
少年の異世界戦記 ～ Muv-Luv Alternative編～

クロイツヴァルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年の異世界戦記 ｛ M u v - L u v A l t e r n a t i v e
編

【Nコード】

N94950

【作者名】

クロイツヴァルト

【あらすじ】

青年はふと、目を覚ますと、自分のミスで貴方を殺してしまったと、目の前で土下座する神があり、お詫びに様々な能力とオリジナルの機体を貰いオルタなどの世界へ介入します。

プロローグ巻（前書き）

連続投稿で死にかけのクロイツヴァルトです。

今回は主人公と神様の会話だけで文字数をかなり使ってしまったかもしれません。また可笑しな部分もしくは誤字、脱字があればご連絡下さい。

見直して可笑しな部分があったので修正しました。

プロローグ

『俺は死んだのか？』

周囲は真っ白な空間に立っているのかが曖昧な感じ……。
一体何があっただっけか？』

～回想中～

「描写が長くなりそうだから端折ります！ (。。(」
簡単に言えば、大学からの帰り道で建設中のビルにあるクレーン車のワイヤーで吊ってあった鉄骨が切れて俺の上に落ちてきて死んだって事だな。」

3

～回想終了～

『俺の死亡説明短か (。。(;)
まあ、親もとつくにいないから悲しむ奴はいないから良いけどまだクリアしてないゲームがあるのが心残りかな。』

「ちよつと良いかのう？。」

『誰だ！？』

そこには今までいなかっただけの白髭を仙人風にこしらえた怪しい老人がいた…

「儂、怪しい老人違うからね！れっきとした神様じゃからね！」

『あゝ、はいはい。神様（笑）ねゝその神様が何か様なのか？』

「神様（笑）って何！真正銘の神様だから！？」

まあ、なんじゃ、お前さんはこちらのミスで死んでしまったのじゃよ。」

『どう言う事だ？じゃ何か俺は鉄骨に潰されて死なずに済んだって事か？』

「そうなんじゃよ。儂がすっかりして天界の死亡者リストの上に飲み物をぶちまけてしまったの、御主の欄だけが被ってしまったので急いで処理をしたのじゃが、残念ながら間に合わなかったのじゃ。」

『それじゃあ、俺は死ぬはずではなかったと言う事か？』

「そのゝなんじゃ、すんませんでした！！！」

神様はその場で綺麗なJapanese土・下・座をかましたのであった。

『それで、許すと思ったか？』

「お詫びになんじゃ、御主には儂が可能な限り願いを叶えてしんぜよう。」

『どう言つ事だ？じゃ何か俺は鉄骨に潰されて死なずに済んだって事か？』

「そう言つ事になるの〜？」

『そつかあ〜。それじゃあしょうがないか〜。』

「そうじゃろ、そうじゃろ(=。。(=。(=。|。(=。」

『って言うと思ったか??』

何、死亡者リストの上で飲み物ぶちまけるかな!?おかげで俺は死んでるし土下座で謝罪したぐらいでハイそうですすかって納得出来るか〜(。。(。。(。『

「お、落ち着くんじゃ?」

『問答無用!!!!』

「ギャー……!!?」

しばらくお待ち下さい。

「グフ、神をボコボコにするとは罰当たりな奴じゃわい」(。o。；)

『ナニカイツタカ?』

「何でもないぞい?」

『まあ、まだやり足りないがな。まあ、テンプレ的に転生出来るんだらうから色々融通聞かせてもらうからな?』

「解っておるわい?元々こちらのミスで死なせてしまったのじゃし可能な限り聞けるじゃろう。」

『良しなら「文字数的に次回に持ち込みじゃ」

『うおー!ー!ー!』(。o。；)

プロローグ巻（後書き）

次回は主人公の能力に機体が決まります。

プロローグ弐

『とりあえず、転生って事だけど、どんな世界なんだ？』

「うん？Muv-Luv Alternativeの世界じゃよ」

『は？Muv-LuvってあのBETAとかが出て来る？』

「そっじゃが？」

『そっじゃが？っじゃなくてんな所に行ったら速攻で死んじゃうわ

(…、皿、) 『

「じゃからこそ、可能な限り願いを叶えると言ったじゃろう？それ
に拒否した所で御主の魂はそのままでは消滅してしまうぞ？」

『わかったよ！行けば良いんだろ！！行けば！？』

「そっか。逝ってくれるか？」

『字が違うから。。。』

「字の文を読むでわないわい！」

『じゃあ、改めて俺の願いはFateのアーチャーの投影魔術にギルガメッシュのバビロンと黄金律にヘラクレスの12の試練で騎士王の直感であらゆる世界の機体及び戦艦の設計図に身体能力をEXに魔力、気も同じようにして後はNTにキラの能力及び経験の反映に00の刹那みたいに純粹種のイノベイドそしてナデシコのマシンチャイルドにA級ジャンパーでIFSにあらゆる武術に魔術の取得及び夢詠唱で使用可能にして答えを出す者に念動力者にして瞬間記憶能力とそれと自分の想像を実体化する程度の能力付加で頼む。』

「此処まで来ると逆に清々しいわい。じゃが魔術に関しては一部の物に時に干渉してしまう物もあるから一部の物は受理できんわい。他の願いは大丈夫じゃな？」

『ああ。』

「機体の方はどうするのじゃ？」

『向こうに着いたら想像を実体化する程度の能力で創るさ。』

「そうか、なら、後は此方から後でサポート用に人を寄越そうかの。」

『サンキュー。何から何まで助かるわ。』

「何、此方のミスで死なせてしまったのじゃし、これ位当然じゃよ。」

「第2の人生と言うのかの？まあ、せいぜい頑張るのじゃぞ？」

『ああ、行ってくる』

「達者でな？」

そして青年は光に包まれて白の空間から消えた…。

プロローグ式（後書き）

なんとかプロローグ終了。

次回は本編に突入。主人公はこの後、どう動くのか、乞うご期待ください。尚、サポート用キャラは明日の午後2時まで受け付けていますのでお願いします。）、、、

主人公及び機体設定（前書き）

主人公及び機体設定を更新しました。 一部のエンジンや兵装は後書きにて説明しております。

主人公及び機体設定

主人公設定

名前 黒逸 戒

年齢 22歳

身長 180cm

体重 75kg

容姿はGジエネのマーク・ギルダールの黒髪Veに金瞳（マシンチャイルド化による変化）

特殊技能 NT、スーパーコーディネーター イノベイダー マシンチャイルド IFS（イメージ・フィードバック・システムの略）瞬間記憶能力 A級ジャンパー 念動力者 Fateのアーチャーの投影魔術にギルガメッシュのバビロンに黄金律にヘラクレスの12の試練で騎士王の直感で騎士は徒手にて死せずしに身体、魔力に気とともにEX（最上位）で武術及び魔術の経験に無詠唱の使用可 答えを出す者に東方風の想像を実体化する程度の能力 キラの能力及び経験の継承 そしてあらゆる世界に存在する機体に戦艦等の設計

図「瞬間記憶能力により可能」習得

Fate風 黒逸戒

戦闘力：EX

体力：EX

耐久：EX

筋力：EX

敏捷：EX

魔力：EX

対魔力：EX

幸運：EX

宝具：EX

スキル：黄金律、超直感、12の試練、投影魔術、騎士は徒手にて死せず、王の財宝及び全宝具の使用、真名解放、あらゆる世界の魔法、武術の使用、魔眼 とある系の超能力 想像具現化 瞬間記憶能力 答えを出す者

CV井上真樹夫

どこにでもいる平凡な青年がテンプレ的な神のミスで殺されてしまい、色々な特典付きの魔チート化でMuv-Luvなどの世界へ送られる事になる。

ガンダムベルフェゴール

Gundam Bellphégor

型式番号 GB-9700

所属 日本帝国

頭頂高 18.5m

重量 9.8t

動力源 プラズマリアクター 肩部内蔵型GNドライブ×2（コーン型スラスタ） パワーエクステンダー 相転移エンジン搭載

駆動系統 サイコ・フレーム採用

各関節部にフェイズシフト装甲を採用

コックピットシステム 全周囲モニターシステム採用

第二世代ドラグーン・システム及びZEROSシステム

装甲材質 ガンダニウム合金、TP装甲

武装 クローアーム内蔵型大出力ビームサーベル

手首及び指先内蔵型ヒートワイヤー×2

肩部内蔵型スライククロー及びクロービーム砲×2及びGNメガビーム砲（切り替え式）

胸部内蔵 ソニック・スマッシュ砲、トリプル・メガソニック砲（システムによる切り替え可）

胸部解放型重力波砲 ヘカトンケイル（此方は胸部解放時に相転移エンジンとの直結により使用可）

MA - M21KF 高エネルギービームライフル×2
掌底部内蔵MMI - X340パルマ・フィオキ・ナ×2
腰部搭載遠隔誘導兵器 GNフィンファンク×8
MA - M02G シュペールラケルタビームサーベル×2
MX2200 ビームシールド×2
EQFU - 3X スーパードラグーン 背部兵装ウイング
(MA - 80V スーパードラグーン ビーム突撃砲×8)
斬鑑刀(ダイゼンガー仕様)、後ろの腰にマウント
特殊装備 ヴオワチュール・リュミエール及びラムダ・ドライバ、
リミッターシステム、トランザム(VG・2season)フレキ
シブルアーム採用エネルギー偏向装甲ゲシュマイディツヒパンツァ
ーアルティメット・ガンダムストリオン・フィールド
AG細胞 DF発生装置及びボース粒子生成装置 重力場発生
及び収束制御装置
テスラ・ドライブ T - Linkシステム 念動フィールド発生装
置搭載
ミラージュ・コロイド発生装置
高速並列演算処理補助自立型AI8搭載
頭部モジュールは鬼の様な(アインストのアルフィの機体みたいな
物)感じで機体のカラーリングは ジャステイスを想像して下さい。

主人公及び機体設定（後書き）

公式では、ヴェルフエゴールにリミッターが付いていますが耐久EXと12の試練の特性により大丈夫と思ひ、システムを切っている状態と言う設定ですのでご了承下さい。 プラズマリアクターはジエネレーターとは違い核融合炉を減速させずに臨界状態を維持して高出力化したが出力が不安定で搭乗者には高い技術を強いる事になる為難しく、その為に出力が不安定になってしまふ所を大容量バッテリーのパワーエクステンダーを用いて、DFの応用であるDBにより炉心を包み小形化をして運用と言う設定です。

そして重力波砲に関しては重力場に作用して自身の周りに力場を一時的に作りそれを砲身に乘せて撃つ為にそれ用の制御装置を付けました。これにより公式に有るように自身の重力量だけではなく、自身にそれ以上の重力場を作り上げる機能が使用可能で自機の周りをDFで囲い込み、その中で重力場を圧縮し砲撃が可能となっております。また自機に掛かる重力過多の解決方法はTP装甲により解消されております。

第巻話（前書き）

連続投稿のクロイツヴァルトです。今回は主人公の行く場所が決まりました。

誤字が見つかりましたので修正しました。

第巻話

（sideナレーション）

とある廃墟にて光が溢れている場所があった。そして、光が治まるとそこにはぶつちやけ主人公のだが一人の青年が現れた。

（sideナレーション終了）

（side戒）

『とりあえず、この荒廃具合からしてちゃんと、M u v - L u vの世界に着いたみたいだな。まずはどっか隠れられる場所を探して自分の機体を創造しなきゃな…、いきなりこんな所で出して誰かに見られた困るしな？』

『それにしてもなんか目に違和感があるんだが、なんだ？』

『説明しよう！』

『うわ！？出たな妖怪！』

突如、出現した妖怪……

「儂、妖怪違うから！何回言えば解るのじゃ？神様だからね？とりあえず、アフターケアとして御主に平行世界にある魔眼とあるの

超能力をある程度付加したのじゃよ。勿論、魔眼は機体に乗っていても使用可じゃぞ?」

『なんか、自分で言うのも何だが少しチートすぎないか?』

「大丈夫じゃろ?」

『まあ、違和感の正体はわかったし、良いか。』

「後は少ししたらサポート役を送るからの?」

『了解した。』

「じゃあのだ。」

そう言っつて消える神様

『さてと、改めて隠れられる所を探すかな?。』

く主人公探索中く

発見した所はMS一機が隠れられる位に大きな工場で奇跡的に原形を保っていた……

『とりあえず、見つけたは良いが最初から能力使えばもっと早く見

つかつたんじやないかorz」

』と、とりあえず気を取り直してやる事やらなきやな。』

〈主人公創造中〉

』よし、とりあえずは出来たかな…?』

そこには真紅のカラーリングに頭部モジュールはガンダムタイプで鬼のマスクをしたMSがそびえ立っていた。

』若干、やり過ぎ感があるがこの世界はこの位しないと危ないからな〜(汗)後は原作開始までの年号を調べて、準備しなきゃな…』

』とりあえず、今の年号は1996だからBETA上陸まで2年…。』

』まずは、主要な国は国連、帝国にEUそしてソ連か…、なら帝国に介入してある程度、自由に動けるように働き掛けないとだな。』

』方針は決まったし、進路は帝国にして後は土産にMSと動力のデータを持って行くかな?』

』よし!じゃあ行くか!』

そう言って真紅のMSに乗り込み起動させた。

『一度は言ってみたかったからな!!』

『黒逸戒、ヴェルフエゴール出る!!』

真紅のMSが緑色の粒子を撒き散らしながら飛翔した行く先は日本
帝国……。

第巻話（後書き）

次回は京都防衛戦まで飛びますが、ダイジェスト的にしてお知らせします。

第貳話（前書き）

1日置きの投稿ですが戦闘描写がグダグダな上、原作キャラの喋り方が今一思い出せないクロイツヴァルトです。

第貳話

戒：『今の俺は、帝国軍所属の大佐になった。ある程度、自由が利くので良いが……。理由は、まあ別の機会に話すとしてしよう。』

そして、俺の機体だがアメリカとの条約がありその存在が公になると色々とまずいと言う事なので今迄は隠していたが、BETAの本土上陸の際にアメリカは、G弾もしくは核による殲滅を前提とした焦土化戦略を強固に主張とし、帝国はそれを拒否をし続けた結果、アメリカは「日本の条約上の命令不服従」を理由にし一方的な条約破棄をし在日米を即座に退去させたのである。

そして今は京都防衛戦に向けて帝国の衛士達はその準備に追われていた。

戒：『さて、アメリカが一方的にだが条約破棄したおかげで、ヴェルフエゴールの枷が無くなって行けそうだな。』

コックピット内で戒はMS用に改良をした強化服を装備した姿で独り言を呟いていた。その時、網膜投影による通信がきた。

篁：「お久しぶりです。戒大佐。今回、京都の本土防衛戦において
コマンド・ポスト・オフィサー
大佐のCPを担当します、篁唯依です。」

戒：『な！？彼女が何故ここにいる……。』

篁：「大佐、どうかしましたか？」

戒：『いや、大丈夫だ。（今は考えていてもしょうがないか。）よろしく頼むよ。』

篁：「わかりました。今回のBETA進行による本土防衛には大佐には遊撃という形で各小隊の援護が任務になります。また、可能であれば防衛線を押上げて下さい。」

戒：『まったく、無茶な注文をする。』

篁：「それと、煌武院悠陽殿下からの御言葉を預かっております……。」「

戒：『なんだ？』

篁：「（貴殿の活躍に期待いたしております。）と…。」

戒：『（悠陽らしい激励だな…。）さて、殿下に期待されてアメリカの束縛も無くなった訳だしヴェルフエゴールで大いに暴れてやりますか。』

篁：「それでは大佐、発進お願いします。」

戒：『了解した。コールサインはオールド1とする。では、黒逸戒改め、オールド1、ヴェルフエゴール出るぞ！！』

戒は機体の両肩から緑色の粒子を撒きちらせながら上空へ向け発進させた。

所変わって此処は最前線の戦場、衛士達が物量で攻めてくるBET A相手にし果敢に奮闘していたが、数の暴力には叶わずに一機、また一機と要撃級の特徴である剛腕により叩き潰されてしまう者や無数にいる戦車級に群がられ官制ユニット共々喰われ、強化装備を身に付けた衛士達は兵士級、ソルジャー闘士級を相手にしていたが兵士級は携行式の小銃で食い止められたが闘士級はその俊敏性により中々止められずに衛士達を次々に蹂躪していった。

「いやあああ！！！」

「うわああああ！」

「戦車級に取り付かれた！助けてくぎゃああああ！？」

「た、たすけ……………」

「く、来るな——！！」

戦車級に生きたまま頭から喰われる者、意識がまだ在る中、足から喰われる衛士達があり、一部の戦術機の衛士は、それを見て、恐怖のあまりに恐慌状態へ陥ってしまい、要撃級へ突撃銃を乱射するが要撃級には照準が合わず、周りの戦車級や闘士級に当たり虚しくその身を肉塊に変えていくだけであった。そんな中、要撃級は自身の役割を果たすべく、そのモース硬度15以上の硬さを誇る剛腕の一撃によって戦術機を衛士共々圧殺していくのであった。

そんな、阿鼻叫喚の地獄をそのまま表した様な戦場でまだ生き残っ

ていた若い衛士達はBETAの異常な物量に対し、未だ、懸命に奮闘していた。

直哉：「大丈夫か!？」

そう言って寮機を心配する桐生直哉がいた。

「大丈夫じゃないですね、戦車級に装甲は喰われていますし、さっき吹き飛んだ衝撃で四肢の駆動部がお釈迦になってしまいましたよ。」帝国衛士の乗る撃震は先程までの戦闘で要撃級の一撃を受けてひしゃげており、今もガリガリと戦車級が官制ユニット事自分を喰らおうとコクピットを目指し装甲を削っている。

直哉：「すぐに助けるから待ってる!」

一方の直哉の撃震は先ほど突撃銃の残弾を撃ち終わってしまいやむなく破棄をし長刀を用いてBETAとの戦闘を孤軍奮闘し続けていたがその異常な数に押され、救援に間に合いそうになかった。

「止める！俺を切り捨てて、後退しろ！」

直哉：「仲間を見捨てて、後退なんかできぬ！！後退するなら、2人で一緒に後退するんだ！？」

「駄目なんだ。さっきの一撃でハッチは開かない上に手足は吹き飛ばされた衝撃で使い物にならん、それに戦車級が周りに取り付いてるんだ。後は、撃震の主機を使って周りの奴らを道連れにする位にしか使えない。それに此処にはもう俺とあんたしか残っていないんだ。だから早く行くんだ！？」

直哉：「それは出来ない、私は逃げないぞ！？諦めるな！！すぐ、そちらに行くから、待っていてくれよ！！」

しかし、現実とは非情な物で、何とかして近づこうとする直哉機に、^{デストロイヤー}突撃級が背後からその自身の特徴でもある突撃殻を使い突進してきたのである。

「直哉さん……危ない！！後ろ！？」

直哉：「しまった！」

「直哉さぁーん!!」

しかし、その瞬間、突撃級の攻撃を主機部に当てぬ様に動き中破ですんだが自身のいるコクピット内部はそうは行かず、壁に挟まれるように圧迫されていた。更にそこへ要撃級が接近して来ており直哉機へ死神の鎌の様に上段から振り下ろしてきた。

直哉：「ここまでか。（ユウヤ済まない。）」

直哉は半ば諦めてこの場にはいない息子に謝った。

しかし、諦め欠けていたその瞬間に真上から突如として、降ってきた緑や赤、黄色と言った色彩を帯びた光条に要撃級は穿たれ、自身の役割を果たすことなく、その身を地面に沈めた。

戒：『『『その撃震二機、無事か!?』』』

その直後にオープンチャンネルによる呼び掛けに対し直哉は直ぐ様先ほど降ってきた光条の軌跡をたどり、上を見上げ、その場で思考が停止した。それはもう一人の衛士も同じであった。

そして、その見上げた先には背部ユニットの翼を展開し両肩から緑色の粒子を放つ、先ほどの光条を放ったと思われる二丁の銃を持つ真紅のカラーリングをされた戦術機？と思う機体が滞空していた。

直哉：「あれは……一体、なんなのだ？」

戒：『その撃震の衛士、無事か！？無事であるなら、応答しろ！』

直哉はすぐ様、網膜投影による通信をし、無事を伝えるのであった。

直哉：「済まない、助かった。私は桐生直哉だ。アンタは？」

戒：『俺は日本帝国軍所属、ヴェルフエゴール、パイロットの黒逸戒だ。それに礼を言うのはもう一機の撃震を救出してからだ！』

そう言うやいなや、背中に展開している翼から分離した突起物は不規則ながらも原理は不明だが素早い機動をし周囲の戦車級に緑色の光条を放ち攻撃して殲滅し、腰の後ろ辺りから飛び出した爪の様な物体は赤色の粒子を放ち飛び出して倒れ伏している撃震に取り付いていた戦車級と周りにいる要撃級や戦車級に兵士級を赤色の光条により撃ち殺し時にはその光を槍の様に先端に出し、刺し貫いたり、斬り殺して行った。そして、自身も指先や手首に内蔵したヒートワイヤーで大型、小型種問わずに細切れにしていた。

直哉：「す、すごい。」

その様子を見ていた直哉はただただ、援護に来た真紅色の戦術機の装備や明らかに違いすぎるスペックに驚嘆するしかなかった。そしてその場に存在した、30000を超す旅団規模のBETAを瞬く間に殲滅し、戒はすぐに倒れ伏した撃震に近寄った。

直哉「あ、危ない!？」

戒『なっ!?!』

が前方から生き残りなのか突撃級が戒に突っ込んで来たが、直哉機が戒を庇う様に飛び出して来た。

直哉「だ、大丈夫ですか？」

戒「あ、ああ。桐生さんのお蔭でこちらには被害は無いが…」

直哉「庇った手前で無様な姿になってしまいましたな。」

そう言う直哉が乗る撃震は突撃級の攻撃をまともに喰らい動けない状態になっていた。そこへどこにいたのか解らないが戦車級が小隊規模で出現し直哉機に取り付いた。

戒：「8！！ヴェルフエゴールを一旦オートにしろ！！俺は桐生さんを助ける！！」

戒はそう言うや否やハッチを開けアロンドイトを投影しながら飛び出した。

戒「邪魔だ、どけええー！！！！」

戒は咆哮に近い声を上げてBETAに突っ込んで行き。魔術の肉体強化を自身に公使し、アロンドイトで次々と戦車級を斬り捨てた。そして…

おね……がいします。」

戒が直哉の近くに來た時には肩腕が喰われて無くそこから夥しい量の出血をしており傍目から見ても助からない事が解ったが戒はそれでも助ける為に呼び掛けたが直哉は自分は助からない事が既に解っているのか、息も絶え絶えになりながらも自分の事よりもこの場にいる息子を頼むと言って來た。

戒『……息子の名は？』

直哉「ユ……ウヤ、ユウヤ……ブリ……ツジスだ。」

戒『分かった、ユウヤだな？』

直哉「あ……あ、たの……め……るか？」

戒『ああ、あんたの息子のユウヤは俺に任せてくれ。』

直哉「あり……が……と……う……」

戒が直哉の頼みを引き受けると言い直哉はそれを聞きそのまま安心して眠る様に息を引き取った。そして戒はそこから離れ脳量子波を使い8に現状確認をした。

戒『(8、そっちの衛士はどうなった?)』

8(こっちにもBETAが出現して対処はしたんだが、衛士の方は
ベイルアウトしてこちらに乗せる時に闘士級に遭遇してやられた。)

戒『(なら、桐生さんと戦術機二機を回収し、後方支援の部隊まで
搬送するぞ。)』

8(罪滅ぼしか…?)

戒『(助けられなかった俺のエゴだよ。)』

戒はそう言つて再びヴェルフェゴールに乗り込み、肩の一部をせり
上げて、巨大なクローアーム二本を出して、直哉の遺体がある戦術
機と乗り手がいない戦術機を持ち上げ、CPへ連絡をいれた。

戒：『オールド1よりCPへ、作戦領域にて大破した戦術機二機及
び衛士の遺体を発見し、これを収容した。その為、今から後方の部
隊までこの者達を搬送する為、後退する。』

篁：「CPよりオールド1へ後方への後退を許可できません。直ちにそれを放棄し、戦線へ戻って下さい。」

戒：『済まないが唯依、それは出来ない。この者達は俺のミスで死なせてしまったも同然なんだ…頼む。』

戒の真剣な雰囲気通信越しにでも伝わり、唯依は何を言っても無駄だと諦めた。

篁：「…分かりました。CPよりオールド1へ、直ちにF-4J

77式戦術歩行戦闘機「撃震」二機並びに衛士の遺骸を後方支援部隊に搬送し、それが完了し次第、戦線にお戻りください。」

戒：『オールド1よりCPへ了解した。唯依、恩に着るよ。』

篁：「なら、食事にでも誘ってもらえますね？」

戒：『ならいつかはその機会を作るとしよう。』

篁：「ええ、楽しみにしときます。」

多少、冗談を交えた戒は唯依との通信を終え、すでに動かなくなっ

た撃震二機を持ち上げた状態のヴェルフエゴールで空へと飛翔した。そして……、ある程度上へと飛び操縦を8に任せ、戒はハッチを開け、徐に身を乗り出し、8に指示を出した。

戒：『8、先程の戦場が見える位置に移動してくれないか？』

8（分かった。）

8は戒に言われた通りに先程の戦場が見渡せる所に陣取る形で浮かぶ様に姿勢制御をした。

戒：『助けてやれなかったせめてもの手向けに……。』

軽い黙祷を捧げ戒はそう言って先程いた所に向け魔力を自身に巡らせて詠唱を始めた。

戒：『（契約に従い、我に従え、炎の霸王。来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を死の塵に。）』

戒：『「燃える天空」！！！！』

朗々と呪文を唱え高めた魔力を右手に纏わせ、最後の発動呪文を唱

えながら先程の戦場に向けて振り下ろした。そして、その場で大規模な爆発が起き先程の場所を更地に変えた。

戒はそれを見届けてから、進路を後方の支援部隊へと、向けるのであった……。

第貳話（後書き）

ユウヤ・ブリッジスのオリキャラ仕様の父親でした。

今回は後方支援の場での短い話になりそうなかんじです。また、意外な人物がオリキャラとして登場します。

所々で撃震が織撃になっていた為、修正しました。

第参話（前書き）

駄目な作者のクロイツヴァルトです。短いと言いつつ長くなってしまいました。

第参話

戒が後方支援の部隊へ行く事が決まり、空を飛んで移動していた。そして今、向かっている後方の部隊では戒が報告した事を司令部からの通達で知り、戦術機達の収容の準備をしていた……。

善行「衛生兵は担架の用意をして置きなさい！！整備班は仮設ハンガーを設置し大破した戦術機の搬入準備をしておきなさい！！」

そう激を飛ばしていたのはこの後方支援部隊の責任者である善行中尉。

原「整備用機材の準備急げー！！そこは戦術機通るん所なんだから邪魔な物は置くな！！」

仮設ハンガーの近くで整備班の者達に指示を出しているのは整備班主任の原素子

戦術機が此方に来ると言う報告を聞いた者達はすぐ様、対応する為に準備を急いでいた。

滝川「まったく、こんな所で見回りとか、つまんねえよな？壬生屋。」

そう、退屈そうに見回りをしていた衛士は一緒に巡回をしている壬生屋と言うロングストレートの少女に言った。

壬生屋「滝川さん！？見回りも立派な任務です！？ それをつままないとは何ですか！！ 巡回を行わなければ味方が危険に晒されますし、逆に行っていればそれだけ危険を減らせますし、緊急時には味方等にいち早く伝達すると言う事はとても大事な事なんですよ！！」

それには壬生屋と呼ばれた少女は正に噛み付く様な勢いで滝川と呼ばれる少年衛士に反論し、途中から説教に近い事になっていた。

「????」壬生屋さんも滝川君も何か楽しそうだね。芝村さん？」

それを見ていた中性的な顔立ちのポヤヤンとした少年と尊大な感じが見受けられる芝村と呼ばれたポニーテールの少女の2人がいた……。

芝村「あの者達は気が弛みすぎではないか!? それに速水!?!
そ、そなたには以前に名前の舞で呼べと言った筈ではないか!?! /
」

最初は憤慨していた芝村だが途中で顔を赤らめ、恥ずかしながらも速水と言う少年に言うのであった。

速水「ははは、まだ舞さんって呼ぶのは恥ずかしいから今は芝村さんじゃ駄目かな?」

そう言う速水は首を傾げ少し上目使いがちに芝村に聞くのであった。

芝村「 / / (くっ! その様な可愛らしい仕草をしおって、反則ではないか!!) そ、そなたの好きにするが良い!?! 」

芝村は自身の顔が熱くなるのを誤魔化す様に明後日の方を向き言い放つのであった。それを速水は解っているのか、必死に笑いを押し殺していた。

速水「くくっ!?!」

支援部隊の一部で、ほのぼのとした空気で巡回していた速水達だが、遠方から小さい機影らしき物が高速で近づいてくるのに速水は気づいた…。

速水「 芝村さん！！こっちに何か向かって来るよ！？」

そう言うや否や、速水はすぐ様、部隊に知らせる為に携行している通信機で善行中尉等に通信するのであった。

芝村「（速い！？しかし……）正気か！？空を飛ぶなど光線級の的になる様な物ではないか！？」

そうなのである。光線級に重光線級といったBETAが航空戦力に對抗する様な形で出現した為に、今や制空権はBETA側にあり、空を飛ぶ事は自殺行為に匹敵するのである。そして、機影がハツキリしてきた。その姿は現存する戦術機とは明らかに違う形状に真紅のカラーリング、鬼の様な頭部に両肩から伸びているクローアームが戦術機を掴んで飛ぶ姿と言う異様な光景に部隊の者達は啞然としていた。そして真紅の機体は部隊の手前にゆっくりと着陸し、アームで掴んでいた大破した撃震二機を自分達の前にゆっくりと下ろした。

善行や一部の衛士達は状況を直ぐに理解し、指示を飛ばした。

善行「……！衛生兵は直ぐに担架を……！整備班は撃震二機の収容を急ぎなさい……！」

「……りよ、了解です……！」

そう言つて、衛士達は各々の役割を果たす為に迅速かつ的確に動くのであった。そして戒は目の前の人物達に、コクピット内で出撃の時よりも動揺していた

戒『（おいおい、さっきはユウヤの親父さんで今度はガンパレードの主要陣かよ……。）これは俺が原作に介入した事により原作とは違う世界になっていると言う事か？』

戒が軽く意識を思考のほうに飛ばし、独り言を呟いていると善行率いる一部の強化装備を装着した衛士達が機体の前に集まっつていて何かこちらに喋り掛けているのを感じ、慌てて集音機の電源を入れて、声を拾った。

善行「其処の所属不明機の衛士、すぐに戦術機から降りてきなさい……！」

それを聞いた戒は嘆息していた。

戒「ハア……。全く、司令部からの通達が入っている筈なんだが……。降りなきゃ話にもならんか。」

戒は一人で愚痴を言っても始まらないとヴェルフエゴールのハッチを開けて、そこから飛び降りた。かなりの高さがあるにも関わらず本人は何事もなかったかの様に着地をしたがそれを見ていた者達はぎよっとしていた。そして、善行達の目前まで来たのだが、その場にはいた一部の衛士達は冷静に銃口を此方に向けた。

善行「そこで止まりなさい。まずは仲間を遺体になってしまいました。が、運んでもらった事に礼を言います。ですが！！この様な戦術機は見たことも聞いた事ありません。悪いですが所属と名前を伺っても宜しいですか？」

善行の言い分は最もである。自分達の知る戦術機とは明らかに違うヴェルフエゴールはEUの事や各国の問題もあり、今まで悠陽や一部の上層部しかその存在を知る者はいないのであるから、尚更に怪しいのである。

戒「機体の方は最重要機密な為、教える事は出来ない。」

戒は今、機体の情報をこの場にいる一般衛士達に教えてしまうのは不味いと判断しこれを拒否した。

善行「……そうですか、機密であるならば仕方ないですね。ならば、せめて所属と名前、階級を教えて貰えますか？」

それを善行は少し思案顔をしながら認めて所属と名前、そして階級を聞いて来た。

戒「わかった。俺は日本帝国所属、黒逸戒だ。階級は大佐になっている。」

「「なっ!?!?!?!?!」」

そう言った途端、善行と周りにいた衛士達は顔色を変え、慌てて自身へと向けていた銃口を外し、敬礼した。善行「黒逸大佐に向かって銃口などを向けてしまい申し訳ありません。」

尚も敬礼した状態で善行は戒に謝罪した。

戒「いや、此方も司令部から通達が来ているばかりと思っていたかな。多少は驚いたが……。それと、敬礼はいらさないぞ？ 今まで、アメリカ等に姿を見せない為に隠れていたのだからな。」

戒はそう言っただけで苦笑していた。

善行「重ね重ね、失礼致します。……それでは、司令部から報告のあった戦術機とは大佐が乗られているアレの事ですか？」

そう言っただけで敬礼を解いた善行達は自身の目の前にそびえる真紅の巨人を見上げていた。その時、善行の後ろから、芝村達が駆け足で近づき善行に食らいつく様な形で質問してきた。

芝村「忠孝中尉！！先程の空を飛ぶ戦術機は何なのだ！？それに、その様な馬鹿をやる衛士は一体、何者なんですか！！」

芝村は先程、自身が見た光景について確かめる為、善行に聞いたのである。そして、それに戒が進み出て言おうとした。

戒『(馬鹿は酷いな……) ははは、驚かしたみたいですまないな。
その衛士は俺でな? 周りに光線級がいなかったものだから、陸を行
くよりも速いと思い飛んできたんだよ…。』

戒は内心で少し傷付いていたが面として出さずに芝村に答えた。

芝村「 貴様があの戦術機の衛士か! ? 」

その答えに芝村は驚嘆した。

善行「 芝村少尉、口を慎みなさい! ? 此方は帝国の黒逸大佐で
すよ! ! ! 」

芝村の言い方が不味いと思ったのか善行は直ぐに注意をした。

芝村「 もっ、申し訳ありません! ! ! 」

芝村は反射的に敬礼をし、謝罪したのである。

戒『 気にしてないから大丈夫だよ。それにあまり階級と言うのは好
きになれなくてね? 気にせずにフランクに頼むよ。』

戒はそれを気にしないでと言って普通に碎けた喋り方してくれと善行達に頼んだ。

善行「分かりました。ですけど、私の場合はこれが地なものですから、無理ですが他の者達は大丈夫でしょう。」

戒「まあ、それなら良いかな？それと、済まないが俺はこのまま前線に戻る事になってしまふから桐生さんの遺体を手厚く弔って欲しい。頼めるか？」

先程の申し出を善行は了承し、戒は今から前線に戻る事と桐生の遺体の埋葬を頼むと善行に告げる。

善行「分かりました。桐生直哉少尉の事は我々に任せて下さい。では、また次に会えました時には私や部下の者達を交えて少し話をしてみたい物ですね。」

戒「そうだな、その時を楽しみにしているよ。そして、頼んだぞ？」

そう言って戒はハッチから伸びているワイヤーラダーを掴んでコクピットに乗り込んでハッチを閉め、機体を前線に向け飛翔させた。

第参話（後書き）

ガンパレードの一部の主要人物達との会話でした。あまり多く出すと困惑しそうなので作者が気に入っている者をだしました。次は再び戦場に戻りますが時間軸的には戒が後方に向かった後になります。その為に今回は最後の部分にしか主人公は出てきません。駄文な作者ですがこれからも宜しくお願いします。

第四話（前書き）

え、今回の話は防衛戦からの撤退ですが一部の捏造が在りますのでご了承下さい。また此処を直すと良いと言つ方は教えて下さい m

「」 m

第四話

場所は再び最前線の戦場に戻る……

まだ、BETAが数多くいる戦場の中で次々に自身のいた小隊や仲間には自分自身がBETAにより殺されていた。そんな帝国衛士達は自身の技術に仲間と連携をとりかろうじて戦線の一角を維持していた。そして、そこにはまだ小隊として機能している部隊がまだ幾つか存在していたがBETAにより少しずつではあるが押されていた。

「此方ガンマ2!!戦線が持たない!?至急、応援ぎゃああああ」

「た、隊長たすけ……」

「い、いやあああ!?!」

「クソ!ここも駄目か!?まだ我々の後ろには数多くの力無き、民達が居るといふのに……」

この近辺を統率する男が織撃の中で毒づいていた。

一方、国連はというとアメリカの事もあり日本の者達からは殺意に

似た感情を抱かれてしまい援護に入るも煙たがられ、罵声すら浴びせられていた。そして、此処帝国のとある部隊では避難民を纏めて後退する準備をしていた。

「綾峰中将！残存する西方面の避難民の移動準備整いました。」

「此方の方は後、数分で完了します。」

綾峰「避難民達の護送並びに護衛部隊は各装備の点検怠るなよ！？」

「綾峰中将、我々、大東亜連合も手伝いますぞ！！」

防衛戦にて逃げ遅れた者達を逃がす為に綾峰中将と呼ばれた男は各持ち場の衛士達に退路を確保させる為、装備を入念にチェックした。そんな中、大東亜連合の将校等も避難民を助ける為に駆けつけてくれていた。

綾峰「済まない。」

「何を言ってるんですか、BETA共から力無き者達を守る為に我等は居るのですから当然の事ですよ。」

「綾峰中将!？」

そう叫んで、通信士の衛士が駆けってくる。すぐ様、綾峰はその衛士に近寄る。

綾峰「どうした!」

「本部からではより京都を捨て東京へ撤退するとの事です。その為に(各部隊は殿下達の遷都が無事終了次第、各自撤退せよ)との事です。」

それを聞いた綾峰は激昂した。

綾峰「馬鹿な!!此方には避難民が居る事が分かっているはずだぞ!？」

しかし、この連絡をしてきたのは一部の殿下をお飾りとしてしか見えない内閣の官僚達による独断であった。

綾峰「ええい!!此方は此方でやるぞ!各部隊に連絡しろ!!避難民の収容が完了し次第に各自発進しろ!？」

「しかし!?!命令は戦線に残り、BETAを食い止めよとの事なの

ですよ!!」

綾峰「そんな物は知らん!! どうせまた、殿下を蔑ろにした馬鹿な官僚共の事だから体の言い時間稼ぎの捨て駒にされるだけだ。ならば私は民の方を優先させて貰う!？」

綾峰は避難民を優先とし連絡兵は上からの命令を優先せよと言ったが綾峰は聞かず移動を開始したのである。後にこれが新たな事件になるうとは、誰も思わないだろう。そして、京都からの撤退が決定した時に戒はと言うと自身の機体に積んだ自立型量子コンピューターの8と高速移動しながら会話をしていた。

戒「なあ、8いゝ俺ら出番これだけか？」

8（それを言ったら俺は今回が御披露目だぞ？）

第四話（後書き）

次は本土防衛戦線から撤退の話ですね。次回、あの二人が登場致しますが作者の記憶により若干、性格が改変されるかもしれません。

m ((m

第五話（前書き）

作者のクロイツヴァルトです。この小説がいつの間にかアクセス数が30000にユニーク数が5000を超えている事にびっくりしていると共にこれからも読者の皆様方に読んで貰える様に頑張って執筆していきますので宜しくお願いします。

第五話

防衛から撤退に変わった戦場には殿を務める為、帝国の精兵たる帝
ベリアル・ロイヤルガード
国期衛軍が撃震の改良型である82式戦術歩行戦闘機「瑞鶴」（ず
いかく）を含む一個大隊を率いて出撃した。その中に専用の塗装を
施した赤と青の瑞鶴がいた。

「???」現存する部隊は撤退をしろ！殿は帝国期衛が務める！期
衛の者達は殿下の遷都が完了するまで持ちこたえよ！？」

赤の塗装を施した瑞鶴は近くににいる要撃級や戦車級を自身の持つ長
刀で斬り殺しBETAの前に斬り込んで行く最中、そう言い放った。

「???」月詠中尉、下がれ！！出すぎてるぞ！？」

そして、BETAを殺す月詠と呼ばれた者に警告するのはこの大隊
の指揮官である斑鳩将軍であった。

斑鳩「各自、編隊を組み残存する小隊の支援にあたれ！？ 殿下
の安全が確保でき次第、各々の判断で後退せよ！？奴らに我等の底
力を見せよ！！そして無駄死にする事は決して許さん！！生きて殿
下の御前へ帰るのだ！？皆の者心してかかれ！！」

そう言つて、斑鳩准将は自分の部下と編隊を組み他の小隊の支援に向かった。

そして、所変わり戒は先程、涼宮少尉からの通信で京都を棄て東京へと遷都する為に殿に帝国期衛軍が出撃した事を聞き8と急いで空を飛んでいた。

戒『まったく、決断するのが遅いな……。今からだと避難民の生存率は低いと言うのに、馬鹿共の下らん意地の所為で衛士にしる、国民にしても犠牲者が多すぎるな。』

8（早くしなければその内に光線級やもしくは要塞級フォートが出てくる可能性が高くなるぞ？）

コクピット内で戒が一人呟いていたら8は他の大型種が出てくる危険性を説いてきた。それに相槌を打つ戒は……

戒『解つてるよ。だからこそ今も急いで向かつてるだろ？』

戒はそう言いながフットペダルを強く踏み込んでスラスタを噴かせていた。その時、レーザーの接近を知らせる警告音になった。戒はそれに対しバレルロールしながら回避した。

戒『来たか！？』

8（正面より約1500M先に光線級を8体確認。並びにその下方に帝国期衛の戦術機「瑞鶴」に「撃震」を確認した、要撃と戦車級に囲まれて苦戦中みたいだぞ……？撃震の方は戦車級に取り付かれて無理だが、瑞鶴は常に動き続けているからまだ取り付かれる心配はないが……）

戒『ならば助けに行くだけだ！？まずは邪魔な光線級から排除する！！8、ゲシュマイデツヒ・パンツァー及びZEROSYSTEM作動！！』

そうやってヴェルフエゴールの肩にあるフレキシブルアームを使い背中にあるカーキ色の二枚の楯を前方に展開し鬼の面越しにアイカメラが妖しく光り光線級に突っ込むと同時に光線級はチャージを終えたのか再びレーザーを自身に照射してきた。

戒『そんな物、効かねーよ！！』

光線級のレーザーがヴェルフエゴールに当たる瞬間、ゲシュマイデツヒ・パンツァーによりレーザーが偏向し、別の所に飛んでいった。

そして、腰に装備したサーベルを抜き、正面に居た光線級を両断した。そして、それを殿をしていた期衛軍の赤の瑞鶴に乗る月詠中尉はその光景を信じられない物を見るようにしていた。

月詠「馬鹿な、光線級のレーザーを曲げるだど！！それに慣れぬ兵装に先程から空を飛んでいるあの戦術機は殿下の言われていた援軍か？にしても此方も負けていられぬな！！」

月詠は長刀でBETAを切り払いながら言ったがその背後から要撃級が近くにいる事に気が付いておらず接近を許してしまっていた。そんな時、戒は光線級を狩り終わり次に下方に視線を移した時に8がその異変に気が付き戒に警告した。

戒「おしっ！！これでラストだ！？」

8（おい、あの瑞鶴の衛士の奴要撃級に気が付いてないぞ！？）

戒「何だと！？（赤の瑞鶴って事は月詠中尉！！）トランザム！！間に合ええー！！？」

その瞬間、ヴェルフエゴールの機体が赤い粒子を纏いとてつもない速度で月詠機に迫るBETAに迫った。そして、ようやく月詠は要撃級の接近に気が付いた。

月詠「しまっ！？（私は此処までなのか？）」

月詠が自身に迫る死神の鎌に等しい要撃級の一撃を見つめっていると

目の前に先程まで光線級と交戦していた戦術機が残像を出しながら要撃級の一撃を腕一本で受け止めたていた。

月詠「（私は…生きている、のか？）」

月詠は自分が生きている事が信じられず、夢の様に感じていた。そんな月詠を戒はオーブンチャンネルで呼び掛けて現実に呼び戻した。

戒「瑞鶴の衛士、大丈夫か!?!」

月詠「っ!!大丈夫だ。援護感謝する。」

戒「殿下の頼みでな…。礼には及ばないよ。まあ、話しは邪魔者共を消してからだ!?!」

戒はそう言い放ち今まで押さえていた要撃級の腕を掌に内蔵したパルマ・フィオキーナで撃ち抜いた。要撃級はその衝撃で後ろに揺らめいた所を戒はすかさず後ろ腰にマウントした斬鑑刀を使い要撃級の体を寸断し、戒は月詠以外の戦術機がいるかどうかを確認した。

戒「他の期衛軍の衛士達は?」

月詠「残念ながら此処には私の他は既にあの様だ。」

そう無念の様に言つて月詠が見た方には光線級に殺られたのか胴体部分を撃ち貫いてコクピット部分のみが溶解して鉄屑に成り下がった撃震が数機倒れていたり、戦車級に取り付かれて四肢やコクピット部を喰われた戦術機が横たわっていた。

戒『なら、後は俺に任せて、アンタは後退しろ！』

月詠「なっ！？その様なこと出来るものか！！」

戒『悪いがアンタは足手まといにかなりえないし俺の機体は性能が戦術機とは比べ物にならない代物であるし、周りに仲間がいると被害を被りかねん兵装が多いからな…。』

戒は有無を言わずに後ろに下がれと言つたが月詠は聞かなかつた。

月詠「貴様が仲間と言つなら尚更、私は貴様を置いて後退など出来ぬ！…」

戒『さつきから貴様、貴様と俺には黒逸戒つて言つ名前があるんだが？』

月詠「す、すまない。そう言えばまだ名前をお互いに名乗っていなかったな……。私は帝国期衛軍の月詠真那階級は中尉だ、きさ…黒

逸は所属と階級は？」

戒『月詠中尉か、改めて所属は帝国で名前は黒逸戒だ。階級は大佐だよ。』

月詠「大佐っ！？失礼ですが、私は黒逸大佐の事を存じてはいないのですが？」

戒『ん〜、このヴェルフエゴールの事を含め、斑鳩さん達の様な佐官以上の一部の人間と悠陽しか知らない事だから当たり前だよ？』

月詠「そうなのですか？（斑鳩准将や煌武院殿下を親しげに呼ぶ大佐って何者なんだ？）」

戒との会話で月詠は驚嘆しつつ内心で不思議に感じていた。

戒『取り敢えず、そのボロボロな状態の瑞鶴じゃ後退するのもキツいだろうし緊急脱出^{ベイルアウト}して此方に乗ってもらおう事になるが良いか？』

戒はそう提案したが月詠はこれを否定した。

月詠「無理だ、まだBETAがいる中でのベイルアウトは危険性が

高い。」

戒『なら、少し屈んで待っててくれ。』

戒にそう指示され、月詠は不審に思いながらも直ぐに動ける様に屈んだ。その瞬間、ヴェルフエゴールが両腕を伸ばし、その場で腕を振り回した途端に周囲のBETAが細切れにされていた。

戒『これで大丈夫だろ?』

月詠「今、何をしたのですか?」

戒『何をつて指先と手首にあるワイヤーで切り刻んだだけだが、どうかしたか?』

月詠は何が起きたのか解らず戒に聞いたが、戒はさも当然の様に答え、月詠は呆れていた。

月詠「ワイヤーで切り刻んだって大佐は出鱈目ですね。」

戒『これでこっちに乗れるだろ?』

月詠「……そうなりますね。」

月詠は戒の異常差と会話で若干疲れながら答えコクピットに乗り込んだが戦術機と全く違う事に驚いた。戦術機の場合官制ユニットの事があり網膜投影で外の様子を見るが、ヴェルフエゴールの場合それが無く球場のスクリーンで360°全て伺える様になっていた。

月詠「これは？」

戒『説明は悠陽の前ですから早く中に入ってくれないか？』

月詠「…分かりました。」

そして月詠を乗せた戒は他の期衛軍を支援する為、その場を移動した。

第五話（後書き）

真那さんの口調が解らずなんか別の人になってしまった感があるク
ロイツヴァルトです。口調が違ったらすいませんm（| |）m
また、斑鳩さんの口調すらつつすらと言つか忘れていた始末（汗）
誰か口調の解る人は私にアドバイスを下さい（；；）ノ

第陸話（前書き）

今回で京都防衛戦終了です。この後は悠陽達との対談と明星作戦かな？明星作戦で死亡する人に介入はした方が良いでしょうかね？

第陸話

戒「月詠中尉、どうしたんですか？」

月詠がヴェルフェゴールに乗ってからずっとコクピット内部を見回していたので聞いたのだ。

月詠「あ、いやな？ 私達の乗る戦術機とは全く違うもので珍しくてな……。」

戒「そうなのか。このヴェルフェゴールは戦術機とは全く違う設計思想になっているのだから当たり前だぞ？」

月詠「戦術機とは違う設計思想……？」

戒「ああ、戦術機はBETA襲来により航空機から派生の形で開発されたが、ヴェルフェいやMSは根本から違うぞ？」

月詠「どう違うのだ？」

戒「詳しい事は悠陽達の所でかな？ 簡単に言うと戦術機は航空機が元になっているがヴェルフェゴールの様なMSと言う物は初めから戦闘を視野に入れた設計をされている。だから形状も違うし、スベックや兵装も全然違ってているんだ。」

月詠「その様な物を大佐はどこで手に入れたのですか？」

戒「自分の持てる私財（創造）で理論を組み合わせて造り上げたんだよ。」

月詠「個人の資産などで造り上げる等可能なのですか！？」

戒「まあ、俺の場合は裏技も使ったがな…。」

月詠「裏技…ですか？」

月詠は更に詳しく聞こうとした瞬間、戒が何かに気付き話しを切り上げた。

戒「話しは後だ！！悪意の塊…それに、このドロドロした怨念に近い感じ…：：：BETAだ！！」

月詠「BETAだと！？…：：：だが、何も見えないぞ？」

月詠は驚いたが疑問に思い聞いた。

戒「質問は後だ取り敢えず下に行くぞ！」

そう言ってヴェルフエゴールを下に下降させた。そして、一方斑鳩准将率いる帝国期衛の部隊は…：

斑鳩「各機現状を報告せよ！」

衛士A「閣下の駆られて居られる瑞鶴と（撃震）の一番機と二番機は健在ですが、……三番機は戦車級に、四番機は光線級に撃たれ、五番機は突撃級により爆砕しております。」

斑鳩「その様だな。（潮時か？それにしても、戒は何時来ると言うのだ？）」

衛士の一人が淡々と応えるが声は絶望的と言った感じの声であった。斑鳩はその場で思案していた。が、その時に地面から地響きと共に要塞級がや他のBETA種（要撃級や突撃級）と一緒に自分達の目の前に現れ、更には光線級を吐き出しながら斑鳩や他の衛士達に絶望的な状況を作り出そうとしていた。

斑鳩「この様な状況で要塞級に光線級だと！？（この状況は非常に好ましくないな。）」

衛士A「か、閣下！！我々はどうすれば……。」

衛士B「も、もう駄目だ、俺達は助からない！？」

斑鳩「諦めるではない！？どの様な状況に成ったとしても最後まで諦めてはいかぬぞ！！生きて殿下の元へ、参ろうぞ！！」

斑鳩は何とか内心だけは冷静であったが他の2人の衛士は動揺し、絶望していた。其処を斑鳩は叱咤激励し、取り敢えずは落ち着きを

取り戻し先ずは近づいて来る突撃級へ接近し突撃殻を避け、真横から長刀の一閃の下に切り捨てた、それを皮切りに撃震の衛士達も各々に応戦していた。

衛士A「くっ、こっんのおおお!!」

衛士B「俺達の土地から出てけえー!!」

二番機は突撃銃の弾をバラ撒きながら小型種を屠り、一番機は長刀を使い要撃級と戦闘していた。

衛士B「危ない!?!」

その瞬間、要撃級と戦闘していた一番機は横から要撃級が突っ込んで来て声も出せずに吹き飛び周りに戦車級に瞬く間に群がられていた。

斑鳩「(全く、此では焼け石に水ではないか。衛士Bは撤退をせよ!?!)」

衛士B「閣下!?!閣下も御一緒に撤退を!?!」

斑鳩「馬鹿を申すな。ならば、此処に居るBETAを誰が足止めすると言っただ?」

衛士B「ならば、自分も残り閣下を微力ながらもお助けします」

斑鳩「生き残って居られるか解らぬぞ？」

衛士B「元より、覚悟の上です!!」

斑鳩「ふっ、本当に馬鹿者だな貴様は!!」

そう言つて斑鳩と衛士BはBETAに突撃しようとした瞬間、レーザーアライトが鳴り光線級がレーザーを上空に向け無数に放った。その光景に斑鳩達は驚嘆した。

斑鳩「なっ!!?(上だと!!)」

衛士B「閣下!?!危なっくわああ!?!」

斑鳩「ばっ、馬鹿者が!?!」

斑鳩達の事などお構いなしに要撃級が斑鳩の乗る瑞鶴へ攻撃しようとした、が横から衛士Bの撃震が庇うようにして出て来た為に要撃級の攻撃を上から受け圧殺された。斑鳩はそれに激昂し今しがた攻撃して来た要撃級を一刀の下斬り殺し、叫んだ。

斑鳩「BETA共よ!!我が同胞の敵取らさせてもらうぞ!?!」

そう言つて斑鳩をBETAに向けて走らせようとした瞬間、上空からの接近をアラートで気付き、一旦BETA共から距離を取り網膜投影により上を見ると高速で近付く真紅の機体が小さいながらも分かった。

斑鳩「（真紅と言う事は……）戒！遅かったではないか！？」

戒「すいません。少々、拾い物？をしていた物ですからね？」

斑鳩は網膜投影で戒に通信し、戒は申し訳程度に謝り斑鳩はそんな戒の後ろに見慣れた者を見つけ驚嘆した。

斑鳩「月詠中尉、そなた無事で在ったか！！」

斑鳩の問いに月詠は申し訳無い様な表情で言った。

月詠「はい。危ない所を此処にいる黒逸大佐に助けて貰い、機体に乗せて頂いており、私の乗る瑞鶴は酷い損傷で乗り捨てる形になってしまいました。」

斑鳩「よいよい、貴殿の無事は殿下も喜ぶぞ？」

戒『あのさ？話は後で先にBETA共から逃げるの先じゃないか？』

斑鳩「その様だな。しかしどの様にして退くのだ？このままでは退くに退けぬぞ？」

戒『其処は任して下さい。斑鳩さんは俺の後ろにいて下さいよ？じやないと巻き添えに成りかねますからね？』

戒に言われ斑鳩は後ろに移動し戒に聞いた。

斑鳩「これで良いのかな？」

戒『ええ、すいませんね？脚部固定用ロック展開！！胸部解放！！エネルギー収束！！トリプル・メガソニック砲…発射あ！？』

戒は斑鳩が後ろに移動を確認して、ヴェルフエゴールに内蔵したメガソニック砲を使い巨大で極太の赤黒い光を放ち目の前のBETAを薙払った。

月詠「っ！？（何だ今の兵器は！！）」

斑鳩「戒、貴公には毎回驚かされているが、これは凄まじいな？」

月詠に斑鳩は今の砲撃にそれぞれの反応を示した。

戒『これで撤退する事ができますね?』

斑鳩「その様だな。」

戒『取り敢えずは東京にいる悠陽の所まで部隊をまとめて行かないとですね?』

そう言いつつ戒は全周波放送を使い帝国の各部隊に連絡した。

戒『全部隊に告ぐ!!!これより全部隊は再編成し東京に向けて撤退せよ!!!』

戒は全部隊に全周波数を使った撤退命令を下し、斑鳩と共に一旦後方の後方支援兼仮設駐屯地になっている善行の部隊に赴いて合流した。その時に斑鳩准将や月詠中尉を引き連れて来た黒逸に善行達は驚いたが閑話省略である。そして改めて黒逸達はBETA侵攻による京都防衛戦は敗走と言う形になり、後に白凌基地壊滅に繋がりに横浜ハイブ建造まで許す形と成ってしまった。

第陸話（後書き）

かなり、グダグダでご都合主義な感じで終わってしまったorz
次回は戦闘無しで悠陽達との会話です。ガンパレの方々はこれから
も出した方が良いでしょうか？ご意見を下さいm | | m

第七話（前書き）

3日明けての投稿です。話しが妙にぐだぐだになりこの人はこんなキャラでは無いと嫌だと言う人はバックして下さい。

第七話

戒「黒逸戒、煌武院殿下の命により参上いたしました。」

悠陽「よくぞ参られた。まずは此度の本土防衛戦に対しての貴公の働きにより、我が帝国は予想よりも少ない被害ですんだ事に礼を言う。」

戒「礼を言われなくとも、殿下の命で有ればどこにでも馳せ参じましょう。」

悠陽「その様な事を皆のいる前で言うでない／＼、それと黒逸大佐は此度の活躍により二階級特進で准将になります。」

戒「……はい？最初の方も気になります。が後半の准将の昇任ってどういう事ですか！？」

悠陽「我が帝国衛士や民達をBETAから守り尚且つ旅団規模を幾つも壊滅させた功績に対する我々の評価であり黒逸大佐を准将にと紅蓮大将に斑鳩准将と共に決めたのだ。」

戒「殿下にお二方の決定事項ですか……。了解しました。この黒逸戒、

准将の任を確かにお受け致します。』

戒『それと、話しは変わりますが、ヴェルフエゴールで出撃した事に付いてアメリカ側の連中が騒ぎ出す頃の筈ですが?』

紅蓮「その事は儂や鎧衣に開発局の巖谷が対応しよう。なに、アチラが何か言つて来たら主の提供してくれたOSを引き合いに出すだけよ。しかし戒が言ったMSだったか?そちらの方はどう説明するかが問題になりそうだが?」

斑鳩「左様、あの様に高性能な物は必ずやアメリカの者共は技術やもしくは現物を寄越せと申すはず...。」

戒『その事については国連のJF-X計画に技術提供する方向で巖谷中佐には説明出来るものとして資料をお渡しするつもりです。』

紅蓮「しかし、そのまま渡すのは不味いのではないか?」

戒『そこは大丈夫です。重要な部分はブラックボックス化しますし、主機部や兵装の資料は虫食いにしますからそのまま持ち帰ったとし

てもMSや光学兵器等の製造は出来ませんよ。まあ、MS用OSは戦術機に搭載出来るのでそっちの方は帝国で開発したと言う事で発表します。』

斑鳩「ならば問題は無いな。」

紅蓮「しかし、量産と言ったがどの様な物にするのだ？」

戒「まず、試作機の候補に挙がっているのが2つ在り俺が乗るMSパーソナル・トルーパーかPTシリーズがあります。』

斑鳩「PTとは初めて聞くが一体どういった物なのだ？」

戒「まず大きな特徴として「戦術的動作思考型OS」、TC・OS（タクティカル・サイバネティクス・オペレーティング・システム）
と言いあらかじめそのOSには登録されているモーションにより戦闘時の機体の動きに対して適切な動作をOSの方で選択し動く事が可能でありますし、また、自動と手動の切り替えも可能で搭乗者の動きに合わせられます。また、それにより搭乗者の負担を軽減し衛士適正が無くとも乗れ、より人に近い動きが可能になります。』

紅蓮「しかし、御主の乗っているヴェルフェゴールもそれに当てはまるのではないか？」

戒「俺の機体はPTのOSをMS用に改良して積み込んでいますから同じ様に動けますね。」

斑鳩「それにしてもTC-OSは聞いていると登録されたモーシヨンと言うがその登録されている物はどの位あるのだ？」

戒「今は取り敢えず達人級の剣術に格闘術ですかね？他は俺の機体に蓄積してあるのを追々フィードバックしていく予定ですよ。」

紅蓮「なんと！？剣術を使えるのか！！」

戒「ええ、それに自身が乗る機体のOSに自分が修めた物をインストールすればその修めた流派も実用可能ですよ。」

斑鳩「それは私や武家の者達には嬉しい限りであるな。」

戒「今、自分の所で機体をロールアウトしているのは取り敢えずはゲシユペンストシリーズの量産機と試作機二機にMSの105ダガーですかね？」

悠陽「それはどこで作っているのですか？」

戒『驚く様な所で、ですよ？』

斑鳩「驚く様な所だと？その様な場所が在るといふのか？」

戒『ええ、以前に悠陽殿下から戴いた少し大きめの屋敷が在りますよね？』

悠陽「ええ、確かに在りますが……まさか！？」

戒『そのまさかですよ？そこに地下区画を作り上げてそこで試作機を製造しました。』

紅蓮「あそこに地下区画をこの短期間で作るとは……。どの様な事をしたのだ？」

戒『まずは自己進化型自立AIのアルを司令塔としMDS モビルドールsystem所謂無人機を使い地下区画を作り上げ、そこでPTやMSの製作を行いました。』

斑鳩「誰もあの屋敷の下がその様になっていたとは露にも思わなんだな。」

戒「当たり前ですよ。それが狙いで始めてたんですからね？取り敢えず用意出来るのは先行量産型ゲシユペンストと特化型の発展機としてアルト・アイゼンの両二機に105ダガーがもう直ぐロールアウトします。ダガーについては、ハート・ポイントシステムHPSが採用されており作戦に応じて装備を換装して出られます。」

紅蓮「そのゲシユペンストなる物の詳細はどうなっておるのだ？」

戒「まずは量産型ですが近、中距離に強い機体で核融合炉を搭載して戦術機ではなし得なかつた高出力を手に入れる事が出来、近接武装の方は左手の方に三本のプラスマスタークがありそれに電撃を纏わせてバンカーの様に使用します。そして光学兵器の使用も可能でプラズマカッターと言うビームサーベルをちょうど腰の横辺りにマウントしてその後ろには中距離兵装のM950マシンガン改良式を装備しておりバックパックには多弾頭ミサイル（スプリットミサイル）六発を装備しております。そして先程のTC-OSSを標準装備しており柔軟性に秀でている機体です」

紅蓮「では、もう一機は特化型と言ったが？」

戒「ゲシユペンストは近、中距離寄りのPTですが特化型PT名称は「アルト・アイゼン」ですが完全に近距離特化型で多少ピーキーな物となっておりエース級の衛士位にしか乗れないですね？本機の大きな特徴としては頑丈さを追求した重装甲と光学兵器をある程度

緩和する為の特殊装甲であるビームコーティングが施されてより機体重量が重く機動性が低く、それを解消する為は大推力バーニア・スラスターや加速用にアフター・バーナーや過吸気を標準装備としており、爆発的な速度によりこの機体は素早く敵に近付く為に一撃離脱戦法を主眼に置いた機体になっており、その為に高出力のプラズマジェネレーターを装備しています。また武装の方は全てが固定兵装になっており、右腕には六連式リボルバータイプのパイルバンカーヒートホーンに左腕には三連式機関砲を装備し、頭部には加熱式実体剣を装備、これは弾切れを起こした時の非常用の格闘兵装になり肩の部分には特殊兵装の近距離からの指向性・近接戦闘用炸裂弾M180A3（大型のクレイモア地雷）とチタン合金製・平均直径120mmの炸裂鋼球弾と共に一緒に使用し敵を粉碎します。こいつは近、中距離で使う為に跳弾の心配は無く射角が広いために自機を爆発に巻き込む事は有りません。そしてバツクパツクにはリボルバー式や三連式機関砲等の予備弾倉を多数積載しており長時間の戦闘が可能です。」

紅蓮「一撃離脱とはな…、我々には無い発想だな。」

斑鳩「確かに、先に紹介されたゲシュペンストの方が扱い易い印象を受けるな。」

戒「まあ、そう言いますがゲシュペンストは汎用性がある分決め手に欠けて近接特化型のアルトアイゼンを製作しました。」

悠陽「ですが光線級が出て来て遠距離からの攻撃にどう対処するのですか？」

戒「そちらは高機動戦仕様の砲戦支援特化型のヴァイスリッターをアルトアイゼンの後になります。がロールアウトしますので基本的にはこの二機で二機編成エレメントを組んでの行動が主になりますね。」

悠陽「そちらはどう言った兵器を装備しているのですか？」

戒「此方の装備は超長距離砲撃を可能とした専用ライフル（オクスタンランチャー）を用いた運用が主で専用ライフルは実体弾とビーム兵器の2つのモード切り替えが可能です。それに左腕部には収納の出来る中距離牽制に使える三連式ビームキャノンプラズマキャットを腰部にはゲシユペンストに使われている非実体剣と光学兵装を搭載しており、動力源は先に説明したゲシユペンストシリーズには共通のプラズマジエネレーターを装備しておりますのでエネルギー出力の問題点も在りません。」

斑鳩「高機動戦型と申したがどの位の速度を出すのだ？」

戒「えー、これは各所に施した小型のバーニアスラスタターやブースターを用いてデータ上になります。が亜音速での飛行機動が可能です。搭乗者には多大な不可が掛かりますが、テスラ・ドライブと言う高効率反動推進装置により、重力質量と慣性質量別個に変化させる事が

可能で衛士への負担をほぼ無くす事ができます。後はそれら重量を安定させる為の姿勢制御装置にスタビライザーやバランスーを使っております。』

悠陽「戦術機では到達出来ぬ速さですか？」

紅蓮「しかし、試作機と言つが誰が乗るのだ？」

戒「そこですが、アルトアイゼンは俺自身が乗りヴァイスリッターにはM D s y s t e mを使い運用データを取るつもりですので心配には及びません。ゲシユペンストは取り敢えず先行量産型として一個中隊分が出来ておりますから今ある不知火・壱型丙と一緒に帝國期衛の者達から配備する形で宜しいですね？」

紅蓮「確かにそれならば、他の衛士達にO Sに期衛の者達の動きフィードバックさせて扱わせる事が出来るな。」

悠陽「では此度の問題やその後についての解決方法は決まったな？」

戒「ええ、これから忙しくなりそうですね？」

紅蓮「ではこれにて解散!!」

悠陽の締め戒が答えて紅蓮がその場で解散を告げ、斑鳩と共にその場を後にしようとして戒は悠陽に声を掛けられた。

悠陽「黒逸准将、話がありますのでそなただけ残れ。」

戒「解りました。(俺、何かしたか(汗))」

悠陽に呼び止められ戒は内心焦りながら答えた。そして他の人達が二人を残して退出したのを確認し悠陽が話し始める。

悠陽「戒さん、私は……どうすれば良いのですか？ただのお飾りの將軍である私は……。皆の為に何…もしてやれず、ただ…座っているだけ…。」

戒「そんな事はない。俺は悠陽がいたからこの場にいるし、逆に悠陽がいなければここに俺はいなかったって事だけは断言できるよ?」

戒は今にも泣きそうな悠陽に近付きあやすかの様に言った。

悠陽「戒…さん。」

悠陽は戒を潤む瞳で見上げ、戒は悠陽にゆっくりと近付き髪を優しく梳き安心させる様に抱き締めた。

戒『悠陽…君が俺を必要とするなら、俺は君の為に尽くす事を約束する。』

悠陽「戒さん…。」

戒『…………。』

悠陽は目を閉じてた。戒はそれに応える様に二人の距離は無くなった。そして、二人は名残惜しそうにそつと離れた。時間にして数秒だがその間の数秒が二人には長く感じれていた。

悠陽「…………ん。か、戒／＼」

戒「…………悠陽／＼」

悠陽「戒…私は」

戒『その先は…駄目だ。』

悠陽は自身の唇を触り先程の余韻を思いだすかの様にしていた。それに対して戒もその甘い雰囲気の流れられるかの様に少し顔を赤らめていた。その後悠陽が何かを伝え様としたのを戒は感じてそれを止めさせた。

悠陽「何故ですか？」

戒『それは場の雰囲気や勢いに流されて言う事では無いからです。』

悠陽「この貴方への想いはこの悠陽偽り等では決してありません！
」！

戒『悠陽…君の想いには今は応えることは出来ない。』

悠陽「今は、って事は機会はあると言う事ですね？」

戒『まあ、確定はしてないかな？』

悠陽「ならば、いつか私は貴方を振り向かせて見せます」

戒「ふつ。ならばそれに応えられる様に漢らしくならないとですね。
紅蓮大将に鎧衣さん？」

紅蓮「ははは。やはり、戒にはバレていたか」

鎧衣「私もバレない自身は合ったのですけどね？」

悠陽「…え？／＼」

戒は急にこの場にいない筈の二人に話し掛けたが二人は普通に柱の陰から出てきて戒に話し掛けて来たのである。普通に会話をする三人に対して悠陽は訳が判らずに顔を紅くして固まっていた。

戒「ふう、良く言いますね？先程の悠陽とのキスした時に俺に軽く殺気を飛ばして来た癖に紅蓮大将は何を当たり前の事を聞くのですか？」

紅蓮「ぬう…。」

鎧衣「はは、紅蓮大将は煌武院殿下に対して過保護ですからね」

軽く話し掛けて来た紅蓮達に戒は意趣返しとして殺気を飛ばして来た事を引き合いに出され、紅蓮大将は呻き、鎧衣は笑いなが紅蓮大

将をらからかう様にして戒に話し掛けて来た。

悠陽「ぐ、紅蓮大…将？／＼いつから其処に？／＼」

紅蓮「最初からですぞ？いやあ、悠陽殿下にも春が来て喜びましたぞ」

悠陽「ううう／＼／＼」

紅蓮の軽い返事に一部始終を見られた事を認識して悠陽はこれでもかと言う位に顔を紅くして戒の後ろに隠れるようにして移動し、戒はそんな悠陽を見て紅蓮達に話し掛けた。

戒「ふう、紅蓮大将？部下の者達がいらないからと言ってあまり悠陽をからかわないでやって欲しいですね？」

紅蓮「ははは。あまりにも悠陽殿下が素で居られたのでついな」

戒「まったく、悠陽？俺はこれから行くところがあるからそろそろ離してくれるか？」

悠陽「う、ごめんなさい！！／＼／＼」

戒が悠陽に離れる様に促すと悠陽は今まで戒の軍服の端を掴んでいた事に気付く顔を更に紅くして慌てて離して謝ってきた。その反応に戒は小動物みたいだなと感じた。

戒『それでは紅蓮大将に鎧衣さん、俺はこれで失礼します。』

紅蓮「うむ。」

鎧衣「アメリカの事は私達に任せ君は君の成すことをやりなさいね？」

戒が退出する事を告げ紅蓮大将は頷いて、鎧衣さんは問題はこちらでやるから自分のやる事を薄々ながら感じているのか、励ましてくれた。

悠陽「戒…、また…来て下さいますか？」

悠陽がそんな疑問を投げかけて来たのに対して戒は…

戒『君が望むのであればまた来るよ。』

そう言って戒は悠陽達がいる大広間を出て行った。

紅蓮「これからですか？」

鎧衣「殿下の恋…ですか？」

悠陽「よ、鎧衣殿／＼」

紅蓮「確かにそれも大事ですがアメリカの動向がやけに静かですから何か企てて来ぬか心配でな。」

悠陽「大丈夫です。何かあれば必ずや戒が助けて下さります。」

紅蓮「殿下は既に戒に落とされてお出でか」

悠陽「ぐ、紅蓮大将！？／＼」

戒が退出した大広間では悠陽達3人が笑いを交えて話しをしてその日は終わって行くのであった。

第七話（後書き）

話しの後半は砂糖を吐きながら執筆しており悠陽フラグを建ててみました。次回は明星作戦まで書けますかね？作者自身ハッキリしておりません。が楽しみにして下さい。m (´ `) m

第八話（前書き）

いつの間にか70,000hit overしてありました作者のク
ロイツヴァルトです。駄文から早く卒業出来るように努力してい
きたいと思いますm(´▽`) m

第八話

戒は紅蓮大将から一時の休みを得て自身にあてがわれている屋敷の地下でこの後、に起きる明星作戦の為の用意を忙しくしていた。

戒『8、そつちはどうだ？』

8（とりあえず、期衛に回すゲシュペンストにヴェルフェゴールのOSに蓄積した動作記録のフィードバックは約七割が完了でヴァイスリッターは数日でロールアウトだ。それと、他のMSにPTの部品並びに弾薬の生産を継続中。）

戒『そうか。アルの方は？』

アル「ヴェルフェゴールにアルトアイゼン、ヴァイスリッター等に搭載するM D s y s t e mの準備完了。」

戒『この調子なら半年後の作戦迄には間に合うか……、8とアルはこのまま作業を継続してくれ。俺は上に戻って巖谷中佐と国連やアメリカの動きを探ってみる。』

8、アル「（了解。）した。」

戒はこれからの動きを考えて上に戻る事を告げ、8達には作業を続けてもらう事にした。そして、場所は変わり帝国軍基地にある戒の執務室……

戒『ふう、とりあえず今はこの位かな？』

戒は執務室にある自前のIFS型コンピューターで今までの情報の整理していた。そこへ執務室を訪れる来客を知らせる音がなりモニター越しに斑鳩准将達があり、戒は斑鳩達を執務室に招き入れた。

斑鳩「戒、今は時間の方は大丈夫か？」

月詠「斑鳩准将！！私は別に今と言ったわけでは……。／／／／」

戒『……ごめん、斑鳩さん話しが全く見えないんだが？』

斑鳩「何、戒の衛士としての腕を期衛の者達に見せて欲しくてな……」

月詠「黒逸准将は忙しい筈だから今は無理だと申している筈です

よ……」

斑鳩「そうは言うが月詠よ…御主も前の防衛戦の時に見せた戒の操縦技術を見たいとは思わぬか？」

月詠「た、確かに見たい…ですが…。」

戒『その位なら良いですよ？』

戒は目の前で口論する？斑鳩達に対して二つ返事で了承した。

斑鳩「おお、受けてくれるか」

月詠「大丈夫なのですか！？」

戒の了承に対し、2人は対象的に違う反応を見せた。

戒『ええ、雑務なんかも一区切り着いた所だから言い方が悪くなりませんが息抜き程度にですが…。』

斑鳩「ならば、そうと決めれば直ぐにシミュレーターの準備をする

としよう。」

月詠「すいません、黒逸准将、お忙しい中で……。」

戒「大丈夫ですよ。今日中にやる書類なんかは既に終わらせているしね?」

月詠「そうですか。」

戒「後、名字は慣れないから名前をお願いしますよ?」

月詠「な、名前などで無理です、准将に恐れ多い!」

戒「なら、准将の権限で名前を呼ばせるぞ?」

月詠「うっ!?!か、戒准将?」

戒「准将もいらないけど真那は真面目だから良いかな?」

月詠「ま、真那!?!」

斑鳩「戒に月詠よ。準備が整ったので直ぐに参るぞ!！」

月詠は戒に唐突に名で呼ばれ赤面をした。其処へシュミレーターの準備に行っていた斑鳩が戻って来て2人を急かした。

戒『では生きますかね、真那中尉?』

月詠「はっ、はい!？」

月詠は戒に呼ばれ若干、上擦った声に成りながらも返事をして後ろから着いて行った。

斑鳩「此処だ。」

戒『これはすごいですね?』

そう言つて斑鳩に連れられて来たシュミレータールームは結構な広さがあり、通常は小隊分位にしかな無い物を中隊規模まで有った。

斑鳩「此処では御主から提供して貰ったOSの慣熟訓練を主にして使っておる。そして、仮想的にはあるが模擬戦も行つ事が可能ぞ。」

月詠「今、あちら側では一部の期衛軍衛士達による慣熟訓練を行つております。」

戒「なら、衛士達の訓練を少し見てみるとしよう。」

斑鳩「それは真か!!」

月詠「よろしいのですか?」

戒「ええ、今調整中のPTの性能を仮想空間で実証してみたいですからね?」

斑鳩「ならば、一度皆を集めて説明せねばなるまい。」

月詠「期衛軍集合せよ!!」

戒の提案に斑鳩が賛成し一度説明を入れる事になり、月詠が今現在

慣熟訓練を行っている衛士達を呼び集めた。

「期衛軍 部隊集合しました!!」

そう言つて敬礼したのは 部隊の隊長であつた。

月詠「今から貴様達には急ではあるが此処に居られる黒逸准将と模擬戦を行つてもらう。」

「じゅ、准将とですか!？」

月詠の言つた事に皆を代表するかの様に隊長は驚嘆し、部隊の面々も動揺していた。

戒「急で済まないが皆の動きはモニターで見させて貰つたがまだ固い部分がある為、俺直々に教えてやるうと思つた次第だ。」

月詠「話は以上だ。全員すぐに準備せよ!!」

戒が期衛の隊長達に建て前だが訳を話し、月詠の一声で全員がシュミレーターに乗り込んだ。

「隊長、あの方は誰何ですか？」

隊員の一人が疑問に思い聞いた。

隊長「あの方は先の本土防衛戦にて新型の試作機に乗られ単機で旅団規模のBETAを足止めした御方だ。」

「りよ、旅団規模をですか!？」

「そんなの嘘に決まってるだろ？」

隊長の答えに隊員達は半信半疑であった。そこへ戒からの通信が入った。

戒『此方の準備は完了した。部隊の方は準備出来たか?』

隊長「はっ!!こちらもすぐにも始められます。」

戒『そうか。』

隊長「准将は防衛戦での機体でお出になられるのですか?」

戒『いや、今回はちょっとした実証を兼ねての模擬戦だ。だから、本気で来て貰っても構わんよ?』

隊長「此方は5人に対して准将は単機ですが?」

戒『何だ、心配か?そんな物は不要だ。伊達や酔狂で准将には成れんぞ。』

そう言って戒は先にシュミレーターを起動させた。

隊長「全員、シュミレーターを起動せよ!」

そして、隊長を始め 部隊はシュミレーターを起動させた。

戒『(さて、アイゼンの試運転を兼ねた仮想戦だがどうなるかな?)』

戒はモニターに映る廃墟を見ながら一人思索していた。

隊長「各機全力でこの模擬戦に当たれ！！相手は京都防衛戦の英雄に当たる人物だ。心して掛かれ！！」

部隊「……了解！！！！」

月詠「今回のCPは私が務める各機奮闘せよ！！」

部隊の陣営は撃震、瑞鶴が共に二機ずつ、そして隊長機に不知火・吉型丙の混成部隊で成り立っていた。そして月詠が期衛の者達を激励して模擬戦を開始させた。

戒「さてと、お手並み拝見と行きますか。」

開始早々、戒が操るアイゼンは一気にスラスタを吹かせてビル of 廃墟群を疾走した。それに隊長はいち早く気付き部隊に指示をだした。

隊長「っ！？各機散開！！」

「いきなりかよー！！」

「……のおおー！！」

「舐めやがって！……！」

部隊の面々は様々な反応を見せながら突撃銃で牽制しつつ散開した。

戒『反応は良いがそれに行動が追い付いて無いな……。』

戒は機体を滑らすように動かし 部隊の放った弾幕を回避しつつ接近した。

隊長「 1から 2へそちらに向かったぞ……！」

2「 2、了解……！」

隊長に言われ 2は機体を戒の方に向けて長刀を構えた。

戒『あえて、単機で挑むか。だが……！』

戒はそれを見て感心したがそれと同時にステークを打ち込める距離を詰めていった。そして……

2「いつけええー……！」

戒『この間合い…貰った!!』

”ドゴンッ!!”

「なっ!?!うわああー!!」

2が長刀を上段から振り下ろす瞬間、懐に飛び込みバンカーを腹部に撃ち込んだ。

月詠「2コクピット部に致命的損傷により大破。」

3「このっ!!」

4「当たれえ!!」

月詠の報告に呼応するかの様に 3、4、が突撃銃を一斉射して5が長刀を手に接近して来た。

戒『良い判断だが、こいつに接近戦は悪手だ!!』

”ブオン!!!!”

5「うわああー!!」

襲い来る弾丸の雨を関係無いと言わんばかりにアイゼンのバーニア

1を噴かせて速度を更に加速させ 5にヒートホーンに高熱を宿して腰部に鎔解させながら突き刺してすくい上げる要領で空中へと吹き飛ばし、溶けた装甲の滴を撒き散らしながら空へ舞い上がった戦術機を落下地点にて迎え撃ち地面に縫い付けるかの様にしてステークを叩き込み、次の標的に向かった。

月詠「 5胸部に致命的損傷、大破。」

戒「次は誰だ!!」

戒はそう言って機関砲の弾を牽制にとばかりに 3と4にバラ撒いて行った。

3「うわっ!?!」

4「ぐうっ!?!」

月詠「 3、 4右腕を損傷、中破。」

戒「これだけのベアリング弾受け切れる物なら…受けて見る!!」

”バシヤッ”

アルトアイゼンの両肩のハッチが開き無数の弾が顔を覗かせていた。そして…

”ドガガガガッ！！！！！！！！”

アイゼンの両肩にあるハッチを開きクレイモアと炸裂鋼球弾を瑞鶴と撃震の二機の全身へ雨の様に浴びせるように撃ち放った。

3、4「うわああー！！！！！！！！」

月詠「3並びに4共に全身への致命的損傷、大破。」

隊長「何なんだあれは！？あの様な戦闘方法を取るなど正気とは思えんが、私以外全員やられていては文句も言えんな……。だが！！期衛軍の者として、そして！！漢として負けられぬわ！！！！」

瞬く間に僅か一機になってしまった隊長機は一時は動揺はしたが、すぐに冷静になり突撃銃と長刀を構えて戒に銃を乱射しながら突撃して来た。

113

戒「なるほどそう来たか……。なら、此方も応えるところ！！！！」

戒はステークの弾倉を交換しながら隊長機に応えるかの様に戒もフットペダルを踏み込みアルトのスラスターを一気に吹かせた。

戒「こちらはjokerを切らせて貰うぞ！！！！」

そう言い戒が乗るアルトアイゼンはまず左腕にあるマシンキャノン

を撃ちながら、両肩のシャッター部分を解放しクレイモアを壱型丙に浴びせ、額上部にあるヒートホーンに高熱を宿し元々赤い塗装をしてある角がさらに紅くし、シユミレーターで再現された戦術機の装甲をまるで、熱したナイフでバターを切るかのように鎔解させながら突き刺した。

戒『まだだっ！！』

額のヒートホーンが食い込んだままアルトは地面を踏み碎きその反動を利用して頭部を思い切り振り上げ、隊長機を天高く振り上げた

隊長「うわああー！！！！！！

」

ヒートホーンが突き刺さっていた戦術機は衛士の叫びとともに解けた装甲の滴を撒き散らしながら、宙へと打ち上げられた。

そして、アルトはその陸戦型では有り得ない程の超高出力のスラスターを噴かし、その空高くへ上げた隊長機に追撃する。

そのノズルから噴出するアルミ粉が燃烧し群青色の炎を吹き出し砂塵を舞き上げて、アルトアイゼンの重厚な巨体を押し上げた。

戒『受け取れっ！！これが俺の…切り札だっ！！』ジョーカー

空中で身動きが取れない期衛の壱型丙にアルトが迫り、右手のマグナムと同形状のシリンダーが回転し弾丸を装填する。

しかし、そこから打ち出されるのは弾丸ではない。

超大質量の鉄塊

いかなる城門とて、城壁とて打ち破る鋼鉄の杭…しかし。

隊長『まっ！負けるかああー！！』

”ガガガガガッ”

隊長機は壱型丙の胸部の一部をヒートホーンにより鎔解されて破損し、跳ね上げられたにも関わらず空中で体制を立て直し、自身の持つ突撃銃をアルトへと照準を合わせ撃ってきた。が…

戒『悪いが、その程度の物では俺のアルトには傷一つ付かんぞ！！』

”カカッ、カカカン”

隊長機の撃った弾はアルトアイゼンの装甲に傷を付けずに虚しく弾くだけであった。そして

”ドンっ！！！”

隊長が乗る壱型丙にバンカーが深々と下腹部へと突き刺さり…

戒『全弾もって逝き、果てろっ！！！！！！』

”断っ！！弾っ！！壇っ！！”

撃ち込まれたっ。

隊長「なっ！！？ぐわああ！！」

そして。

”ドゴーン！……！”

ステークを全弾撃ち込まれた吉型丙はその場で爆散した。月詠「不知火・吉型丙、爆散。部隊の全滅を確認、よって黒逸准将の勝利で模擬戦を終了とします。」

月詠の通信で、模擬戦終了の報告を聞き戒はシュミレーターを出た。

戒「どうだった？ 部隊者達は私との模擬戦で何か感じる物は得られたか？」

隊長「はっ！！我々はまだまだ連携が上手く出来ていない事が分かりました。」

戒「ん〜、私として連携の点は十分に合格ラインなんだけど、まだ新型OSに体が着いて来てないのが見受けられるな。次のBETA戦までには慣熟訓練のカリキュラムをしっかりとこなせ。私からは言える事は以上だ。」

部隊「……御指導、有難う御座います……！！」「……」

戒は 部隊の面々を前にどうだったか聞き、良い点と悪い点を指摘し、 部隊との話しを終えそのまま 部隊の者達とは別れてモニター室にいる斑鳩達に合流した。

斑鳩「戒よ。相変わらず御主は強いな？期衛の衛士5人を僅か10分足らずで全滅させるとはな、のお月詠中尉？」

月詠「はい。動きが速く、状況処理が追いつかない場面もありとても凄かったです。」

戒「でも、やはり期衛を名乗っているだけ在って何度かヒヤツとする場面が幾つか在りますし、隊長さんには最後の方では空中での姿勢制御をしつつ俺に攻撃できた訳だしあの部隊はこれからも鍛えれば伸びると思いますよ？」

斑鳩「京都防衛戦の英雄である紅き鬼神に言われるとは部隊の者もそうだが、部隊を纏める者として嬉しい限りではあるな。」

戒「……先程、隊長さんも言っていました。が俺の事を紅き鬼神と呼んでましたが何の事ですか？」

月詠「ご存知無いですか！？戒さんの京都防衛戦での戦いを皆が見ており、国の者達が畏敬の念を込めて呼んでいるのですよ！！」

戒「そ、そうか。（あれ、真那中尉ってこんなキャラだったけ？）」

月詠が興奮気味に説明し戒は若干引き気味ながらも彼女のキャラが

壊れているなど心配してる所にモニター室に入って来る者がいた。

巖谷「何やら賑やかですな？」

月詠「い、巖谷中佐！？」

戒『お久しぶりですね？巖谷さん』

斑鳩「珍しいな、御主がこの様な所へ来るなど。」

巖谷「何、期衛の者達が騒いで居ったからな？」

月詠「軍の者達が…ですか？」

斑鳩「騒ぎの原因は私と戒であろう。」

戒『…斑鳩さんなら解るけど何故俺を引き合いに？』

月詠「黒逸さんも准将なのですよ？」

斑鳩「左様、私と戒2人の准将が同じ所にいれば期衛の者達が騒ぐも必然と言う物よ。」

巖谷「ま、そう言う事ですな。」

戒『そんな物ですかね？そう言えば巖谷さんは国連の方にいるはずでは？』

篁「巖谷中佐！！」

戒が何故国連にいる筈の巖谷中佐が此処にいるのか疑問を聞いた時に中佐を呼ぶ唯依の声が聞こえてきた。

戒『唯依中尉？』

篁「か、准将！？お久しぶりです。」

戒が唯依がいる事に不思議に思いながら名前を呼ぶと唯依は戒がいるとは知らずに驚きの余り、最初は名前で呼びそうになりながらも慌てて直し、階級で呼んだ。

巖谷「相変わらず唯依ちゃんは堅いね？」

唯依「当たり前です！！」

戒「唯依中尉、そんなに怒ってばかり居ないで笑った方が可愛いよ？」

唯依「わ、私が、か、可愛いなどとはふざけないで下さい。／／」

巖谷「やはり、戒くんは唯依ちゃんの魅力が分かっているじゃないか」

唯依「い、巖谷中佐まで／／／／」

月詠「……………」

斑鳩「ん？月詠よ、どうしたの…だっ!？」

戒が唯依達と談笑していたが先程まで話していた月詠が急に静かになったのを不思議に思い斑鳩が後ろを向きながら呼び掛けたら物凄く不機嫌そうな顔をしているのを見てしまい斑鳩は驚嘆してしまった。

月詠「斑鳩准将、どうかしたのですか？」

斑鳩「い、いや何でも無いぞ。(これでは戒の行く先が不安で仕方

ないぞ？殿下に篁中尉そして月詠か、堅物な女性を落とすとは恐ろしい奴だ。」

斑鳩の様子に月詠が声を掛けたのだが月詠の顔が口は少し笑い掛ける感じに対し目が笑っていないと言う怖い事になっており斑鳩は准将らしからぬ動揺を見せ、内心で戒に対して感心していた。

戒『斑鳩さんに真那中尉、どうかしたんですか？』

月詠「な、何でもありません!!」

斑鳩「何、月詠中尉が何か困っていたので声をかけていただけよ。戒、そなたに聞いてやって欲しい。」

月詠「!?!?!」

戒に呼ばれた月詠は何でも無いと言ったが斑鳩の言葉に月詠はびっくりしたのか斑鳩を赤面しながら見てしまった。

戒『真那中尉、何か困り事ですか？』

月詠「い、いえこれを困り事と言って良いか?!?!」

戒『何ですか？』

月詠「うう／＼／＼し、失礼します！！」

戒『あつ！！真那：中尉？斑鳩さん、真那中尉はどうしたんですかね？』

斑鳩「さあな。（月詠よ、頑張るのだぞ。）」

月詠は斑鳩の言葉を信じて戒が正面から見てきて相談にのってきたが気恥ずかしくてモニター室を飛び出してしまい戒はそれを不思議に感じ、斑鳩に聞いたが斑鳩も知らぬ振りをして月詠に心ながら応援していたその時、背後で妙なプレッシャーを感じ後ろを振り向くと黒い笑顔をした唯依がいた。

唯依「黒逸准将？」

戒『なつ、何でしょうか篁中尉！？』

唯依が戒を呼んで来たが何故か名字の方で呼んできた上に彼女から発するプレッシャーにより戒は答えるも敬語になっていた。

唯依「黒逸准将はおモテになるのですね？」

戒「きゅ、急にどうしたんだ？（巖谷さん、斑鳩さんどうにかして助けて下さいよ！？）」

巖谷「済まぬ、私は力に成れぬ。」

巖谷「ほ、ほれ、唯依ちゃん確か戒くん何か伝える事が有ったはずだろ？」

唯依「あっ！！そうでした。」

戒「（巖谷さんナイス！！）何かあるの唯依ちゃん？」

唯依「は、はい。（唯依ちゃん）／＼前回の時に戒さんから渡して戴いたOSの資料を国連軍に提出した所、各国の反応は特にアメリカやソ連が強くアメリカに至っては詳細を教えろと言ってくる位でした。なので戒さんには国連へ赴いて貰いたく思い今回帝国に戻って来た次第です。」

戒「ん、なら、数日後の大東亜連合主体の国連軍との本州奪還作戦の時にアルトにヴェルフエゴール、そしてゲシュペンストを投入するから直にその性能を見せる事にするよ。ちよつと今回の作戦であるシステムを使って見たいからね？」

唯依の話しに戒は今度行われる明星作戦で今見せれる物を出して改めて各国の者達にあのOSの凄さを見せるついでに試作段階のシステムの試運転をすと言った。

巖谷「あるシステムとは？」

斑鳩「戒の事だ、また驚かせてくれるのだろうか？」

戒「ええ、そのシステムと言うのはM D s y s t e mと言い無人で有りながらも機体を動かす事を可能とする物で偵察機等に使用可能で統括するのは自律型AIのアルでデータ上ではPT等1,000機を一度に制御可能になっています。」

巖谷、唯依「1,000機!？」

巖谷に唯依は戒の言う自律型AIを用いたM D s y s t e mでの制御出来る範囲が大隊規模である事に驚きを隠せなかった。

巖谷「ただ一個の官制機だけで…、凄まじい一言ですな。」

唯依「その様な事が可能なのですか？」

戒『勿論ですよ。後、巖谷さん？官制機では無く量子コンピュータの様な物で超並列処理を実現させ、大量の情報を高速処理をする事が出来1,000機もの戦術機並びにPT等をM D s y s t e mにて統制を取れます。』

巖谷「量子とは、未だに実用性が出ていないとされているが？」

戒『そこは問題ないです。自律型AIであるアルは今の技術では到達出来ていない150億個以上の量子コンピューターから出来ます故に。』

唯依「それではかなりの大きさになるはずですよね？」

戒『所が、俺の作製したアルはヴェルフエゴールの技術も使っているので手の平にちょうど収まるサイズで作れていますよ？』

巖谷「それは凄い!!」

戒『とは言っても複数台作ろうとすれば国が傾きかねない為、俺の所にある物しか無いですがね？』

唯依「量産出来るとしたらそれはそれで恐ろしいですよ。」

戒の言葉に巖谷は感心し唯依は呆れが混じった声をだした。

戒『とりあえず、今M D s y s t e mを搭載しているのは俺が今度名目上で立ち上げる試験小隊にだけになるがな。』

唯依「試験小隊ですか？」

戒『ああ、今度の作戦時にだけの限定になるがな。』

唯依「そうですか……。」

戒『勿論、その時には唯依ちゃんにはC Pを頼むけどね?』

唯依「わ、私ですか!？」

巖谷「良かったじゃないか、唯依ちゃん?ご指名を貰って。」

唯依「前は軍の指示でしたけど、私などに務まるでしょうか?」

戒『謙遜しない。唯依ちゃんは十分に俺を補佐してくれていたし、あの時の俺の我が儘に唯依ちゃんは正論を述べてくれたしその後の指示も的確だったから助かったよ?』

唯依「そ、そんな。／＼／＼」

戒『とりあえず、作戦の時には頼むぞ？唯依。』

戒はそう言って唯依の頭を撫でてから部屋を退室した。

唯依「戒…さん／＼／＼」

巖谷「唯依ちゃん…おじさんは応援してるよ。」

唯依は戒に撫でられた頭に手をやり戒の名前を顔を少し紅くしながら呼び、それを見ていた巖谷さんは唯依の恋が実る事を応援していた。

そして数日後に大東亜連合率いる国連軍との本州奪還作戦が始まった。そこで戒は悲劇を回避出来るのか？

第八話（後書き）

相変わらず戦闘描写が上手く行かない物ですね f ^ | ^ ;

とりあえず次は明星作戦の舞台になりますね。隆之は生存の方が良
いか悩む所ですが、皆様のご意見をお聞かせ下さい。 m (| (

m

第仇話（前書き）

仕事が忙しく中々投稿出来ない作者のクロイツヴァルトです。

既に100,000hit目前まで来ているのを驚嘆しつつこの様な稚拙な文章でも読者やユーザー様方に見て頂き感謝していますm

（――）m

これからも何卒よろしくお願いします（^。^:）

第仇話

此処は帝国軍のミーティングルーム

斑鳩「これより大東亜連合との横浜ハイブ攻略戦、作戦名明星作戦を決行する!!!」

月詠「この作戦は日本帝国の未来を左右する重要な作戦だ。各員心して掛かるのだ!!!」

戒「今回、我が軍は撃震80機に瑞鶴50機に試作型武御雷50機、不知火・壱型丙30機に試験運用を兼ねたゲシユペンストを120機そして特化型のアルトアイゼンにヴェルフエゴールをこの作戦に投入する事を決定した。そして試験小隊としてその内のゲシユペンストを20機にアルトアイゼン、そしてヴェルフエゴールを含む22機は無人遠隔操作ソフト、MDシステムの試験運用を兼ねている。」

月詠「その為、この小隊は隊長機の黒逸准将とCPの篁中尉の2人だけとなる。」

斑鳩「他の部隊については変更は無い。」

戒「最後に、この戦いが反撃の狼煙とならん事を……。」

戒、斑鳩、月詠「」「帝国軍の者達、各員多いに奮闘せよ!!!!!!」

「」

戒達の激励により帝国軍の士気は上がり、全衛士は各々の戦術機に乗り込んで行った。

戒『これから始まるんだな…。』

月詠「そうです。この作戦を成功させ、米国の者共に我ら日本帝国の強さを見せ付けるのです！！」

斑鳩「そなたらしくも無いな？なにを弱気な事を申しているのだ？」

戒『今回の作戦で確かに国連軍は協力的にあるけど、米国がなんのアクションも起こさずに不気味な迄に静観しているのが気になるんだよ。』

斑鳩「確かに彼の国は己の力を見せ付ける為に絶対に出てくる筈であるからな。」

戒『しかし、今更考えても致し方ないか。』

月詠「そうですね。」

斑鳩「そろそろ、我らも出撃の支度をせねばな。」

そう言つて斑鳩は先にミーティングルームを退室して行った。そしてそれに続き戒も退室しようとした所を月詠に呼び止められた。

月詠「黒逸…准将。」

戒「真那中尉、どうした?」

月詠「どうか無茶をなさらぬ様、お気を付け下さい。」

戒「急にどうした?」

月詠「私にも判りませんが、何か悪い事が起きる様な気がしてならないのです。」

戒「…それは真那の感か?」

月詠「あまりそういうのは良くないのは判るのですが、それで黒逸准将が居なくなるのでは無いかと心配で」

戒「ふつ、大丈夫だ。此方には勝利の女神達が居るのだからね?」

月詠「勝利の女神…ですか?」

月詠が不思議に思いながら聞いた。

戒「真那や唯依の事だよ?」

戒が近づき月詠の頬を撫でながらそう答えた。

月詠「そんなノノノ私ごときが女神などとはノノノ」

戒「そんな事は無いよ。真那は俺にとって女神だよ?」

月詠は戒の言葉を否定するが戒はそれを否定し撫でている頬の反対側にキスをした。

月詠「か、戒准将／＼／＼な、何を／＼／＼」

戒「真那が魅力的な女性だと自信が持てるおまじないだ。」

月詠「戒准将／＼／＼」

戒「それに、ハイブ攻略戦での無事も込めてだな？」

月詠「奪還作戦で、ですか？」

月詠がその行為に赤面していたが戒の言葉を不思議に思い聞き返した。

戒「ああ。今回の横浜ハイブ攻略戦でアメリカは静観の姿勢を見せてはいるが、嫌な予感がしてならならい。」

月詠「あの国が何か仕掛けてくると？」

戒「十中八九、此方に対しての発言力を手に入れる算段でもして来る筈だ。」

月詠「目的は…戒准将のアレですか？」

戒「多分だがそれ以外考えられないな。俺のヴェルフエゴールやゲシユペンスト等の詳細もしくは現物を寄越せとなるだろうな。或いは俺の知識目当てで俺を渡せとかかな？」

月詠「そんな！？どうにか出来ないのですか！！」

戒のアメリカがするであろう行動を聞き同様した。

戒「現時点では何とも言えないな……。」

月詠「……い……す」

戒「真那？」

月詠「嫌です！！戒……が……どこかに行くなど……」

戒「真那……。」

戒の言葉に俯き動かない真那を戒は心配したが次の瞬間、真那は最初、大きな声を出したが次第に嗚咽を交えながら戒に言った。

戒「大丈夫、真那や悠陽、それに紅蓮さん達のいるこの帝国から出やしないよ？」

月詠「まこと……です……か？」

真那は泣きはらした様な目で戒を見上げ聞いた。

戒「俺の魂に誓って。」

月詠「なら……その誓いの証拠を私に見せて下さい……」

戒は当然とばかりに真那の問いに答えた。そして真那は戒の答えに証拠をと赤面しながら言った。

戒はその雰囲気を感じ真那の顎を優しく指で上げて長くとも短くも取れるキスをした。

戒『これが証拠になるかな？』

月詠『は、はい／＼／＼』

戒のキザったらしい言葉に真那は顔をほんのり紅くし返事をしていった。

戒『そろそろ、出撃だ。真那も気を付けろよ？』

月詠『か、戒も気を付けて下さいね？／＼』

戒『行くぞ！！』

月詠『はい！！』

そして本州奪還作戦…明星作戦が間もなく始まるのであった。

第仇話（後書き）

次回で明星作戦に入ります。

明星作戦では主人公はどう動くのか…。

そして月詠ファンの皆様、月詠の性格が壊れ気味ですいませんm)

――) m 主人公の設定でハーレムを目指しているもので月詠さんを恋する乙女の様にしてしまいました。

第拾話（前書き）

クロイツヴァルトです。えー、最初に隆之君は原作通りで死亡扱いにしました。それと白銀君の存在ですが主人公が白銀の存在の上から上書きして存在していると言う設定にしました。

第拾話

ここ、日本帝国の格納庫に戒はいた。

戒『アル、8準備は抜かりはないか？』

アル>全ゲシユペンストのDMシステム、正常稼動中<

8 (BETA、帝国と大東亜連合との戦闘開始、現状をリアルタイムで繋ながらアメリカへの情報ハッキングを並列進行中)

戒『了解。』

8達との現状確認をしている戒に網膜投影で通信が入る。

戒『こちら戒。』

唯依「>戒准将、発進準備よろしいでしょうか？<」

戒『いつでもイケるぞ。』

唯依「>了解しました。では、戒准将発進お願いします。<」

戒『了解。黒逸戒、アルトアイゼン出撃ぞ!!』

そう言つて戒はアルトの背中にある大型のバーニアスラスタを噴かした。目指すは横浜ハイブ最深部。そして、そんな戒に追隨するのは自身の脳量子波とアルで制御しているゲシユペンスト部隊20機、そして、8の制御しているヴェルフェゴールが今、格納庫を

発進した。

「こちらブラボー、C Pへ、B E T Aの数が多すぎるぞ!? 援軍を要求する!」

「来るなあー!」

”ガガツガガガツ”

「うわああ”ドゴン!」

横浜ハイブがある戦場は億を超えるB E T Aで溢れており、帝国に大東亜連合率いる国連軍と共闘しているがいかんせんB E T Aの数が多く幾つかの部隊は壊滅状態にあった。

月詠「戒准将の採用して下さったO Sのおかげで危うい所も安心して行ける!」

不知火・壱型丙を駆る真那は突撃砲と長刀を駆使して順調に横浜ハイブへの道を駆けていた。

斑鳩「月詠の奴、戒の用意したO Sだからか余計に気合いが入っておるな。我等も月詠に続くのだ!」

「了解!」

そして、そんな中、戒達は高機動戦をB E T Aに仕掛け鬼神の如き動きをし、確実にB E T Aを葬っていた。

戒「数の暴力でこのアルトが止められるか!」

”ガシャー！！”

戒「喰らえ！！！」

”ドガガガガガ！！！！”

そうやってアルトのクレイモアが火を吹き正面の要塞級を爆発物を含んだベアリング弾で沈めた。

戒「アル、ハイブまで後どの位だ？」

アル「>現在位置からで約3、000？先だ<

戒「8！！ヴェルフエゴールと交代する。お前はアルトの方を頼む！！！」

”ドガガガガガガッ！！！！”

そうやって戒はアルトの左腕にある固定武装の三連機関砲を使い周囲にいる小型BETAを殲滅した。

”バシユッ！！”

アルトのエアロックが外れ、戒が外に出て、ヴェルフエゴールに乗り換えてアルトを8に任せて再びハイブに向けて動いた。

戒「俺は、このまま横浜ハイブに向かう。アルと8は周辺の部隊を支援してやれ。」

8、アル（>了解くだ。）

戒『後少しか。来たか!?!』

戒がGN粒子を撒き散らしながら飛んでいるとレーザーアラートがなった。

戒『光線級約20体か。だが、俺の敵じゃないな!?!』

そうやってヴェルフエゴールの両腰にマウントした突撃銃を使い撃ち落として行く。

”ビシューーン!” ”ビシューーン!”

戒『墜ちろ!?!』

”ズバァーーン!!”

光線級を殺し、ハイブ付近まで近づいた戒はセンサーにより、すぐ近くに月詠がいる事に気付き機体を地上に下ろし、月詠に通信をいれた。

戒『真那中尉無事だったか?』

月詠『戒准将もご無事でなによりです。』

斑鳩『戒がそこらのBETAにやられるとは思わんよ。』

戒『斑鳩さんも無事でしたか。』

斑鳩『お主の採用したOSを搭載したのだからそうそう墜ちはせんよ。それに月詠は気合いが入っておって、我等は残った敵の後始末しかしておらんからな?』

月詠「斑鳩准将／＼！？わ、わたしは別に戒准将がいるから気合
いが入っていた訳ではありません！！」

斑鳩「月詠よ、我は一言も戒の等とは申しておらぬぞ？」

月詠「うううう／＼」

斑鳩の言葉に反応した月詠であったが自ら墓穴を掘り画面越しでも
分かる位に顔を赤くしていた。

戒「そろそろ中に行きますか？」

月詠「はい！」

斑鳩「我等もいつでも行けるぞ。」

そしてハイブの内部に戒達は侵入した。

戒「奴さんが団体さんで歓迎してるな？」

正面に見える無数にいるBETAを確認し戒はおどける様にしてい
た。

斑鳩「とにかく突破をせねば話にならぬな。」

戒「なら、斑鳩さん達は俺の討ち洩らしをお願いします。」

斑鳩「承知！！」

戒はヴェルフエゴールの指先と手首に内蔵したヒートワイヤーを使い周囲のBETAを殲滅して行く。

”斬” ”暫” ”惨”

そして、ハイブの中層辺りに来た頃、ハイブ内を調べていた月詠が悲鳴の様な声を上げた。

月詠「！？ハイブ内部の予想深度がフェイズ2以上！？戒准将！
！一時、作戦を中断し、撤退をする事を進言します。」

斑鳩「ふむ、確かに、当初の予想では横浜ハイブはフェイズ2、そして現在はそれ以上か…一度撤退し全体の見直しをした方が良いか。」

戒「二人は横浜ハイブから脱出して下さい。俺は少し気になる事があるからこのまま降下し、最深部を探ってみます。」

月詠「そんな！？戒准将、危険です！！お一人だけでは。」

斑鳩「戒…大丈夫なのだな？」

月詠「斑鳩准将、何を！？」

戒「最深部を確認したらすぐに戻る。」

斑鳩「早く戻ってくるのだぞ？」

月詠「無事に帰って来て下さいよ。」

戒「約束するよ。」

そして戒に追隨していたゲシュペンストを月詠達に同行させた。

戒『さてと、8、外の様子はどうか？』

8（現在、BETAとの戦闘は均衡を保ちながら継続中。アメリカは不穏な動きをしている模様。）

戒『多分、原作通り味方諸共G弾を使ってハイブを消す算段だろうな。』

8（大丈夫なのか？）

戒『其処はちゃんと考えているから安心しとけ。』

8（了解。アメリカに何かしらの動きが有ればまた通信する。）

戒『わかった。』

8との通信を終えて再び最深部へ向かう為にBETAを殺し続ける
?????か……く……す……。：

戒が深部の入り口付近に来たその時、頭の中に響く声が聞こえた。

戒『なんだ！？今のは……。』

戒は今の声を注意深く聞き取るが距離があるのか途切れ途切れに聞こえるだけであった。

戒『（横浜ハイブには脳髄だけになって生きてる純夏がいるだけの

筈だ。そして異端者の俺とは接点が無い。』

BETAを要塞級や戦車級を撃ち殺しながら戒は最深部に向かってヴェルフエゴールを進めた。

純夏? : 戒ちゃん……い……よ。 :

戒『やはり、純夏は武ではなく俺を呼んでいる……まさか!! イレギュラーである、俺と言う存在が白銀武の存在を上書きしてこの世界に存在してしまっている。それで純夏は武ではなく俺を呼んでいる、と言う事が。』

戒は何億というBETAを次々に殺して最深部の入り口まで来ていた。

純夏 : 戒ちゃん、逢いたいよ。 :

戒『此処だな……』

” ガシャンッ!! ”

” フイイイー!! ”

” ズッゴーン!!!! ”

突撃銃を連結してロングライフルにして隔壁を破壊した。中に入るとそこはBETAはおらず、ただ広いホールの様になっており、中心部には幾つもの柱が立っていた。戒はその柱の上部に位置する台座に安置された人の脳髓の群れを見つめる。

純夏 : やつと逢えたね? :

戒『君か、俺を呼んだのは?』

思念を放つ脳髄はちょうど真ん中に位置しており、他と比べるとやや大きめに作られていた。

純夏：そうだよ。私はずっと戒ちゃんが来るのを待っていたの。：

戒『（どう言う事だ？俺は君との接点が無い筈だ。）』

純夏：戒ちゃんはそうかもしれないけど、私は戒ちゃんをずっと喚んでいたの。：

戒『>つまり、俺は武の代わりに純夏の思念により必然的に呼ばれたのか。<（純夏が俺を呼んだのか？）』

純夏：私はただ戒ちゃんに逢いたいって思っただけ。そこに神様って言う人が来て戒ちゃんに逢わせてあげるって、だから私はずっと戒ちゃんが来るのを待ってたの。：

戒『>なるほど、最初からアイツは知っていた。だからあの時M U V - L U Vだと言ったのか。<』

純夏：神様の言うとおり、待っていて、戒ちゃんが来てくれて私は凄く嬉しいな。：

戒『（純夏……。）』

純夏：勿論、私はこんな姿になっちゃったから話す以外は無理だけどね？：

純夏は少しだけ悲しげな声で戒に話す。

戒『（純夏……。！?）』

純夏と思念会話をしていると8からの緊急の通信を知らせるアラームがなる。

戒『（純夏、悪い、仲間から連絡が来たから少しだけ待っていてくれるか？）』

純夏：うん、戒ちゃん、わかったよ。：

戒『8、どうした？』

戒が疑問に思い8に聞くが画面には残酷な文字が映された。

8（アメリカの連中が現状に焦って味方への通告無しでG弾の使用が決定した。）

戒『時間は！！』

8（約二時間後には横浜ハイブ上空に落ちる。）

戒『モニュメントを突破するまでに一時間半か、クラヒティ・プラストGBのチャージに約10分：ギリギリか。』

戒はそうすぐに決断すると純夏に再び思念会話をする。

戒『（純夏、現在アメリカが此処、横浜ハイブにG弾の使用が決まり、向かって来ている。俺はそれを迎え撃ち、被害が出ない様にする。）』

純夏：そんな！？戒ちゃんは大丈夫なの？無事に帰って来てくれる

よね？：

戒『（この後について訳にはいかないが多分またすぐに逢えるよ。）』

純夏：うん！約束だよ？：

戒『（ああ、約束だ。）』

そして戒はそこから少し離れ、反応炉に被害が出ない所で機体を上に向けた。

”ガシユンツ！！”

胸部ハッチが開き内蔵された砲口が現れその中央部に赤黒い光が収束していく。

戒『ふう、「トリプル・メガソニック砲」発射あ！！』

”ズゴオーン！！”

極太の光が地上部分までの脱出口が出来、穴の部分からだ空が小さく見えていた。

戒『（純夏、また…会おう。）』

純夏：うん！絶対だよ？待ってるからね？：

”フイイーン”

純夏との会話をし終えて、戒はヴェルフェゴールの肩部にあるGNドライブは緑色の粒子を出して背部ユニットのバーニアはアルミ粉吐き出し、それを燃焼させて青白い炎を噴かして地上へと急いで

上昇する。

戒『（くっ！時間が惜しい！！）邪魔だぁー！！』

”ブン！””惨！！””斬！！”

地上に向けて飛ばしている中で上から数体のBETAが落下して来るに苛つきながら斬鑑刀で一気に斬り捨てた。そして数分してメガソニック砲により消滅したモニュメント跡地から飛び出した。

戒『（抜けた！！）「こちら、日本帝国所属の衛士黒逸戒だ！全軍に告ぐ！現在この戦域にアメリカのG弾が発射された。到達時間まで後二時間を切っている。全戦術機は武装破棄し行動不能の味方や歩兵部隊を回収しながら戦線より離脱しろ！！』

ハイブ上空で滞空しながらオープンチャンネルを大音量にして全軍に撤退命令を出した。

月詠「戒准将はどくなさるのですか！？」

戒『俺は被害が出ない様にアレを……止める。』

篁「無茶ですよ！？戒准将もお逃げ下さい！？」

斑鳩「私との約束を違える気か！？」

戒『真那、唯依、そして斑鳩さん？俺は死ぬつもりは毛頭も無いですよ。』

斑鳩「何かしらの策が在るのか？」

戒『ええ。アメリカに脅しを掛けられて、尚且つG弾の様に重力異常を起こさない重力兵器を全世界に披露が出来て、日本が技術面で2つ3つ以上先にいると判らせられる、一石二鳥のプランです。』

月詠「重力異常を引き起こさない兵器ですか!？」

斑鳩「我が日本帝国を持ち上げ、尚且つアメリカのG弾を無力化出来る兵器を世界に見せる…か、本当に貴殿は私を驚かせてくれるな。」

篁「戒准将、ご無事でいて下さい。」

そう言つて斑鳩達は戦域より離脱していった。

戒『麗しの女神達に無事にと言われたら頑張るしか無いな』

8 (後30分でG弾二発が着弾するぞ?)

戒『了解。胸部ハッチ解放、同時に ドライバ起動!!』

”ガシャンッ!!”

”ゴオオオオオ!!”

ヴェルフエゴールは三枚ある胸部ハッチを開け、機体全体を目に見えない何かが包んだ。

戒『相転移エンジン、フルドライブ!!GBチャージ!!』

”ギユオオオオオオ！！！！！”

8（臨界点まで五分。）

”ゴゴゴゴゴ！！！！！”

そして発射体制に入ったヴェルフェゴールの遙か上空、衛星軌道上からG弾が降下してくるのを最大望遠で確認した。

戒『8！！まだ発射出来ないのか！！！』

8（待て、後もう少し…、カウント……スタート。10…9…8…7…6…5…4…3…2…1…）

戒『GB…発射あー！！！』

”ゴバアアアア！！！！！！！”

半透明のGB「グラビティ・ブラスト」がG弾に直撃した。

”ズツガアアアアアン！！！！！！！”

アル>重力場異常磁場結界の反応無し！！！<

降下中のG弾の一発目に直撃しアルの報告を聞いてホツとしたが…

8（想定より200M程先に二発目の存在を確認。）

二発目は戒の狙いからやや外れた所に存在していた。

戒『なんとか…出来たな?』

8 (自信があつたんじゃ無いのか?)

アル「確か、私達には不可能は存在しないと申しましたね?」

戒『ちゃんと終わったのだからやいやいやい言つなよな?俺はそれよりもこれからの事が心配なんだよな。』

8 達から非難の言葉を受けながら戒は逃げるかの様に話題を逸らした。

8 (アメリカ…か?)

アル「それなら、今回の一件で全世界から不信感を買ってしまったので当分の間は大人しくしている筈です。」

戒『確かに、アメリカも不安だが、俺としては真那や唯依達に怒られ無いか心配なんだよ!?』

8 (何でだ?)

戒『今回はとんでも無い無茶をしたから、その為にアイツ等からの説教がBETAを相手するよかキツイんだぞ!?』

アル「マスターご自身が無茶をしている自覚はあつたのですね?」

8 (自覚あるなら少しは自重すれば良いのにな。)

戒『無理。』

アル「なら、マスターの身に染みるまで説教を受けて下さい。」

8（ヴェルフエゴールの官制掌握）

アル「ゲシュペンスト二機で両側から確保」

戒『お前等は鬼か!?!』

アル「それは、マスターの通り名です。」

8（それは戒の通り名だろうが。）

戒『はくなくせ!?!』

そんな戦場に似つかわしくない会話をしながら帝国軍の横浜方面仮設駐屯基地に向かった。

戒『ギャグパートで終わりとかないだろ!?!』

第拾話（後書き）

今回の話で純夏との会話ですが主人公はリーディングに似た脳量子波を使って念話の様な形式で会話をしている設定です。次回は本州奪還戦後の駐屯基地での話になります。若干と言っかなかなりキャラ崩壊しそうな予感のする作者です。

戒『それって、俺は無事で済むのか!?!』

作者『ギャグパートだから無理』

戒『死ぬ!?!』

作者『ちよっ!?!まっ!?!暴力反対!?!』

戒『問答無用!?!（氷神の鉄槌）!?!』

”ドグシャアアツ!?!”

戒『えー、駄文な作者の書く小説ですが皆様、今後共よろしく願います。』

作者『待つて……ます。』

戒『生きてたか。』

第拾壹話（前書き）

えー、永らくお待たせしました第拾壹話ですがグダグダな上にある
2人の人物を出しましたけど他これをした方が良いと思われる方は
感想が若しくはメッセージを送って下さると幸いです。

第拾巻話

戒は今、ヴェルフエゴールの制御を8に奪われ、そして、アルが制御するゲシュペンスト二機により格納庫に連行されていた。

戒『あゝ、マジでヤバいな』

ヴェルフエゴールの前には二人の般若が立っており戒が降りてくるのを今か今かと待っていた。

唯依「戒准将！」

月詠「早く降りて来て下さい!!」

唯依と真那は物凄くどす黒いオーラを纏っていた。

8（さっさと行って説教されてこい。）

戒『俺に死ねと!?!』

アル「多分、違うと思いますよ?」

戒『違う?』

8（多分、バカには判らんと思うぞ?）

戒『何だよ、それ。』

アル「女心と言う物が判れば自ずと知れますよ?」

8（なんで、お前がそれを言うのか判らん）

アル「それは、わたしは機械ですが性別で言うなれば女性に分類されますからそう言えるのです。」

8、戒『（マジか）ですか！？』

戒と会話していた8とアルであったがアルの爆弾発言に戒はおろか8ですら驚いていた。

アル「大マジです。それよりも早く降りないとお二方からの説教が長くなりますよ？」

戒『それは嫌だな。』

8（なら、さっさと逝ってこい。）

戒『字が違ってないか！？』

アル「気のせいでは？わたし共はちよつとした準備がありますので、JF>ジャンプ・フィールド<を形成してBJ>ボソソジャンプ<して先に屋敷に戻って居りますので。」

8（少ししたら戻ってくるからな。）

戒『なるべく早く頼むぞ？』

そう言って戒をコクピットからワイヤーラダーを使い、下に降り立つとヴェルフェゴールは薄緑色の膜に覆われて消えた。

戒『ふ、2人共、心配を掛けて済まないな…』

恐る恐る戒は目の前に立つドス黒い空気を纏った真那と唯依に話しかけた。

真那「…まったくですよ？私たちがどれだけ心配したか…。」

唯依「いくらどうにか出来るとしても少しは心配をする私たちの身になって考えて下さいよ！」

戒『す、済まん』

唯依「大体、黒逸准将はいつもご無理をなさるから見ているこちらは寿命が縮まる思いをしているのですよ！」

戒『し、しかし、俺の機体なら大抵の事なら大丈夫だからな…？』

真那「確かに戒の機体は凄いと判っていても心配な物は心配なんですよ！」

戒『う…ほんと、スイマセン。』

2人「「ちゃんと反省してるんですか！！」」

戒『ハイ、シツカリハンセイシテマス。以後、気ヲ付ケマス。』

2人の前で縮こまる戒は先程の偉業成し遂げた人物と誰が思えようか。そんな時に1人の戦術機の整備士が近づいて来た。

整備士「お取り込み中失礼します。」

戒「どうした？」

先程の空気に耐えられず戒は整備士の方に逃げ、そんな戒にまだ言い足り無いいのか2人は戒の後ろに着いていた。

整備士「はい、黒逸准将に面会を求める者達がいるのですが、よろしいでしょうか…？」

戒「俺にか…？一体誰だ？」

整備士「はい。ただ、調整者「コーディネーター」と言えば判ると男女の2人組が言っておりましたが…。」

戒「（！？）わ、判った。此方に通してくれ。」

整備士「了解しました！」

整備士の言葉に戒は表面には出さなかったが内心では驚きを禁じ得ないでいた。そして先程の整備士は敬礼をして持ち場に戻り、3人の衛士が先程の報告に有った男女の2人組を連れてきた。

衛士A「黒逸准将！お二人をお連れしました！」

戒「ご苦労様。こっちは良いから君達は休息を取ってくれて構わないよ。」

衛士B「はっ！了解しました！」

そう言つて衛士達は戒達の前から立ち去つて行つた。

効「初めまして…が合っているのだろうか？むらぐもがい叢雲効だ。」

ラクス「初めまして、戒様。私、ラクス・クラインと申します。以後お見知りおき下さいな？」

戒「あ、ああ。此方こそよろしく頼む。…月詠中尉に篁中尉、俺はこの2人と話があるから何かあれば後で俺の執務室で頼む…。」

真那「判りました。しかし！」

唯依「先程の事は頭にしっかりと入れておいて下さい。まあ、戒准将はそれでもご無理をなさるのでしょうけど…。」

戒「は、ははは。なるべくは善処はするよ…。心配ばかり掛けて済まないな…。」

真那「兎に角、少しは私達の事も頼つて下さい。これでは何のために戒准将のお側にいるか判りませんよ？…それでは、私は今回の見直しをしてきます。」

唯依「偶にはCPである私の指示も聞いて下さいよ。それでも、情報収集は欠かさずに行っているのですからね…？…私はこれから戒准将の用意した試作機のデータを纏めますので出来上がったらそちらにお持ちします。それでは。」

戒「済まんな？しつかり頼むよ。」

戒の雰囲気には2人はその者達等の質問を断念し、了承の意を伝え

るが、先程の件を忘れない様にと釘を刺してその場を離れた。

真那「しかし、あの2人は一体何者だろうか…。」

唯依「月詠中尉、戒准将の反応を見る限りではそこまで注意深く見なくてもよろしいのでは？」

真那「確かにそうなんだが、またライバルが増えてはかなわんからな…。」

唯依は月詠の言葉で先程の場で会った2人組の内の1人、ラクスの事を思い出していた。

唯依「確かにあの人は綺麗でしたね。」

真那「戒准将のまわりにはなんだが女性が多い気がするならないのだが…。」

唯依「確かに…。」

2人「…どうするか（しましよう）」

そんな2人を余所に戒は先程の場所から離れ、基地の外にラクス、そして効と3人で近くの瓦礫に各々座ったり立ったまま話をしていた。

戒「結局の所、君達はどうしてこの混沌とした世界にいる？本来の君達は此処とは別の世界…つまりSEEDの世界にいる筈だが？」

ラクス「それは、貴方のサポーターとして神様が私達をこのMUV
- Luvの世界に造り出したからですね。」

戒の質問に瓦礫の上に座るラクスは柔らかい笑みで戒に答えた。

戒「造り出した…?」

効「君の所にはロウの所の8とアルがいるが、外交面のサポーター
がいないから…と俺達をあの世界から姿形そして、魂の在り方を真
似て造った…と言っていた。近くて遠い存在と言えるだろうな…。」

戒「じゃあ、君達はSEEDの住人であってそうでも無いと言える
って事か?」

ラクス「その通りですわ。」

ラクスのその言葉に戒は頭を抱えた。

戒「あの駄神め… ややこしい事を…。頭が痛すぎる…。」

ラクス「まあ！大丈夫ですか?」

効「…まあ、わからんでも無いがな…。」

効は澄ました様な顔でそう言った。

戒「とりあえず、ラクスは外交面で行けるとして、効は俺の所にあ
るMSに乗るか?」

効「此方に来る過程で戦術機の知識もある程度は頭に入っているか

「らこちらの世界の物も扱える様になっている。それに、世界情勢も判っている。」

戒「…外交面にラクス、戦術機方面には効…か。上出来過ぎやしな
いか…」

2人の能力を把握しながら戒は若干呆れていた。

効「この後はどうする？」

戒「とりあえず、ALTERNATIVE第4計画が本格的になるのはあと2年は先だその間にプロミネンス計画に介入して日本に有利な形にして置かなくちゃいけない。その為、事後処理が終わり次第に国連軍の巖谷中佐の所に行きアラスカに行ける様に手配して貰わないといけないな…。」

効「しかし、行くとして積み荷はどうする？」

戒「とりあえず、PTとMSを各一機に新しく作ったASアームスレイブの計三機だ…。行くメンバーは俺と向こうの交渉役にラクスを連れて行く。」
ラクス「わかりましたわ。」

効「なら俺は戒達が留守の間に期衛の方を担当していれば良いのだな…?」

戒「ああ、それで頼むよ…出来れば悠陽のフォローも頼む…。」

戒は効に頼みながら厳しくも優しい君主を思い出していた。

ラクス「それでは私は後程執務室に赴きますわ。」

効「俺は戦術機のOSの書き換えをして来る。」

戒「わかった。」

そう言つて3人は別れ、戒はその場に残り空を見上げて口を開く…。

戒「これからだ…。これからこの世界を変えて見せるさ…。この身を化物にしたとしても…。」

その言葉を吐いて戒もまたその瓦礫の積み重なった場所から離れるのであつた…強く拳を握つた際に落とした僅かな血を残して…。

第拾壱話（後書き）

作者「はい、第拾壱話何とか完成しました！」

戒「しかし、他の物語にズレが生じない様に気を付けると大変だな……。しかもサポート役である2人って……少しは自重しろよな……？」

作者「だけど俺が知る限りである2人しか適役が居なかったからさ？」

戒「交渉役とか効1人で充分だろ？」

作者「そうすると後の物語で辛くなると思って考えた結果……」

戒「こうなった訳か……」

作者「まあ、次は少し飛んでアラスカでの話か、若しくはその前日の話になりますかな？」

戒「精々、読み手である読者様やユーザー様が読める様に書けよな……駄作者？」

作者「わかつたるやい（ノ T T）」

戒「次の話はなるべく早くなる様に心がけますのでこれからもよろしく願います。」

第拾弐話（前書き）

今回からはユウヤ達が登場します。多少なりとも言動が違いますが、このキャラはこの喋りだと言っ人はご一報下さい。

第拾弐話

あれから数日が経ちユーコン基地に向けて出発する為、MS等を積んだ輸送機に俺とラクスに唯依の3人が座席に座っている。最初に行くと言った時に真那が着いて行くと言った時には驚いたが何とか説得をしたが…。

ラクス「戒様？どうかしましたか？」

戒「いや、前日の事だな…。」

ラクス「ふふ 戒様はおモテになられますね？」

戒「冗談でも止してくれ…。」

唯依「戒准将、もうすぐ離陸します。よろしいでしょうか？」

戒がげんなりしている所に唯依が管制塔からの離陸指示を受けた事を戒に告げた。

戒「…大丈夫だ。向こうに行ったらよろしくな？」

唯依「はい！」

機長「間もなく離陸しますのでお手元のシートベルトをして下さい。」

そして間もなくして3人を乗せた飛行機に3機の輸送機「ムリーヤ」が目的地であるアラスカのユーコン基地に向け飛び立った。

その頃ユーコン基地にあるブリーヒングルームではアルゴス試験
小隊が集まっていた。

タリサ「中尉、いきなりあたし達に召集を掛けて一体どうしたんだ
よ？」

イブラヒム「今回のブリーヒングは明日こちらに来る日本人の事
で話があるからだ。」

ユウヤ「日本人…。」

ヴァリレオ「おいおい、ユウヤ怖い顔になってるぞ？」

ユウヤ「うるさい！」

ステラ「うるさいのはユウヤでしょ？中尉、私達を集めたって事は
何かあるのですよね？」

イブラヒム「そうだ。我々アルゴス試験小隊はプロミネンス計画に
置いて新型のデータ収集が主な任務だが、そこに今回来る人物で日
本帝国の英雄：黒逸准将そして女性士官2名が来る。そして准将自
らが設計、開発した機体が3機一緒にこのアラスカ基地に来る予定
だ…。」

ヴァリレオ「ヒュー　　すげえじゃん。」

タリサ「日本の英雄か、一体どんな奴なんだろな？」

ステラ「実力で数々の奇跡を起こし、帝国の懐刀と言われる…と言
った所かしら？」

ヴァリレオ「奇跡…ねえ〜?」

タリサ「あゝ、早く来ねえかな?」

ステラ「ふふふ、明日には来るって言っていたでしょ?」

タリサがうずうずしながら喋りそれにステラが苦笑しながらそれに答える。

そしてそこにユウヤが立ち上がり部屋を出て行くこととしていた。

ヴァリレオ「おい!ユウヤ何処に行くんだ?」

ユウヤ「これ以上、日本人の事なんか聞いていたくないだけだ。」

そう言い残してユウヤはブリーヒングルームから退室した。

ヴァリレオ「まったく、ユウヤのあの日本人に対しての偏見はなんつとかならないのかねえ〜?」

タリサ「あんな奴ほつといてもいいじゃんかよ。」

ステラ「チーム内で協調性が無いのってユウヤだけですもんね。」

非難的な2人にヴァリレオはとりあえずユウヤのフォローをしたのである。

ヴァリレオ「ユウヤにも何かあったんじゃないのか?アイツは日本人と米国人のハーフな訳だからな?」

タリサ「それはそうだけど…。」

ステラ「この話はとりあえずもう終わりにしましょう。明日の為に今日は解散でよろしいですよね？中尉？」

イブラヒム「そうだな…。今日はこの位にしとくか、ユウヤもあの調子だしな…これでブリーヒングは終了だ！各自明日の為に休養をしとけよ？」

そしてブリーヒングにいるアルゴス試験小隊は各々の場所に散らばった。その頃、先に出て行ったユウヤといえば…。

ユウヤ「くっ！何が准将だ！日本人なんか信用できるかよ！」
そう言ってユウヤは自室の壁を力の限りぶん殴った。

ヴァリレオ「ユウヤいるか…って予想通りの事をしてるのな」

ユウヤ「うるさい！それに何の用だ…。」

ユウヤの言葉にヴァリレオは呆れながらも話を続ける。

ヴァリレオ「なに、あの後で訓練も何も無いから少し外に行かないかとな？」

ユウヤ「ふん、少しなら付き合ってやる。」

そう言ってユウヤは自室を出てヴァリレオと共に基地の外にある商業区にその姿を消すのであった。

第拾弐話（後書き）

作者「今回はゲストでサポート役のラクス嬢に来て頂いております。」

ラクス「よろしく願いますわ。」

作者「え〜、ラクス嬢はサポート役として登場しましたが、戒の事をどう感じていますか？」

ラクス「好ましく思っていますわ。」

作者「それはlike？それともloveですか？」

ラクス「今の時点ではlikeになりますわ。」

作者「と言う事は戒ラバーズに後に加入と言う事ですか？」

ラクス「…それは判りませんわ。所でそろそろ次の話を書かないとなりませんわよ？でないと……。」

作者「ちよつ、その後ろ手に持つ釘バットはなんでございませよ…。」

ラクス「それでは次の話のゲストは叢雲効になりますわ。作者に変わってお送りしますわね。次の話も是非見て下さいな。」

第拾参話

アラスカ平原にあるユーコン基地上空に戒達を乗せた飛行機が来ていた。

ラクス「戒様、起きて下さいな。」

戒「ん…、着いたか？」

ラクスの隣で寝ていた戒は伸びをしながら起きた。

戒「あれがユーコン基地…か。」

戒は窓からユーコン基地を眺める。そして飛行機がユーコン基地の滑走路に着陸した。

戒「さて…行くか。」

ラクス「はい。」

唯依「戒准将、大丈夫ですか？」

戒「ああ、大丈夫だ…。」

そして飛行機を降りるとそこにはアルゴス試験小隊の面々が揃っていた。

イブラヒム「黒逸准将、遠路遙々良く来て下さいました。私はこの

アラスカ、ユーコン基地所属のイブラヒム中尉です。」

戒『ああ、此方こそよろしく。』

イブラヒム「私の後ろにいますのはこの基地に置いての実験等を担当するアルゴス試験小隊のメンバーになります。」

ヴェンセント「ヴェンセント・ローウェル軍曹です！よろしくお願
いします！」

タリサ「タリサ・マナンドル少尉だ…です。コールサインはアルゴ
ス2です！よろしくお願いします！」

戒『よろしく、タリサ少尉。』

ヴァリレオ「ヴァリレオ・ジアコーザ少尉です！日本の生きる伝説
に会えて光栄です！コールサインはアルゴス3…よろしくお願いし
ます。」

戒『俺はそんな大層な者じゃないよ。よろしく、ヴァリレオ少尉。』

ステラ「ステラ・ブレールメル少尉です。黒逸准将よろしくお願いし
ます。サインはアルゴス4です。」

戒『此方こそよろしく頼む。』

ユウヤ「ユウヤ・ブリッジス少尉だ、コールサインはアルゴス1だ。
」

そして最後にアルゴス1であるユウヤが自己紹介をしたが憎しみや

嫌悪に満ちた目で戒を見ていた。

戒『ブリッジス少尉よろしく頼むな？（予想通りに負の感情がとてつもないな…。）』

ユウヤ「俺はお前となんかと仲良くする気は無い！」

イブラヒム「ブリッジス少尉！」

戒『大丈夫だ。それより、唯依とラクスにこの基地の案内を頼む。私は隣の基地に用事があるのでな？』

唯依「ならば私も行きます！戒准将をお一人では危険です！」

戒『向こうは私1人を希望しているのでな…？それに自分の身は自分で守れるのでな。イブラヒム中尉…後の事はよろしく頼む。』

イブラヒム「はっ！」

戒の言葉にラクスは笑顔で了承するが唯依は反論をした…が向こうは戒1人を希望していると告げ、唯依が言葉を続けられない様にイブラヒム中尉に後の事は任せると言っ、ソ連の基地がある方向に足を進めた。

そして戒はソビエト連邦が駐屯している基地に着き、門番に身分証を提示しゲートを潜ると1人の女性士官が立っていた。

戒『君が案内役か？』

ラトロワ「はっ！ジャ…イーダル試験小隊の隊長を務めているフィカーチア・ラトロワ中佐です。この度、黒逸准将の案内役を承ります。」

戒「よろしく、ラトロワ中佐。それから、堅苦しいのは無しで良いよ、疲れるだろう？（彼女はジャール大隊の筈だがここらも変わっている様だな。）」

ラトロワ「他に人が居ない時だけにしとくよ。改めてよろしく。」

戒「よろしく。この後に食事でも…と行きたい所だけど、この責任者の所まで案内を頼むよ。」

ラトロワ「わかった。私の後に着いて来てくれ。」

そして戒が応接室に通されて少しするとここの責任者であるイエージ・サンダークが入室して来た。

イエージ「いやはや、この度は招待に応じて下さり有難うございます。フィカーチア中佐案内ご苦労様です。また後で呼びますので退室して構いませんよ。」

ラトロワ「…はっ！」

ラトロワはイエージの胡散臭い笑みに眉をしかめながらも敬礼をしてから退室をした。

戒「では、腹の探り合いと行きますかね？（想像通りに信頼など置けない人物だな。）」

イエージ「あからさまですね…。でも嫌いでは無いですよ？」

イエージはその胡散臭い笑みを顔に張り付けたまま話は始まったのであった。そして数時間が経ち…。

ラトロワ「要請により参りました。」

ラトロワはイエージの呼び出しに嫌悪感を隠そうともしないで入って来た。

イエージ「ファイカーチア中佐、度々すみませんね？彼にイーダル小隊のメンバーを紹介したいのでお願いしますか？」

ラトロワ「了承しました。（下種が…。）」

ラトロワは敬礼をし、戒を連れて退室する際、傍にいる戒には聞こえたが、侮蔑を込めた言葉を吐き捨てていた。

そして場所は変わり戦術機が立ち並ぶ倉庫に来ていた。

ラトロワ「イーダル小隊集合！」

ラトロワの一声に3人の女性が2人の前に整列した。その内小柄な少女が銀髪の女性の後ろに隠れる様にして此方を見ていた。

戒「（彼女がイーニアか…。）」

ラトロワ「戒准将、紹介する。コールサイン、イーダル2のナスターシャ・イヴァノワ中尉だ。」

茶髪の少女が敬礼をした。

ラトロワ「次にコールサイン、イーダル3のクリスカ・ビャーチェノワ少尉。そして……」

クリスカ「イーニア・シエスチナ少尉だ。」

紹介された銀髪の女性……クリスカは後ろに怯える様にして隠れるイーニアを庇う様にして戒を敵でも見る様な瞳でありながら敬礼をした。

ラトロワ「……シエスチナ少尉、上官に対して敬礼もせずビャーチェノワ少尉の後ろに隠れているとはどういう事だ……」

ラトロワは呆れながらそう言いイーニアに近づくが逆にイーニアは更にクリスカにしがみつく。

イーニア「クリスカ、あの人怖いよ！」

クリスカ「イーニア?!大丈夫よ?私が傍にいるから安心して。」

イーニアの叫びにクリスカは安心させる様に宥めるその様子に戒も心辺りがあるのか苦笑をしていた。

戒「ふっ。」

イーニア「あの人の心が見えないよ!」

イーニアの言葉にクリスカは驚愕し即座に戒を睨み付けた。

クリスカ「貴様は一体何者だ！」

ラトロワ「ビヤーチエノワ少尉！」

戒「ラトロワ中佐、良いよ。」

ラトロワ「しかし！」

戒「クリスカ少尉と言ったね？俺が何者かって言つが君達、紅の姉妹は俺の心を見ようとした様だが…無駄だ。」

クリスカ「なっ！？」

戒が自分達のしている事に気づいていた事にまたも驚愕をした。

クリスカ「…何故気づいた。」

戒「簡単な事だ。ここのイエージ中尉は何かと俺から情報を手に入れたが…ついていたからな？其処にリーディングが可能な君達に白羽の矢が立ち先程からやっていたのだろう？」

クリスカ「確かにそうだ。だが、イーニアは見えないと言った！何故、貴様の心は見えないのだ！答える！」

クリスカの剣幕にナスターシャヤラトロワはたじろぎはしなかったが戒に2人は目を向ける。

戒「簡単な事だ…。俺は君達よりも上の存在だからだ…。」

そう言つて戒はその場から一瞬にしてクリス力達の後ろにいた。

4人「!？」

戒「わかつたかな？」

ラトロワ「戒…准将…貴方は一体…。」

戒「俺はESP発現者だ。」

戒の発言にその場にいた者は驚愕をした。それもその筈ESPは人工的に生まれてくる者を遺伝子レベルで調整を行い生まれてくるからである。

ラトロワ「では、戒准将はALTERNATIVE3の計画で…」

戒「いや、俺は自然に発現した物だ。多種多様のESPを持ちそれを制御するのは至難の極みだったかな？」

クリスカ「貴様は私達とは違つのか？」

戒「違つと言えば違つし違わないとも言える。」

そう言つて戒はクリスカ達に近づき、怯えるイーニアの頭を優しく髪を梳いた。

イーニア「ん…。」

イーニアは最初、体を強ばらせたが戒の手が気持ち良いのか目を細めていた。

クリスカ「どういう事だ？」

戒『イーニア達はリーディング…所謂、読心術が使えるだけだが、俺はそれ以外の事も出来る。』

クリスカ「先程の事もその一つか？」

戒『さつきのはテレポーション、瞬間移動って物だ。他にも炎や雷を出す事も出来るし力の向きを変える事も出来る。』

ラトロワ「信じがたいな…。」

戒『此処でやるのは危ないからな…。他の物なら…透視かな？』

クリスカ「透視…？」

戒『物などを透かしてその中身を見たりする物だ。…ラトロワ中佐は煙草を吸うのだな。胸ポケットに入ってるな？』

ラトロワ「あ、ああ。」

戒の問いにラトロワは戸惑いながらも左胸にある煙草を取り出した。

戒『まっ、こんな物かな？』

そう言って戒は遠くにある筈の椅子を自分の近くに飛ばしてそれに座る。

クリスカ「今のはなんだ？」

戒「ん？瞬間移動の力だ。俺位にしか使えないが目視するか、触れた物を任意の場所に飛ばす事が出来るんだ。」

ラトロワ「便利な能力だな。」

戒「確かに便利だがそれ故に悪用しようと思ってくる者が居て面倒だ。」

嘆息しながら戒はそう言っつて椅子に座る。

イーニア「戒は私がやった事、怒らないの？」

イーニアは先程の事で少しだが戒に対しての恐怖心が取れたのか、戒に話しかける。

戒「軍とは上の命令には絶対だからな、怒るなんてしないよ？実害もなかった訳だからね？」

イーニア「ごめんなさい。」

戒「イーニアが謝る事じゃ無い。あれはイエージ中尉が命じたのだろっつ？」

イーニア「…うん。あの人は私達の事をパーツとしか見てないから…。その位は出来るだろっつて。」

イーニアは徐々に俯いて言葉も小さくなっていく。

戒「あの野郎…んな事をイーニア達の事を……!!」

戒はイエージがイーニア達に言った言葉に対して血が滲む程に拳を握り締めていた。

クリスカ「貴様は私達の為に怒るのだな。」

戒「当たり前だ！イーニアもビヤーチエノワも立派な人間だ。それはラトロワ中佐だって同じ気持ちだ…でなければあの時の表情は出せないからな。」

ラトロワ「見ていたのか／＼」

戒「ふつ、俺は視野が広いからな…確かに軍とは兵士を駒や部品と見る輩がいるが俺はそれは間違いだと思う。軍のしかも上層部においてその考えは間違いだと言う奴が多いが俺の知った事では無い…言いたい奴には言わせておけば良い。」

イーニア「戒はどう思ってるの？」

戒「俺か？俺はな、軍や部隊の者を家族だと思っている。」

クリスカ「何故だ？」

戒「日本には確か、こんな言葉がある…同じ釜を食う者は家族だと誰かが言っていた。」

イーニア「同じ釜？」

戒「一緒に飯を食べれば皆が仲良くなれると言った所かな？」

ナスターシャ「良い言葉ですね。」

戒『俺もそこら辺はうる覚えだから鵜呑みにするなよ?』

クリスカ「お前はほんとに変な奴だな…。」

戒がおどけていると先程よりかは幾らかは柔らかい表情でクリスカが戒にそんな言葉を投げかける。

戒『向こうで散々言われたよ。だけど、悪い気はしないよ。…そろそろ戻らないとだな。』

イーニア「行っちゃうの?」

戒がそろそろ唯依達の所に戻ると言うといーニアは残念そうな顔をした。

戒『そんな顔をするもんじゃ無いよ?イーニアは笑った顔が一番可愛いと俺は思うからな…?』

戒は椅子から立ち上がりイーニアに近づき頭を撫でる。

イーニア「うん／＼」

戒『何かあれば、ラトロワ中佐、それにビヤーチエノワ少尉って言う頼りになる人がいるだろ?』

クリスカ「ふん／＼」

戒はイーニアを撫でながらクリスカを見ると少し頬を染めて顔を逸

らした。

戒『それとコイツを渡しておくよ。』

戒は懐からデータスティックをクリスカに渡した。

クリスカ「これは？」

戒『ビャーチエノワ達の役立つ物と俺の通信端末へのアクセスする為のパスが入っている。相談事や愚痴でも良いからかけて来ると良い。それじゃあ、ラトロワ中佐、出口まで頼むわ。』

ラトロワ「わかったよ。」

クリスカ「待て！」

そして戒はその場から離れ、出口でもあるゲートに向かう為、倉庫を出ようとするとクリスカが呼び止めた。

戒『どうした？ビャーチエノワ少尉？』

クリスカ「さつきは済まなかった。それと、私の事はクリスカで構わないからな！」

戒『ああ！俺の事は階級無しで戒と呼んでくれて構わない！次に会う時は一緒に飯でも食いに行こう！』

イーニア「私も一緒だよ！」

クリスカ「その時を待っているぞ！戒！」

戒『約束する！』

そう言つて、今度こそ戒はイーダル小隊がいる倉庫からその姿を消したのであつた。

イーニア「クリスカ、戒にはまた会えるよね？」

クリスカ「うん、ほんの短い時間だが戒は信用が出来ると私は思つよ？イーニア。」

ナスターシャ「それに男前だしね？」

クリスカ「それは関係無いだろ／＼！！！」

ナスターシャがクリスカにからかいながら話すとクリスカは頬を赤に染めて否定をし、その場から足早にして離れた。

イーニア「クリスカ、待つてよ〜？」

ナスターシャ「やりすぎたかな…？」

イーニアの言葉が倉庫に反響し、ナスターシャが1人残され、そんな言葉を零したのであつた。

そしてゲートを潜り、戒はラトロワ中佐と向き合っていた。

戒『ラトロワ中佐、色々と有難う。』

ラトロワ「礼をするのは此方の方だ。ビヤーチエノワ少尉達の事で
あんなに親身に聞いてくれる者など居なかったからな。」

戒「貴女こそイーニア達はほんとにラトロワ中佐、貴女が隊長で良
かったよ。」

ラトロワ「そうか／＼なら、これは私からの感謝の印だ。」

ラトロワはそう言って、戒の襟首をぐつと引っ張り、自身の唇を戒
に重ねた。

ラトロワ「…ん。」

戒「感謝の印で口づけとは、びっくりしたな。」

ラトロワ「私だって一人の女だ頼りになる男がいれば惚れるに決ま
ってるだろ?」

戒「男冥利に尽きんな。それではなラトロワ、クリス力達によろし
く。」

ラトロワ「ああ。戒の方こそな?」

そして2人は別れたのであった。この後に待ち受ける悲劇を知らず
に。

第拾参話（後書き）

ラクス「はい、第拾参話でした。今回、作者はお休みにいられますわ。では今回のゲスト叢雲効ですわ。」

効「よろしく頼む…。」

ラクス「今回の役割では傭兵では無く軍属になっていましたけど違和感はありませんでしたか？」

効「あの世界の俺はフリーの傭兵だったが軍も面白いと感じている。」

ラクス「では、入ってみて不満に感じた事はなんですか？」

効「飯が合成食品で不味い。」

ラクス「確かに、天然物と比べると雲泥の差ですわね。」

効「後は後方部隊の一部が弛んでいる事が不満だな？仮にも後方とは言え、戦場には変わり無いのだから何時でも戦場にいる感覚でないと困る。」

ラクス「そこら辺は作者が基盤は出来ていたと言っていましたわ。」

効「ならば俺から言う事は何も無い。」

ラクス「判りましたわ。」

効「この作品を見ている読者やユーザーの者達は戒を使いたければ、
メッセージを送ってくれ。」

ラクス「では、次回の第拾四話までご機嫌よう。」

第拾四話（前書き）

一部のキャラの性格が変わっていますがそれが嫌だと言う人はバツクをお願いします。 m (| |) m

第拾四話

戒がソ連に赴いている最中、唯依とラクスはユウヤ・ブリッジス少尉とタリサ・マナンドル少尉に基地内を案内してもらっていた。

ラクス「皆さんはとても親切ですわね？」

タリサ「クライン中尉は此方には黒逸准将の付き人で来た：来られたのですか？」

ラクス「ふふ、私の事はラクスとお呼び下さいな？勿論、階級無しでお願いしますわね」

タリサ「そうか？助かるよ。どうも堅苦しいのは苦手なもんで…」

ラクスの言葉にタリサは頭を掻きながら苦笑いしていた。

ラクス「良いのですよ？戒も堅苦しいのは嫌いですからね？勿論、私も嫌いですから。」

そう言つてラクスは前を歩く唯依とユウヤを見ていた。

タリサ「ユウヤが気になるのか？」

ラクス「ええ、あの方は先程の挨拶の時、親の仇でも見る様な目をしていらしたものですからね。」

タリサ「あたしもそこら辺は知らないんだ、ユウヤはあまり、あたし達とのコミュニケーションをしないからな。」

ラクス「そうなのですか。あの方は何か訳がお有りの様ですわね？」
それから少し経ち、基地内の案内が終わり、格納庫に来るとソ連側
に行っていた戒が積み荷の確認をしているのが見えた。

戒「…ん？なんだ、もう案内が終わったのか？存外に早い物だな。」

唯依「戒准将、何時お戻りに？」

戒「1時間位前にな？唯依達が戻って来る前迄に機体と装備の確認
と調整をしていた所だ。」

そう言つてシートが掛かったままの機体の前に行き、徐にシートを
引っ剥がした。

其処には灰色のカラーリングが施されたMSと白色の戦術機より幾
分か小さい機体、そして、黒色のPTが並んでいた。

唯依「戒准将、これは？」

戒「俺の機体のデータを流用して製造した物だ。灰色の機体は汎用
性を重視して武装は換装式に、で白色の機体は単独任務…偵察等を
重視した機体だ。黒色の機体…コイツは遠距離戦を重視した機体で、
後方支援向きだ…多少だが近接用装備も備えているのがな？」

タリサ「単独任務つてBETA相手にか？」

戒「そうなるな？まあ、コイツは戦術機と比べると総合的に見て約
2倍強と言つた所だな。」

唯依「2倍ですか!!」

戒「まあ、専用機になっちまうがな。この小隊の中で冷静な判断と単独での行動が出来る胆力そして、高い技術力が求められる。他の機体に関しては戦術機とさして変わらんとするが少しばかり使い勝手が違うて来る位かな？」

ヴァリレオ「機体の名称みたいのはあるんすか？」

戒「あるぞ？灰色の機体の名は「ストライク」、黒は「ヒュッケバイン」、で白は「アーバレスト」って名だ。」

タリサ「へえ〜。」

戒「機体説明に戻るぞ？ストライクには装備を換装する機能が付いていて、空戦、砲戦、陸戦の三種に、全周囲型の計4つの装備がある。また、何も装備しないで戦う事も出来るが、装備が限られてしまう。ちなみにコイツは試作機になるからな？」

ステラ「試作機でこれだけの装備ですか！」

タリサ「早く乗ってみてえな！」

戒「焦るな これらの試験運用は先ず機体のスペックをちゃんと理解してからになるからな？で、ヒュッケバインの方には肩にGカノンが1門、腰にレールガン二丁で腕部には20？連装ガトリングが内蔵される。で両腰のウェポンラックにはプラズマソードが内蔵してある。」

ステラ「ブラスト・ガードには打ってつけだね。」

戒「で、俺が新しく設計、開発したのがこのASだ。^{アーム・スレイフ}」

唯依「大きさもそうですが戦術機とは大分違うのですね。」

戒「ああ、直訳だと主従追従式機甲システム（armored mobile master-slave system）になるな。」

ヴァリレオ「追従式ですか？」

戒「噛み砕いて言えば自身の動きをトレースして動かすシステムの事だ。先ず見せた方が早いか…。」

戒はそう言って、アーバレストに乗り込む為、コクピット部を解放した。

ヴィンセント「中に固定される様に乗り込むのですか？」

戒「ああ、先ず特徴としてはこのASに乗り込む際には声紋認識が採用されていてな…？これに登録されていない者には乗れない様にしてある。」

そう言って戒は機体の上部を閉める。そしてアーバレストの双眼に光が灯りアルゴス小隊の前に進み、外部スピーカーを使い話を続けた。

戒「説明を続けるぞ？コイツには今までの戦術機に使った装備も使える様に設計もしてあるから武装面に関しては問題ない。固定武

装は頭頂部付近にある二丁のチェーンガンに腰のウエポンラックにある単分子カッターだ。コイツは原理は違うが、高周波によりあらゆる物の切断等が可能だ。で、本国にはコレのオリジナルがあるがそっちの方は塗装等、色々違っているのだがな?』』

戒は外部スピーカーで話しながら武装のある場所を差しながら説明し、再びガレージに戻し、アーバレストから降りてきた。

戒『説明は以上だ。何か判らない事があればいつでも質問をしてくれて構わないからな?資料は君達の通信端末にも送っておくから目を通しておいてくれ。以上…解散!』と、ブリッジス少尉は少し此処に残ってくれるか?他の者達は各自この後の訓練をしてくれて構わない。ラクス、AS用のシュミレーターを製作する為の部品があるからアイルー達を使ってやって置いてくれ。』

ラクス「判りましたわ。」

タリサ「戒准将、アイルーってなんだ?」

戒『それは今度説明してあげるよ。とりあえず、今日の自分達のやる事をやっておきな。』

タリサ「へーい。絶対だからな?」

そう言っつて、タリサや他の面子は自分の持ち場に戻って行った。

ユウヤ「…俺を呼び止めた理由は何なんだよ…?」

戒『此処では拙いから少し場所を変えよう。』

そして戒はユウヤを連れて、倉庫裏に場所を移していた。

ユウヤ「こんな場所で何をしようってんだ？」

戒『そう邪険にするな。君は確か日本人と米国人のハーフだったか？』

ユウヤ「確かに俺は糞日本人と米国人のハーフだ…それがどうした。

」

戒『ブリッジス…済まなかった。』

戒はユウヤの目の前で頭を下げる。

ユウヤ「なっ！？いきなり、なんなんだよ！」

戒『君の父親の事についてだ。』

ユウヤ「あんな奴の事なんて父親ともなんとも感じていない！」

戒『君は誤解をしている。彼は…桐生直也は失踪した訳では無い。』

戒の言葉に最初は怒りを露わにしていたユウヤだがその言葉に目を見開き、静かに訳を聞いた。そして、あの京都防衛戦での出来事を事細かに説明した。

ユウヤ「そうか。親父は死んじまっていたのか…。」

ユウヤは話が終わると、ただただ空を仰ぎ見ているのであった。

戒『直也さんは自分が死ぬと言うのに、息子である…ブリッジス、君の事を心から心配していたよ。そして死に際に俺に君の事を頼むとも言われた。』

ユウヤ「そっか…。」

戒『話はそれだけだ。いきなりこんな事を言われても直ぐに、はいそうですかって納得は出来ないと思う。君の場合ならば尚更だが少しづつで良いから日本人に対しての偏見を直して欲しい。』

ユウヤ「…考えてみる。」

戒『ありがとう。そして、ほんとに済まなかった。』

戒は頭を再び下げる。ユウヤはそんな戒に言葉を投げかける。

ユウヤ「なあ、親父は死ぬ時に笑って逝ったのか？」

戒『ああ、死に際の最後まで君の事を気に掛けて、俺にブリッジスの事を託して笑って逝ったよ。』

ユウヤ「そっか、黒逸准将、あんな親父だけど、最後を看取ってくれて有難う御座います。」

戒『いや、とても家族思いな良い父親だったよ。ブリッジス。』

ユウヤ「今更だけど、俺の事はファーストネームのユウヤで良いよ。」

戒「なら、俺も名前で呼んでくれて構わないよ。」

ユウヤ「仮にも上官なのにか？」

戒「ユウヤの場合、今更な気がするが？」

ユウヤ「ハハ……確かにそうだったけな。」

戒「改めて、これからよろしくな？」

ユウヤ「こつちこそ。」

そしてどちらからとも言わずに握手をしてその場から2人は別れて行った。

戒「彼だけじゃない、此処にいる人達は絶対に守る。あの事件までの日はもう覚えていないが、それでも…この手が届く限りの者達だけでも守ってみせるぞ。」

1人戒は基地の外に出て、周りが見渡せる場所にて満月がある場所に向けて拳を握り締めていた。

第拾四話（後書き）

作者「ふつかあーっ！」

ラクス「あら、生きていらしたのですか？」

作者「勝手に殺すな！」

ラクス「なら、今一度闇に沈みなさい…ですわ」

作者「それは他キャラのセリ…ギャアアアアアア！！！」

戒「それにしてもイクリプスの主人公の性格、原作と違わないか？」

ラクス「作者曰わく、それだと面白くないそうですわよ？」

効「傍迷惑の何物でも無いな。」

戒「全くだな。で、今回の話には若干フルメタの設定等を流用しておりますのでご質問がある方はメッセージ等を下さい。」

効「それにしても、俺の次の出番は何時になるのやら。」

ラクス「今のイクリプス編が終わったらになる様ですわね？」

効「早く進めて欲しい物だな。」

戒「とりあえず、頑張って執筆はしてるみたいだけどな？」

ラクス「では、次回の第拾伍話でまた会いましょう。」

3人「ご感想等、お待ちしております。」

第拾伍話（前書き）

今回の話には一部その方面の資料を少し改竄しておりますので何かご質問があればメッセージか感想にお願いします。

第拾伍話

あれから数日が経ち基地内の者達と戒達は打ち解けていた。そして今、ユーコン基地のPXにて昼食をとっていた。

タリサ「だー！キツっ！」

そう言っただりサはテーブルに突っ伏した。

ヴァリレオ「確かに今日のあれは俺でもキツかったよ。」

ステラ「ボヤかないの。その変わりに色々な面で前よりも腕が上がつて来ているのは確かなのよ？」

タリサ「そうなんだけどキツイ物はキツイんだよ。なんで今さら格闘技の訓練なんてやるんだよ。」

ヴァリレオ「なんかあのASは操縦する為には自身の身体能力に左右されやすいからって言ってたぞ？」

タリサ「それって、結構乗り手を選ぶんじゃないか？」

ステラ「そうね。」

そんなたわいない話をしている時、PXに戒とどこか疲れた様子のユウヤが入って来た。

ヴァリレオ「戒准将、お疲れ様です！」

ヴァリレオの言葉にタリサ達は席から立ち上がり敬礼をした。

戒「んな事は俺にはしなくても良いって。皆はもう食事を済ましたのか？」

タリサ「今から食う所だよ。」

ステラ「？ユウヤ、どうしたのよ、何か疲れた様な顔をして。」

ユウヤ「…いや、さっきまで2人でシュミレーター機で模擬戦をしていたんだけどな…。」

そう言つてユウヤは疲れた顔をして、足元がフラついていた。

タリサ「ちょっ、ユウヤ！マジで大丈夫か!？」

ユウヤ「あれは…死ぬる…。」

ユウヤは遠い目をして呟いて壁を見ていた。

戒「あゝ、ヴィンセント？ユウヤを自室に連れて行ってくれるか？
流石に今回はやり過ぎたみたいだからな。」

ヴィンセント「あ、はい。判りました。」

戒「ユウヤは午後の訓練は休んでおけ。流石にあれだけやれば体力が保たんだろ。」

ユウヤ「は…い…。」

そして、ユウヤはヴィンセントに肩を借りてPXから自室へと向かって退室した。

ヴァリレオ「戒准将、一体ユウヤとシユミレーターで何をしていたですか？」

戒「いやな？ユウヤならイケるかなと思って朝の6時から昼までの6時間の耐久組み手を仮想空間でやっていたんだよ。」

3人「……はあ!?!?」「」「」

戒の一言にタリサ、ステラそしてヴァリレオは度肝を抜かれたのか素っ頓狂な声を上げてしまった。それもその筈、通常、戦術機の運用は要所所で違うが平均的に見て大体2、3時間が目安であるが戒がやった事はその二倍となる。普段から、MSの操縦をしている戒にとつては何の苦も無いが、この世界では長期の稼働が可能な機体が無い為、ユウヤはグロッキー気味になっていた。

戒「俺としてはまだ殺り足りないんだがな。」

タリサ「…なんか、言葉のニュアンスが違う気がする…。」

ステラ「タリサ、そこは気になっても言っちゃ駄目よ。」

戒達がそんな話をしている所にラクスが入ってきた。

ラクス「戒、此処にいらしたのですか？」

戒『ん？ラクス、どうした？』

ラクス「AS用のアレが出来たのでその報告をと思ひまして、探しておりましたのですよ」

戒『もう出来たのか！』

ラクス「はい あの子ども達が昼夜問わずにとても張り切って突貫でやってくれましたのでそこまで時間は掛かりませんでしたわ」

戒『なら、家に帰った時にはアイツ等に何かご褒美にあげないとだな…。』

タリサ「…なあ、さっきからあの子どもかアイツ等って言うてるけど一体何の話をしてんだ？」

戒『説明するより実際に見た方が早い…。ラクス、イブラヒム中尉に連絡をいれておいてくれ。午後の訓練はASのシュミレーター機による模擬試験をやる…。』

ラクス「わかりましたわ。では、また後ほどに参りますわ。」

そう言つてラクスはPXから退室して行つた。

ヴァリレオ「戒准将、AS用つて言つた様ですけど戦術機のシュミレーター機と何処がは違うんですか？」

戒『前にも説明はしたが、ASは搭乗者の動きをそのまま直にトレスする物だから、現存するシュミレーター機とは全体的に違うぞ』

「まあ、だから午前の訓練では格闘戦の訓練をしてもらった訳なんだがな？とりあえず、後でシュミレータールームに集合してくれ…詳しい説明はそこでするからな？俺は準備する物があるから先に行ってるから。」

タリサ「あ、あたしも何か手伝うよ！」

そう言つて戒はPXから出て行き、タリサはそんな戒を足早に追いかけて行つた。

ヴァリレオ「タリサの奴どうしたんだ？」

ステラ「まさか…ね。」

ヴァリレオ「ステラ、なんか知ってるのか？」

ステラ「いいえ、ただの勘違いかも知れないから。」

ヴァリレオが不思議に思つて聞くがステラはかぶりを振り何でも無い様に言う。

そして、先程PXから出た、戒とタリサはと言うと既にシュミレータールームに着いていた。

タリサ「なあ、戒？見た方が早いつて言つてたけど何があるんだ？」

戒「それはね？…皆、おいで〜！」

アイルー達「ウニヤアアアア！」

戒の一言にシユミレーター機の影から整備士の様な服装をした二足歩行の猫が6匹ほど駆け寄って来た。

タリサ「猫!？」

戒「ただの猫じゃないよ?ちゃんと人の言ってる言葉を理解出来る頭の良い子達だよ?」

タリサ「……可愛いな。」

タリサは自分の近くに来たアイルーを撫でながらポツリと呟いた。

戒「…ふむ、タリサ、俺はシステムの最終確認をしているからその間この子達の相手をしていてくれ。元は猫なもんで寂しがり屋な者でな?」

タリサ「え…?でもさ、あたし戒の手伝いに来ただけだよ。」

戒「なら、俺の変わりにこの子達の相手を頼むよ。ほっとくと悪戯をしでかす奴もいるからな。」

戒はそう言ってタリサの頭をクシヤと撫でる。

タリサ「ん…わかったよ///」

タリサは顔を赤らめながらも気持ちよさそうに目を細めていた。

戒「さて、それじゃあヴアリレオ達が来たら教えてくれ。」

タリサ「わかった。」

タリサは満面の笑みで戒に答えた。そして戒はそれを見て、シュミレーター機に入りシステムの最終チェックを始める。

戒『動作までの誤差は余り無いな…武器の方は…成る程戦術機のもあるしシヨットガンもある。機体のデータはM9にアーバレスト、コダールにファルケか…俺が乗る時だけは魔改造機のアルカイン…か、あの世界の最新鋭が揃ってるな。まあこの方がやりやすいがな。』

戒は次々に画面にデータを出しては消してを高速で行い、それを終わらしてシュミレーター機から出るとちょうどヴァリレオがアイルー達に攻撃されていた。

戒『……何があつたんだ？』

ヴァリレオ「戒准将、見てないで助けて下さいよ？」

アイルー達「ニヤアア？」

ヴァリレオ「ギャアアアア！？スパナはマジで止めて！」

戒『はいはい、お前達！そろそろ止めないと…飯抜きだぞ？』

アイルー達「ニヤアア！」

戒の死の宣告に近い言葉に今まで追い掛けていたアイルー達は一斉にその場で固まる。

ヴァリレオ「た、助かった」

ヴァリレオはやっと解放されたのか息も絶え絶えと言った状態になっていた。

戒「で、事の発端はなんだ？」

ステラ「それがね？ヴァリレオったら、あの子達を撫でたのは良いのだけど、後ろに他の子が居ただけれど誤って尻尾を踏んじやつて…ね。」

ステラの言葉に戒はその後の事を容易に想像が出来た。

戒「成る程な…。その後、逃げる際に他のアイルー達の尻尾も踏みソイツ等も加勢する形でヴァリレオを追い回した…と言うわけか…。」

ヴァリレオ「故意にやった訳じゃないぜ？」

戒「もし、故意でやったのであれば俺直々に制裁を与えている所だ。つたく、とりあえず全員シュミレーター機に搭乗しろ。」

3人「はいっ！」

そして、全員がシュミレーター機に乗ったのを確認して、戒も乗り込んだ。

戒「まず、電源を入れる前に言って置くが、コイツは自分の動きをより正確にする物だからしっかりと頭にそれだけは入れておけよ

？後はサポート用にAIがそれに備わっているから助けにはなる。
各自、起動したら、使う機体を選択しろ。』』

そして戒からの通信が切れる。

タリサ「うーん、あたしはこのファルケってヤツにする。」

ステラ「わたしはコダールにするわ。」

ヴァリレオ「俺はM9にするかな。」

そして各々が機体を選択してシミュレーターを起動させ、画面には
ビルの廃墟群が映った。

戒「さて、全員ちゃんと起動したな？…タリサやヴァリレオは予想
通りだが、ステラはコダールか？」

ステラ「何か変かしら？」

戒「いや、誰が何に乗るかは自由だから良いよ。」

タリサ「戒のそのASはなんだ？」

戒「コイツはアルカインって言ってな…？本国にある物をデータと
して入力したんだ。」

タリサ達の前に映るのは細部が違う真紅のカラーリングをされたア
ーバレストであった。

ステラ「アーバレストに姿が似ていますが？」

戒「ああ、アーバレストはこつちをベースにして作ったからな。これがASのオリジナルになるな。」

ヴァリレオ「戒准将の乗るソイツは選択肢に入っていないみたいだけど？」

戒「当たり前だろ？コイツは実機だとワンオフだからな？で特殊装備だとドライバ搭載機に亜空間換装システムにECSを搭載している。で、ドライバに付いてはM9以外には装備されている。ECSに関しては標準装備になっている。」

タリサ「戒が乗っているヤツに付いてるその亜空間換装システムってのは他の…あたし達が乗っているのには付いてないのか？」

戒「このシステムは搭乗者に多大な負荷を掛けるからコイツだけの装備になっている。その変わり、何かに特化しているって訳では無いんだ。とりあえず、始めるぞ？先に言っておくが3人で上手く連携して俺に一撃をいれるか、行動不能にするかしないと終わらないからな？」

ヴァリレオ「ユウヤがやっていた物と同じって事ですか？」

戒「まあ、そうなるな。…では、始めるぞ！」

そう言つて戒は腰から煙玉の様な物を地面に投げてその姿を隠した。

タリサ「よっしゃあ！やってやるぜ！あたしとステラは前でヴァリレオは支援を頼むな！」

ヴァリレオ「わかった。支援は任せとけ！」

ステラ「このドライブって言うのはどう使うのかしら？」

AI そのシステムは自身と機体の同調が必要になります。ですが皆様が機体を選択した際に波長パターンを登録しましたので後は発動する際のイメージを固めるだけです。

ステラはコダールを動かしながらシステムの確認をしていると画面横から補助AIからのアドバイスを聞いていた。

タリサ「イメージ…ジ？」

AI そうです。守りたいのであれば強固な楯や攻撃する際にはその時に使う武器にそのイメージを乗せる等ですね？後は皆様の発想力が鍵になります。

タリサ「よくわかんないけど要は想像に左右されやすいシステムって事だろ？」

ステラ「なんか気分屋みたいなシステムね？」

ヴァリレオ「二時の方角から熱源体多数接近！」

ヴァリレオの言葉にその方角に目を向けると数多のミサイルが此方に飛んで来るのが伺えた。

ステラ「任せて！」

タリサ「大丈夫か？」

ステラ「さっきので大体はわかったわ。後は自分のイメージをしっかりと持つだけ。あのミサイルから守れるだけの……楯を……！」

ステラが乗るコダールがミサイルに向かって腕を伸ばし、自分達の前に見えない壁でもある様に飛んできたミサイルはステラ達の目の前で爆発するだけであった。

ヴァリレオ「ヒューー」

タリサ「すっげー！あれだけのミサイルが意味を無くしちゃったな！」

ステラ「ええ、これならイケるわね？（でもこんな機能を作り出した戒准将ってほんと、凄いわね……）」

ミサイルを全て防ぎきった事にタリサ達は興奮冷めなまま先程、ミサイルが飛んできた方角に戒がいると思ひ、歩を進めた。勿論周囲の警戒をしながらである。

ヴァリレオ「にしても、戒准将は一体どこにいるんだ？……うわっ！」

周囲の警戒をしながら、ヴァリレオはそう呟いていると背後の方から急に衝撃が来た。

タリサ「ヴァリレオ！」

それにいち早く気づいたタリサはヴァリレオの方を向くとヴァリレオの背後の景色が歪んでいた。そして、歪みが収まると其処にはアルカインがいた。

タリサ「なっ!?!」

戒「言った筈だぞ…:ASにはECSが備わっている…:と。」

そう言っつてヴァリレオの乗るM9を蹴り飛ばした。

ヴァリレオ「うわっ!」

戒「言い忘れていたが攻撃した時の衝撃などは搭乗者にフィードバックされるから気をつけるよ?。」

ステラ「くっ!」

ステラはコダールに装備したガトリング砲をアルカインに向け、発砲した。その砲身から無数の弾がバラ撒かれ、足元には葉莢がバラバラと落ちる。

戒「おつと!。」

しかし戒はバックステップでそれらを回避しつつ廃墟の影に隠れる。

ステラ「タリサ!」

タリサ「わかってる!」

ヴァリレオ「さっきの仕返しだ!」

そう言つて3人は各々の武器を構えてアルカインが隠れている廃墟
に向け走る。しかし…。

タリサ「いない!？」

ヴァリレオ「上だ!」

タリサ「こんのー!」

ステラ「タリサ、待ちなさい!ああ、もう!ヴァリレオ!タリサの
支援をお願い!私はタリサを追うわ!」

ヴァリレオ「わかつた!」

ヴァリレオの声に従い上に目を向けると先程までにはなかつた翼を
アルカインは有して空を飛んでいた。そこにタリサはファルケに持
たした単分子カッターを構えて空に躍り出た。それを見たステラは
即座に隣にいるヴァリレオに指示を出して自身もタリサに追隨する
為に跳躍した。

戒「2人共、ドライバの適性は十分だな。タリサはやはり冷静な
判断力に欠けるな。ステラは全体を見る為の視野がしっかりとして
るし、ヴァリレオに関しては支援砲撃が正確だな。」

戒はそう状況判断を下しながらヴァリレオの撃つ弾を避けながらタ
リサに接近した。そしてそのまま胴の部分に蹴りを入れ、追隨して
きたコダールの方に飛ばした。

タリサ「んなっ!」

ステラ「キヤアアア！」

そしてタリサとステラが下に落ちるのを確認して、戒は下に降下した。

戒「イカロスを破棄、続いて、ヴォルケイノ、インフェルノを換装……。」

アルカインの背中にあつた翼は霧の様に消え、変わりに両手には二振りの両刃剣が姿を表した。

タリサ「つつ〜！戒の奴思いつきり蹴りやがってえー！ステラは大丈夫か？」

ステラ「タリサの方こそ大丈夫？私の方も大丈夫よ？にしても、戒准将の機体は凄いわね？」

タリサ「あれは反則だろ！」

戒「まあ、俺のは自分専用に手をかなり加えた機体だからな？」

ヴァリレオ「それって、ズルく無いか？」

戒「まあな。そう言って、ヴァリレオ……お前、俺がタリサ達に攻撃した際に狙撃してきたじゃないか？」

ヴァリレオ「それでも余り効果が無いみたいですが？」

戒「そんな事は無い。さっきの一撃が駆動部に入って、有効打になつたよ。」

タリサ「へ？それじゃあ…」

戒『ASの訓練はこれにて終了！』

タリサ「いよっしゃー！」

そして、戒とタリサ達はシュミレーター機から出た。

戒『うん！皆、ASの扱いが初めてには思えない動きだよ。特にタリサとステラはAIの補助があったとしても、ドライバを起動したのには驚いたよ？ヴァリレオは狙撃が正確だったな。』

ステラ「それにしても、戒准将？この模擬戦にはどのような意味が？」

タリサ「そう言えば、急だったよな？」

戒『意味か？それは今まではPTのシュミレーターは見た事があるけどASの適性はどの位か見てみたかったからな？』

ラクス「そこにAS用のシュミレーターを完成させて皆さんの適性を見る為に乗って貰った…と言う訳ですわ。」

戒の言葉を引き継ぐ様に後ろからラクスが話しながら歩いて来た。

戒『まっ、そう言う事だ。』

ヴァリレオ「で、模擬戦は合格したは良いけど、肝心の適性結果は？」

ラクス「それでしたら、皆さんは合格ですわ。」

戒「模擬戦の間に全員の動きの癖や戦闘の仕方をデータ収集したから、後は皆の同意があれば専用機も造る事も出来る。」

ヴァリレオ「すげえな！専用機か！今まではイーグルとかしか乗って無かったから自分用ってのには憧れがあつたんあだよな！」

戒「だが！戦術機もそうだがPTやMSの開発も進めているからどの機体にするかでまた違ってくるがな？とりあえず、そう言った話もあると言つ事を頭に入れておいてくれ。」

ラクス「戒、先程、効から連絡がありましたので執務室にて連絡を入れて下さいな。」

戒「わかった。」

そう言つて、ラクスはシュミレータールームを出て行つた。

タリサ「なあ、戒？さっきの話に出てきた効つて誰なんだ？」

戒「ん？効は本国に残つて貰つた俺の部下だよ。」

タリサ「へえ〜？」

ステラ「この後はどうするんですか？」

戒「この後はタリサ達との模擬データのまとめをしないと行けないからな？」

タリサ「あたし達はどうしたらいいんだ？」

戒「この後はラクスが引き継ぐ事になっているからな？とりあえずはブリーフィングルームにいてくれ。」

ステラ「了解しました。」

そう言っただりサ達はシュミレータールームから出て行った。

戒「さて、執務室に行くかな…皆はメンテナンスを頼むよ？」

アイルー達「ニヤー」「」

そして戒もシュミレータールームから姿を消したのであった。

第拾伍話（後書き）

作者「1日明けで投稿が出来た」

戒『にしても後半に関しては何故モンハンのアイルーを出した？』

作者「やっぱり、戒達がない間での機械なんかの整備にはマスケット系のキャラをと思ったたらちようど今やっているモンハンのアイルー達に目が行ったんだよ。彼等は人語を理解できる高い知能を有している訳だからね？」

戒『されは判ったけど流石にASのシュミレーター機や製造なんかは色々な意味で拙くないか？強制脱出「ベイルアウト」が出来ない点とか戦術機と操縦系統が違うとか光学迷彩とかさ？』

作者「設定上の物を使う訳だし大丈夫じゃね？」

ラクス「考え無しですわね？」

作者「黙らっしやい!!！」

ラクス「また、お仕置きが必要な様…ですわね？」

作者「……ダツ!!！」

ラクス「逃がしませんわ！」

アイルー達「「ニャー!!！」」

作者「挟み撃ち?! ちょっとギャアアアアアアアアアア!!!」

戒「作者が退場した為、俺が引き継ぐ。次は少し飛んで戦術機相互評価プログラムになるな。」

ラクス「作者がその間の事をド忘れしているだけだと思えますけどね?」

戒「それは言っではいかんだろ。」

ラクス「事実ですから。」

戒「とにかく! 次回の拾六話は作者の都合で少し遅れるが楽しみにしてくれ。」

ラクス「それでは、また次の話で逢いましょう。」

アイルー達「ウナウウ」

20万hitアンケート

このMuv-Luvを書くため筆を取って早3ヶ月が経ち、アクセス数が20万を記録しました。このMuv-Luvを見て下さるユーザー様や読者様にこの小説を感謝します。そして、20万hitを記念して短編を作りたいと思います。なので、イクリプス編までに登場したキャラでほのぼのか甘いのか…といった方はコメントを下さい。(、、ゞ

とりあえず、候補には…。

1番 唯依

2番 紅の姉妹

3番 タリサ

4番 クリスカ

5番 イーニア

6番 ラトロワ

になりますね？誰が良いか、コメントを下さい。よろしくお願ひしますm() () m

20万hit記念(前書き)

20万hitを記念してカガヤ様のリクエストにより筆唯依中尉との甘い話になっていければ幸いです。これを見られた方はご感想をお待ちしております。

20万hit記念

あれから数ヶ月が経ち、ブルーフラッグ機体相互評価プログラムの日がもう残す所、数日となっていた。その2ヶ月程前にBETAの強襲があつたがその時に俺は別の用事でその場には居合わせる事は無かつたが大事にはなら無いで済んだが試験運用で作製した99式電磁投射砲が失われた事を後から聞いた。俺からすれば電磁投射砲、即ちレールガンはPTの遠距離装備にあるからそれを技術的に流用すれば戦術機にも対応させられる為に深くは考えなかつた。

- ユーコン基地 黒逸戒執務室 -

唯依「戒准将は機体相互評価プログラムにはご参加するのですか？」
夜遅く、戒の執務室には唯依と戒が2人でブルーフラッグの事では話をしていた。

戒「勿論だ。ブルーフラッグには俺も参加する。ただし単機による物だがな？」

唯依「単機ですか!？」

戒「勿論だ。その為にストライクを持って来た訳だしな？」

唯依「他の…ASやPTはどうするのですか？」

戒「あゝ、アレか？あれ等はまだ試作段階で完成には程遠いから御披露目は見送りになるかな？」

嘘だ。この後に控えるBETA強襲までアレは米国やソ連等には隠して置いた方が得策と考えている。アレを出したが最後…不知火の強化計画に支障をきたすし招かれざる客が来るからな。

戒「とりあえず、ソードの装備とエールを持って行く積もりだ。」

唯依「ランチャーは持って行かれないのですか？」

戒「アレは出力が強すぎだから間違って客席にでも直撃したら洒落にならんからな。」

唯依「たしか、主武装は高威力のアグニとなっていましたね…。」

戒「あれはプラズマエネルギーを高圧縮した状態で確かマイクロ秒でバーストインパルスに変換、生成し放射するから人がいる所なんかに撃った時の被害なんか考えたくも無い。だから今回のプログラムには不向きと考え持ち込む事は無い。」

唯依「そうですか。しかし、そのストライクを出すと不知火式型と比べられ見劣りしてしまうのでは？」

戒「そこは不知火は不知火の強化案でストライクはバックパックを換装させる事によりあらゆる戦場への即応性を図る為の試作機として出せば問題あるまい。」

唯依「……確かにその様にすれば不知火式型とストライクの両方を出せますね？しかしコスト面で問題が出るのでは？」

戒『それは既に解決策が用意してある。』

唯依「どうするのです？」

戒『まず、コスト面に付いてはアレはガンダムと呼ぶのだが、規格を幾つか下げ、装甲面をPS装甲を排してラミネート装甲…つまり、光線属種に対しての物に変更、勿論硬度の方は例えで言えば至近距離で突撃砲を喰らわない限り大丈夫な様に設計はしてある。動力源にはストライク同様、プラズマジエネレーターにしてある。結局の所、PS装甲でコストが上がっていた…って所かな？』

戒の説明に唯依は驚きと戸惑いを隠せていなかった。

唯依「そ、そんなに違う物なのですか！？」

戒『当たり前だ。PS装甲があるのと無いのとじゃかなり強度が違う…。PS装甲は謂わば物理的な攻撃…実体剣や実弾による物、勿論ミサイルもそれに入るがほぼ無力化する事が出来るがその反面、製造には高コストになると言う事だ。』

唯依「そ、そんな事が！？」

戒『勿論、俺のヴェルフエゴールにも同じ装備が施されている訳だがな？しかし、PS装甲は他国に出す訳にはいかない。』

唯依「新たな争いになる…と？」

戒『憶測に過ぎんが、米国辺りがこの技術を手に入れたらそれこそアイツ等は更に調子に乗ってしまうだろうな。』

唯依「確かに…。」

戒「それに、あのソ連のイエーヅは焦臭い。奴は隙あらば俺が持つ技術を盗み出そうと画策しているだろうな…。」

唯依「……………」

戒のその言葉に唯依は顔を俯かせてしまった。

戒「…済まん。数ヶ月前の事とはいえ、余計な事を思い出させてしまった様だな…。」

唯依「い、いえ？戒准将の所為ではありません！あれはほんとに不慮の事故の様な物ですから！」

戒「しかし、唯依が危険な目に合った時に俺は駆けつけてやれなかった…大切な者を近くで守れないそんな自分自身に嫌悪や殺意すら覚えたよ…。」

戒は机に座ったまま、肩を震わし、自身の拳を強く握りしめる。唯依はそんな戒の拳を両手で優しく包み、口を開く。

唯依「私は戒に…好きな人にそう想われるだけでも安心出来ません。」

唯依はそう言うがやはり、生身でBETAと相対した事が未だに脳裏に焼き付いているのか拳に合わせた両手は微かに震えていた。

戒「唯依…。本当に無事で良かった。今まで忙しく、ごうやって2

人で話す機会が無く済まなかった。』

戒は席から立ちあがって唯依の前に立ち頭を優しく撫でながら自分の本心に近い言葉を唯依にかけた。

唯依「戒…。」

唯依は戒より身長が低い為、その身長差故に上目使いになるが頬を少し赤らめながら戒を見上げた。

戒「唯依の中の恐怖を今、取ってあげるよ。』

そう言つて戒は唯依に優しく抱き締めながらお互いの唇を重ねた。

最初は啄む様にそして徐々に深い物に変わり苦しくなってきたのか唯依が戒の胸を軽く叩き、戒はゆっくりと唇を離れたその時に2人の間に光る橋が出来た。

唯依「ん…ふあ…はあ…はあ。」「

唯依は唇を離れた瞬間、甘い声を零し、息を整えていた。

唯依「か…い…。」「

戒「場所を移そう。』

そう言つて戒は唯依を背中と膝の後ろに手をまわした。所謂お姫様抱っこである。そして、執務室にある仮眠室に入りそのベッドに唯依をゆっくりと寝かした。

戒「唯依、ほんとに良いのか?』

唯依「あ、当たり前です。私は好きな男性こゝろにしかしませんよ／／／
／／／、それに、初めてなので…その、優しくお願いします／／／
／／／」

その後の事は皆様のご想像にお任せします。

行為後、ベッドの上に2人は布団を被りながら、余韻を噛み締める様に抱き合っていた。唯依は行為後に初めてしたものだから途端に寝てしまい、戒だけが起きている状態であった。

戒「俺と言う異物がこの世界に入り、色々な所で事象が変わって来ている。そして、この世界の特異点である白銀武はあの日、あの街に現れるか…予想はつかん。が、既に賽は投げられた。後は運命に任せるしか無いか…。」

そして、戒もまた唯依の髪を梳きながら意識を闇に沈めたのであった。しかし、ブルーフラッグの時にある惨劇が待っていたようとは戒はこの時には思いもしなかったであろう事をここに書き記しておく。

- 後日、P X内 -

ステラ「唯依中尉、おはようございます。」

唯依「おはよう。」

P X内にて食事を採っていたステラは入口から来る唯依に気付き敬礼をし、唯依もそれを返す、がその後の唯依の歩き方がぎこちなかった事に違和感を覚えるステラは自分の前に座り、食事を摂る唯依

に質問を試みるのであった。

ステラ「唯依中尉、何かあったのですか？かなりぎこちない歩き方でしたか？」

唯依「な、なんでも無い／＼／＼／」

ステラの言葉に顔を瞬間沸騰させながらも冷静を装う唯依だが端から見ても何かがあったのは一目瞭然であった。その後、戒が来て一騒動あったのはまた別の話である。

20万hit記念(後書き)

作者「はい。20万hit記念完成しました!」

唯依「ユーザー様、読者の方々この小説を読んでいただき有り難うございます。これからもお願いします。」

戒「おい!作者!」

作者「はい?」

戒「何故に軽くヤバい表現になってるんだよ!危うくR18になる所だったぞ!」

作者「でも、唯依姫は満足してるみたいじゃないか。」

唯依「//////」

戒「うおい!唯依い!?!意識をトリップさせてないで何か言ってる!?!?」

唯依「えっと、気持ち良かったです//////」

作者「だってさ...?良かったな(笑)」

戒「ちよっ!唯依さんや?!何を言っちゃってるのかな!?!」

唯依「えっと。リクエストして下さいました力ガヤ様、甘い感じになっていれば良いのですが、感想をお願いしますね?」

戒『次はシリアス方面で行くんだよな？』

作者「勿論、フラグ乱立の場面もあるぞ」

唯依「嘘だ！ー！ー！」

作者「ちよっ！？落ち着いて！ー！出演キャラ違っよ！ー！」

唯依「どう、違っのかな、かな？」

作者「ちよっと、話し合いをしませんか？…錠は、オヤシロ様は許してー！？」

唯依「直ぐに終わるよ？アハハハハ！ー！」

戒『えー、混沌としてきたのでこっら辺りで締めたいと思います。次に出来るのは五万hit後になります。よろしくお願いします。』

作者「誰か！助けてー！？」

唯依「アハハハハ！どうして逃げるのかな、かな？」

第拾陸話（前書き）

ユウヤ達の性格を改変していただきますので、嫌だと言う人はバックをお願いします。

第拾陸話

ユーコン基地 格納庫

戒『明日か、何も問題なく行けば俺の取り越し苦労であれば良いが……』

戒は格納庫の入口から夜空を見上げながらそう言葉を零した。

唯依「戒准将、どうしたんですか？」

戒が格納庫で夜空を見上げていると後ろから唯依が声を掛けて来た。

戒『唯依か、なに、夜の贈り物を待っているだけだ。』

唯依「贈り物：ですか？」

唯依は戒の言葉の意味が判らず疑問符を浮かべていた。すると雲の影からオレンジ色の塗装がされた大型の輸送機らしき物が姿を現した。

唯依「あれが戒准将の言っていた、贈り物ですか？」

戒『2人の時には階級は無しだ……まあ、いいや。あれは本国で作った物でアウドムラと言って、最大で6機搭載出来る。』

唯依「すいません。機体がそんなに搭載出来るなんて凄いですよ！」
戒「と言ってもアレ1機では小隊と通信車両を積むのが精一杯だがな？」

唯依「でもアレには一体、何を積んであるのですか？」

唯依は滑走路に着陸したアウドムラを見ながら戒に疑問に思った事を聞いた。

戒「なに、機体相互評価プログラムは4機で一組だろう？だから向こうで完成させたMSを2機と専用機を1機持って来てもらったんだよ。」

戒はそう言っアウドムラの方に歩いて行く。唯依はその後ろを歩いて行く。

戒「済まんな、効。こんな時間に。」

効「なに、向こうに新しく入った者がいてな？勿論、戒…君のオペレーター役も行う事になっているよ。」

戒「そうなのか？まあ、別に良いが…。で、頼んだ物は…？」

効「心配せずとも、アルカインとダガーにザクそして、それらの換装用も持って来てある。今、アイルー達がトレーラーで搬入をしている。」

戒「あの子達がいると、作業面でほんとに助かるな。」

唯依「戒准将、こちらの方は…？」

戒「ああ、唯依は知らなかったな。コイツは叢雲効、本国で俺の部下兼期衛軍大佐になる。」

唯依「失礼しました！私は…」

効「知ってるよ？帝国期衛軍の篁唯依中尉だろ？話は戒から通信等で聞いているよ？優しくも厳しい女性だと聞いているよ。」

唯依「そんな／＼／＼」

戒「んな事を今言うなよ…。で、帰りにPTとアーバレストを持って行ってくれるか？」

効「判った。アイルー達に運ばせて置くよ。」

戒「ありがとう。それじゃあ俺達は戻るよ。次に会うのは一年後だな。」

効「ふっ、そうだな。その時が楽しみだな。」

効はそう言っつてその場所を離れた。

戒「さて、唯依は先に戻れ。俺はアレ等のシステムの構築する為にもう少し残るから。」

唯依「それならPXに行つて夜食を作ってきますよ。少しでも食べないと頭も体も上手く働きませんからね？」

戒「そうか？なら、唯依の自慢する肉じゃがをお願いしようかな？」

唯依「わかったわ。待っていて下さいね?」

そう言っつて唯依はPXに向かう為、格納庫を後にした。

戒『ふう、こんな物か…。』

そう言っつて戒は懐から煙草を取り出し、火を着ける。肺に紫煙をゆつくりと入れ吐き出す。

唯依「戒、煙草を吸うんですか?」

戒が紫煙を吐き出した所へ唯依は夜食にと戒が頼んだ肉じゃがをトレイに乗せて近くに来た。

戒『ん?ああ、気分転換なんかの時によく吸うな。』

唯依「システムの構築は終わつたんですか?」

戒『ああ、明日…と言うよりも今日か。まあ、とりあえず評価プログラムには出せる様には出来たよ。後は、ご覧じろつてな?』

唯依「しかし、衛士の方は?」

戒『そつちの問題はクリアしているよ。』

唯依「…どういふ事ですか?」

戒『まだコレは公表していないが、MDシステムを使う。』

唯依「どんなシステムなんですか？」

戒「簡単に言えばそれは無人化された兵器って事だ。」

唯依「人が戦術機に乗らなければ衛士はいらない。しかし！そんなれば私達のいる意味が無くなります！」

戒「あー、唯依、落ち着け。なにも俺はコレを表に出すつもりは一切無い。それにコレを使うには人の脳波で行う。それに加えて複雑な思考や並列化した情報量を扱う事の出来る人間にしか使えない。そんなシステムが表に出ても使う事が出来ると思うか？」

唯依「限りなく不可能に近いでしょうね。しかし、戒はそれが出来るの？それと評価プログラムの時には戒もMSで出るの？」

戒「出来るからこそ、この場にアレがあるのだから？それに俺自体、MSには乗らん。不知火弐型に新型OSを使って乗る。で、小隊を組む際にストライクにダガー、そしてザクを使う。勿論周りに被害が出ない装備だから似たり寄ったりになるかも知れないがな？」

唯依「そう…ですか。」

戒「ああ、そろそろ寝ないと起きれないだろ？それとも俺の部屋で一緒に寝るか？」

唯依「そ、それは／＼／＼／」

戒「はは、それじゃあ、お休み。肉じゃが美味かったよ。」

唯依「ま、待って下さい！」

俺が皿を持って格納庫の基地に続く出入り口に差し掛かろうとした所に唯依が叫びながら制止して此方に近づいて来た。…どうしたんだ？

唯依「あ、あの、やはり…その／＼／＼／＼」

戒「…一緒に行くか。」

俺が俯き気味な唯依の頭に空いている手で頭を撫でると唯依は顔を赤らめながらも目を細めて擦ったそうにしていた。そして2人が一緒に寝て、明朝。格納庫にて機体の搬出の為に早くに起きて、来ていた。

唯依「戒、大丈夫ですか？」

戒「なに、心配は無い。あるとすれば情報漏洩が一番だな。」

ラクス「そちらの心配でしたら大丈夫ですわ。戒の管理する物や此方の基地内のデータバンクには幾重にもプロテクトを掛けましたし、間違つて侵入されたとしてもあらかじめ用意した偽のデータが行きますし、それを開いたりしたら即座にウィルスが発生する様に設定してありますので（黒笑）」

戒「ラクス、背後から黒いのが見え隠れしてるぞ（汗）」

ラクス「あら、私としたら」

戒の注意にラクスは笑いながら背後にあるモノを消した。

戒『ユウヤ達は一足先に向こうに行っているみたいだな?』

唯依「はい。昨日の時点で向こうに行き、どのような場所でやるのか確認の為に既に出立しています。」

戒『そうか。なら、俺達も急がないとだな。』

唯依「戒! 貴方の成功を祈ります!」

丁度、戒の使う戦術機がムリーヤに搬入されたのを皮きりに戒は機体に乗込み込む。

戒『さてと会場に急ぎますか。』

そうやって戒はムリーヤを飛ばし、ブルーフラッグ…機体相互評価プログラムを行う場に向かうのであった。

その頃、ユウヤ達はと言うと…。

亦菲「あんた達アルゴス小隊なんかには負けないわよ!」

何故か何故か統一中華戦線の崔 亦菲に絡まれていた。

タリサ「なんなんだよ! さっきからあたしらにばかりいちゃもん付けやがって!!」

ヴァリレオ「落ち着けてタリサ。此处で騒ぎを起こせば俺達じゃなくて戒准将に問題があるって言われるぞ?」

タリサ「くっ！わかったよ。あの人には絶対に迷惑を掛けたくないからな。」

ステラ「まったく、黒逸准将の名前だけでここまで効果があるって凄いわね。」

ユウヤ「まったくだな。」

亦菲「黒逸って誰よ？」

ステラ「貴女、知らないの？」

タリサ「戒准将を知らねーなんて人生を損してるな（笑）」

亦菲「なんですって!？」

タリサ「やんのか!」

ヴァリレオ「だから、2人共まずはお落ち着けて、されと、タリサ。そろそろ、戒准将がムリーヤに乗ってこっちに来る頃だぞ？」

タリサ「マジか!？急いで戻んねえとだな！ユウヤ！ステラ！急いで戻るぞ!」

そう言つて、タリサはとてつもない速さでその場を後にする。

ヴァリレオ「やっぱり、戒准将の名前は凄い効果だな。」

ステラ「さっきまでの勢いは何処に行ったのかしらね？」

ユウヤ「それより、早く俺達も行った方が良いと思うんだけど？」

ヴァリレオ「そう言う事で失礼します。」

亦菲「一体、誰だつてのよー！？」

そしてユウヤ達も亦菲の前から立ち去り、その場に残された暴風小隊、そして隊長である亦菲の絶叫が虚しく上がるだけであった。

バオフェン

滑走路 格納庫前

ユウヤ達がタリサを追いかける形で格納庫前に着くと先に来ていたタリサが戒と楽しそうに話をしている所であった。

戒「ははは ん？ユウヤ達どうしたんだ？皆揃って。」

ヴァリレオ「いや、戒准将がそろそろ来る頃だと思い迎えに来たんですよ。」

戒「んな事しなくて良かったのに……評価プログラムの進み具合はどんな感じだ？」

ステラ「先程、暴風小隊の者達がアフリカのドゥーマ小隊との戦闘にて勝利しました。」

戒「やはりドゥーマ小隊が敗退したか。」

ユウヤ「一言も聞いてないぜ！そんな事！？」

タリサ「戒が出たらあたしらに勝ち目が在る訳無いじゃねえか！」

ステラ「でも、何で参加するのですか？」

戒「ん？俺の機体は弐型だぞ？ただ、他の3機は試験運用で造ったMSだ。」

ステラ「基地で見たアレが3機ですか！？」

タリサ「嘘だろ」

ユウヤ「腹を括った方が良いだろ。」

ヴァリレオ「やるしかないだろな」

戒と話をしていたユウヤ達は呆れ半分驚愕が半分と言った感じで話をしていた。

戒「なにも勝ち負けが全てでは無いだろうが。この相互評価での経験が後々でお前達の役に立つ時もある。だから勝ち負けで決めるな。そう言った勝ち負けの事を気にする前に自身の全力を出す事を一番に優先しろ。その後で勝った負けたを言えば良い。」

ヴァリレオ「そうだな。確かに戦術機の相互評価ってだけだからな。」

タリサ「なら、あたしらの小隊の連携で他の奴らをぶっ飛ばしてや

る！」

ユウヤ「ふう、タリサが燃えてるな。」

戒「良い事じゃないか。たとえば、俺の言葉とは言えやる気が出たんだからな？」

ステラ「黒逸准将、そろそろ、戒准将の戦術機の相互評価試験が始まりますよ？」

戒「ん、そうか？じゃあ、また後でな？」

ステラの言葉に戒は足早に格納庫前から離れて行った。

試験会場内

亦菲「全く、アイツ等ほんとにムカつくわね！あゝ、もう！この憂さ晴らしは次の奴らで晴らしてやるわ！」

暴風2「亦菲中尉、相手が来たみたいですよ？」

亦菲「やっと来たわね！一体ど…こ…の…！」

亦菲は対戦相手が来た事を知り其方を見て言葉を失う。それと反対に会場内はざわめいた。勿論それは入って来た戦術機の所為である。先頭には不知火式型だが全身を真紅のカラーリングで不知火式型と細かいデザインが若干違い、その後ろからは戦術機とは異なる機体が入ってきたからである。

亦菲「な…によ、あれは？何処の小隊よ！」

亦菲は機体外に付いている外部スピーカーを使い、今入ってきた戦術機に問い掛ける。

戒『ふむ、そう言う其方は？他者に名を聞く前に自らが名乗る物が礼儀では無いのか？（やつぱり、亦菲は激情型の様だな？）』

亦菲「ふん！私は統一中華戦線の暴風小隊所属の崔 亦菲中尉よ！
…これで満足かしら？」

亦菲は得意気に言うが次に向こう側の言う言葉に驚愕する事になる。

戒『俺は日本帝国期衛軍所属の黒逸戒だ。階級は嫌いだから言わん。この小隊の名はオーガだ。』

暴風2「て、帝国期衛が何故いるんだよ!？」

亦菲「帝国期衛が何だつてのよ！そんな事で尻込みする程、暴風小隊は柔じゃないわよ！」

そう言つて亦菲は織撃10型に装備した柳葉の様な長刀を構える。それに感化される様に他の暴風小隊の面々は同じ得物を手に持ち構える。

戒『やれやれ、血気盛んなのは良いが足元を掬われん事だな!』

そう言つて戒も不知火式型の腰に差した日本刀の様な物を抜き放つ。そして、後ろに控えたストライク、ダガーそしてザクも連動する様にストライクとダガーはコンバットナイフを両手に逆手で持ち、ザクはその肩のスパイクシールドからアックスを引き抜き、刃先が熱

した様に赤くなる。最初に動いたのは痺れを切らした亦菲だ。

亦菲「睨み合いで何が出来るってのよー！」

亦菲は戒の乗る不知火式型に直線機動を強化した織撃10型でそのトップヘビー化し、打撃破壊力を強化した柳葉状の長刀を戒の乗る不知火式型に唐竹割りの要領で振り抜く。

戒「思い切りは良い…だが、ソレはコイツには悪手だ！」

戒はそう叫びながら袈裟切りで織撃10型の長刀を弾いた。そしてそのまま振り抜いた所を逆袈裟で切り返すがそこは近接戦闘のエキスパート、寸での所を胸部に装備されたりアクティブアーマーを起爆し、爆破の衝撃で大きく後退する。

亦菲「…中々やるわね。」

戒「其方こそ、今のを良く機転を利かし躲した物だ。」

亦菲「当たり前前よ。私を誰だと思ってるの？暴風小隊を率いる崔亦菲よ！」

戒「確かに。だが、君以外は既に片付いている様だが？」

亦菲「なっ!?!？」

戒の言葉に衝撃を受けた亦菲は他の暴風小隊に目を向けると駆動部をやられたのかストライクの前に仰向けに倒れ、ダガーと対峙した織撃も同様でザクと戦闘をした織撃は両腕を肩から斬り飛ばされて膝を着く形で止まっていた。

亦菲「そんな！何時の間に!？」

戒「やはり、戦術機は乗り手でその性能が左右するな。…さて君はどうかな？ああ、安心しろ。君と俺の戦いにはアレ等は手出しはせんから気にするな。」

亦菲「この！舐めるなー!!」

戒の言葉に亦菲はキレて咆哮に似た叫びを上げ、戒に向け跳躍ユニットの火を吹かし接近する。

戒「ただ闇雲に突っ込むだけでは俺には勝てんよ!」

ユニットを吹かす亦菲を戒はただ迎え撃つ。そして、亦菲の駆る織撃と戒の駆る不知火式型は長刀と日本刀：ガーベラ・ストレートで切り結ぶ。

亦菲「なんで！なんでよ！出力ならこっちが上なのに!」

亦菲は叫びながらもフットペダルを更に踏み入れ、跳躍ユニットの噴き出す火の勢いがます。

戒「力だけが全てでは無い。」

そう言つて戒は今まで何度か斬りつけてきた亦菲の勢いある一撃の重心をズラす為、ガーベラの向きを横にズラした。すると力の慣性に従い、織撃はその身を地面に倒した。

亦菲「くっ！まだ…!」

亦菲は果敢にも言葉を上げながら再び起き上がるつもりだったが目の前にガーベラの切っ先を突き付けられその動きが止まる。

戒「この戦い…俺の勝ちだな？」

亦菲「……私達の負けよ……！！」

戒はそう宣言し、亦菲は悔しさに顔を歪ませながら自身の敗北を告げる。そして会場から出て、戒は不知火弐型から降り、外に出ると其処には先程まで戦っていた暴風小隊の隊長…崔 亦菲がいた。

戒「何の用だ？崔亦菲中尉。」

亦菲「貴方の階級をちゃんと聞いてないから来たのよ！」

戒「そんな事か？」

亦菲「そんな事！？階級は軍人に置いて大切な物よ！それをそんな事呼ばわりをしないでよ！」

戒「あゝ、判った、判ったからそう怒鳴るな。俺の階級は准将だ…これで満足か？」

戒の言葉に亦菲は一瞬何を言っているのか理解出来なかったが数秒して一気に顔色が蒼白した。

亦菲「じゅ、准将！？アンタ…じゃなかった。貴方が！？」

戒「敬語は嫌いだ。それにさっきまでの砕けた話し方で良い。」

亦菲「なんで黙っていたのよ？」

戒「仮に明かしたとして、崔亦菲…君は本気を出したか？」

亦菲「そ、それは……。」

戒「あの場で明かさなかったのは君達の実力を見たかったからに他ならない。」

亦菲「だけど、私はアンタに負けたじゃない！」

戒「それは結果的にだろう？実際の所、君達…暴風小隊は練度は高いが経験キャリアがお世辞にも多いとは言えない。それは他の小隊にも言える事だがな？しかし、そんな中でも君は少し強引だが接近戦の心得と言う物がしつかりとしている。前の戦いの切り返しで決める積もりの一撃を察知して躲したのが良い例だ。」

亦菲「ふん、誉めたって何も無いわよ／＼／＼／」

戒「ふ、そうか。」

亦菲「そ、そうだ。私に勝ったんだから、と、特別に名前前で呼んでも良いわ／＼／＼／」

戒「そう言う事なら俺の事も名前前で構わん。なに、階級は気にしないから他の者達と接するのと同じ様にしてくれて良いからな？」

亦菲「そ、そう？なら、これからはか、戒って呼ぶわね／＼／／」

戒『ああ、これからも宜しくな、亦菲。』

その後はたわいない話をしていると会場の方で大きい歓声が聞こえてきた。

戒『今度は何処の小隊が勝ったんだ？』

亦菲『多分、今やってるのは米国のインフィニテーズ小隊と東欧州社会主義同盟のグラーフ小隊の筈よ？』

戒『インフィニテーズと言えばステルス性能を持ったラプターだったか？あれは並の衛士にはキツいだろうな。あれはセンサーに掛からないだけじゃ無く、振動も限りなく0に等しいから気付いたら既にoutって事に成り得るからな。』

亦菲『何処からそんだけ情報が出て来るのよ』

戒『事前調査は基本だぞ？』

戒の言葉に亦菲は呆れ顔で言うが、戒は何事も無い様な顔で言うのである。

その頃、先程の戦闘を終わらせたインフィニテーズの小隊であるレオン・グゼとシャロン・エイムはユウヤ・ブリッジスと何年振りかの再開をしていた。

レオン『久しぶりだな、ユウヤ。』

シャロン『元気にしてた？』

ユウヤ「ああ、久しぶりだな、レオンそしてシャロン。」

レオン「お前らの初戦見せてもらったぜ？中々良い連携するじゃねえか。」

シャロン「そうね。でも私としては最初に日本製の戦術機で出てきた時にはびっくりしたわよ？」

レオン「あゝ、確かにな。あの日本嫌いのユウヤが乗ってるからなゝ？にしてもユウヤ、なんか前の時に会った時より性格が丸くなってるないか？」

ユウヤ「ある人のお陰で今はそこまで日本の事を嫌ってないし、多分、丸くなったのはあの人の影響かな？」

レオンの言葉にユウヤは苦笑をしながらも楽しそうに話をする。

シャロン「ユウヤを明るくした人ってどんな人？」

レオン「確かに気になるな。ユウヤの根深い日本嫌いを軽くした訳だしな？」

ユウヤ「一言で表すのならあの人はとても人望の厚い人…かな。」

シャロン「なんか良いわね。」

レオン「へゝ。一体誰なんだ？」

ユウヤ「お前らも名前位は知ってるだろ？黒逸戒…俺が尊敬している人だ。」

2人「「嘘だろ!？」」

レオン「黒逸戒ってあの日本帝国期衛軍の黒逸戒か!？」

ユウヤ「ああ、あの人が居たから今の俺があるって言っても過言じゃないかもな。前の俺には考えられなかったけどな。」

シャロン「物凄い人と知り合ったわね。そう言えば私達がやる前に出たあのオーガ小隊だったかしら、アレはユウヤ達の国連側の方で出したの？」

ユウヤ「俺もそう思うよ。それは違うな。あの人は自分の試作機がどの位か相互評価試験で試すから別系統で出るって言ってたな。」

レオン「本人が乗っていたのはユウヤが乗っているのとカラーリングが違うだけみたいだが？」

ユウヤ「俺も詳しくは教えられてないんだ。」

戒「情報収集も勉強だぞ？ユウヤ。」

ユウヤが2人に質問を返していると格納庫の影から戒が現れてユウヤに皮肉気に言葉を放つ。

ユウヤ「か、戒!?!い、いつから其処に居たんだよ!」

戒「なに、タリサ達だけが戻ったのにお前だけが戻ってこないから探していただけだが?...その2人はユウヤの知り合いか?」

レオン「初めまして。俺は米陸軍、第65戦闘教導団インフィニテ

ーズ所属のレオン・グゼ少尉です。」

シャロン「同じくシャロン・エイム少尉です。」

戒「話に出ていたかな？日本帝国、帝国期衛軍所属の黒逸戒だ。階級は基本的に嫌いなもんでな？フレンドリーで頼む。」

レオン「准将なのにそれで良いのかよ？」

戒「階級だけが軍では無いよ。皆は階級だけで人を見たりしないだろっ？。」

レオン「まあな。ユウヤは昔から上官に楯突きまくってたけどな（笑）」

ユウヤ「それは昔の事だろ！」

シャロン「今も…じゃないかしら？」

戒「ははは ユウヤ、仲が良いじゃないか？」

ユウヤ「誰がこんな奴と！」

レオン「つれないなあ。昔の仲間だろ？」

戒「幼馴染みのような物だな。」

シャロン「それはどういう意味何ですか？」

戒「説明は面倒だ。レオンは知ってるだろ？」

レオン「勿論だ。子供の頃からか、若しくは長年連れ添った相手に使う言葉だぜ？」

シャロン「そういう意味じゃ、私達には当てはまるわね。」

戒「後、俺から見たらユウヤとレオンは悪友って感じだな。」

ユウヤ「なんでだ？」

戒「遠慮無しに話が出る所とかかな？」

戒の言葉にシャロンは思い当たる節があるのか、妙に納得している。

シャロン「あゝ、確かにそうね？」

戒「ははは！…ん？アレは…。」

そんな時に銀色の髪を靡かせながら駆けて来る少女を戒は見つける。

イーニア「戒、やっと見つけた！」

駆けて来た少女…イーニアはそのまま戒の胸に飛び込む様に抱き付いた。

戒「イーニアじゃないか。どうしたんだ？」

イーニア「戒を見つけたから来ただけだよ？」

戒『まったく クリスカが心配するぞ?』

クリスカ「まったくだ。」

戒の言葉に何処にいたのかクリスカは戒の隣で頷いていた。

戒『ん?いつから其処に居たんだ?』

クリスカ「さつきだ。しかし驚かないのだな?」

戒『気配があるのが判ってたからな。』

クリスカ「ほとんど戒は人間離れした事をするな。」

クリスカの疑問に戒は気配だけで判別した事に呆れてしまっていた。クリスカ達が集まっているのを見て格納庫外にいた他の衛士達が声を上げる。

衛士1「なんで魔女が此処にいるんだよ!!!」

戒『ん?』

衛士2「化物が!!! さつさと失せるよ!!!」

他衛士達「「そうだ!そうだ!!!」」

イーニア「か、戒:ク、クリスカ:。」

クリスカ「くっ!!! (判っていた:判っていた筈だぞ!!! クリスカ! 私達:紅の姉妹がどの様な存在であるか!!!)」

衛士達の罵声にイーニアは戒の服を掴みクリスカを見て、クリスカは俯きながら唇を噛み締め、内心で自身に叱責していた。

ユウヤ「な、何だよ！コレは！？」

レオン「まっ、普通の反応だろ？」

ユウヤ「どういう事だよ！」

シャロン「紅の姉妹」「スカーレット・ツイン」が人の心を読むって噂で他国の衛士達からは畏怖されて嫌われているのよ。」

ユウヤ「だからって！？今！アイツ等は何もしてないだろ！？」

クリスカ「ユウヤ・ブリッジス、良いんだ。私達は奴らからしたら化物にしか見えないんだ。」

衛士1「さっさと消えるよ！！化物が！？」

そして衛士1が石の様な物を投げる。それがイーニアの頭に当たりそうになるが側にいた戒がそれを掴み、ゴシヤツと握り潰した。

イーニア「あ、ありがとう！戒！」

クリスカ「き、貴様あっ！！！」

戒「クリスカ…止める。」

クリスカ「だがっ！！！」

戒『俺に任せて置け。貴様らの行い…温厚な俺でも流石に鶏冠にキ
たぞ…!!』

衛士1「な、なんだよ!?ほんとの…ヒツ!？」

戒『その汚い口で彼女達の事を悪く言うなよ?』

戒が叫びその場にいた衛士達は怯むが衛士の1人が尚もクリス力達
の事を言おうとした瞬間、戒はその衛士の目の前に居り、首を掴ん
で、目が笑ってない冷たい笑みを衛士に濃密な殺気と共に叩き込む。

衛士1「……………」

戒『ふん!』

戒の尋常では無い殺気に掴まれた衛士は口から泡を吹き、白目を剥
いて気絶してしまい、戒はゴミでも捨てるかの様に仲間と思われる
方に投げつける。

衛士2「いきなり何しやがるんだよ!？」

戒『それは此方が聞きたいな…。』

衛士3「なにをだよ!」

戒『貴様らの物の言い方だ。彼女達が何かしたか?貴様らに危害を
与えたか?貴様らに何かしたか?…何もしておらんだろが!!そ
れなのに何故、貴様らは彼女達を罵る!何故、消えろと言う!!そ
の様な事を言う奴らはこの俺がこの場で…消す!!…』

戒のその言葉を皮切りにイーニア達には被害が出ない様に戒は他の衛士達に先程の衛士にした様に濃密過ぎる殺気を辺りに撒き散らす。反論してきたほとんどの衛士達は腰を抜き尻餅を突いていた。

衛士4「お、お前は一体何なんだよ!？」

戒『ああ、言っていないかったな、俺は帝国期衛軍の黒逸准将だ。』

ユウヤ「あゝあ、戒の奴階級使ってるな。って事は、ブチギレてるよな?」

レオン「なんか、今更だけどあの人って何者だ?睨みだけで此処等にいる衛士達が尻込みするってどんだけだよ」

戒の言葉を聞き、ユウヤは怒らせた衛士達に同情し、レオンは自ら掛けたサングラスでわからないが疑問と呆れを一緒くたにした様な表情になっている。

衛士4「て、帝国期衛軍がなんでこんな所に!？」

衛士5「ら、羅刹の黒逸がなんで!？」

戒の名乗りはその場にいる衛士達は全員が全員、顔を青ざめる。

戒『なんだ...?名前を言っただけで先程までの勢いが窄むのか?その程度で尻込みする位なら貴様らがさっさと失せろ!』

戒の一喝に衛士達は一斉に蜘蛛の子の様に散り散りに逃げる。

戒『罵声を浴びせた奴だけでも殺して置くべきだったか…』

イーニア「戒！もう良いよ！？」

クリスカ「ああ、私達の事で怒りを覚えるのはお前位だが、それでも嬉しいよ。」

ユウヤ「にしても少しばかりやり過ぎじゃ無いのか？」

戒『なに、上の奴らの弱味は十二分に用意してあるから問題は無い。』

レオン「怖ええよ」

クリスカ「だが、私達はば…」

クリスカが化物だと言葉を続けようとすると戒は軽く手の甲で拳骨？をして遮る。力が少し強かったのかクリスカは日本人にしては長身の戒を目尻に涙を堪えながら見る。

戒『クリスカ、自身の事を蔑む様な事を言うなど君は阿呆か？』

クリスカ「…」だが！「！」

戒『言い訳は聞かん！良いか？前にも言ったと思うが君達は化物などでは無い…本当に化物と言うのであれば私だ。』

戒は左手の親指で自身を指す。

ユウヤ「どういう事だよ？」

戒『今に判る。俺の事とは別に人は誰しも化物を飼っている。それが自身の心だ。人の負の感情と言うのは時に自身だけならず他者にさえ害を成す事がある。それがしっかりと認識しないから人類は争いが絶えない。』

イーニア「イーニアは少し判るよ。色んな人の心を見る事もあるけど奥の方に何か黒く蠢いた何かを見る事がいっぱいあったから。」

戒『結局は人は深層意識の中にどす黒い物を抱えている物だ。恨みや妬み、そして憎しみ等それは人それぞれが持ち得るものだ。そして、それを面と向かい合う者はほんの極一部だけだが……。』

ユウヤ「戒にもあるのか？」

戒『それは秘密だ。さて、重たい話は此処までだ。俺はクリス力達と飯を食いに行くがどうする？』

ユウヤ「言われなくても行くさ。」

レオン「俺達も良いのか？」

戒『そんな当たり前な事を聞くな。さっさと行くぞ。』

イーニア「戒と一緒に御飯。」

クリスカ「イーニア！戒！待ちなさい！」

ユウヤ「行くか？」

レオン「勿論だぜ！あんな奴は滅多に居ないだろ？」

シャロン「そうね？考え方が他の上官とは180度違つみたいだし、それに面白いわね？」

そう言つて戒達の後をユウヤ達は追ひ、その後も楽しく食事をして、自分達の部隊に戻つて行つた。この巡り合わせがどう転ぶかは誰にも…神にすら予想は出来ない。

第拾陸話（後書き）

作者「第拾陸話完成しました」

戒「後半がやけに重たくなってるないか？」

作者「原作自体が重いだろ？」

戒「名作に対してメタな発言は止めるよ!？」

作者「話は変わるが、今回のゲストを呼びましょうか。TEのメインヒロインの1人!クリスカ・ビーチャノワ少尉です!」

クリスカ「この様な所に呼んで私は何をすれば良いのだ？」

戒「確かに、それはあるよな」

作者「これからの戒ラバーズに加入予定つか、確定だがな（笑）」

戒「俺にこれ以上どうしろと!？」

クリスカ「戒は私が嫌いなのか? / / / /」

戒「いや、クリスカ? 恥ずかしいのならやらなくても良いだろ? 俺的には可愛いが。」

クリスカ「いや、作者が戒が喜ぶだろうって。 / / / /」

戒「...作者あー!?!? って居ねえ!! 何処行ったあー!?!」

クリスカ「えつと戒が作者を追って行ったので私が変わりをする。
次の話もしっかりと見てくれ。」

作者「此処まで来れば…」

戒『待てや！この駄作者がぁー！！！』

第拾七話（前書き）

前半はクリス力視点で後半は戒の視点です。見て下さった方は出来れば感想を下さい。

第拾七話

アイツはほんとに不思議な奴だ。私達の生まれを知りながらも他の者達と同じ様に接してくる。しかし、人とはあまり関わらない様にしていた私が自ら進んで関わろうとするのだから不思議な物だ。

イーニア「クリスカ？どうしたの？」

クリスカ「ううん、何でもないわ。イーニア。」

イーニア「イーニアね？今日、戒がイーニア達の事で凄く怒ってくれたのがとても嬉しかったよ。クリスカは？」

クリスカ「そうだね。私もイーニアと同じだよ？」

イーニア「ねえ、クリスカ、戒はイーニア達の事、どう思ってるのかな？」

クリスカ「どう思ってるのか？」

イーニア「イーニアは戒の事が好きだよ？でも戒はイーニア達の事どう思ってるのか気になるの。」

クリスカ「私もそれはよく判らないわね。でも短い間だけあの人はイーニアや私の事で本気で怒ってくれるし、心配もする…嫌いなそんな事はしないから大丈夫だと思うわ。」

イーニア「うん」

クリスカ「イーニアはあの人の事はどんな好きなの？」

イーニア「えつとね？側に居てくれるだけでポカポカして、いないとイーニアの此処がギュッって苦しくなるの。クリスカはそういうった事ってあるの？」

イーニアは自身の胸の辺りを差しながらクリスカの質問に答え、クリスカはどう答えて良いか判らずにいた。

クリスカ「（私はあの人の事をどう思っているんだ？最初は確かに嫌いと言うか、また嫌な奴が来たと思った…けど、あの人は…戒は普通に接してくれる。自分自身が私達と同じ様に力を持っているのに何故其処までお気楽で居られるのかとても不思議で仕方なかった。だが、イーニアの今の言葉を聞いて一瞬だが胸が痛くなったが…まさか私が戒の事を…：判らない。私は友好的な意味で好きだと思っていた…でも、だとしたらこの気持ちは一体何なのだ？）」

イーニアの言葉でクリスカは自身の頭の中で疑問でいっぱいになっていた。

イーニア「クリスカ、どうしたの？」

クリスカ「えっ!？」

イーニア「イーニアが話しててつまらなかった？」

クリスカ「う、ううん！そんな事ないよ？ただ、明日はまたイーニアが戒と会えると良いなってね？」

クリスカが戒の名前を呼んだ時にイーニアは少しだけだが表情が軟

らかくなつたのを見逃さなかつた。

イーニア「クリスカ、戒の名前呼んだ時の表情「かお」が軟らかくなつてるよ。」

クリスカ「イーニアが変な事を聞くからよ／＼／＼／＼もう！明日も早いから寝るわよ！／＼／＼／＼」

イーニア「あつ！クリスカ？ちゃんと答えてよ？」

私はイーニアの言葉から逃げる様にベッドに潜ってしまった。この感情を私が抱いて良いか判らない。しかし、もし、もしそれが許される物なのならばあの人に戒に打ち明けようと思う。

そしてクリスカは意識を闇に落とした。そしてクリスカが床についてイーニアも就寝する為、ベッドに入ったのである。

そんな彼女達を余所に残酷な時は刻々と迫る。

格納庫とある一角

戒『不知火式型並びに全戦術機に言えるが跳躍ユニットに依存した主機はいざと言うときに困ってしまうな…。なんとかして主機部を改良してユニット無しでやれない物か…。』

格納庫の一角でコンソールを軽快な指のタッチで動かしながら戒は戦術機の改良を考えていた。

ラクス「戒、そろそろ寝ませんと明日の戦闘に支障が出ますよ？」

戒「いや、この問題を何とかしなければ今後の奴らとの戦争に支障を来すからな。最初は核融合炉を使うかと考えたが終わってからの問題があるから没でプラズマジエネレーターにしようか、低電力ジエネレーターにするかと悩んでいる所なんだ。」

ラクス「そうですね、戦術機は光学兵器を主眼として作られておりませんから低電力ジエネレーターの方でもよろしいのでは？」

戒「しかし、燃料の補充等の問題を考えるとそれも没か……。やはりプラズマジエネレーターにするか。とりあえず明日の試験までには不知火弐型改にプラズマジエネレーターの換装を終えないと駄目だな。」

ラクス「なら、それは私とあの子達でやりますから戒はもう寝て下さいな。」

戒「悪いな。それじゃあ頼むな？」

ラクス「はい 戒、お休みなさいですわ」

戒は後の事をラクスに任せ、格納庫を後にした。

ラクス「さて、アイルーちゃん達と頑張らなくてはですわね」

ラクスは戒の姿が見えなくなつてからアイルー達と不知火弐型改の主機部の換装を夜通しで行った。そして、戒のオーガ小隊の次なる相手はキース・ブレイザー率いるインフィニティーズであった。戒

はインフィニティーズの戦いと
の戦いで何を感じ、何を見るの
だろうか。

第拾七話（後書き）

作者「第拾陸話完成です」

戒「今回はやけに短いな？」

作者「次回が少し長引く為に今回の話は意味深な場面を少し入れてそこで少し区切る意味合いもあるんだよ？…さて、今回のゲストはイーニア・シエスチナさんに来てもらっています！どうぞ」

イーニア「こ、こんにちは／＼／＼／＼」

戒「何故、イーニアが？」

作者「ん？前の後書きにはクリスカが出たたる？だから次は姉妹繋がりでイーニアにと思ったただけだ。」

イーニア「えっと、イーニアはどうすれば良いの？（首傾げ）」

作者「……………」

戒「作者が立つたまま気絶してるぞ！？さっさと目を覚ませ！」

作者「ハッ！？イーニアが余りの可愛さに意識がすっ飛んでいた！」

戒「読者の人達に判りづらいぞ？それ。」

作者「あのな！質問しながら首を傾げて上目使いと言つ高等テクで誰も墜ちないと思つていいのか!？」

戒「んな鬼気迫る勢いで近付くな!!」

作者「グフツ!!」

戒「さてと、イーニア次の見所は判るか？」

イーニア「えつと、まだ作者の人が明確にして無いから判らないよ。」

作者「勿論！フラグ乱立男の戒には色んな場所で物語のカギを握る人物達とこれからも親交を持つてもらつつもりだ。」

3人「『これからMUV-LUVALTERNATIVE少年の異世界戦記をよろしく願ひします。』」

イーニア「えつと、ご感想を貰えると嬉しいです（ペコリ）」

第拾八話（前書き）

可笑しな表現があつた為修正致しました。

第拾八話

インフィニティーズ格納庫

キース「今日の最初の対戦相手は判っているな…?」

ガイロス「帝国期衛軍のオーガ小隊だろ?」

キース「ガイロス、油断は禁物だ。あの京都防衛戦での彼の噂位は聞いているのだろう?」

ガイロス「噂は噂でしかない。化けの皮をこの俺が剥ぎ取ってやるよ!」

レオン「やれやれ、ガイロスは熱いね。」

シャロン「でも、相手は数々の異名を持った人よ?確かに油断は出来ないわよ?」

レオン「わかってるって、ちゃんと暴風小隊の対戦も見てるからデータ分析したから大丈夫だろ?」

ガイロス「ふん!暴風如きが使う織撃と俺達のラプターを比べるな!」

キース「ガイロス、落ち着け!」

ガイロス「チツ!」

キース「とにかくだ！今回戦う相手は他の者達とは格が違う！各自フォーメーション通りの動きを期待してるぞ！」

3人「はっ！！」

オーガ小队 格納庫

戒「相手はラプター先行量産型か…。電子戦はあちら側と比べるまでも無いな。今回は全機近接戦装備で行くか…。」

ラクス「ですが、少しは砲撃戦装備で行くべきかと。」

戒「そうすると、光学兵器無しのブレイズザクにソードダガーにエールストライクって所かな？」

ラクス「それで他の国への宣伝にもなるのでよろしかと。」

戒「そうだな…。上手く行けば国内外共に出せればBETAは勿論、ハイブ攻略にも大きな短縮が出来るな…。」

戒はラクスと話をしながらMSの換装作業を並列して行っていた。

戒「唯依、隠れてないで出て来なよ。」

戒が作業を中断して格納庫の入口に向かってそう言っていると気まずそうな顔をして唯依が入って来た。

戒「どうしたんだ？」

唯依「あ、あの…。」

ラクス「ふふふ、私は少し用事を思い出しましたので先に行っておりますわ」

戒「お、おい！」

戒が呼び止めるもラクスは聞かずに格納庫を出てしまった。

戒「まったく（気を利かせてくれたみたいだが、唯依の様子が少しを見る限り違う気がするのだが…。）」

唯依「あ、あの！戒はあの不知火弐型はどういった仕様になっているのですか？初戦で見せた動きが私達の不知火弐型とは違う様に感じたのですが…。」

戒「それは各関節にちよつとした物を使っているのとOSの書き換えで今回の戦闘では主機部の換装を行ったな。不知火弐型とは別物になりかけているな。」

唯依「そうなんですか？各関節にはこういった物を使えばあの様な動きが出来るのですか？」

戒「うーん、あの動きはOSと関節にある仕掛けそして衛士の技量次第で可能だよ？で、関節に使ったのはストライクのPS装甲を使った物だ。そうする事で機動戦をした時の関節部の損耗率が格段に下がるがコストが掛かるから試作で終わるかも知れない。」

唯依「それでも、格段に損耗率が下がるのは全衛士は勿論、技術者としては画期的な物ですよ？」

戒『そうなんだが……』

戒が続きを話そうとしたらコンソール近くの通信機から連絡の為にコール音が鳴り、戒がそれに出た。するとラクスからの連絡であった。

ラクス「戒、そろそろ時間になりますので準備をお願いしますわ。」

戒『ああ、判ったよ。有難うな。』

ラクス「いえ、戒の事ですから時間を忘れてしまっただけかと思いましたがですわ。」

戒『ははは、いつもと言う訳じゃ無いさ。』

ラクス「そうですね？まあ、いいです。それでは私は客席で見させていただきますので。」

そう言ってラクスは通信を切った。

戒『さて、米軍機の性能を見せて貰えますかね？』

唯依「戒、気を付けて下さい。米軍のラプターはステルス性が強く今までの戦闘記録では無敗となっていますから……。」

戒『有難うな？心配をしてくれて……だけどそれでも俺は……俺達は負けれない……だろ？』

唯依「フフ　そうでしたね。」

戒「それじゃ、行ってくるよ。」

唯依「あっ／＼／＼／＼」

戒はそう言って唯依の頬に唇を落として不知火式型改に乗り込んで会場に向かった。その場に顔を赤くした唯依を残して。

相互評価試験場

キース「来たか…。」

ガイロス「ふん！ぶっ潰してやるよ！」

レオン「…装備が前と違うから少しは用心するべきじゃないのか？」

シャロン「相手はあの人だから十分な注意は必要ね？」

ガイロス「そんな物は腰抜けの考える事だ！！」

キース「馬鹿者！先走りをするな！」

キースはそう叫び、ラプターを戒の不知火式型改に肉薄させ、0距離で突撃銃を撃つ。

戒「おっと！いきなり随分な挨拶だな。各機散開しザクは後方支援しながら2番機を相手に、ダガーとストライクは4番機と1番機の

相手を…。」

戒は0距離射撃をサイドステップで避けながら音声コマンドを使いMS各機に指示をだす。

キース「くっ！何故あの機体はステルス性能を持つラプターをああも的確にロックしてくるんだ!？」

シャロン「しかも、私達の動きより早い!？」

レオン「ちい！ミサイルの数が多い!？誘導兵器は禁止じゃなかったのかよ!？」

戒「さて、筋肉馬鹿をさつさと始末をして他に行くか。…それと誘導兵器では無くただ直進するだけのミサイルだぞ?」

戒は先程から自身に対し、突撃銃を撃ちまくってくるラプターに対して余裕綽々な動きで交わしていた。

ガイロス「くっ！この！ちょこまかとしやがって！逃げてばかりで勝てるのかよ!」

戒「勝てはしないけど当たりもしてないが…?」

ガイロス「舐めやがって!（さっきからアクティブを作動させているのに、ヤツはしっかりこっちを感知してるなんておかしいだろ!？）」

戒「おいおい、そんな子供騙しじゃあ俺は墜とせないぞ?（良い具合に混乱してるな）」

戒はガイロスの射撃を機体を横にブラしながらも行動は回避と相手を挑発するだけに留めていた。

レオン「ガイロス！少しは頭を冷やして冷静にならないと駄目だ！」

ガイロス「腰抜けはすっこんでいろ！！コイツは俺が……！？」

レオンの言葉にガイロスは聞く耳を持たずに尚も休みなくがむしやらかな撃ち方をして、とうとうガイロス機の突撃銃の弾倉全てが尽きてしまい、やむを得ず突撃銃はその意味を無くしてしまった。

ガイロス「なっ！？しまった！？」

戒「やれやれ、やつとか？此方の挑発に乗ってくれて助かったよ。此方は無駄な動きをしないでカタが着いたからな。」

ガイロス「このクソ日本人が！！」
ジャップ

そう言つて戒はガイロス機に対し、ユニットを噴かし一気に肉薄すると、そのまますれ違い様に腰の刀を居合い抜き、要領で抜き放ち、ラプターの四肢を常人では視認出来ない速度で切り落とした。

ガイロス「ぐあっ！！」

レオン「ガイロス！」

戒「おいおい、レオン、他人の心配をしてないで自分の心配をしたらどうだ？」

レオン「くっ!?」

レオンはガイロスに気を取られている間に戒は肉薄しレオン機を蹴り上げ様とするが寸での所を躲したが装甲の表面を少し削ってしまった。

シャロン「レオン!?!」

キース「シャロン!ボサツとするな!次が来るぞ!」

レオンが寸でで躲すのをシャロンはそれに悲鳴に近い声で叫ぶがキースの一喝に直ぐに反応しその場からユニットを噴かし離れるとその場に一条の光が上空から先程までシャロンがいた空間を貫く。

シャロン「くっ!」(光学兵器携行機でさらに空中戦までする機体なんて聞いた事無いわよ!?)

キース「ええい!あの機体の衛士!ヤツは化物か!」

キースはダガーの連撃を突撃砲をバラ撒きながら回避しつつ悪態を吐いていた。

戒「さて、そろそろ観念したらどうだ?ラプターでこの2機を相手に良く保った方だぞ?」

レオン「はは、だけれどもそっちには一撃も入れられてないじゃ無いかよ」

戒「まあ、確かにそうだが、仮に戦場だとしたら絶望的な状況かで生き残る事は凄いい事何だぞ?で、どうする?観念するか?それとも

「継続か？」

レオン「俺も男なんでね？最後まで諦める訳には行かないぜ！」

戒「なら、俺一人で相手しよう。ザクはストライク達の支援に行け。」

」

戒の指示に従ってザクは背部のバーニアを噴かしてキース達の方に向かう。

シャロン「中尉！レオンがいた方向から向こうの増援が来ます！」

キース「クソッ！！この2機だけでも手こずると言うのにさらにもう1機来るだー！？」

シャロン「ミサイル多数確認…来ます！？」

シャロン達は回避しようとするがストライク達により動きが制限され、ミサイル群の爆発に巻き込まれてしまった。

レオン「シャロン！？中尉！？」

戒「向こうは終わった様だな…。」

レオン「この戦力差はもう無理か…。」

戒に対峙するレオン機は片腕を失った状態になりながらも多少だが弾を残した突撃銃を片手に持ち相對していた。

戒『だが止めるつもりは毛頭無い…か？』

レオン「当たり前だろ？たとえ負けると判つていても一矢報いる位の気概が無ければ男としてどうかしてるぜ？」

戒『ふっ、そういうのは嫌いでは無いよ。ならば！次の一撃で終いにしようか…。』

戒はそう言つて刀の鞘に手を添えて居合いの型で止まり、レオンは突撃銃をいつでも撃てる様に戒に照準を合わせているその場で止まる。戒達の雰囲気会場は一瞬だけ時が止まったかのような錯覚を覚える。そして皆が固唾を飲み見守る中どちらとも無く両者は同時に駆け抜けた。

唯依「戒…。」

タリサ「中尉、戒なら大丈夫だろ？なんたつてあたし等の上官何だからさ？」

タリサの言葉を聞きながらも唯依は未だに動き続ける2機を見つめている。

レオン「くっ！！性能はこっちが上だつてのに照準が直ぐに外されちまう…けど…！」

戒『その様ながむしゃらな撃ち方では俺には当たらんよ…！』

戒は機体を左右に振りながら突撃銃の弾を避け、当たりそうな物だけを的確に弾き徐々にその距離を詰める。

レオン「おいおい！冗談じゃないぜ！ほんとに化物じゃねえかよ！
こんだけの弾幕を事も無げに去なすとか出鱈目にも程があるだろ！
？」

そしてとうとうレオンは戒の駆る知火式型改の持つ刀の攻撃範囲内に捉えられてしまう。そして…。

戒『其処だ！！』

戒の一喝の下に刀で一閃し鞘に戻す。そして刀を鞘に納める瞬間に起きる鐸鳴りに反応するかの様にし、レオンの駆るF-22ラプタールの腕がズルりと重力の法則に従い地面に落下する。その瞬間…米軍に初めての黒星を戒は叩き付けたのであった。

タリサ「いよっしゃあー！！！！！！」

唯依「良かった…。約束通り勝った。やっぱり、あの方は凄いですね。」

ユウヤ「ああ、俺達も負けられないな！！」
戒の不知火式型改の後ろ姿を見てアルゴス小隊は決意を新たにするのであった。

第拾八話（後書き）

作者「第拾八話出来たー！ー！！」

戒『五月蠅いよー！！』

作者「ぐはっ！？」

戒『今日は誰をゲストに読んだんだ？』

作者「今回のゲストには煌武院悠陽殿下を呼んでみましたー！！」

悠陽「こんにちは」

戒『何で悠陽が？』

作者「いや、それが……（滝汗）」

悠陽「言ったら……判りますね？（黒笑）」

戒『悠陽、キャラが違うぞ』

悠陽「あら、私とした事が／＼／＼」

戒『で、また何で後書きに？』

悠陽「あの駄作者に早く私の出番が来る様に急かして来たのですよ！」

作者「休みの時ならともかく仕事があれば少々キツイぞ！？」

悠陽「その様な事は私は知りません。次の話も早く仕上げてくださいね？でない……（黒笑）」

作者「完璧に脅しちゃってるよ!？」

悠陽「では、次は第拾仇話：楽しみにしてて下さいね？波乱万丈なこの小説を見て下さる読者様、ユーザー様御感想をお待ちしておりますね（笑）」

作者「俺のセリフが!？」

25万hitアンケート

作者「25万hitたっせえーい!!」

戒「こんな駄文で25万hitか…。」

作者「五月蠅いわい!!え〜、このM u v - L u vを読んで下さる全ての読者様達には感無量です。」

作者「この度25万hitを記録したので25万hit記念のリクエストのアンケートを取りたいと思います。なので、誰との絡みが良いかどんな内容にしたいのか、感想文かメッセージ報告でご連絡を下さい。」

戒「前は唯依だったが次は誰が来るのやら…。」

作者「それは読者の皆さんやユーザー様の要望次第だな?」

戒「……腹括っておくか。」

25万hit記念リクエスト（前書き）

遅くなりましたが、25万hit記念リクエスト完成いたしました。
m | | m

25万hit記念リクエスト

京都黒逸家屋敷

戒「今日は非番でやる事も無くて暇を持て余してしまっな。しかし、偶にはこんな静かな物も良いな…。」

戒は1人、屋敷の縁側で仰向けになり、静かに空を見上げていた。

紅蓮「戒殿ー！ー！！」

しかし、そんな静かな一時をぶち壊すかの様に紅蓮大将が屋敷に滑り込んで来た。

戒「なっ！？紅蓮大将、どうしたんですか？！」

紅蓮「何も聞かずに来てくれぬか！ー！！」

戒「えっ
」

紅蓮「ええい！面倒だが…御免！ー！！」

戒「ちよっ！？降ろせー！ー！！」

戒は突如、来訪して来た紅蓮に有無を言わずに京都の帝都に連行されるのであった。そして…。

帝都 煌武院悠陽私室

紅蓮「殿下！連れて来ましたぞ！！」

パンツ！！！！！！

戒「うわっ！？」

紅蓮は言葉を上げて悠陽の部屋に入るなり戒をその場に放る。

戒「痛っっっ！！」

紅蓮「では戒よ、殿下の事を頼むぞ！！」

そう言つて紅蓮は室内に戒を残したままでドアを閉め、立ち去ってしまった。

悠陽「戒！大丈夫ですか！？」

戒「ああ、大丈夫…大丈夫だからそんなに覗くように見なくても大丈夫だよ／＼／＼／＼」

戒と悠陽の距離は後数？でキス出来る位に縮まっていた。

悠陽「そ、そうですか／＼／＼／」

悠陽もそれに気付き少し距離を離れた。

戒『よつと！しかし、急にどうしたんだ？紅蓮大将が来た時にはびっくりしたが。』

悠陽「そ、それは／＼／＼／」

戒『それは？』

悠陽「か、戒殿とお話をしたかったです。／＼／＼／」

戒『いつもって訳じゃ無いが話はしてるだろ？』

悠陽「い、いえ。その、ふ、2人きりでお話をしたいと…。それを紅蓮大将に聞かれたらしく本人は張り切って戒を連れて参る…」と」

戒は悠陽の言葉に何故紅蓮大将が自分の所に襲撃もとい来訪し、何故に拉致をしたか合点がいった。

戒『成る程、確かに悠陽と話をする時には隣に真那や重臣共が居たからな…。』

悠陽「すいません。私の我が儘で戒の貴重な休みを潰してしまって

」

悠陽は濟まなさそうな顔で戒に謝るが戒は気にするなと言う風に手の平で頭を2、3度ポンポンと叩く。

戒『なに、気にするな。結局は非番で暇をしていた所だ。それに、悠陽と2人きりなんて滅多に無いだろうしな？今日は悠陽の手伝い

「だろつが話相手にもなつてやるよ」

悠陽「戒、有難う御座います」

戒「で、俺は何をすれば良いんだ？」

悠陽「戒の話の話を聞かせて下さいますか？」

戒「俺の？詰まらん話しか無いが…？」

悠陽「戒殿の話は私にとっては詰まらない話などではありませんよ？」

戒「そんなもんか？」

悠陽「そんなもんです」

戒「それじゃあ……」

その後、2人はたわいない話をし、談笑をしていた。

悠陽「ふふふ、あの斑鳩准将がですか」

戒「あれには俺もびっくりしたよ」

戒は悠陽と楽しく話をしていると口に手をあてて欠伸をするのを見ていた。

悠陽「ふあ……」

戒『眠いのか？』

悠陽「あつ、えつと／＼／＼／＼」

戒の言葉に顔を赤らめて目を逸らす悠陽。

戒『しかも良く見れば隈が出来てるじゃねえか…、どの位寝てないんだ？』

悠陽「……………か……………です。」

戒『ん？』

悠陽「だから…その、4日間位眠れてないのです。」

戒『そりやまた、なんでんな事になってんだよ』

悠陽「それは……………」

戒の質問に悠陽は答え辛いのか俯いてしまう。

戒『ふう、まあ答え難いのなら言わなくて良い。だがな？1人で抱え込むな。悠陽には真那に紅蓮大将や斑鳩さんもいるんだ…困ったら相談を持ち掛けるって事も出来るだろう？』

悠陽「その中に戒はいるのですか？」

戒『何を当たり前な事を聞く？悠陽が大変な時には相談にも乗る…そして助けるさ。』

悠陽「戒／＼／＼／」

戒「今はとにかく寝る事が大事だ。」

悠陽「……寝る事？」

戒「そうだ。睡眠不足は心身と共に影響を及ぼす。それで周りに迷惑を掛けたら心配を掛けまいとする悠陽にとっては本末転倒だろう？第一、俺はそんな悠陽を見たくは無い……。」

悠陽「ふふ、確かにそうですね。」

戒「貴方は何時もぶっきらぼうに言っただけで私や真那を始め他の者達を心配するのですね。私はそんな貴方だからこそ惹かれたのかも知れませんね？」

戒「悠陽が寝るまでの間はちゃんと居てやるからしっかりと休め。」

悠陽「ですが、私が寝たら出て行かれてしまうのですよね。」

戒「（だあー！この姫さんはこの捨てられた子犬の様な瞳で見るとか計算高いのかそつで無いのにやっているのかが判らんわー！！！）わかった。なら起きるまでいる事にする。」

悠陽「ほんとですか！？／＼／＼／」

戒「ああ、それと悠陽が安心して寝れる様に何かして欲しい事がある」

れば可能な事で有ればする。』

悠陽「あ、あの／＼／＼でしたら戒の、ひ、膝枕でお願いします／＼／＼」

戒「俺の…と言うか男の膝など固いだけだが、まあ、悠陽がそれを望むのならそれでも良いのだがな。』

悠陽「お、お願いします／＼／＼」

戒の言葉に悠陽は顔を赤らめ、戒の膝に頭を乗せて横になった。

悠陽「戒殿は本当に優しい方…ですね。」

戒「ふつ、こんな戦う事しか能の無い奴を捕まえて言う台詞か？」

悠陽「戒殿、それは違いますよ？それしか無いのならば此処まで私や真那、それに紅蓮は信頼を置きませんよ？」

戒「貴方を一目見た時に私の心は貴方に捕らわれてしまった。ですがそれが嫌と言う訳でも無く自然に受け止める自分がいる事に私は自分自身にびつくりしています。貴方が隣に居るだけで私は不安や寂しささえ忘れる事が出来るのです。それは真那にも言える事です。貴方にそれを言ったらまた傷付けない様な皮肉気な言葉でかえすのでしょうかね。そんな貴方に、そんな貴方だからこそ私や真那は惹かれたのですよ。」

戒「どうした？俺の顔をじっと見て。』

悠陽「なんでもありません。ただ…いえやっぱり何でも無いですよ。」

戒『?????』

いつか貴方に話せる時が来たらこの私の胸にしまった想いを告げたいと思います。

25万hit記念リクエスト（後書き）

作者「で、出来たー！！！」

戒『今回の話はヤケに遅かったな。』

作者「姫さんの口調を変更するかどうかで悩んだ事と今日はマラソンもあつてその練習で遅くなつてしまつたが走つた時のテンションを維持して執筆をしたからなんとか出来たんだよ。」

戒『良くやるな。』

作者「自己の目標には至らなかつたがな」

戒『え〜、ユウト様リクエストして下さり有難う御座います。』

作者「甘い仕上がりになっていれば幸いです。」

戒『この話に関しての文句などはリクエストしてくれたユウト様しか受け付けませんので悪しからず。』

2人『「これからも少年の異世界戦記Muv-Luv編をよろしく
お願いします！！！」』

第拾仇話（前書き）

2週間振りの投稿です。今回の話はインフィニテーズ達との会話です。

第拾仇話

戒のオーガ小隊に敗れたキース率いるインフィニティーズは現在、格納庫にて先の試験での反省すべき所を話していた。

インフィニティーズ格納庫

レオン「やっぱり英雄は強いな。」

シャロン「そうね。あの不知火にしろ、他の戦術機…じゃなくてMSだったかしら？あれもとてつもない脅威になるわ。そもそも機体性能が違い過ぎる事もあるけど経験すら段違いなのよね…。」

キース「うーむ…。齡二十歳過ぎであの才能は我等に取って脅威でもあるがまた、欲しくもあるな。あの者が此方側に着いてくれるだけで我が国の戦局は違つのだらうな…。」

ガイロス「あんな奴がいた所で何も変わんねえよ！」

レオン「初つ端で撃墜された奴が言うかね？」

ガイロス「んだと！？」

シャロン「よしなさいよ！！」

ガイロス「レオンの女は黙ってるよ！！」

シャロン「きゃあ！？」

レオン「ガイロス!!」

キース「よさんか!!」

2人「?!?」

キース「仲間内で争ってどうする!!!!!!」

戒「まったくだな……。」

全員「……なっ!?!?!」

キースがその場で一喝した時…その場にいる筈は無い戒が同意する事にインフィニテーズの全メンバーは驚愕した。

レオン「か、戒!?!なんで此処に!?!」

シャロン「此処は仮にも米軍が借りてるハンガーなのだけど」

戒「ん?禁則事項…ってか?」

シャロン「意味が判らないわ」

レオン「……未来人かよ」

戒「って良くそのネタが判るな!?!」

シャロン「レオン？」

レオン「ん？俺、何か話したのか？」

戒「いや、なんでも無い忘れてくれ。俺も忘れるから。」

シャロン「そ、そうね」

レオン「????」

キース「それにしても直接会うのは初めてですな？インフィニティーズ1のキース・ブレイザーです。」

戒「俺はオーガ1…黒逸戒だ。堅苦しいのは無しで頼むわ。どうも軍人然としたのは性に合わないからな…?」

キース「はあ」

レオン「で、戒は此処に何をしに来たんだ？」

戒「ん？暇だからレオン達の所を覗きに来ただけだが？」

シャロン「普通は暇って理由で来る人いないわよ」

戒「此処にいるが？」

シャロン「もう良いわよ ツツコムのも疲れるし」

レオン「マジで何しに来たんだ？」

戒「ん？まあ、ほんとの事を言えば機体の事で…。」

キース「ラプターの事…ですか？」

戒「その通りだ。あれは俺の所にある奴を除けば確実に上位の性能スペックを誇るだろうが、BETA相手にはあの目眩ましの様な物は不用の物と思えてな？まあ、対人を想定した物ならかなりの脅威にはなるかな？」

キース「確かに奴らに対しては意味が有りますが、将来的には必要になる物と考えてこの措置をして試験に望んでいる訳ですからな。」

戒「そうか…まつ、そもそも俺が口出ししてはいかん事だが…忘れてくれて構わんよ？」

ガイロス「ジャップの意見なんて端から聞かねえよ！！」

シャロン「ガイロス！中将になんて事を言うの！？」

ガイロス「大体その歳で中将つてのがそもそも可笑しいだろ？大方馬鹿な奴らにでも取り入ってその地位を手に入れたんだろが！！」

レオン「ガイロス！！いい加減に…」

戒「聞き捨て成らん…。俺個人に対しての罵倒ならば聞き流したが…俺の国…引いては家族とも言える人達への罵倒はいくら温厚な俺でも許す事が出来んな…。」

ガイロス「だつたらどうするんだ？腰抜けの似非中将がよ！！」

シャロン「ガイロス！？それ以上は駄目よ！？」

戒「一軍人の癖に常識と言う物が判らないと見えるな…。」

ガイロス「なっ！？」

ガイロスが戒に殴りかかるのをシャロンは制止しようとするが、頭に血が上ったガイロスが聞く訳も無く戒に躍り掛かるが…戒は合気道の流れてガイロスの拳を受け流し、その勢いを殺さずに自分の後ろに投げ飛ばし、ガイロスはそれに驚愕する。

戒「さて、まだ終わって無いと言うのにもう寝るのか？」

ガイロス「ぐはっ！？」

キース「も、申し訳ありません！？？ガイロスには嚴重な処罰を与えますのでこの場での事はそれで手打ちにして貰えませんか…？」

戒「この肩が今後一切俺の国や家族の事を罵倒しないと誓えるのならこれ以上傷付ける積もりは無いし、必要性も感じないな…。」

戒は倒れ伏しているガイロスの腹を踏み、ガイロスは苦悶の声を上げるが戒はそれを意に介さず冷徹な声でまだ終わりでは無いと言うが隊長であるキースがその間に割って入り、戒に部下の愚行の謝罪と処罰を与えると約束する事により戒もその怒りの矛を収める事にした。

レオン「戒…その、済まないな 米国軍の一部は他国の事を軽率に見がちな奴が多くてな？」

戒「判っている…誰しもが持ちえる物と判ってはいるがいざ自分の国や仲間の事を罵倒されるとどうも自制が出来ない物だな…？」

レオンの言葉に戒は最初は理解していると言ったが、自身の事を語り苦笑を零した。

レオン「だけど、自分の事じゃなくて仲間の事で怒る事自体普通は珍しいと思うぜ？戒みたいに将官クラスの奴らは無駄にプライドが高いからな…？」

戒「プライドがあつた所で何かか救える訳でもない…それに気付かない奴はただの馬鹿か阿呆だな…。」

レオン「かなりキツイ言い方だな だけど、確かにその通りかも知れないな。結局は戦う俺達や戦術機を修理や調整する整備士…他にも色んな役割を持った奴らがいなきゃ何も変わらないからな。」

戒の言葉にレオンは半ば呆れるが最後には戒同様苦笑しながら話をする。

戒「つと、そろそろ時間か…？」

レオン「何のだ？」

戒「ん？そろそろ次の試験が片付く頃かなってな？」

レオン「もうか!？」

戒「俺達の次はイーニア達のイーダル小隊と亦菲達の暴風小隊の試

「験戦闘だが、多分イーニア達が亦菲の小隊を瞬殺しただろうからな？」

シャロン「何故、そう思うのですか？」

戒の言葉にシャロンは疑問に思ったのかそれを言葉にする。それに戒はこう答える

戒「野生の勘…と言うのでは駄目か…？」

シャロン「勘…って凄い曖昧な答えですね」

戒「確かに曖昧ではあるが、俺は今までその勘で生きてきた訳なんだがな？」

レオン「まるで動物だな」

戒「言ってる。……それじゃ、せいぜい負けない様に頑張れよ？」

シャロンは呆れるが、戒は何でも無い様に言い、レオンも呆れて言う。そして、戒は憎まれ口を言い、身を翻してその場を離れる。

レオン「絶対に負けねえからな！！」

戒「ふっ。」

去り際にレオンの言葉を背に受けて戒は笑みを零した。

第拾仇話（後書き）

作者「第拾仇話完成しました！！」

戒「他の話が夢中で遅くなっただんじゃ無いのか？」

作者「イヤな？他の話は早く出来ていたんだが、震災で会社でトラブって中々M u v - L u vの投稿が出来なかつたんだよ？」

戒「沢山の読者やユーザーの皆様。お待たせしてすいません。M u v - L u vを優先的に更新する様、努力しますので長い目で見て下さると幸いです。」

作者「それは俺のセリフ！？御意見や御感想をお待ちしております

m (_ _) m

第貳拾話（前書き）

最初に、女性キャラの性格がこの話では崩壊気味です。嫌いな方や苦手な方はバックを推奨します。

第貳拾話

ソ連 イーダル試験小隊格納庫外

戒『確か此処等辺りに……』

ラトロワ「ふうー。」

戒『そんな所で煙草を吸っていたのか？』

戒がインフィニテーズ達と別れ、格納庫外でイーダル小隊の面々を探していると格納庫近くの裏手で煙草を吸っているラトロワを見つける。

ラトロワ「ん？戒か……？どうしたの？」

戒『いや、ラトロワ達と話をしようと思ってな？しかし、以外な物を見てしまったな……。ラトロワは煙草を吸うのだな……。』

ラトロワ「まあ……ね。気晴らしと言うか、息抜きみたいな物ね……？」

戒『そうか……。少し隣を失礼する。』

そうやって戒はラトロワが寄りかかっているコンテナの横に座り込んで自身の懐から煙草を取り出して火を付け、一息だけ吸って紫煙を吐き出す。その様子を見たラトロワも意外な物を見る様な目で戒を見ていた。

戒『……なんだ？』

ラトロワ「あ、いや、戒が煙草を吸う所を見るのが初めてだった物だから…。」

戒「俺だって人だからな…？煙草も吸うし、酒だって飲むぞ？」

ラトロワ「そう…、ごめんなさいね？変な目で見てしまった。」

戒「気にするな…と言っても君は気にするんだろうがな（笑）」

ラトロワ「うっ」

戒「はははっ（笑）」

ラトロワ「ゴホン！まあ、なんだな…先日は助かったよ。」

戒「ん？何かしたか…？」

ラトロワ「イーニア達から聞いたよ？戒の所に行った時に周りにいた衛士達に罵倒や侮辱等、一悶着あった事をだ。その時に戒が自分達を庇ってくれた事をな…？」

戒「まあ、確かに…な。彼女達を守ったのもだが、結局は己の自己満足になってしまっただろうがな…。確かに最初は何を喚いているんだと思ったさ、ただな？その後の奴らの行動に頭にきたのは反省はしない…が、あの時にイーニアが止めてなかったら本気でイーニアやクリスカを罵倒した阿呆を殺していたかもしれないよ。その事に関してイーニアにとても感謝している…。彼女達の前で勝手に怒っておいて言うのもなんだがな？」

ラトロワ「戒は何故そこまで怒れるんだ？」

戒「俺はな…ラトロワ、生まれの事や行動の違いで侮蔑などをする奴が許せんだけなんだよ…。生まれや人種等は違うが皆同じ人だと言うのにな…。」

ラトロワ「戒は優しいんだな。」

戒「他の奴にも言われるよ…。だが、俺は優しくは無いよ…ただあるがままに生きてきただけなんだからな？」

ラトロワ「そう言う事は自分自身では判らない事もある。」

戒「そんな物かな？」

ラトロワ「そんな物さ…ほら、あっちから会いに来たみたいだぞ？」

戒「ん…？」

ラトロワが戒とは反対の方を見て言っているのに反応し、コンテナの影から立ち上がって出るイーニアが駆け寄って戒に飛び込む様な形で来た所を受け止めると胸の辺りに軽い衝撃が来た。

戒「イーニア、昨日振りだな…。」

イーニア「うん 戒も昨日振りだね。」

戒「暴風小隊との試験は勝った様だね？」

イーニア「うん イーニアはクリスカと一緒になら負けないよ。」

戒『はは、確かにそうだな…（笑）』

イーニアは戒に抱き止められている状態で身長的にも小柄なので戒を見上げているが花が咲いた様な笑顔で戒と話をする。

クリスカ「イーニア！急に走るなつて…黒逸…か？」

戒『おいおい 俺がそれ以外の何に見えるんだ？』

クリスカ「す、済まん／＼／＼」

戒『まあ、いつか。イーニア、少し離れてくれるか？』

イーニア「なんで？戒はイーニアの事、嫌いなのか？」

戒『そうじゃないよ。煙草の始末をしなきゃいけないからな？』

イーニア「うー？」

イーニアの言葉に苦笑を漏らして抱き止めてる反対の手に持つ火の付いた煙草を軽く上げる。それにイーニアは渋々と言った感じで離れる。

戒『ごめんな？』

それに戒は少しだが罪悪感が湧き、謝罪して手に持った煙草の火を消して携帯用灰皿にねじ込む。

クリスカ「黒逸は何故、此処にいるんだ？」

戒「ん？俺はただ単にイーニアやクリスカ達に会いに来ただけなんだがな？」

イーニア「ほんと！イーニアは嬉しいよ」

クリスカ「ふん！そんな事で来たのならばもう済んだのだから帰れば良いだろ！」

イーニア「クリスカってツンデレ？」

戒、ラトロワ「ブフツ！？」

クリスカ「なっ／＼／＼イーニア！？だ、誰がそんな事を言った！」

イーニア「えつと…ユウヤだよ？」

クリスカ「…そうか、ユウヤ・ブリッジスが…。イーニアは大人しく此処にいてね？」

戒「待て待て？大人しくするのはクリスカの方だぞ？殺気出しすぎて恐すぎだぞ」

クリスカ「は、離せ！私はあの馬鹿を殺りに行かなければいけないんだ！！」

戒「だから落ち着けて…のわあ！？」

クリスカ「ちよっ？きゃあ！？」

暴れるクリスカを後ろから羽交い締めしていた戒であったが、あまりにもクリスカが暴れていたので2人の足がもつれてしまい、倒れてしまった。

戒「だ、大丈夫か…？」

クリスカ「／／／／／（ど、どうしたと言うのだ！？黒逸の顔が近くにあるだけだと言うのに何故こんなにも胸が高鳴るのだ！？それに…イーニアは黒逸とキスを…）」

戒「く、クリスカ？ど、どうし…うむう！？」

クリスカが下にならない様に倒れた戒はクリスカの無事を確認したが当の本人は心此処に在らずの状態であり、その内にクリスカはその状態で戒に顔を近づけ、徐々に距離を詰め、その行動に戒は戸惑い再びクリスカに話し掛けようとする。クリスカはそれを遮る様に戒と唇を重ねた。それに戒はおろか、見ていた2人も様々な反応をする…。

イーニア「あぁー！？」

ラトロワ「……………！？」

戒「……………（クリスカは一体どうしたと言うんだ！？何気に拘束して逃れられない様にして…。と、とりあえずやむを得ないが…）」

クリスカ「……………んう！？」

そして最初はされるが儘であった戒だが途中で周りの事を考えないで何とかする為、クリスカとの軽い口付けを深い物へとシフトして

主導権を自分に変える。それにクリスカは驚き離れ様としたが頭と腰を戒の手と腕でガッチリとホールドしている為逃れられなかった。そして…

クリスカ「んー！」

クリスカは戒の胸を力の無い手で叩く。それに気付いた戒は両腕の拘束を外し、2人の唇を離すとその際に銀色の橋が掛かるがそれも2人の距離が空くとぷつりと切れた。

クリスカ「ハア…ハア…。」

戒「つと」

2人は漸く立ち上がったがクリスカは先程の行為の余韻が残っているのかふらついてしまい、戒はそれを片腕で抱き留める。

戒「だ、大丈夫か？」

クリスカ「だ、誰の所為だと…。」

戒「いきなりして来たのはクリスカだろ？」

クリスカ「う、五月蠅い？そ、それよりも早く離れる？」

戒「まだふらついていたのだから少し落ち着く迄は、このままだな…。それとも…他の抱き抱えての方が良いか？」

クリスカ「うっ　！？…こ、このままで頼む　／／／／／」

戒『了解。(な、なんだ!? クリスカの奴? こんな性格だったか? なんだこの可愛いらしい生物は!?)』

亦菲「……戒? ……何をしているのかしら?」

戒の言葉にクリスカは顔をこれでもかと言う位に赤らめて戒の目線から逃れる様にしていたがそれを間近で直視した本人は平静を装ったが内心は戸惑い、そして悶えてしまっていた。其処にこの場には出来れば来て欲しくは無い人物である崔 亦菲が其処に居た。

戒『い、亦菲? 何故君が此処に?』

亦菲「それを言う前にさっさと離れたらどうなの?」

戒『判った? 判ったからそう睨むな』

クリスカ「////////」

亦菲の威圧的な言葉に戒はとりあえずラトロワにクリスカを任せる形でクリスカと離れるがクリスカは見られた事による物が先程の様に……いや、それ以上に赤くしてラトロワの横に顔を俯かせて座る。

戒『で、ほんとにどうして此処に来たんだ?』

亦菲「さっきの事で話そうと思ったのだけれど、それとは別件でアント達には話が出来たわ。」

イーニア「!？」

クリスカ「……」

ラトロワ「ほう……？」

そう言つて亦菲は戒以外の者達を睨み付け、戒以外の3人は三者三様の反応を見せる。

戒「一体、何だと言うんだ」

亦菲「戒は席を外してくれる？」

戒「ん？何故だ？」

亦菲「い・い・か・ら！それとも実力公使が良いの!!」

戒「あゝもう？判つた、判つた 離れるから暴れるなつて。」

亦菲「そう、判れば良いのよ。」

戒「それじゃあな……。イーニア、また話をしような？ラトロワ、済まん？クリスカを頼むよ。」

ラトロワ「まったく、ウチのエースがこれじゃあ暫くは使いもんにならないだろうが」

戒「まあ、なんだ、ラトロワやイーニア達には今度その埋め合わせをするよ。」

ラトロワ「それじゃあ、その埋め合わせには何か奢って貰おうかしら…?」

戒『はは お手柔らかに頼むよ。…それじゃ。』

そして、戒は格納庫裏から出て行った。

亦菲「さて、と…じゃあ話を始めようかしら? 恋敵同士…ね?」

クリスカ「なっ!?! 私は黒逸とは何も…」

亦菲「あんな事をしておいて言う台詞かしら?」

クリスカ「うっ!?!」

ラトロワ「小娘等に戒の相手が勤まるのかな?」

亦菲「な、なんですってえ!!!」

ラトロワ「何か間違えたか?」

亦菲とラトロワは互いに挑発し、牽制しあっていた。

イーニア「クリスカア?」

クリスカ「ちよっ? イーニア!?!」

イーニア「イーニアだって戒と彼処までしてないのにー?!?! あ、でもクリスカとすれば戒との間接になるかも…」

クリスカ「い、イーニア？お、落ち着いて…ね？」

イーニア「大丈夫。イーニアは冷静だし、落ち着いているよ…？だから、その唇…モライマス。」

クリスカ「イヤアー…？」

イーニア「クリスカニガサナイヨ。」

クリスカ「イーニア？正気に戻ってえー？」

そして、イーニアとクリスカはと言うと、クリスカと戒の深い口付けにイーニアは羨望し、あまつさえ間接的にやるうとしてクリスカに迫るがクリスカはイーニアの妙な威圧感にその場を脱兎の如く逃げ出した。そして、イーニアはそれを追いかけるそして、場の収集が着かなくなっている頃、話題にされている戒はと言うと……。

戒「ふう、さつきから付け回していたのは貴様等か…。」

???「！?!?」

会場から少し離れた荒れ地に戒はクリスカ達の所から付けてきた者達を途中で撒き、この荒れ地に誘い込んだ。

戒「その様子だとあの阿呆の差し金…か。貴様等も衛士の端くれなら、尾行せずに堂々と出てくれば良い物を。何の用があつて付けてきたんだ？」

衛士「！？」

衛士2「!？」

戒「返答は無く、警告無しが発砲…問答無用…と言う事か…。」

戒の質問に何も答えずに衛士と思われる2人はサバイバルナイフとハンドガンを勿論サイレンサー付きの物を構え、2人は発砲をしてくるが、ESPの一方通行を使い、撃たれた弾丸を銃口に反射して破壊する。

戒「手に怪我をしたと言うのに叫び声ひとつ上げぬ…か。訓練された暗殺専門の兵士って所か。」

戒が状況分析をしている間にも逆手に持ったナイフで的確に喉、心臓等即死に繋がる様な所を狙って来るが、それを悉く交わす。

戒「まったく、面倒臭い…破っ…!!」

いい加減、避けるのが面倒臭くなってきた戒は再び接近してきた奴の鳩尾に掌底を叩き込み吹き飛ばし、その際にもう1人に瞬動で背後に周って首の後ろに手刀を入れ、意識を刈り取る。

戒「ふう、さて…と貴様等の雇い主を教えて貰おうか…。」

衛士1「…任務…失敗…可能であればターゲットを巻き込み、自爆します。」

戒「なっ!？」

戒が驚き、その場を離れ様としたが近くで気絶させた筈のもう1人が急に足を掴みそれに気が逸れている間に先程の兵士が手榴弾の様

な物を出して安全ピンを外し懐に飛び込んだ瞬間、辺りは轟音と共に爆煙が舞い上がった。

インフィニテーズ

レオン「なんだ！？今の爆発音は！」

シャロン「レオン！向こうの森の奥から上がっているわ！」

レオン「行くぞ！…何か胸騒ぎがする…。」

キース「わたしも行くぞ。」

イーダル小队

ナスターシャ「な、何！？」

ラトロワ「今のは…爆弾か何かの破裂音か！？」

イーニア「ね、ねえ、クリスカ、あっちって戒が歩いて行った方角じゃないかな？」

イーニアはクリスカの軍服の裾を掴み、微かに震える体でクリスカに問い掛ける。まるで信じたく無いと言わんばかりの目をして。

クリスカ「た、確かにあつちに戒は向かって行った…急いで向かうぞ！…杞憂であれば良いが…。（戒…イーニアだけでは無くこの私にも心配を掛けるなよ…！）」

アルゴス小队

ユウヤ「おい！今のは何だ！？」

タリサ「何かが発射した音だろ！？それ位わかんねえのか！！」

ヴァレリオ「向こうはソ連の奴らのいる方角だぜ？何が起きたってんだよ！？」

唯依「全員いるか！？」

ユウヤ「篁中佐！？」

タリサ「一体何があつたんだ？」

唯依「それは判らないが、第二種警戒態勢が敷かれた！我々は直ちに現地に向かい状況の確認をする！」

全員「了解！！」

唯依「（戒…貴方は何処にいるのですか…。）」

アルゴス小隊に指示を出して駆け出した中で唯依は1人、胸が締め付けられる思いを拳を胸の辺りで握り締めて耐えていた。

暴風小隊

亦菲「私達も行くわよ！」

衛士A「し、しかし、隊長、我々には待機命令が…」

亦菲「なら、アンタ達だけ待機してなさい！私は1人で行くわ！
妙な胸騒ぎがしてならない…何が起きてるって言うのよ！！」

衛士B「た、隊長おー！？」

そして、一同は森の奥に集い何を見るのか？そして、戒の安否は一体……。

第貳拾話（後書き）

作者「第貳拾話完成！いや、皆さん良い具合に壊れてたかな？」

戒「何故俺が行くだけであなるんだよ」

作者「それが判らないのであるのは本人だけか？あの女性陣達は苦
勞するな？」

戒「一体何の話だ？其れよりも！ラストのアレは何だ！？俺は彼処
で爆死か！？」

作者「な訳無いよ？勿論あの後の事も考えているよ？最初にどの隊
が来るかはまだただけどね？」

戒「どうするんだ？」

作者「それはね…アンケートで決めたいと思います！……！」

戒「はい？」

作者「アルゴス、イーダル、暴風、インフィニテーズのどの小隊が
先に見つけて欲しいかご要望があれば感想かメッセージをどうぞ。
勿論、その際に何かやって欲しい事があればそれも添えて貰えれば
可能な限り書きますのでお待ちしております。m（）（）m」

戒「俺の今後はどうなるんだ」

作者「大丈夫！今後も（恋する乙女が）増えるから？」

戒『副音声に何か良からぬ物が入っていたぞ!?!』

作者「それでは次回は第弐拾壹話でお会いしましょうm」
「m」

戒『勝手に締められた!?!』

30万hit達成記念アンケート

作者「イエーイ」

戒「何を騒いでいるんだこの馬鹿は」

ラクス「どうやらアクセス数が30万を超えたようで、それに狂喜乱舞しているみたいですよわね？」

効「騒がしいだけだな…。」

8「そういうテーマも内心は嬉しいんだろうがよ!」

効「まあ、そうだな。ただ彼処まではしゃがなくとも良いと思うのだがな？」

アル「まあ、この作品も友達から借りてプレイして面白いと言って執筆するのは良いけど途中途中で原作の知識が飛び飛びなのは頂けませんね？」

作者「だあー!さつきから俺のガラスのハートを何回砕けば気が済むんだ!?嬉しいんだから仕方無いだろ？」

戒「はあ」

ラクス「それではそろそろ、30万hit達成記念のアンケートを取りたいのですが前は煌武院悠陽さんでその前が篁唯依さんでしたわね?同じ人との絡みや他のキャラでの絡み、若しくは一時の休息等大まかな事感想板やメッセージ等に送って下さいな」

効「君達の依頼を待っている。」

戒「その後には確実に俺の精神的ライフがレッドラインギリギリだ
けどな？」

作者「それでは、ユーザー様、そして沢山の読者の皆様御意見や御
要望をお待ちしておりますm（）（）m

第貳拾壹話（前書き）

大分遅くなりましたが、第貳拾壹話完成しました。誤字、脱字がありましたらご報告下さい。

第貳拾壹話

戒が関わった部隊の者達が戒の下に向かっている時、本人たる戒は
……

戒 side

戒『参ったな…、さっきので肋骨は何本いったか判らん…。人が相手だからと試練を閉じていたのが仇になってしまったか…。再生はしないから人が来るのを待つか。先程の爆発はかなりの物だから誰か来るだろうな…。』

戒は爆心地とも言える場所から少し離れた場所で倒木に座り込む形で服は所々破け、右腕も肩から無く、夥しい量の出血をしており、ボロボロの状態であった。

戒『フウ…それにし…ても、奴はよほど…俺を…殺した…いのだろ…うな…。やはり、イーニア達に何か…しらの影響が強く計画に支…障が出ると判断した…か？』

戒は懐から無事であった煙草を片手で出し、発火能力で火を付けてから紫煙を吐き出し、自身の憶測を口に出した。

戒『この状況をアイツ等が見たら何を言うかな…？多分だが怒るかな…。』

戒はそう言って苦笑した。すると上空を戦術機特有のエンジン音が聞こえ、上を見上げると其処には不知火式型と見られる機影が飛んでくるのが僅かにだが確認出来た。

戒「アレは…ユウヤ…か？…ヤバいな視界が少しボヤケて来た…血を流しすぎたか…。」

戒は尚も近付く不知火式型を見ながら自身の状態を冷静に分析していた。

戒 side out

ユウヤ side

ユウヤ「皆！戒を見つけたぞ！」

ユウヤは戦術機から望遠を使い倒木に座り込む戒を発見し、それを後ろから来ているタリサ達に通信で知らせる…

タリサ「戒は無事なのか！」

ユウヤ「まだ確認していない…今から降下して確認をする！（戒…無事でいてくれ！）」

ユウヤ side out

ヴァリレオ「おい！待てよって切りやがったよ」

タリサ「アタシ等も行くぞ…！」

ヴァリレオ「ああ、わかった！」

そして……

ユウヤ「大丈夫か…か、戒！う、腕が！？」

戒「よお…ど…うした、驚い…た顔…をして…。」

ユウヤは不知火式型から降りて、近付くと戒の余りにも酷い状態を目にして驚愕し、叫ぶ。そして戒は息も絶え絶えと言った状態にありながらも普通に話そうとするが血を流しすぎた所為か途切れ途切れに話す。

タリサ「ユウヤ！どうし…戒！？ヴァリレオ！！直ぐに衛生兵を！？」

ヴァリレオ「こんな所に衛生兵を呼んだ所で時間が掛かるだけだ…出血量からしてもヤバいから近くにあるソ連側の病院に搬送するぞ。」

戒「…誰かアツ…プルを持…っていない…いか？」

ヴァリレオ「一応、俺が持っているが何に使うんだ？」

戒「良いから、少し離れて…いる。」

そして、ヴァリレオから手榴弾を受け取り、戒はふらつきながらも立ち上がり、ピンを外し投げた、そして、自身の肩口の傷を手榴弾を投げた方向に向けた。そして…

戒「つ…つ…つ…！？」

手榴弾の爆発が届くギリギリの所で戒は傷口をその爆炎で焼き、口から血が出る程噛み締めて激痛による声を殺す。その様を見ていた面々は戒の行動に驚愕した。

タリサ「戒何をしてるんだよ!？」

戒「何っ…て傷口を焼いて…止血…をした…だけだ。」

ヴアリレオ「とんでもないやり方だぜ？」

戒「しかし…これ以外には肩口の傷を止血する…方法を思い付か…
…なかったからな。」

タリサ「ちよっ?それ以上は喋るなよ!?意識朦朧としてるじゃねえか?」

戒「まあ…な。確かに現在進行形でヤバいからな。朦朧と言っかな…視界がボヤケて来ている…な。」

ユウヤ「と、兎に角!病院に急いで連れて行った方が良いだろ!!」

ヴアリレオ「そ、そうだな?」

かくしてユウヤ達は不知火式型のマニピレーターに戒を包む様にして病院に急いだ。そして……

唯依「戒は…戒は大丈夫なの!？」

タリサ「ちよ?中尉、落ち着いて!？」

ヴアリレオ「今、戒が手術室に入った所なんですから落ち着いて下さい?」

戒がソ連側の病院に收容されて手術室に入って少ししてから、唯依

が来たが取り乱しており、タリサとヴァリレオが慌てて諫めていた。そして、そんな所へイーニアを除いたイーダル小隊のメンツがタリサ達が来た廊下から現れた。

ラトロワ「戒の容態は？」

ユウヤ「今さつき入ったばかりだから俺達にも判らない…けど俺達が戒を見つけた時、アイツ片腕を無くしてた。」

クリスカ「なっ！？ほんとなのかそれは!？」

ヴァリレオ「ほんとだよ…。しかも止血とか言って無茶をしたから何とも言えないよ…。」

ラトロワ「…どんな無茶をしたんだ？」

タリサ「信じらんねえかも知んねえけど手榴弾を使って傷口を爆炎で焼いたんだよ。」

2人「手榴弾で!？」

2人が驚愕するのも無理は無い普通の人間ならば手榴弾を使って傷口を焼くなんて常軌を逸した事をせずに布などを使って止血をするからである。

ヴァリレオ「まあ、驚くのも無理ねえよ 実際に目の前でやられた俺達ですら驚いたからな」

ユウヤ「…そう言えば、イーニアは？」

クリスカ「今の状態の戒と合わせられる訳に行かないだろ？」

ユウヤ「…確かにな…。」

ヴァリレオが呆れながら話をしてから、ユウヤとクリスカがその後
に少しだけだが話をして、全員が手術室の前で各々で待つ事数時間
…手術室のランプが消えた。そして…

”ガラガラガラガラ”

唯依「戒は大丈夫なんですか!」

医者「落ち着いて下さい。とりあえずは一命は取り留めました。そ
れにしてもあそこまでの傷口を爆発で焼くなんて医者から言わ
せたらとんでもない無茶ですよ…。」

ヴァリレオ「確かにな」

医者「一命は取り留めましたが…誠に言いにくいのですが…衛士と
しては残念ながら…。」

唯依「そ、そんな!?!」

タリサ「あなたは医者なんだろ!?!戒は腕を無くしちまったんだ!
治すとか何とかならねえのかよ!」

医者「残念ですが、今の我々の医療技術ではどうしようもないので
す…。」

ユウヤ「なんだよ…なんなんだよ!?!これは!?!なんで戒がこんな
事になるんだよ!?!」

ヴァリレオ「クソツタレが!!」

クリスカ「そんな事って!?!」

ラトロワ「戒が…そんな事って…!!」

医者 of 言葉に掴み掛かっていたタリサや他の者達も絶望した。自分達を気に掛け心配して、時には冗談を交え一緒にいた上官にして仲間である戒が衛士として続けられないと告げられてしまったからである。そして、戒が手術室から移された病室に一同は集まる。

戒『……………』

ユウヤ「今は眠っているみたいだな…。」

クリスカ「…わたしには何も出来ないのか…。わたしやイーニアを守ってくれた…戒に何一つ…!!出来る事ならこの腕をやりたい!!けど…無理…なんでしょうね…。」

タリサ「なんでだよ!?!誰だよ!戒を…戒をこんなにした奴は!見つけ出して八つ裂きにしてやる!!」

ヴァリレオ「落ち着けタリサ…。」

タリサ「ヴァリレオ!テメエは悔しく無いのかよ!!」

ステラ「止めなさい、タリサ。皆、悔しいに決まっていますでしょう…!!」

タリサ「……ゴメン。」

ラトロワ「とりあえず、今は全員戻った方が良いわね…？戒は麻酔が効いているから明日にでもなれば目を覚ますと医者も言っていたからね…。」

ラトロワの言葉にその場にいた全員は渋々ながらも戒の病室から退出する。

そして……その日の夜…。

???「我らの主は大丈夫なのか？ウンディーネ…。」

ウンディーネ「わたし達の契約者たるこの方がそう簡単に死ぬ訳はないわ。セルシウス、今はわたし達の力を戒の傷を癒やす為に使い目を覚ますのを待つのです。」

病院の深夜勤務の者達以外が寝静まった中、戒の病室内には水で構成された身体を持った女性と蒼のセミロングに武闘家の様な服装の少女の様な人が戒が眠るベッドの左右に立ち、話をしていた。

セルシウス「やはり、どの世界の人間も非道い物なのか…。自分に都合が悪い事が起こればそれを行う者を消すなど…。私は主以外の人間は嫌いだ…。」

ウンディーネ「それでも、戒は救える者ならば例え悪人であろうと助けるでしょうね…。戒は優しすぎるのですから…。」

戒『……俺は優しくは無いよ……ウンディーネ……』

セルシウス「主！気が付いていたのか！？」

戒『ついさっきに……な。それにしても、お前達がこの世界で現界出来るとは思わなかったな……。』

ウンディーネ「確かに普通ならばわたし達は自身の特徴たる物かもしくは住処にしている所では長く現界は出来ませんが、貴方の強大な魔力があつて、わたし達は初めて長時間の現界が出来るのですよ？知らなかったのですか？」

セルシウス「主よ、気付いていなかったのか？」

戒『すまん。まったく知らなかった』

ウンディーネ「そうなのですか」

セルシウス「主でも知らぬ事があるのだな？」

戒『俺とて全てが判っている訳ではないさ……。』

ウンディーネ「戒が目覚めたのでわたし達はそろそろ戻りますね？」

セルシウス「私はもう少し主といたいのだが……／＼／＼」

ウンディーネ「セルシウス？戒を困らせてはいけませんよ（黒笑）」

セルシウス「し、しかしだな？ウンディーネ、主は片腕が無いのだ。身の回りの世話をする者が……」

ウンディーネ「セルシウス…？」

セルシウス「さあ戻ろう、すぐ戻ろう？」

ウンディーネ「それでは、戒、また何かありましたらわたし達をお呼び下さいね？わたし達は戒の精霊なので…。」

若干暴走気味のセルシウスをウンディーネが収めて、セルシウスは水色にウンディーネは蒼色の玉の様な物に姿を変え、戒の身体の中に入っていた。

戒「片腕が無い…か。明日にでもラクスに連絡を取ってアレを持って来させるかな…いや、先にアイツ等になんて話すかな？唯依やイーニア達は心配していたようだしな…。」

戒は病室の窓から見える夜の街を見ながらそう零した。

黒逸 戒執務室

ラクス「それでは、効、よろしく願いしますわね？」

効「了解した。明日にでも其方に向かう…。新しく来た者も紹介しないとだから、同行させる。」

ラクス「判りましたわ。では、例の件をお願いしますわね。」

効「それじゃあな…。」

効の執務室にてラクスは本国にいる効の所へと通信をしていた様で何かを頼んでいた。

ラクス「戒様……。必ず貴方の腕を治してあげますから待っていて下さい。」

ラクスは机の上に飾ってある皆で写って微かに笑った戒の写真を見ながら決意の籠もった瞳で見ている。

第貳拾壹話（後書き）

作者「いや〜何とか完成したね〜？」

戒「おい！作者？」

作者「な、何かな？？」

戒「チート設定にして置いて片腕損失ってどういう事だ！」

作者「いやね？そのままで行ったら詰まらないかなってな？」

戒「それで片腕無くすのもどうかと思うがな？」

作者「落ち着けて？ちゃんと其処の辺りはちゃんと考えているからね？」

戒「………どうするんだ？もし………しょうもない事であれば貴様の命を………消す。」

作者「大丈夫だった？話の最後でラクスが既に手回しの方をしていただろ？」

戒「そうか……。」

作者「これ以上はネタバレに繋がりそうなので、ここら辺りで………次は第貳拾貳話で」

戒「これからもよろしくお願いします。」

第貳拾貳話（前書き）

色々と忙しく、2週間振りの投稿です？今回の話ではガンパレのメンバーとテイルズあのキャラが出ますが性格の程は作者の捏造が入っていますが、嫌いな方はバツクをお願いします。

第貳拾貳話

「戒が入院した次の日」

戒「あゝ暇だな〜。」

唯依「あ、貴方と言う人はわたし達がどれだけ心配したと……？」

戒「すまん、すまん（笑）しかしな…暇と言う以外にやる事が無いし、此処では仕事もさせてくれないからな〜？」

唯依「当たり前ですよ！仮にも貴方は重傷の身なんですから仕事などさせられませんし、わたし自身がさせません！」

戒が上だけを起こして唯依に仕事が無く暇だと言うと唯依は肩をツナワナと震わせており、戒はおどけ、唯依は身を乗り出して当たり前とだ言う。

戒「しかしな？片腕が無い位で仕事が出来ない訳じゃ無いぞ？片手でも出来る仕事はそれなりにある訳だしな…？」

唯依「貴方はいつもそうやって無理をして…。」

戒「それよりも、通信端末を持って無いか？少しラクスに連絡を取りたいんだが…。」

ラクス「その必要はありませんわ。」

唯依「えっ!？」

戒『お前は気配を消して何をしていた?』

戒がラクスに連絡を取ろうと唯依に話していると開いている病室の入り口からラクスが入ってきてそれを遮る。唯依は急に入ってきて来たラクスに驚愕し、戒は気配を消して入ってきていた事に呆れていた。

ラクス「その方が面白いと思ったのですが?」

戒『ハア〜?まあ、いい…ラクス、俺の腕の事で… ラクス「問題ありませんわ。効に連絡をして、技師の人と一緒に此方に向かっていますので…。」…仕事が早すぎないか?』

ラクス「戒の怪我は聞いておりましたので…用意は早い方が良いと思いますして。」

戒『いや、助かるよ。で、いつ頃になる?』

ラクス「昨日の夜に高速艇で来る様に手配をしておりましたので、昼過ぎには到着すると思いますわ。」

唯依「そんなに早く来れる物があるのですか?そもそも、そんな早く来れる物では搭乗者にはとてつもない負担が掛かるのではないのでわ?」

ラクス「其処は問題ありませんわ。戒が設計していた物で重力制御等で搭乗者への負担は限り無く0に近い物になっておりますのですが、その反面で機体の運搬には不向きな小型の物になっていきますが…。」

戒「まあ、たしかに機体の運搬を前提には考えていない作りだが、戦術機1機位ならばかろうじてのるが、基本的には武器や弾薬に資材等の運搬を迅速に行う事で設計、開発をした訳だからな…?」

唯依「そんな物で一体何を持って来るのですか?」

ラクス「戒の義手ですわ。」

唯依「しかし、義手では日常生活位の補助にしか成らないのでわ?」

ラクス「心配はありませんわ。戒の義手なのですから、戦闘をしても何の問題も無い物になっておりますわ。」

戒「そもそもアレは俺が設計したのだからな?」

唯依「いつ頃に?」

戒「此方に来るのが決まって直ぐにかな?様々な国がいるから念には念をと思つて両腕を作つて置いたがまさか片方だけが、ほんとに使う羽目になるとは思わなかつたがな?」

唯依「戒…貴方はこうなる事が判つていたのですか!?」

戒「いや、判つていなかったさ…。だがな、いつ何時何が起こるか判らないから…保険の様な物だつたがな?」

唯依は戒が自身に起こりうる事が判つていた様な行動をしていた事に驚愕するが、戒はそれは無いとおどけて答える。

戒『……そろそろ唯依は戻った方が良さだろう？仕事もある訳だしな？』

唯依「そうですね……」

戒『俺の事なら心配無い……唯依がまた来る頃には義手が着いているからな……？』

唯依「……判りました。それではまた来ますね？ラクスさん……くれぐれも戒には仕事をさせないで下さいね？」

ラクス「心配しなくても大丈夫ですわ　もとよりこの状態の戒にさせる物は全て片付けて置きましたので、義手が来る迄の戒の仕事は存在しませんからね」

戒『そう言われるとなんか複雑な心境なんだが？』

唯依「それを聞いて安心しました。それでは。」

ラクスに戒の目付役を頼み、唯依は戒の病室を後にする。

黒逸　戒病室前

唯依「さて、わたしも自分の仕事をしつかりと……」

イーニア「クリスカ？早く早く？」

クリスカ「待ちなさい、イーニア？そんなに急がなくても……」

唯依が戒の病室から出ると小柄な少女と前に会った事のあるクリス

力は唯依の存在にいち早く気付いた。

クリスカ「お前は…？」

唯依「また会ったなビャーチエノワ少尉？わたしは唯依…篁唯依中尉だ。」

イーニア「クリスカの知り合いなの？イーニアはイーニア・シエスチナだよ よろしくね？唯依」

唯依「……この子はビャーチエノワ少尉の妹か？」

クリスカ「……お前には関係ないだろう？それよりもわたし達は戒に用があるんだ。さつさへ行かせて貰うぞ…。」

唯依「確かにわたしには関係ないのかも知れないが、准将の所に行く事については聞かせて貰うぞ？」

クリスカ「ただの見舞いだ。イーニアは戒に会いたいと言っているから一緒に来ているだけだ。」

唯依「……理由はそれだけか？」

クリスカ「他に何の理由がある？」

イーニア「……」

唯依とクリスカの不穏な空気にイーニアは両者の顔をキョロキョロと首を動かして不安な顔で見る。

戒『まったく、人の病室前で騒ぐ阿呆は誰かと思っただらお前等か？』

イーニア「戒！」

戒『おっと！どうしたイーニア？』

イーニアは戒がいた事に気付くと直ぐ様戒に近づき抱きつく。それに対して、抱きつかれた戒は左手でイーニアの頭を優しく撫でて、イーニアに問いかける。

イーニア「イーニアね？戒が怪我したから心配してお見舞いに来たんだよ？」

戒『そうか。心配してくれてありがとな？イーニア』

イーニア「えへへ／＼／＼」

クリスカ「もう動いて大丈夫なのか？」

戒『まあな。動く分にはなんの支障も無いが、流石に仕事をやるとなると片腕だけじゃ厳しいがな？』

クリスカ「……濟まない。」

戒『？…何故クリスカが謝る？』

戒がおどけて言うところクリスカは俯きながら謝罪する。が戒はそれに疑問を抱く。

クリスカ「わたし達の直ぐ近くにいたと言うのに直ぐに駆けつけて

やれずにだ……。わたし達の事を守ってくれたのに戒の事を守ってやれなかった…。そんな自分が許せずにいる……」

戒「そんな顔をするな。俺は生きてるんだ……。それで充分だろう？それに昼には俺の左腕の代わりが届くから心配せずともすぐにでも戦場に戻ってやるさ。」

唯依「だから貴方はどれだけ心配を掛ければ済むんですか！義手を着けたがらと言ってすぐに戻るなんて許可出来ませんよ！？」

クリスカ「ソイツの言う通りだ……。暫くは安静にして欲しいね。聞きそくに無いが……？」

戒「ハア〜。俺ってばそんなにも信用無いか？」

唯、ク「無茶をするからだ（です）。」「」

戒「判った判った？これからは無茶は出来るだけしないから……約束するよ？」

唯依「それなら良いです。」

クリスカ「約束を違えるなよ？」

イーニア「戒は療養だね。」

戒「そうだな……。暫くは大人しくしているよ。」

クリスカ「そうか……。それにしても戒を襲った奴らは何者なんだ？見つけたら殺してやらないと気が済まないな……。」

戒『それに関しては既に終わっているよ?』

唯依「どう言う事ですか?」

戒『全員と言うか、2人だけだったが自爆してくれちまったからクリスカの殺すと言う行動は出来ないぞ?』

唯、ク「自爆!?!」

戒『暗殺者としては基本中の基本だが、相手に情報を与えない為なんだが、奴らはそれに伴って俺を道連れにしようとした様だが、存外に俺の悪運が強かったのかな?片腕損失と肋骨数本程度の怪我で済んだがな?』

クリスカ「と言う事は黒幕の事についてはなにも判らず終いか…。」

戒『まあ、そうなるな。(済まん。いずれクリスカ達にも矛先が向かいかねないから犯人がイエーガーの糞野郎だと言う事を教えるのは得策では無いから教える事は出来ない。) 済まないな。』

クリスカ「いや、謝る事では無いだろ?」

戒『そう…だな。そうだ、唯依は時間の方は大丈夫なのか?』

唯依「え?…!?!?」

唯依は戒に時間の事を言われ、壁に掛かっている時計を確認すると少し焦った顔をする。

戒「？…大丈夫か」

唯依「あ…はい！それじゃあ、わたしはこれで行きますね!？」

戒「つと！大丈夫か？」

唯依「す、すみません／＼／＼」

唯依が急ごうとしてけつまづいた所を戒は一瞬で唯依の傍に移動し片腕で抱き上げる。

戒「まったく、唯依は焦りすぎだぞ？もう少しゆとりを持ってだな
……」

クリスカ「……いつまでその体勢でいるつもりだ？」

唯依「あ！すみません！そ、それでは／＼／＼!！」

片腕で抱き留められた状態で戒と唯依が話をしているとクリスカが他人には判らないが不機嫌な空気を纏っていた。

戒「まったく。どうしたんだ？クリスカは？」

イーニア「戒、怪我は大丈夫？」

戒「大丈夫だよ そうだ！2人は飯はまだだよな？」

クリスカ「あ、ああ。戒の見舞いが終わってから取ろうと思っていたのだがな？」

戒『なら、これから病院の食堂に行こうか？入院してる時の病院食は不味くてな』

クリスカ『そ、そうか？』

イーニア『戒とご飯』

戒『そんなに引つ張るなって 急がなくても飯は逃げないぞ』

そして3人で食堂に向かうと片腕しか使えない戒の代わりにクリスカがトレイを2つ持って来てくれた。

戒『済まんな？』

クリスカ『こういう時は感謝して欲しいわね？』

戒『…確かにそうだな。有難う、クリスカ（笑）』

クリスカ『ええ／＼／＼』

イーニア『むう〜？』

戒『ん？どうしたイーニア？』

イーニア『何でもない？』

戒『そんな拗ねた顔して何でもない訳が無いだろうが ほらこっち来い。』

イーニア『ひゃっ!?!?』

拗ねたイーニアを戒は一旦、箸を置き片手でイーニアを抱き上げて自分の膝に乗せる。

戒『ほら、これで機嫌を直してくれないか？』

イーニア「うん！」

クリスカ「……羨ましいな。」

戒『クリスカ…？』

クリスカ「あ、いや何でもない／＼／＼」

戒『そうか？なら良いのだが……。』

イーニアが戒の膝の上に座り嬉しそうにしているとクリスカが複雑な顔をしていると戒が不思議そうに聞くとクリスカは顔を赤くし何でも無いと話す。そんな中食事の方はつつがなく済み3人は病室に戻る為に廊下を歩いて談笑をしていた。

戒『今日はありがとな？入院生活は暇な物でな？楽しかったぜ』

クリスカ「そう言って貰えると来た甲斐があつたわね？」

イーニア「戒が笑つてるとイーニアも嬉しいよ。」

戒『そつか。俺はイーニア達が笑顔で嬉しいよ 勿論、クリスカもだからな？』

クリスカ「ふ、ふん／＼／＼／」

イーニア「クリスカ顔が真っ赤」

クリスカ「い、イーニア？何を言ってるの？」

ラクス「戻って来ましたね？」

戒「おっ？ラクスどうした？もうアイツ等着いたのか？」

ラクス「すでに機材等を部屋に運び終わり後は戒を待つだけだったんですよ？」

戒「そうか、済まなかったな。で技師は誰が来てるんだ？」

原「あたしだ。」

森「私もいますよ。」

戒「なっ！？お前等はその時の…」

ラクスの報告に戒が聞こうとすると部屋から出て来た技士は戒が、3年前の戦場で会った原素子と森精華であった。

効「義手等も扱える為に最初は1人を連れて来る筈だったんだが、助手をつけないと行かないと言うのでな？」

戒「なる程な…だから3人もいた訳か…。」

原「そう言う事だ さっさと作業に入るぞ！森は準備をしろよ！」

森「了解です」

原の言葉に森は病室に再び入る。

原「さて、戒准将…じゃなかった、戒は左肩に義手を着ける為の機械を取り付けるからな？痛むけど男なんだから大丈夫だよな？」

戒「当たり前だ…。」

原「よし！この医師にはもう話をつけてあるからそろそろ来る筈だよ。」

そして原が話をしていると…

医師「黒逸准将、私が今回貴方の手術を担当します。よろしく願いします。」

戒の後ろからスーツの上から白衣を来た男性が歩いて来た。

戒「ああ、此方こそよろしく頼む。」

ラクス「それでは戒わたくしは基地に戻りますが、くれぐれも他の方に迷惑を掛けないで下さいな？」

戒「判つたるつて。ラクス、俺が戻るまでの間の仕事は急がしいと思うが例の件も含め、頼むな？」

ラクス「はい 任せて下さい」

ラクスは戒にそう言っただけで病室から退室して行った。

戒「それじゃあ、クリスカにイーニアちょっと行って来るよ。」

イーニア「うん」

クリスカ「絶対に成功する…よね？」

戒「義手に関しては俺自身が設計と開発をしたんだ…大丈夫に決まってるだろう？」

クリスカ「それもそうね…。ごめんなさい、変な事を聞いてしまっ
て。」

戒「いや、気に掛けてくれているのだから嬉しく思うよ（笑）」

クリスカ「／／／／／／／／／／（急に笑顔を見せるから自分でも判
位に顔が赤くなっちゃうじゃない!?!）」

戒「それじゃ、イーニア行って来るな？」

イーニア「うん！行ってらっしゃい」

そして、戒が医師に連れられて病室を後にして少し経ち……

効「君達が戒の言っていたクリスカとイーニアか？」

クリスカ「お前は誰だ…？」

イーニア「……………」

廊下に残ったクリスカとイーニアは効が自分達の名前を知っている事に不信に思ったのか警戒の色を示し、クリスカは効と距離を少し空け、イーニアはクリスカの後ろに隠れていた。

効「……話を聞いていて判るだろうが、改めて自己紹介をしよう。俺は叢雲効だ。階級は中佐になるな。」

クリスカ「貴様は戒と親しい様だがどういった関係だ？」

効「俺は戒の部下であり、協力者でもある。」

クリスカ「協力者…なんのだ？」

効「それは俺から言う事では無い。戒…アイツが話す事だし、話していないと言うのならまだ時期では無いと言う事だな…。」

クリスカ「時期…？話す？一体なんの事だ！」

効「俺からはなにも言う事は無い。アイツ自身が話す事だ…。」

クリスカ「くっ！！」

森「叢雲中佐、此方の準備が終わりましたので確認をお願いします。」

「

効「わかった。……気になるのは仕方ない事だが、今の君達ではどうしようも無い事には変わりはない。まずは目先の事を片付ける事よりも現在いまやるべき事を片付ける事を俺は薦める……。」

そう言つて効は戒の病室に入つて行つた。

クリスカ「現在いまやるべき事……か。」

イーニア「クリスカ……？」

クリスカ「イーニア、戻ろう。」

イーニア「うん。」

クリスカとイーニアは戒が戻ってくるのを待たずに病室を後にした。そして……

戒「今戻つたぞ……つてイーニア達は？」

効「彼女達ならば自分達のやるべき事をやりに行つたよ……。」

戒「そうか。なら、俺もさっさと復帰しないとだな……。原に森、頼むぞ？」

2人「了解！！」

そして戒は自分のベッドに横になり、義手を着ける為の準備を済ませた。

原「戒、義手の神経系の接続をするけどその際に激痛が来ると思っ
けど大丈夫か？」

戒「問題ない…やってくれ。」

原「それでこそ男だね……森！」

森「はい！カウント行きますよ？3…2…1…0！！」

戒「グツツ~~~~！！？」

戒は神経系を繋げた瞬間の激痛に最初の堪える声の後は歯を食いし
ばり耐えていた。

原「……大丈夫か？」

戒「ハアハア…なん…とかな。それにしても義手と言うのはなんと
も違和感のある物だな…。」

森「馴染むにはそれなりの時間が必要だから当たり前ですよ？そ
れに着けたばかりですので日常生活に支障が無い様になりハビリも必
要です。」

戒「うーん、面倒臭いな…。」

原「我慢しなさい。義手と言うのは着けた人の代わりの手足になる
のだから当たり前でしょう？いくら神経系を繋いで自分の腕と寸分
違わずと言う訳じゃ無いからね？」

効「ここは専門家の言う事を大人しく聞いて置いた方が良策だろ？」

戒『リハビリ…か。』

効「それじゃあ、俺と原は戻るが、森を監視でつけるが文句は無いよな？」

森「ええ!？」

戒『……文句は無いが何故彼女なんだ?』

原「そこは言ったら野暮って物よ?」

森「//////////」

戒『マジで判らん』

効「まあ…そう言う事だ。頼むぞ森少尉。」

森「あつ!り、了解です!！」

俺がまったく判らず、考え事をしているのを余所に効と原が機材をさっさと片付ける傍らで森は終始耳まで赤くして俯いていた。

効「それじゃあ、俺達は戻るが退院したとしてもあまり無理はするなよ?お姫様が更に心配をするからな?」

戒『悠陽の事を上げられたら断れない事がわかってて言ってるだろ?』

効「当たり前だ。此方に来る過程でお姫様達の耳に入った時には卒倒して目を覚ました途端に此方に行くと言いだした位だからな？…帰ったらとりあえずは覚悟しといた方が良さだろうな（笑）」

戒の抱く悠陽への大恩の事を踏まえて効が釘を刺し、戒はイヤミにも聞こえる効の言葉に半目で睨む。そんな戒の睨みでも効は何処吹く風と言った感じで更に追い打ちを掛けてきた。

戒「……帰るのが鬱だ」

原「なんと言うか、まあ、なんだ？色々大変だけど頑張ってるな」

戒が頭を抱え呟くとその様を見ていた原は冷や汗を流すがとりあえずは戒を励ました。

効「それにしても機械義手…か。」

戒「光学兵器でも耐えられる強度にしたからな？後は魔力とかで形状を変化させる事も可能だな…。」

効「どこぞの豆よろしくな腕になってるな…。」

戒「だが、イカすだろ（笑）」

効「ふっ…。」

戒の着けた義手は鋼の錬金術師の技術で作られていたが其処に戒自身も改良とアレンジをする事によりその世界の技術で作ったにも関わらず義手の役割を超えた物に仕上がっていた。

効「それじゃあな……。くれぐれも無茶だけはするなよ?」

戒『ああ、わかってる。ほんとに助かったよ。』

原「それじゃ、森…頑張れよ(笑)」

森「は、原さん?」

効と原はそう言っつて病室を後にした。

戒『さて…と、森…名字だと違和感があるな…。精華、俺の荷物はどこにある?』

森「あ、待って下さい／＼／＼/?(戒さんに名前で読んでもらえた／＼／＼)」

戒が名字だと違和感があると言い、名前で呼ぶと森：精華は顔を赤らめながらベッドの脇に置かれた戒の少し大きめの軍用の鞆を持ち、戒の膝の上にあげる。

戒『うーん……おっ!あつたあつた』

膝に置かれた鞆を開け、まだ馴れない左腕も使い目当ての物を出した。それはボトルシップの様な物だが中には建物の様な物が入っていた。勿論これは戒の能力で作った物でネギま!?の別荘であった。

精華「凄いですね!瓶の中にお城が入ってます!こんな所に住めたら良いですよね」

戒『なら、入ってみるか？』

精華「え？」

戒『人除けの結界を張ったし、しばらくの間は人が来る心配は無いな…。精華、コレに触ってみな。』

精華「え？は、はい！」

そう言われて精華はボトルシップではなく別荘に入ったダイヤモンド魔法球を触ると足下に陣が現れてその場から消えた。

精華「此处は何処……！？」

精華は陣が発した眩い光により目を瞑っていたが光が収まっている事がわかりそつと閉じていた目を開けた。次の瞬間、絶叫した。

精華「え！？さっきまでわたし病院にいた筈だよね！？なんでいきなり西洋のお城が見える所にいるの！？しかも一本道が細いし、手すりも無いよ！？戒さんも居ないよ……！？」

戒『驚き過ぎだ。俺の行動について来るなら驚いてる暇は無いぞ？』

精華「か、戒さん！一体此处は何処なんですか！？わたし達は病院にいた筈ですよ？！」

戒『あゝ 先ずは落ち着け』

精華「あ！す、すみません／＼／＼／＼」

戒「まず、現状を説明するか…此処はダイオマラ魔法球、精華はポトルシップって言った物の中だ。」

精華「えー！ー！？」

戒「ま、驚くのも無理は無いな…。」

精華「ど、どどういう事ですか！？此処があの中って！？」

戒「此処は空間を圧縮して作り出した物でな？精華は浦島太郎を知っているよな？此処はその逆になっているんだ。」

精華「？？？」

戒「例えば此方で1日を過ごしても外では1時間しか経っていないと言う事だ。此処の中と外では時間の流れがまったく違うからこそ出来る事もある訳だ。」

精華「例えば？」

戒「訓練や休憩等上げれば切りは無いが今の目的はリハビリに掛ける時間の短縮だな。」

精華「だからといって無茶は駄目ですよ？」

戒「わかって……そうだ！精華、コイツを渡しておく。」

精華「コレは？」

戒は懐からエンブレムの様な物を手渡す。

戒「コレはデリスエンブレムと言って時間の流れを正常にしたり、留めておく作用を齎す物だ。」

精華「????？」

戒「つまり、此処で長時間使用するとその分歳を取るからそれを緩和する為の物だ。」

精華「成る程」

戒「で、此から行く所には足下の移動用魔法陣に乗れば其処の橋を渡らなくても行けるからな。」

精華「……今更何ですけど、戒さんって何者ですか？此もそう何ですけど、義手や戦術機にしてもわたし達の知る技術とかけ離れ過ぎていませんか？」

戒「その事については話す事は、今は出来ない。だが、話す時期はいずれ来るからその時にしてくれ……今は1日でも早い前線への復帰を目指してリハビリに専念がしたい。」

精華の質問……尋問に近い言い方に戒は目を瞑り、今はまだ時期では無いがいずれ話すと言った。

精華「わかりました。いずれ話してくれるのであれば良いです。」

戒『それじゃあ、此処から移動しようか。』

戒はそう言っ、精華と今度は一緒に魔法陣に乗り城の手前の広場に転移した。

精華「広場も凄いですね！」

戒『この下には浜辺もあつて、息抜きに海水浴も可能だ。』

精華「まるで別荘ですね」

戒『まあ、正式名称だと味気ないから俺は“別荘”と呼ぶから強ち間違いでは無いな(笑)』

精華の的を得た言葉に戒はただ苦笑して話すのである。

精華「でも此処でリハビリって言ったけどどうやってするの?」

戒『まあ、見て……いや、少し離れてるよ?』

精華「あ、はい???」

状況が飲み込めない精華ではあるがそれでも戒の言葉通りに壁の所まで下がり、それを確認した戒は静かに目を閉じてある詠唱をする。

戒『「我が契約に従い、来れ、氷雪の巫女、汝の力を、我に貸し与えたまえ。」セルシウス!!!』

そして、戒が詠唱を終えた次の瞬間、戒の2m先に肌が全体的に薄い青に髪は濃い蒼色のセミロングで格闘着とも民族衣装とも取れる服を着た女性が立っていた。

セルシウス「契約に従い、参上致しました我が主此度はどの様な…

……精華「ええっ……!?」……御用で。」

セルシウスは呼び出した戒に用件を聞こうとしたが、精華が戒のした行動に絶叫する形で遮ってしまい、セルシウスは精華を睨み付けていた。

セルシウス「人間…わたしと主の会話を遮るとは良い度胸だな…?」

精華「そ、そう言う訳じゃ?」

戒「セルシウス、精華を威嚇するな 精華も驚くなって言っただろ?」

セルシウス「も、申し訳ありません?」

精華「す、すみません」

戒の呆れた言葉にセルシウスと精華は慌てた様に戒に謝る。

戒「ふう……セルシウス、今回君を喚んだのは他でもない俺の左腕のりハビリの為だ。早く戦場に戻る為にこの幻想空間「ファンタズマゴリア」幽閉型魔法球を使って戦闘訓練で腕の感覚を取り戻したい…協力してくれるか?」

セルシウス「なにを言うかと思えば、主…貴方の力に…助けになる事こそが我等が契約の筈です。その様な事は仰らないで下さい。」

戒の言葉にセルシウスは契約をした精霊達の代弁をするかの様に自身の事も含めて戒に言うのであった。

戒「そう…だったな、悪いな？変な事を聞いて……」

セルシウス「い、いいえ！？その様な事は！？ああ！？頭を上げて下さい我が主！？我等が主がそう簡単に頭を下げないで下さい！？」

戒はセルシウスの言葉に不適切だったなと頭を下げるとセルシウスは驚愕し慌てて戒に頭を上げる様にと半ば叫んで言う。そんなやり取りを精華は状況が状況なだけに理解が追いついていなかった。…そんな事を戒が知る由も無く話はそのまま続き……

戒「さて、それじゃあ…始めるか！！」

セルシウス「主、訓練だからと言っても手加減は一切しませんよ！！」

戒「当たり前だ！！」

そう叫び、先に仕掛けたのは戒で2mも離れていた距離を戒は自身の脚力で一気に詰めて腹部目掛けて右の掌底を放つ…がセルシウスは読んだかの様にそれを肘打ちを戒の右腕の上を叩きそれをさせなかった。

戒『ちいつ!!』

セルシウス「左腕がぎこちないからと言っても動きは変わりませぬ!!」

戒『そろそろ動きが変わって溜まるかつ!!』

”ビュッ!!” “バシッ!!” “ドガッ!!”

2人は会話をしながらも拳打や蹴打の応酬を音速の域で繰り返し、常人である精華の目では完全に追える代物では無かった。

セルシウス「左腕が馴れてない動きでは無いです…ね!!!!」

戒『まだまだ…だ!違和感が払拭出来なければ意味は無い!!其処おっ!!!連牙弾!!!!』

セルシウス「甘いですね!鷹爪落爆蹴!!!!」

戒は拳に氣を纏った連撃を放つがセルシウスはコレを跳躍して躲すとその態勢から氣を纏った脚で戒に向かって氣弾の様な物を2発程放ちその後に残した氣を脚に纏い跳び蹴りの要領で戒に突貫する。

戒『飛葉翻歩…!!?』

セルシウス「読み通りです!!凍刃十連撃!!!!」

戒『グハッ!?!』

戒はセルシウスの攻撃を読んで回避を行うがセルシウスもそれを読

んでいたのか直ぐ様に身を翻して自身の能力を乗せた特技を放つ。それに戒は防御が間に合わずまともに喰らい近くの柱に叩き付けられる。

セルシウス「……左腕があまり使え無いからと言ってこの程度ですか？余りにも弱いです。以前の主で在れば縮地で躲せる筈ですよ？」

戒「くっ！まだ……だ！！魔神拳！！！！！」

セルシウス「それでこそ我等の主……ですが、まだ動きがぎこちなっ！？」

セルシウスが戒に呆れた風に言うと戒は態勢を直しながら拳から氣を地に這わせる様に放ちセルシウスはそれを蹴打で打ち消すつもりだったが目前でそれは爆発し煙幕の役割を果たした。流石にセルシウスもコレには驚いた。まさか氣を爆発させて目眩ましに使う等とはまるで予想外の様であった。

戒「其処だあっ！！！！八葉連牙あっ！！！！！」

セルシウス「しまっ！？」

戒はその一瞬の隙を突いて懐に飛び込み飛葉翻歩と連牙弾の複合技……奥義八葉連牙で左右からの連撃を加えて最後に真下からのアップーカットをぶちかまし、セルシウスを空中に打ち上げた。

セルシウス「くうっ！流石は主……ですが、そう簡単にやられませんかよ！！アイシクル！！」

戒「ちい！！！！」

セルシウスは空中で重心を使って上手く態勢を整えると戒を正面に捉え、巨大な氷塊とも取れる氷柱を幾つかを高速で放った。戒はそれに即座に反応すると回避する為に身を低くし、その場を駆け抜ける。

セルシウス「氷爆!!」

戒「なっ!?!」

着地したセルシウスは此方に駆けてくる戒に対して足下に薄青の魔法陣を展開し、戒の足下から無数の氷柱が乱れ立ち、一斉にそれ等が爆発し氷と白煙で視界が塞がれてしまう。戒はその状況に驚き走る事を止めてしまった。そして…………

戒の背後には掌から氷刃を発生させ首元に寸止めの状態で立つセルシウスがいた。

セルシウス「…………勝負有り…ですね?主…。」

戒「左腕が使え無いつて言い訳はしないさ…。ただ、セルシウスはやはり白兵戦はとてつもなく強いな…。中距離からの攻撃も冷静に判断して行動できるし、手強いな…。」

セルシウス「その様な事は有りませんよ?我等は何時如何なる時でも己の鍛練を怠った事は有りませんので、主が鍛練を怠っていないければ今のも難なく処理出来た筈ですが…?」

戒「ハハハ セルシウスは手厳しいな それじゃあ此からはリハビリも兼ねてセルシウスに鍛練の手伝いをお願いしようかな?」

セルシウスの言葉に戒は渴いた笑いをして此からの協力もお願いする。

セルシウス「元よりその積もりですよ我が主。」

セルシウスはその言葉に氷刃を消し、戒の目の前で臣下の如く礼をしてそう言った。そんなセルシウスを戒は困った様な顔をする。

戒「セルシウス、そのな？主従の関係は大事だけど、俺はそういう呼ばれ方は…な？あと、その敬語も何とかならないか？その口調だと、どうもむず痒いのでな…」

セルシウス「そうは仰られても主は主ですので、それに、この口調はわたしが生まれた時から使っていますから、今更直すのはかなり難しいかと…。」

戒「うーん なら、その主と言うのを止めてくれないか？もし外で行動する時に説明するのがかなり難しいから…な？」

セルシウス「…わかりました。ある…じゃなかった、戒。（ああ、主と言わずやっとな前で／＼／＼／＼）」

戒に呼称の訂正をさせられたセルシウスであったが顔には出さず内心では悶えていた。人間だけでは無く、精霊すら恋をしてしまう戒の魅力と人徳は凄まじい物でそれは本人だけがそれに気が付かないと言っのだから凄い。

戒「ああ？」

すいません？

セルシウス「戒、どうしたのですか？」

戒「いや、変な電波を受けた様だ。」

セルシウス「はあ」

精華「戒さん！！」

セルシウス「？小娘が、わたしと戒の愛の語らいを邪魔するか…！」

戒「何時の間に愛の語らいに成った」

精華「いきなりあんなに激しく動いては駄目じゃ無いですか！？それに、叢雲中佐や原さんから無茶だけはするなってあれ程言われたじゃないですか！！？」

セルシウスと話をしていると壁の所にいた精華は切りの良さそうな所で戒に足早で近づくと声を張り上げて、委員長キャラの説教をする。それに戒はバツが悪い顔をして、頭をガシガシと掻きながら済まないと言う。

精華「全く、それではさっそくですが此処から出ましようか。」

セルシウス「待て、小娘…。何故貴様が戒の行動を決めなければ行けないのだ？（貴様だけ帰れば良かろう？わたしと戒の邪魔をするな？）」

精華「当たり前です！わたしは戒さんの看病兼お目付役だからです

！（貴女こそわたしと戒の邪魔をしないで下さい（黒笑））
戒を挟んで話す2人は目から火花を散らして互いに一步も譲らない。
そんな中、戒は申し訳無いとばかりに声を2人に掛ける。

戒『精華、済まんが 此処に入る時に設定をしてな？此処で1ヶ月間は出れないんだ。スマン』

精華「はい！？い、1ヶ月ううっーーーー！？」

戒『だけど、外では1時間しか経ってない事になるから安心してくれな？』

精華「で、でも食事は？」

戒『この下にジャングル等があるから其処から調達だな？自給自足がこの中での生活になるしな？獲物も独自の生態系を持っているから、色々楽しいぞ？』

精華「そ、そうですね（1ヶ月もの間わたしは生きてられるのかな）」

戒の自給自足と言う発言に精華は頷くが内心は冷や汗がダラダラと出ている。そして、その1ヶ月で戒は当初の目前である左腕のリハビリを出きるのか？

第貳拾貳話（後書き）

感想をお待ちしております。

第貳拾參話（前書き）

一週間振りの投稿でしたが、どこか無理矢理感のある話になってしまいました。嫌な人はバックしてくれて構いませんので悪しからずご了承くださいm（ー）m

魔法球の名称の訂正をしました。

第貳拾參話

ダイオラマ魔法球内

戒『やっとこの中での生活も終わりか…』

戒はセルシウスとの義手の感覚を掴む為の訓練をした所である広場にて立っており、魔法球内での1ヶ月間の事を思い返していた。

セルシウス「戒、そろそろ……」

戒が佇む所にセルシウスは後ろから近づきながら戒に話し掛ける。

戒『わかった…』

そして戒は広場を後にして、魔法陣の前で待っている精華の所に行く。

精華「戒さん遅いですよ。」

戒『すまんすまん』

セルシウス「それでは主、わたしは戻ります。」

戒『ああ、わかった。』

セルシウスは蒼色の球状になり戒の体の中に戻って行く。

戒『さて…と、行くとするか。』

精華『はい!』

そして戒と精華はダイオラマ魔法球内から消え、そして、戒の病室に戻って来た。

精華『不思議な感じですね…。』

戒『そう感じるのも無理は無いな…。向こうでは1ヶ月でも、こっちじゃ1時間しか経ってないからな?』

精華は戻って来ての第一声に戒は当たり前だと言う。

戒『さて、明日は医師に言っすぐに退院だな。』

精華『全治1ヶ月って言われた人が既に全快してるなんてお医者さんが知ったら驚嘆ですよ。』

戒『そりゃ、向こうで1ヶ月も過ごして全快しました…なんて言えないさ。』

精華『それは…確かにそうですね。』

戒の言葉に同意しつつ精華は冷や汗の様な物を掻く。そしてその後も雑談をして時間が過ぎ…。

戒『精華は一旦戻れ…俺はそろそろ寝るよ。』

精華「はい、判りました。ゆっくりおやすみ下さい」

そして、精華が退室し、戒はベッドに座り、月が上っている空を窓から見上げる形で睨んでいた。

戒「俺と言うファクターが入った事によりこの世界に様々な事象が起きている…。万が一ヤツらが俺への対抗手段を探し倦ねている間にオリジナルハイブを潰せる計画を作るには2001年のクリスマスまでが期限…。か。PTやMSにASで今後の事を考えて戦艦やMAも製造も加味していく必要がある…。か。まずは目の前の曲者を潰した方が良いか…。俺を敵に回す事がどれだけ恐ろしいか思い知らしてやるよ…。「サンダーク」。」

戒は空に浮かぶ月を睨み付け、殺気をその身から滲ませていた。

翌日

医師「あの人にはまったく驚きしか有りませんね。」

唯依「どういう事ですか？」

医師「黒逸准将はあの爆発で3本の肋骨骨折や裂傷に軽度や重度の火傷等があり全治1ヶ月と見たのですが、今朝のレントゲンを見た所、骨折は完治し、火傷や裂傷等も見当たらないのです。黒逸准将の自然治癒力は異常としか言えませんね。」

唯依「では、もう退院と言う事ですか？」

医師「そうですね。医師として診れば退院しても良いとは言えませんが、黒逸准将の事ですからわたしの意見を聞かないで自力で抜け出しそうですから退院として扱い、少し間を置いて診察すると言う事でお願ひします。」

唯依「わかりました。医師せんせいほんとに有り難う御座いました。」

唯依はそう言うと言つと席を立ち診察室から退室し、戒の病室に向かった。

戒「おつ？唯依どうだった？」

唯依が戒の病室に行くと言つと既に軍服を着て退院する気満々の戒がいた。

唯依「ハア 医師の人からは許可を貰いましたが少し間を置いてから再度診察する事が条件だそうです。」

唯依の話聞いて、戒は面倒臭いと言つ表情をした。

戒「うえ 病院自体が苦手なんだが？」

唯依「苦手でも何でも退院する為の条件なので拒否をすれば後1ヶ月は病院生活をして貰わないといけなくなりますよ？」

戒「うぐつ！？わ、わかったよ。」

唯依の言葉に1ヶ月もの入院をするのと条件付きでの退院を考慮し、

前者だと間違いなくこの後に起きるであろう事象に間に合わない判断しつつ呻き声を上げるも了承する。

唯依「それでは基地に戻りましょう。」

戒『そうだな…。(近日中にハトルウィック大佐の身柄が拘束される…筈だからその時にテロとBETAの騒動も発生するからこれを利用して独の基地に潜り込んで奴を…サンダークを……コロス。)』

戒は唯依と共に病院を出て、迎えの車に乗り込む際に戒は病院を見上げて決意を新たにして独にある野戦病院を後にした。この後に起きる殺戮と混乱と恐怖渦巻く戦場で…戒の…そして…ユーコン基地の運命は…。

?????

独の使っている基地のとある部屋に椅子に座るサンダークとその前にいる部下とその後ろに数人の黒服を着たSPが扉の前に立っていた。

サンダーク「暗殺に失敗…ですか？」

部下「も、申し訳御座いません？何分、あの男の高い身体能力や高度な白兵技能もあり、腕一本持つていくのが精一杯でしたのです？」

サンダーク「言い訳は聞きませんね。目的の為とは言え、わたしに不利な情報や証拠を残す者は誰であれ例えそれが親であっても処分するのがわたしですのですね？確かあの男の国の言葉に死人に口無し

と言つ言葉があるそうですからね？」

部下「ひっ!?!?」

サンダークの言葉に扉の近くにいた黒服2人が部下の男を両脇から拘束する。

部下「ち、サンダーク中尉!?!? な、なにを!?!?」

サンダーク「言った筈ですが? 処分すると……いや、アレを試すか? 胡散臭い品だがまだ試していないからな……。あの黒衣の男はBETAにも勝てると言っていたな。例の薬は丁度此処にあるから試しますかね……。」

サンダークはそう言って机の中から薬剤の様な物を取り出すと徐にその自身の部下に近づく。

部下「な、なんですかそれは!?!?」

サンダーク「なにも心配する事は有りませんよ……ただ貴方には失敗を挽回するチャンスと言つ事でコレの実験を受けて貰うだけですからね? コレを飲めば貴方はBETAすら凌駕する力を手に入れる事が出来るのですから恐怖する事は無い筈ですよ?」

部下「んぐっ!?!?」

サンダークは部下の口に無理矢理その正体の知れぬ薬を飲ました。すると部下は急に糸の切れた人形のように倒れそうになるが両脇から黒服2人が支える形で腕を掴んでいる為に頭を垂れる様になつていた。

サンダーク「……あの男の言う事は嘘の様ですね……。まあ、良いでしょう。結果的には処分する筈のこの男は精神異常を来して毒物を自ら服用したと言う事で処理をすれば後は何も問題は無いですしね。死体を片付けて下さい。」

黒服「はっ！」×2

そして部下だったモノを黒服に運ばせ様とした…次の瞬間。

部下「グガアアアア！！！！！」

黒服1「なっ?!」

黒服2「うわあああ?!」

サンダーク「何が起こったと言うのですか!?!」

死んだ筈の部下が獣の様な雄叫びを上げて両脇にいた黒服達を壁際まで吹き飛ばし物言わぬ肉塊に変え、人の力と思えない腕力をサンダークに見せた。

サンダーク「あの男が渡したこの薬は人を化物に変えると言うのか!?!」

化物「ガアアアアア！！！！！」

サンダーク「くっ!?!この化物を射殺しろ!!」

「パン！パパン！！」

サンダークは化物と化して体の至る所に禍々しい棘を生やし手は鎌状になった部下の処理をする為、残りの黒服達に発砲の許可を与え、自身もハンドガンを持ち人体の急所や心の臓等を撃つが効果が余り無い所が弾いている様にすら見えた。そして、化物は発砲して来た黒服達に常人では知覚出来ない速度で近づくと鎌状になった'斬'と手を横薙ぎに一閃すると目の前にいた黒服達は叫び声を上げる暇すら与えられずに上半身と下半身が別れ下半身からは夥しい量の血が噴水の如く噴き出して倒れる。

サンダーク「く、来るなあああ!!!」

'パンパンパン！'

周りにいた屈強なボディガードである黒服5人があつという間に肉塊に変えられた事にサンダークは恐怖し銃を乱射するが先程と同じ結果であった。そして……。

化物「グオオオオオオ!!!」

'暫！惨！斬！'

化物は連続で腕を振り、サンダークの体を下からの逆袈裟に袈裟斬りそして真ん中から断ち切る様にして殺した。そして、サンダークも先程の黒服達と同じ様に叫び声を上げる前に絶命させられたのである。

????「ふつ。本物は死んだか……。では後はこの俺が成り代わるとするかな。」

サンダークや黒服達が化物により惨たらしい死体になっているこの部屋の隅で全身を黒いフード付きマントで覆った男が壁をすり抜ける様にして現れる。

化物「ガアアアアア！！！！」

「さつきから喧しいな。既に貴様は役目を終えたのだからさつさとこの場から消えるが良い……。」

そう言うと黒衣の男は化物に腕を真つ直ぐに向けると……

「我が闇の眷族に命ずる、彼の者を冥府へ誘え。来れ、冥府の業火。『メギドフレイム』！！！！」

「ゴツオオオオ！！！！」

男の手から放たれた炎は全てを黒く塗り潰すかの様な漆黒の業火であった。そして、化物に当たった瞬間、化物は瞬時にしてその場から影も形も無く、灰ですら其処に存在していなかった。

「ふふふ、後はこの部屋の片付けか……。わたしの計画に必要なあの白銀の救世主を手に入れて絶望に染め上げて、漆黒の魔王に仕上げるのに必要な時間も後残り2年と言った所か……。時の神が干渉した様だが、いずれにしても俺の……いや、わたしの邪魔はさせぬよ。脆弱な人間はただ、BETAに殺され、絶滅すれば良いのさ。時の神よ！わたしを止められるモノなら止めて見せるが良い！！ハハハハハハッ！！アーハッハッハッ！！」

黒衣の男は部屋中にぶち撒けられた血や臓物を自身の影を使い一瞬

で綺麗に消し去り、自身の身を先程殺されたサンダークに変えた。

サンダーク？「後少しだ…後少しすればテロやBETAとの戦闘でこの基地は乃至更なる混乱に落ちる！人の子よ！恐怖するが良い！その恐怖や怒り！憎しみ！悲しみ！それらが混沌とした負の感情…それが冥府で生きる我が糧になるのだからな！！！！」

サンダークとなって黒衣の男はそう叫んだ。原作では有り得ない事象が此処でも起きていた。戒はこの男の言う事を阻止出来るのか！？そして、この黒衣の男の正体とは…？次回を待て…。

第貳拾參話（後書き）

作者「やってしまった」

戒「今回はかなりオリジナル要素が入った話になっていたな。ってか原作でもサンダークは死んだって話は聞いた事は無いし、今後の独の動きが判らなくなったな。」

作者「だが後悔はしていない！そして、ネタバレになるかも知れないが、あの黒衣のキャラは宇宙を燃やす漫画から来ているかも？」

戒「何故、疑問系になってる！！」

作者「途中で改変するかも知れないからだ！まあ、最終的には黒幕的存在が出てくるかもよ？勿論、戒と同等かそれ以上の敵も現れる可能性も無きにして有らずと言った所かな？」

戒「そんな敵が出て来たら星一つ消し飛ばんじやねえのか？」

作者「まあ、これは予定であって確定事項では無いし、そこら辺は自身で考えつつ、ユーザー様や読者様からも意見を聞いて行きたい所だね？」

戒「とりあえず、原作に沿いつつオリジナル要素をこれからも入れて行ってくつて事か。」

作者「そう言う事だね？次回の第貳拾四話の更新は遅れる可能性も有りますが楽しみにして下さいm()m」

第貳拾四話（前書き）

目を空けての投稿になりましたが短く、グダグダな感じになっています。そして、主人公のチート化が更にヒドい事に

第貳拾四話

昼過ぎに基地に戻った戒は唯依と別れ食堂に居た。

ユーコン基地内PX

戒『やはり病院食よりは食堂の飯が良いな……。』

ステラ「んな事言つて戒はもう少し病院でゆっくりしていた方が良かったんじゃないか？ 普段はアタシ等というけど寝る間を惜しんで作業してるってラクスから聞いたぞ？」

戒『……タリサ、いつの間にラクスと仲良くなったんだ？』

ヴァリレオ「タリサだけじゃないぜ？ ステラも一緒に仲良くなったみたいだぜ？」

戒『……いつの間に』

タリサ「で？ 体の方はもう大丈夫なのかよ？ 片腕義手にしたからその分勝手が違うだろ？」

戒『まあ、勝手が違うつてのは当たり前だがコレはコレで便利だぞ？ 手を飛ばしてワイヤーアンカーに使えるし、指先には極細のワイヤーがあるから対人は疎か戦士級に闘士級等にも通用するし、頑丈さは計算上になるが光線級の攻撃を凌ぐ装甲になっているぞ？ ワイヤーの強度も通常のワイヤーの物では無く俺の機体に使っているワイヤーと同素材で申し分ない物を使ってるからちつとやそつとじゃ切れない』

タリサ「逆に反則臭くねえのかソレ」

ヴァリレオ「戦術機ですら化物級なのに生身ですら化物化して来たな」

戒「ほんの少し他の人より強いつてただけだろ？」

2人「あれでほんの少しかよ」

戒の言葉に2人は同じ事を思い口を揃えて言う。

戒「さて…と、」

戒は急に席を立つ。

タリサ「どうしたんだ？いきなり席を立って？」

戒「用事を少し思い出したからな…？また後でな？」

去り際にタリサの頭を撫でてPXを出す。

タリサ「／／／／／」

ヴァリレオ「いっちょ前に赤くなってんのな（笑）」

タリサ「う、うるせえ！／／／／／」

ヴァリレオ「グボアッ!？」

戒に撫でられて赤くなつた所をヴァリレオにからかわれ、照れ隠しの為か鳩尾に思い切りの良い拳を叩き込み角度が良かったのか崩れ落ちる様にして倒れるヴァリレオである。時折痙攣をしている為多少危ない気がするが周りの人間もいつものやり取りの為かスルーをしていた。

黒逸 戒自室

戒『…で、急に呼び出してどうした？この駄神が…。』

駄神「久々の登場でそれは無いじゃろ！？って言うか名前の部分ですら駄神なのか！？」

戒の自室には戒をこの世界に飛ばした神…クロノスがいた。

戒『で、そんな事より今頃になつて何故今になつて現れた？』

駄神「名前の変更は無いんじゃない…ウオツホン！！それなんじやがな…、この世界に他の奴が干渉したみたいでな？ソイツが干渉した所為で世界に歪みが生じたみたいなんじゃ。」

戒『なんだと！？しかし、歪みが生じる程の事態を引き起こしたって事はかなりヤバい奴って事か…。』

駄神「ヤバい所かあ奴がいるだけで世界に悪影響を及ぼし兼ねんのじゃ。しかも此方に来る際に何体か他の世界から魔物を持ち出しおつて此方の方でも対応に追われているんじゃない。で、この世界に来た様じゃからお前さんに頼みたいのじゃ。」

戒「面倒臭い事になってるな…。しかも魔物？そんな物まで持ち出したって仮にも神だろ？阻止は出来なかったのか？」

馱神「それがの…。そ奴自身も神なのじゃ。まさか世界を犠牲にして己の力にするとはいも思わんかったんじゃ。」

戒「神が世界に自ら干渉って不味すぎ無いか…。」

馱神「じゃから緊急を要する事態ナノじゃ。あ奴を探し出して何とかして欲しいのじゃ。」

戒「…基本的に神は殺せないんじゃねえのか？」

馱神「それは無い。神もまた人じゃ。人々の信仰があつてこそその不死じゃからな。しかし奴の場合は全くの逆で儂等が光とするならば闇の部分に属する神の1人でかなり高位の部類になる。じゃからそれも踏まえてお主には幾つか新たに宝具を投影と財宝に入れて置くからの？」

戒「神が相手って事は対神用って所か？」

戒の言葉にクロノスは頷いた。

馱神「そうじゃ。ロンギヌスやグングニル等に加え、神を殺す事に特化した物や霊体や病魔に対しても使用できるから割りと便利じゃぞ？勿論真名開放も可能じゃからな？ロンギヌスは「神殺しを成す槍」でグングニルは「必中せし神の槍」じゃ。他にも財宝の中にはあらゆるアニメやゲーム等からアイテムを無限使用に入れて入れたし、能力にめだかのジ・エンド「完成」を追加したからコレで万事大丈夫じゃろ？」

戒「流石にサービス良すぎないか？」

駄神「儂等の不手際が招いた事なんじゃからコレ位はせぬといかんじやる？他の者達も納得の上で渡したから安心せい。」

戒「まあ、確かに神相手ならあつて困らない物ばかりだから助かるがその相手の神つてのは誰だ？」

駄神「ソイツはの……お主の世界に……元々いた世界では神話にも登場する輩じゃよ。儂と比べたら知名度は格段に向こうが上じゃな。」

戒「だから一体誰だつて聞いてんだが……。」

駄神「冥府の神の1柱……ハデスじゃよ。」

戒「ハア！？ハデスつて物凄い知名度が高いな！？確かイギリス神話に出る奴だったか？そんな奴がまた何でこんな事を仕出かしたんだ？」

駄神「多分じゃが、この世界の人間を見て失望をしたんじやるな……。人類がまとまらぬ限りBETAへの抵抗なぞ微々たる物じゃ。それなのに人はやはり人でしかなく今の現状よりも未だに見えぬBETAがいなくなつた時の事を考えよつてからに。各国は酷い物じゃ誰を蹴落とすかとか他国の技術を手に入れる為に虎視眈々と狙う奴も居れば自国の計画に邪魔と判断すればお主の様に命も狙われる。奴はそんな世界を滅ぼそうと考えたのじやるうな……。己の力にするついでとして。」

戒「確かに判らなくも無い……。」

馱神「戒…。」

戒「だが！そんな奴らでも中には人を思いやる事の出来る奴もいれば打算的に動かない奴もいる。それに信念を持って動く奴だっている。俺はそんな奴らがいる世界を壊させないし、終わらせないさ。」

戒の言葉にクロノスは不安な色を見せるが次に言った言葉に安心した顔をした。

馱神「そうか。ではこの世界を頼んだぞ？我が使者にして時の守護者よ。」

戒「その呼び方はどうかと思うが…まあ、気に入っているこの世界を無茶苦茶にされるのだけは勘弁願いたいからな…？それじゃ、俺は戻るからな。」

そう言つて戒はクロノスを部屋に残して退室した。

クロノス「お前さんをこの世界に呼んで正解じゃったな。前の世界ではあれ程無気力であつたお前さんが…頼んむぞ…黒き聖人よ。」

第貳拾四話（後書き）

作者「第貳拾四話完成だ」

戒「おいコラ作者！何だ今回の話は！？」

作者「裏ボスとしての敵を出したただけだが？」

戒「そつちじゃなくて俺が更にチート化になった事についてだ！！」

作者「まあ、他の世界についても書いているからその辻褃合わせも兼ねた話だから仕方ないかな…？」

戒「裏ボスにしてもそうだが収集は着くのか？」

作者「そこはちゃんと考えているから大丈夫だ！」

戒「物凄く不安だorz」

作者「何とか成るって（笑）」

戒「……頼むから消えてくれ。」

作者「それはあの人のセリフだよ！？」

戒「今回は第貳拾伍話になります。」

作者「次回、急展開になるかと思われますので（主に戒の周りがお楽しみに」

戒「副音声で良からぬ事を言っていないか!？」

作者「気の所為気の所為（笑）無問題」

戒「ハア、主人公止めたくなって来た？」

作者「大丈夫！俺の知る限りのアニメやゲームを一通り逝ったら他のオリキャラでやる……事もあるかも知れないから。」

戒「字が違うし、未定なのかよ!？」

作者「それでは、また次回で会いましょう!」

戒「場を放置して逃げるな——!!!!!!」

第貳拾伍話（前書き）

とりあえずオリジナルキャラクターを投入してお話です。簡単な説明を後書きでします。また、何か違和感の様な物や誤字脱字がありましたらご報告下さい。

第貳拾伍話

俺はクロノスと別れた後、周囲の探索と服の物色を兼ねて商業区に
来ていた。

戒『うゝん やはり和服は欲しいな。ここら辺はスーツやジャケット
ト等しか無いな……。』

ラトロワ「戒じゃないか？どうしたこんな所で。」

戒『ラトロワ中佐か？いや、服を少し探しててな？』

ラトロワ「服か？どんな物を探しているんだ？」

戒『まあ、俺達…東洋の者に馴染み深い和服を探しているんだが、
やはり此処等辺にそれらしい服や店が無い物で困っていた所だ。』

ラトロワ「この辺にはそう言った服を扱っている店は無かった筈だ
が？」

戒『やっぱりか それにしてもラトロワ中佐はどうして此処に？』

ラトロワ「中佐は止めてくれ。今日は非番だから此処での日用品の
買い置きをして置こうと言う訳で来たんだ。」

戒『そうか。なあ、ラトロワ中……ラトロワは昼はまだなのか？』

ラトロワ「ああ、わたしも先程街に出てきたばかりだからね。」

戒『成る程な。なら一緒に近くのカフェで昼にしないか？』

ラトロワ「良いのか？（これは願ってもない好機これを使って戒をわたしに向かせられれば…／＼／＼／＼）」

戒『ああ。1人だと何かと寂しい物だな。』

ラトロワ「なら、喜んでお供するわね」

戒『ああ、それじゃあ行こうか。』

ラトロワ「あっ！ちょっと待て！」

戒『おい／＼／＼』

戒が目当ての店に行こうとするとラトロワは呼び止めて戒の右腕を抱くようにしてくっ付いた。それに戒は若干顔を赤らめながらも呆れる。

ラトロワ「わ、わたしは別に嫌では無いのだが、戒はイヤ……か？」

戒『中佐の好きにすると良い／＼／＼（ええい！女性とのこう言っ
たやり取りが無いからと狼狽えすぎだ！？）』

ラトロワ「はい／＼／＼それと中佐ではなくラトロワと呼んでくれ
／＼／＼」

戒『あ、ああ。（ラトロワのキャラって違わないか！？クールな女性
性って感じだった筈だぞ）』

そして戒とラトロワは近くのオープンカフェに入ると外の席に座り注文を取りにウェイターが来た。

「ご注文は？」

戒『俺はコーヒーをブラックで。』

ラトロワ「わたしは紅茶を頼む。」

「かしこまりました。」

そしてウェイターは注文表を持って店の奥に消える。

戒『内装も綺麗で外の方も開放的で好きだな。』

ラトロワ「確かにそうですね。それに店の雰囲気もゆったりと言いますか、落ち着いた感じで良いですね。」

戒『ああ、確かにそうだな。早くBETAをこの世界から退けて皆がゆっくり出来る世界にしないとだな？（その時に俺が居られるか判らないがな……。）』

ラトロワ「戒、どうした？難しい顔をして。」

俺はラトロワと会話しながら考え事をしていたらラトロワが心配する様な口調で声を掛けて来た。ふむ、難しい顔をしていたのか？

戒『いや、何でも。』
「……………」
「何だ!？」

戒がラトロワの言葉に返答しようとした時、現在いる店より先に進んだ洋服屋の所から爆煙を巻き上げてソレは現れる。

ラトロワ「なんだアレは！？BETAなのか？！」

ラトロワが驚くのも無理は無い。その現れたヤツは頭部は牛の物で体は人の様だが兎に角でかくその異様な風貌に更に拍車を掛けるかの様に手に持つ獲物は斧と槍を合わせた所謂、ハルバードの様な物と人1人が簡単に隠れられる位に大きな楯にスパイクが楯の前面を程の攻撃的な楯……それらから特にハルバードからは禍々しい感じの気配を感じとれた。

戒「（もう仕掛けて来たのか？！しかも魔物は魔物でも神話に出てくるミノタウロスかよ！）ラトロワは直ぐに周囲の人間の避難誘導に掛かれ！」

ラトロワ「戒はどうするんだ！」

戒「アレを引き付ける！幸いにヤツは建物を壊すのに夢中だがその矛先が非戦闘員たる民間人に何時向けられるか判らないからな。」

ラトロワ「危険だ！ヤツの腕力は異常だ！見て判らないのか！？」

戒「だがな？今取れる方法は誰かがヤツの注意を引き付ける囮役をしなければいけない。幸い俺の武器もあるしな？」

ラトロワ「しかし！」

戒「ラトロワ中佐！」

ラトロワ「……………」

戒「君が今すべき事は何だ！俺を止める事では無く民間人の安全を確保して避難させる事だろうが！籍は違うが准将としてラトロワ中佐には民間人の避難をしてもらいぞ！」

ラトロワ「くっ！…了解…しました。…御武運を。」

戒の言葉にラトロワは自分の力が及ばない事にラトロワは苦虫を潰した様な顔をするが命令に従い、民間人の避難に向かう。

戒「済まん…ラトロワ。さて、魔物相手に刀…紅釣瓶が何処まで通用するか…な！」

「……………」

俺がミノタウロスに接近すると丁度奴は店の一つを潰した所で俺に気付いた様で威嚇の声を上げる。

戒「はあっ……………」

「斬！！」

「……………」

戒「ちい……………」

「ズガンッ……………」

戒は先ず楯を持った右腕を狙うがそれを左手に持つハルバードで受

け、楯を戒目掛けて振りかぶるが戒はそれを瞬動術で避ける。

戒「うわぁ 絶対喰らいたくねえな…アレ」

ミノタウロスが楯を持ち上げた所で俺が見たのは楯のスパイク部分が地面にくつきりと後を残した所でゾツとした。

「……………」

戒「早く始末しないと面倒だな…。」

、パパパンツ！、

戒「なっ！？」

俺がミノタウロスを正面に捉えて思考をしていると奴の背後から銃声が聞こえた。奴は何事も無かったかの様に背後に首だけを向け、俺は奴から目を離さずにその後ろにいる人を見て驚愕した。

唯依「戒准将から離れなさい！！」

クリスカ「戒から離れろ！怪物が！！」

「……………」

戒「なっ！？あの馬鹿共が！！」

唯依やクリスカの言葉にミノタウロスは激昂した様子で2人に走り寄るが戒はそれを瞬動術でミノタウロスと2人の間に割って入り、2人を抱えて更に瞬動術を使い近くの建物の上に移動した。

戒『馬鹿野郎！！何を考えてやがる！！』

唯依「わたし達は戒准将を助けよう……」

戒『助けようとしてくれるのは嬉しいが、あの相手に銃はあまり効かない。アレは剣や刀等の斬撃が有効だが身体能力が高い事が必須条件だな。』

クリスカ「ではどうするんですか！？」

戒『とりあえず、俺がヤツを殺す要因を持っているから俺が行く。唯依達は此処にいる。』

唯依「戒准将！？」

クリスカ「戒？！待って！？」

唯依達は制止の声を上げるが既に戒はミノタウロスの前面に移動していた。

戒『待たせたな？ミノタウロスよー！！』

「！！！！！！」

ズガアアアアア！！！！！！

戒『腕力だけで地割れを起こすとか無駄にすぎえな』

「！！！！！！」

戒『怪物…魔物相手ならコイツだ！！神鳴流奥義…〔斬空閃〕！！』
, 斬！！,

「！！！！」

俺の放った氣の斬撃は狙い通りに楯を持つ左腕を斬り飛ばした。その切断面からは夥しい緑色の血液を吹き出した。ミノタウロスは痛み悶える様な声を上げて、激昂したのか目を血走らして此方に濃密な殺気を飛ばして来た。

戒『いつちよ前に殺気を飛ばしてくるんじゃないやねえよ！〔次元蒼破斬〕！！』

戒は唐竹割りの状態で刀身に巨大な鬨氣を纏い頭から一刀両断にし、更に前面にミノタウロスの残骸に追い打ちを掛ける様に濃度の高い氣を剣戟に乗せて消し飛ばした。

戒『たくつ 面倒な野郎が出て来やがって』

クリスカ「戒ー！！無事かー！！」

戒『大丈夫だぞー！！』

クリスカに戒は返事をし、瞬動でクリスカ達の所に行き、2人を再び抱えると先程の場所に瞬動で戻った。

戒『はあ 色々とブチ壊れてるな』

戒は改めて周りを見ると地面は元より、店等はミノタウロスの攻撃により荒れていた。

唯依「修繕するのに時間が掛かりますね。」

クリスカ「それにしてもあの怪物は一体……。」

戒「BETAでは無いのは確かだな。（神話の怪物を何処から……？）」

唯依「戒准将、アレはどうするのですか？」

戒「……………はっ?!」

唯依に言われ、戒は唯依の指差す方を見るとミノタウロスが持っていたハルバードが地面に刺さってその場に鎮座していた。楯は消滅したのかそれだけが残っていた。

戒「まったく厄介な物が残りやがって（宝具か、はたまた呪具か…アレの放つ気配は微妙な所だな。大き過ぎて人に持てる物では無いのは確か何だよな…）」

唯依「とりあえず、国連軍の増援が来ますから待機していきましょう。」

戒「ちよつと待つてろよ?」

唯依「ちよつ?戒准将危険です!?!」

戒「武器だけだから大丈夫だ。（さて、宝具か呪具かは判らんが、

他国の連中にコイツを渡す事は絶対に危ないな。」

唯依の制止を聞かずに戒はミノタウロスの持っていたハルバードに近づき手を触れた瞬間、ハルバードは鈍く光った。

戒「なっ?!」

戒は驚きの余りに飛び退き様子を見る為に距離を取る。そして鈍色の光が収まると其処には先程のハルバードが尺が1m位弱の大きさに縮まって其処にいた。

戒「コイツは……はあっ!? 怪力の付加にアロンドイトと同じ効果だと!?!」

俺がハルバードを持ち上げて解析魔術を施すと宝具や呪具では無いが魔法具である事は判ったがその効果に驚愕した。判るか? ただの力の増強だと思ったら「無毀なる湖光」アロンドイトとまったく同じ効果を持った魔法具だぞ!? 通常なら有り得ない物が目の前にあるのだから無理は無いと思わないか!?

唯依「どうしました?」

戒「いや、何でも無い。コイツは俺が管理して置くよ。普通の奴は持てないだろうしな……。」

クリスカ「どうしてそう言えるのだ?」

戒「理解出来るか判らないが、コレは持ち主を選ぶみたいで認めた奴以外が持とうものならソイツはコレの持つ邪気に当てられて発狂もしくは人格崩壊を起こしかねないみたいだからだ。」

唯依「そんな危険な物を持って大丈夫なんですか!？」

戒「大丈夫だから今現在持っているんだろ?多分だがアレを俺が倒したから主人として認めたらんだろうな…。」

クリスカ「で、事後処理は戒の所ですか?」

戒「そうだな…。普通の奴は理解出来ないから俺がやるしか無いだろうな。唯依、上の連中に言つて他の軍が干渉をしない様に頼む…。」

唯依「判りました!」

戒の言葉に唯依はその場を離れて戒とクリスカだけが残った。

クリスカ「わたしはどうする?」

戒「クリスカはこの事をまだ黙つたままでいてくれ。」

クリスカ「無用な混乱を防ぐ為か?」

戒「ああ、アレはBETAでは無いからな。余計な混乱は避けたいからな。」

クリスカ「戒は知っているんだな…。」

戒「済まない。まだ詳しくは教えられ無いが、アレは俺個人に関する事だつて事だけは言える。」

クリスカ「戒自身に関する事？」

戒「そうだ。全部はまだ教えられ無いが時期が来たらクリスカや唯依にも教えるつもりだ。」

クリスカ「そう。なら、わたしは戒を信じて待っているわ。」

戒「有難う。」

クリスカ「じゃあ、わたしは基地に戻るわね？」

戒「判つ……クリスカ！」

クリスカ「なに？」

戒「クリスカもそうだがラトロワイーニアにも注意して欲しい事があるんだ。」

クリスカが基地に戻る為に身を翻して歩を進めようとした所を戒に呼び止められた。

クリスカ「注意？」

戒「ああ。サンダース…奴に気を付けてくれ。奴は胡散臭いからな。まあ杞憂に終わってくれば良いのだが…な。」

クリスカ「判ったわ。イーニア達にも伝えて置くわ。」

戒「頼む。」

そして今度こそ戒とクリスカはその場を後にした。

???

サンダース「ミノタウロスが消されたか…。」

???'「ハデス様どうなさいましたか？」

サンダース「街に試しに放ったミノタウロスが何者かによって滅ぼされたみたいなのだ。呪具を持たせたのだがな……。」

???'「呪具を持っていたにも関わらずに…ですか!？」

???'「はっ! 所詮は獣ね。ハデス様から呪具を授かった所で知性もなければ理性も無い。そんな者がハデス様の呪具を有効に使える筈が無いわね？」

???'「ミリア! 口が過ぎるぞ!」

ミリア「あら? ほんとの事を言ったまでじゃない。ハーティア?」

ミリアと呼ばれた赤いマントを来た者は女性特有の高いソプラノの声にマントの上からでも確認出来る位に出るとこは出ているプロポーションを持っていた。そんなミリアが先の市街地でのミノタウロスの事を声高に批判をするとミノタウロスには劣る背丈だがそれでも負けず劣らずの筋骨隆々の体軀をマントで隠さずに黒色の鎧を着

た二十代後半位の青年がそれを注意するのであった。

ハーティア「なんだと!!！」

ミリア「あら？やる気かしら？筋肉馬鹿のハーティア？」

ハーティア「言わせておけば!!この阿婆擦れがあ!!！」

ミリア「何ですってえ!？」

サンダース「止めぬか!!!!！」

「?!?!?!？」

サンダース「今、同朋同士でやり合っでどうする？今するべき事はミノタウロスを滅ぼしたと思われる者の正体を見つけ出し、始末する事であろう？我が野望の邪魔になる事は自明の理だ。誰が行く？」

ミリア「ならば私の配下にお任せを……来なさい！妖艶なる蝶よ！サリエル！」

ミリアの言葉にミリアの後ろには宙に浮いた女性の様な姿ではあるがサイズが人の三倍程ある怪物と言っても過言では無い者が現れた。

サンダース「それは？」

ミリア「私が見つけた世界に存在する者で呼称は荒神と呼ばれた者ですわ。この者を使い、ミノタウロスを消した者を誘き出して始末してご覧に入れますわ」

ハーティア「ふん！そう、上手く行くと良いがな！」

ミリア「あら？ならば貴方も自身の配下を出せば宜しくて？」

ハーティア「はんっ！多数で行くのは卑怯者のする事だ！やるのであれば正々堂々とステゴロ「素手」かタイマン「1対1」かに決まっているだろうが！」

ミリア「ヤダヤダ これだから男は嫌だわ 古臭い勝負を好むからわたしは嫌いだわね。」

ハーティア「貴様なんぞに好かれたく無いわ！」

ミリア「いつ私がアンタみたいな脳筋を好く物ですか！？」

サンダース「止めぬか2人共。」

「はっ！申し訳有りません！」

サンダース「ミリアよ、そなたの荒神とやらでミノタウロスを滅ぼした奴を始末出来るな？」

ミリア「はいっ！ハデス様の御心の儘に。」

サンダース「良かろう。なら、サリエルには我が力の一部を貸し与えよう。」

ミリア「ハデス様のお力添えを頂き、有り難き幸せ。必ずやその者を殺して見せますわ！」

サンダース「頼んだぞ？」

ミリア「はっ！」

そしてミリアと呼ばれた赤いマントを着た女性は闇に消え、その場にはハデスとハーティアが残った。

サンダース「ハーティアよ、念の為に貴様はミリアを監視せよ。くれぐれもミリアには気取られるなよ？」

ハーティア「つまり、ミリアは裏切る可能性がある…とお考えですか？」

サンダース「左様。あの女は表面では確かに我に忠誠を誓っている様に見えるが裏では何か良からぬ事を企てているようだから…。懸念材料がある時には誰であろうと疑いを持って置かなければ待つのは己自身の破滅よ…。」

ハーティア「はっ！ハデス様の名このハーティアが完遂してご覧に入れて見せましょうぞ！」

そして、ハーティアも消え、その場にはサンダースの姿をしたハデスだけが残った。

ハデス「確実にミリアもハーティアもアレを仕留める事は出来ぬだろうな。一刻も早く白銀の英雄の本体の意識を消し、我が器にせねばならぬ…か。運命の日2001年12月24日…その日が貴様等人類の最期だ！！ククツクハハハハ！！！！」

戒『以上が今日、市街地で起きた事件です。』

巖谷「うむ、唯依ちゃんからも聞いたが夢の様で俄かに信じがたいな……。」

戒『残念ながらこれは夢では無く現実に起こった事だ。市街地に突如として現れた牛の怪物は神話に出る迷宮に棲むと言われたミノタウロスに間違いは無いと思われる。姿形は酷似していたが、武器はハルバードに楯と言う異様な組合せだったが、紛れも無く神話に登場するミノタウロスであったよ。』

巖谷「しかしだね？戒君、それがもし仮にも神話に登場する怪物：ミノタウロスとしよう。それを誰が一体何の為に、そしてどの様にして神話の怪物を出現させたかが判らないと対処のしようが無いぞ？」

戒『とりあえず、今後は様子見をして、次に何らかの行動を起こしたら捕縛する積もりだから、その時に尋問でも拷問でもして吐かせると。』

通信越しの巖谷の言葉に対し戒は目を瞑りながら今後の方針を決めた。

巖谷「なら、この件は戒君に任せるよ。君の事だから既に何かを掴んではいるが決定的な確証を得られていないって所かな？」

戒『巖谷さんは鋭いですね…… まあ、確かに決定打が無い事にはまだ動けません、十中八九、ドイツのサンダース中尉が怪しいと踏んではいるな。』

巖谷「サンダーズ中尉がか？……確かにそう見えなくも無いが、理由を聞いても良いかな？」

戒「うーん 正直に言えば、勘、だな……。」

巖谷「戒君の、勘、……かね？随分とまあ、非科学的だね。」

戒「まあ、長年と言うよりも戦人の勘はあまり馬鹿には出来んだろ？」

巖谷「確かに……。私も衛士をやっていた時は技術面に勘も使っていたから強ち馬鹿には出来んからな。……判った。サンダーズ中尉の動向は此方で出来うる限り調べて置くよ。戒君はその神話の怪物に関して調査を進めてくれ。」

戒「恩に着る。巖谷さん。」

巖谷「なに、気にするな。唯依ちゃんのお婿さんの頼みを聞かぬ訳にはいかんよ。」

戒「ちよつ！巖谷さん？」

巖谷「なに、冗談では無いぞ？戒君みたいな好青年はそうそう居ないからね？……進展があれば連絡をするよ。」

そう言つて巖谷の方から通信を切り、戒は暗くなつた通信画面を暫く見続けていた。

戒「まったく、あの人は 兎に角、アレを出せるって事は此方も魔術や魔法を使用出来る様に準備はしておいた方が得策かな？」

そう言い戒は椅子から立ち上がり執務室から自室に戻るののである。

第貳拾伍話（後書き）

作者「貳拾伍話が出来たぜ！」

戒「おい！なんだあれは」

作者「アレとは？」

戒「敵キャラが言った名前だ！某神狩ゲームのモンスターだろうが！」

作者「まあ、ね。敵の女性キャラはマントで容姿を隠してはいるけどイメージ的には灼眼のマージョリー・ドーさんの姿に髪を金から黒に変えた感じで男の方は同作品のロリコンさんことシユドナイで此方も変更点は今の所は髪型位かな？シユドナイは髪色は灰色の短髪でオールバックなんだけど、髪を短髪から長髪に変えて、髪の色を血の様な紅に変更かな。」

戒「何故その2人をチヨイスしたんだ？」

作者「好きなキャラだから、。b」

戒「あつそ。で、ハデスの容姿は今はサンダースだけど実際の姿はどうなっているんだ？」

作者「ハデスの本来の姿はエターニアのネレイドの体色を薄い黒から全てを塗り潰す様な漆黒に変更って所かな？後は持ち出したのは魔物と記述しましたが、他作品の怪物や魔獣や荒神等がこれからも出る予定になります。それと、オリキャラはまだ何人か出る予定に

ありますので。」

戒「オリジナルを入れて難航するなよな？」

作者「軌道修正をしつつ話をしつかりと作って行く積もりだよ。」

戒「まあ、こんな駄文な小説ですが感想を貰えると嬉しいです。」

作者「また、他の作品も並行して執筆しているので良かったら見て下さいm(_ _)m」

戒「次は第貳拾陸話で」

30万hit記念小説(前書き)

今回の話はラクスと唯依とのお話です。

30万hit記念小説

市街地

戒『まったく、折角の非番だと言うのに暇な奴等だな…（笑）』

唯依「ら、ラクスさん？」

ラクス「何ですか唯依さん？」

唯依「少し戒准将に近すぎませんか？」

ラクス「あら？ だったら唯依さんも戒の近くに来れば宜しいのでは？」

唯依「なっ！？／／／／／」

戒『お前達は何をしているんだ』

今の状況は俺が歩いている真横にラクスが俺の腕に恋人がする様な腕組みをし、唯依はそれを人1人分間を空けて隣を歩いてラクスに注意と言うよりも何処か嫉妬を思わせる言い方をする。何故こうなつたかと言つと………

遡る事数時間前

戒『買い物？』

ラクス「はい 日用品等がそろそろ切れそうなので一緒に来てくだ
さいませんか？」

戒「別に良いぞ。俺も煙草を切らし掛けているからな。」

ラクス「では行きましょうか」

そして、市街地に行く為に通路を歩いていると向かい側から私服姿
の唯依が歩いて来た。

唯依「あつ！戒准将にラクス中佐！」

戒「唯依じゃないか。私服姿で俺達と一緒に何処かに出掛けるのか
？」

唯依「は、はい。あの、所で戒准将達は何処に出掛けるのですか？」

戒「ああ、俺達は ラクス「デートですわ」 ……おい」

唯依「え！？」

戒「大丈夫だ。ラクスの冗談だからな？唯依も街に出掛けるのなら
一緒に行かないか？どうも、女性の日用品の買い物はよく判らない
から唯依も来てくれると助かる（ラクスが買い物って言うが真意が
判らないからな）」

唯依「は、はい！／／／／／」

ラクス「あらあら、私1人では物足りない様ですわね」

戒『他の奴が聞いたら確実に勘違いする様な台詞は止めてくれ』

ラクス「くすくす」

戒『んん！それじゃあ、行こうか？』

現在

戒『（それで今に至る訳だが、やはりラクスは協力者としてよりも異性として見てる感じがこの頃強く感じられるな）ラクス、そろそろ何処の店に行くか教えてくれないか？』

ラクス「それは彼処ですわ」

戒『ん？あ…れ…か…』

俺はラクスが指差す場所を見ると女性用の服を取り扱う店であった。勿論其処はランジェリーも取り扱っている様で確実に男の俺は気まぐずい事には代わりは無いのである。

戒『それじゃあ、俺は外で　　ラクス「戒も一緒に入るに決まってるじゃないですか」　　……本気か』

俺の言葉にラクスは満面の笑みで対照的に唯依は顔を真っ赤にして口を鯉の様にパクパクとさせていた。それをラクスはわかっているのか、俺と唯依の手を掴むとさっさと店内に入ってしまった……つか、俺は踏ん張っている筈なのに普通に引っ張っているラクスって何処にそんな力があるの！？

ラクス「、戒は此方で待ってて下さいね？さあ、唯依さん、私と一緒に参りますわよ。」

唯依「あつ！えつと！私は／／／／」

ラクスはそう言うや否や唯依を引っ張って、店内に消える。俺はラクスが唯依を引っ張ってもとい引きずって行くのをただ見てるだけであつた。

ラクス「これなんて唯依さんにぴったりだと思いますわ。」

唯依「ええっ！？こ、こんな大胆な物は、は、はは、破廉恥では／／／／／」

ラクス達が店の奥に行くと言ランジェリーが多く並ぶ商列棚にあり、ラクスが取り出したのは肩紐が無く胸の真ん中にホックが付いた物で更に布面積も少ない黒のレースでかなり際どい物である。

ラクス「そうですか？戒には意外と効果があると思いますわよ？なにせ、普段はあの様になっていますが、胸の大きい方が好きだから、唯依さんの胸は戒の好みの筈ですわよ？」

唯依「そ、そんな事はないかと／／／／／」

ラクス「唯依さんは自信をお持ちになっても宜しいのですよ？女性としてのプロポーションは抜群なのですから、コレを使って戒を誘惑して見てはどうですか？」

唯依「ええっ！？そ、そんな事出来ませんよ！？／／／／／」

ラクス「物は試しと言っじゃありませんか さっ、まずは試着ですわ」

唯依「あっ！ちよっ？」

ラクス「それでは私は少し他の物を見て参りますので、唯依さんも試着が終わったら唯依さんも衣服を見て回って見て下さいな」

ラクスは言うが早いか、さっさとその場を離れて行ってしまう。その顔には悪戯を思い付いた子供の様な笑みを浮かべて…。

唯依「どうしよう／＼／＼／＼／＼ラクス中佐が選んで下さったのは良
いけど、私にはかなり大胆な物だと思っただけ……戒准将ならば
コレを着たらどう反応を……って！私は何を考えているのよ！／
／／／／」

唯依は1人、試着室の中で考え事をしながら悶えていた。そして、
唯依の傍を離れたラクスはと言っ……。

ラクス「（ふふふ 良い具合に混乱していますわね では更に混乱
させて上げましょうかしら）戒〜」

戒「おっ！ラクスもう終わったのか？」

ラクス「はい 私の物は既に終わって今包んで貰っていますわ」

戒「そうか。（なんだ？ラクスの笑顔が物凄く恐ろしいのだが……
）（そう言えば、唯依はどうしたんだ？」

戒の言葉にラクスの目が一瞬キラッと光るが戒はその一瞬を女性用の店と言う事もあり、見逃してしまっていた。これが後に大変な（主に戒自身）事が起こると知らずに……

ラクス「唯依さんはまだお洋服を試着していますが、まだ決まらない様ですので私が戒を呼びに来たのですよ。」

戒「（ヤバい…何がヤバいつて？兎に角何がヤバいか判らないが、本能的な所で感じるのだから災難な事には代わりはない筈…此処は何とか切り抜けないと）（そ、そう言うのは女性であるラクスの方が判るんじゃないのか？」

戒の言葉は予想通りだったのか、ラクスは逃げられない様に更に言葉を紡ぐ。

ラクス「女性から見るのと男性が見るのでは見方が違いますから、戒の意見を聞きたいのですわ。」

戒「しかしだな…（これは逃げ出した方が得策か？）」

ラクス「勿論、逃げ出した場合には私と唯依さんで戒の部屋に問答無用で押し掛けますわよ？」

戒「なっ！？（エスパーか?!?)」

戒が驚愕している間にもラクスは戒の腕を女性らしからぬ力で唯依のいる試着室の前に来ていた。その際に周りの女性客の視線が戒に

注がれている事に戒自身気づいている様で居心地がとてつもなく悪かった。

ラクス「唯依さんとうですか？」

唯依「あつ、ラクス中佐。その、わたしにはやはりこの様な物は似合わないかと…あ？でもサイズの方はぴったりなんですよ！…何故ラクス中佐がわたしのサイズを知っているのか物凄く不思議なんですが」

ラクス「そんな事有りませんわよ？それに私は戒の補佐官もやっていますから、周りの部下の方の情報を知らない訳が無いですわとりあえず先ずはどの様な感じか見せて貰えませんか？」

戒「ぶっ！？」

唯依「あ、はい…って、か、戒准将！？／／／／／」

唯依はラクスの言葉に従って試着室の仕切りのカーテンを開くとラクスとその横には戒がおり、唯依は今自身の格好の事もあり、余りにも急でその場に硬直してしまった。

ラクス「まあ とても似合っていますわ！」

唯依「／／／／／」

ラクス「ほら！戒、なにをしていますの。感想を聞かせて下さいな！」

戒『あゝ、その、なんだ…唯依にとても似合っているよ／＼／＼／
／』

唯依「あ、有り難う御座います／＼／＼／」

ラクス「くすくすくす」

戒『ほ、他には無いのか？』

唯依「は、はい。大丈夫です／＼／＼／」

そして、その店で買った物の代金を支払う時にまた一悶着があったのは言う迄もなかった。

戒『さて、そろそろ基地に戻るとするか。』

ラクス「そうですわね」

唯依「……………」

戒『唯依、どうした？さっきから黙り込んで…。』

唯依「あっ！な、なんでもないです！？／＼／＼／」

戒『？？？？』

ラクス「くすくすくす」

唯依「うう／＼／＼／＼」

そんなやり取りをしながら3人は基地に戻って行った。

30万hit記念小説（後書き）

後日談

タリサ「なあ、ラクス。」

ラクス「なんですか？」

タリサ「今日の中尉の機嫌がすげえ良いんだけど、どうしたんだ？」

ラクス「ふふふ、愛しの方から贈り物でもされたのでは無いでしょうかね。」

タリサ「なっ!?!（中尉だけ狡いぞ!?!あたしだって……!?!）」

ラクス「あらあら（笑）（戒は本当に罪作りな方ですわね）」

後書き

戒『うおい!?!なんだコレはあ!?!……!?!』

作者「何が？」

戒『なに、俺に変な属性を付けていやがるんだ!?!』

作者「いや、完璧主人公だと詰まらないから特殊な感じの性癖を持たせたただけだが？」

戒「だからってコレは無いだろ!?!」

作者「別に大丈夫だろ？男は胸が好きな奴は沢山いるだろうしな？」

戒「俺の中では最悪でしか無いわ!?!」

作者「まあ、そう言われても変更はしないがな（笑）」

戒「クロス……イツカ…ゼツタイニコロス!」

作者「以上。30万hit記念小説でした。この話を見た方はご感想を下されると嬉しいです。お待ちしております!」

第貳拾陸話（前書き）

今回の話はテロリスト襲撃時の話です。何か足りないと思われた方はコメントを下されると嬉しいですよ。m | | m

第貳拾陸話

あれから数日

戒「アルゴスと暴風が合同訓練？」

ラクス「はい。インフィニティーズ戦を想定した訓練の様です。」

部屋には戒とラクスの2人だけで向かい合って座り何かを話し合っていた。

戒「遠距離戦に持ち込もうとしてもアレはステルス性能が高い上に主機部も静かな物を使用しているから現在の戦術機では相性が悪いだろうがな。」

ラクス「確かにそうですね。電子機器も通常よりも高度な物を使用し難度のある電子戦すら出来ますから今の戦術機には辛い相手ですわね。」

戒「まあな。俺の持つMS等に使われているCPは通常のものでは有り得ない位に技術的に高いからあれ位のステルスは無いに等しい物だからな…。後は何か変わった事は無いか？」

ラクス「今日ですがそろそろアレが来る頃では？」

戒「もう、そんな時か。他の衛士には悪いが、俺はBETAとテロリスト、それに奴等が襲撃して来るから守ってやる事は出来んな…。」

ラクス「ラトロワ中佐達はどうするんですか？」

戒「その事何だが、MSを主力部隊に回そうかと思っただ。イーダルにアルゴス、暴風にそしてインフィニティーズを援護させるさ。」

ラクス「では兵装は砲戦仕様と近接仕様を半々で？」

戒「それはラクスの判断に任せる。俺は少し席を外す。」

ラクス「判りましたわ。」

その頃、アルゴスと暴風小隊は……

野外格納庫

其処にいるのはアルゴス小隊と暴風小隊の亦菲であった。

ユウヤ「遠距離からならインフィニティーズを撃破出来るだろ？」

亦菲「それは難しいわ。まあ、わたし達は接近戦を挑んで惨敗だったけどあのステルス性能はとても厄介だし、主機部も静かな物だし、脚部も振動が余りにも無いから振動を感知してからって言う事も出来ないから対人戦は戒のオーガ小隊を抜けばトップね。」

ヴァリレオ「そう言われても、じゃあどうやってアイツ等と戦うんだ？」

亦菲「それを見つけて出す為に合同訓練をしてたんじゃない！」

ステラ「今は内輪揉めをしないでどうやれば撃破出来るか模索しなきゃじゃないのかしら？」

タリサ「戒ならそう言うだろうな…？」

ユウヤ「接近戦は悪手だろうな。不知火は接近戦を主体に考えているから少しキツイな…。」

その場にいたメンバーは若干雰囲気が悪くなっていた。そこに思い掛けない人物が現れた。

クリスカ「どうやら難航しているみたいだな…。」

全員「なっ!？」

ユウヤ「クリスカなんで此处に!？」

クリスカ「さあ？何故かな…。」

タリサ「テメエ惚けるんじゃない!!！」

ヴァリレオ「落ち着けて!？」

タリサ「離せっ!？VG!!！」

クリスカの言葉にタリサは飛びかかるが寸前でヴァリレオに羽交い締めにされて未遂に終わる。

そして時を同じくユーコン基地では

「……」「こちら、格納庫の制圧を終了。反抗した衛士は射殺した。」

「……」「了解。次の指示があるまでその場で待機せよ。」

「了解。」

「……」「上手く事は進んでいるみたいですね?」

「マスター、司令部まではもう少し掛かると思われます。」

マスター「わかりました。期待していますよ。」

「はっ!我等が理念の為に!」

マスター「それと、我々を招いた者は何処にいるのだ?」

「我等より先に司令部に入った模様です。しかし、あの様な者を信じて誠に大丈夫なのでしょうか……。」

マスター「全ては神の教示のままに……ですよ。」

そう言つてマスターと呼ばれた男とその部下は薄暗い通路を進んで行くのであった。

「……?」

ミリア「さあ、開幕よ。異形の者達、アンタ達の拘束を今解き放つ

てあげるわ。精々派手に暴れて下さいねえ？」

何処かの地下と思われる場所にハデスの部下であるミアアはコンソールを操作し、BETAが閉じ込められている実験用フロアのロックを外すした。

ミアア「さて、これで人間共への錯乱は良いでしょうね……。後は邪魔者の方はサリエルを差し向ければ問題は無いわね……。なにせ、ハデス様の力を受けたアラガミですから必ずぶち殺してくれるだろうしね。骨のある方であると嬉しいわね……。わたしはただ力のある方に味方をするだけ。思想が最悪でも……ね。」

ミアアは狂気に満ちた笑みを最初は浮かべるが最後の方は苦渋の表情を浮かべ、暗闇に見える無数の赤の光を眺めていた。

オーガ小队専用 格納庫

戒「此処は勘付かれていないな……。まさかこんなすぐに来るとは思わなかったな。そろそろアラスカでの活動も潮時か……。」

俺は1人格納庫でコンソールを操作し、ダガーやザクにストライクに灯を入れる。全て応用出来る物でダガーとストライクはエール装備でザクはスラッシュ装備で起動した。ラクスはユウヤ達の所に無事に向かっただろうか？今はテロリストだけの様だがいつBETAが襲撃してくるか判らんし、奴等も動いて来るかも知れん……。準備だけはしておかないとな。

戒「MS部隊は無事に出撃な……。後は……。制限解除用認証コード「最古の龍」(コレでアルカインのウェポンズドライブの制限を無く

したからBETA戦は心配無いが、問題はイーニアだな。辛くも脱出するがその代償にイーダル小隊を……ラトロワ中佐達を亡くすが、そんな事は俺がさせない……。) アル、現在の状況はどうなっている？」

アル 現在の状況はテロリストが各小隊の戦術機を接收して、反抗した衛士達は例外なく殺されています。後は辛うじてイブラヒム中尉がアルゴス小隊に連絡を入れて彼等は戦術機にて待機し、唯依中尉は武御雷で出撃した模様です。

戒 『判った。アルはドイツのデータバンクに侵入して上の連中の弱みになる証拠や資料をかき集めて置いてくれ。あんな所に何時までモイーダル小隊の皆を置いて置くのは我慢ならんからな……。』

アル つまり、あの子達を引き抜くって事ですか？

戒 『それは此からの状況によるな……。兎に角、アルはそっちに専念してくれ。俺はテロリスト共とBETA共を駆逐する。』

アル 了解しました、マイ・マスター。

戒 『任せたぞ。換装用声紋認証：墜翼：イカロス！続いて現換装固定、魔弾：タスラム、覇槍：ランス・オブ・ラゲナロク！！』

戒が機体の中で次々とコードを認証するとアルカインの背中には漆黒の翼が出現し、腰や脚部、そして肩等にミサイルポッドが現れ、手には長大な突撃槍が握られていた。

戒 『これで準備は整ったな。……黒逸戒：アルカイン出撃るぞ！！』

そう叫びフットペダルを強く踏み込むとアルカインの翼のスラスタ

ーノズルからアルミ粉を噴出させそれが燃焼し群青色の炎を吹き出して格納庫を飛び出した。戒はその身を再び血と硝煙が匂う戦場に投じた。

戒『待つているよ！イーニア！そして、覚悟しろテロリスト共！！俺の大事な仲間には指一本たりとも触れさせはせんぞ！！』

彼の者は再び戦場に踊り出る時に何が起こるのか……。そして、ハデスの仲間であるミリアは何を思い動くのか……。そして、隠れて監視として来ているハーティアはどう動くのか？テロリストのマスターとは何者か…そして目的は？ 策謀渦巻く戦場で戒は何を見出すのか……。

第貳拾陸話（後書き）

戒「今回は作者は居ないがどうしたんだ？」

効「どうやら仕事が忙しくコレを執筆し終えた瞬間にぶっ倒れてたな……。」

戒「大丈夫なのか？」

効「光るGの如くな生命力があるからその内復活するだろうな。」

戒「とりあえず、告知だけはしておくか。次の話は戦闘がメインの話に成りますが予想としては長文になる可能性があるらしいですが、御期待して下さい。」

効「では、俺の出番はまだ先になるが、第貳拾七話でまた会おう。」

戒「それでは、次回の第貳拾七話の後書きで作者がいると良いが……。」

第貳拾七話（前書き）

疑問や修正箇所があればご報告下さい。

第貳拾七話

戒が格納庫を出る少し前

ユウヤ「一体どうなつてんだ?!」

ヴィンセント「落ち着けて!今、基地の方も混乱していて連絡が取れないんだからよ!」

ヴァリレオ「しかし、そんな中でイブラヒム中佐が連絡をくれたのは戦術機にて起動待機して中尉や戒の指示に従って言ったけど、中尉はともかく戒は一体何処にいるんだ?」

タリサ「それはあたし等が一番知りたい事だろう?今は中佐の指示通りに中尉が戒の指示に従って行動する事だろ?」

ステラ「タリサの言う通りね。黒逸准将ならこの騒ぎの事を何か知っている筈だから篁中尉と合流し次第、黒逸准将の所へ急ぎましよう。」

亦菲「アンタ達って何時もこんな感じな訳?わたしの部下なんて非常時になつた瞬間に狼狽えるんだだけ?」

ヴィンセント「常にあの人は何時も非常時に備えての訓練が常になつていたからそれ程狼狽える事も無くなつたし、前は険悪な雰囲気ของทีมだったけど黒逸准将の御陰でチームとしては良い感じに纏まってきたているな。黒逸准将がいなかったら仲違いして最悪のチームになつていたかも知れないけどな...。」

亦菲「へえ〜？ やっぱり戒は凄いわね。上官としての責務をしつかりとこなすだけじゃ無く部下の様子もしっかりと見ているのだから……（やっぱ、戒はわたしの婿に欲しいわね……）」

ヴィンセントの答えに亦菲は関心し内心で良からぬ企みを新たにしていた。すると、ヴィンセントのインカムに通信が入る。

戒『ヴィンセント、聞こえるか！』

ヴィンセント「黒逸准将？！御無事でしたか！」

戒『やっと繋がったか……。ああ、こちらは問題ないがそつちこそ大丈夫か？』

ユウヤ「なに！？戒からの通信か！？」

先程のイブラヒムとの通信とは違いクリアに聞こえるその声にヴィンセントは驚きつつ戒の無事を確認し、ユウヤは皆を代表するかの様に驚きを隠さずに喋った。

ヴィンセント「ちょっと待って下さい。皆に聞こえる様にしますの
で。」

ヴィンセントはそう言うつとインカムからの通信を皆が乗る戦術機に聞こえる様に切り替えた。

戒『皆は無事でいるか？』

ユウヤ「当たり前だ！」

タリサ「あたし等の事をあんまり見くびんなよな」

ヴァリレオ「戒の鬼の様な訓練をこなしてたんだから無事に決まってるんだろ？」

ステラ「鬼って言うかちゃんと為になっているでしょ？」

戒「皆は無事な様だな…。

ヴァリレオは無事に帰れたら説教だな…。」

ヴァリレオ「ギャアアアア～?!嘘だろ!?!」

亦菲「戒、アナタ今何処に居るのよ!」

戒「ん?亦菲も其処に居るのか?」

亦菲「わたしだけじゃ無いわ。ドイツのイーダル小隊のクリスカ・ビャーチエノワも一緒にいるわ。不本意だけどね。」

戒「クリスカもそっちに居るのか?…亦菲は自分の戦術機に今乗って居るのか?」

亦菲「???…違うわ。今はF-15Eに乗っているわ。」

戒「なら、クリスカは何に今は乗っているんだ?」

亦菲「わたしと同じ物に乗っているわ。」

戒の言葉に亦菲は不思議がりながらも答える。そして戒は更に質問をし、亦菲はそれにも答え、戒はそのまま思案していた。

戒『…なら、もう直ぐそつちにストライクが着く頃だから2人はそれに乗り込んで出撃してくれ。』

亦菲「ちよつと待つて、機体が着くつて戒が乗っているんじゃないの?!」

戒『ん?ああ、亦菲達には言つてなかつたな…。相互試験の時からそうだが、MSは無人で動いているんだ。だから其方にストライクが着いたら2人はそれに乗り込んでくれ。…心配しなくとも全てに共通して副座式になっているから大丈夫だ。』

戒の言葉に皆は驚いた。勿論今までも戒の行動に驚いていたが今回はそれ以上である。戦術機は基本的には人が乗らなければ動かせないのだが、戒の言う無人で動かせる事は前代未聞の事である。それが実用化になっていると発表等をすれば衛士が要らないと暗に言っている様な物であるからだ。

ユウヤ「戒、アンタは一体…何者だよ。」

戒『そんな事…決まっているだろ?お前達の…ユウヤ達の上官の前に仲間だろうが。』

ユウヤ「?!…悪い。」

戒の言葉にユウヤはバツが悪い顔をした。

ヴァリレオ「それで戒は今何処に居るんだ?」

戒『ん?そう言えば亦菲も聞いてたな…。俺は今ロシアの基地に向

かっているぞ？道すがらにテロリスト共が襲撃して来たが全て墜としてやったがな（笑）」

戒の笑いの入った言葉にヴァリレオだけでは無くこの場にいる全員が戒を襲撃したテロリストに同情の念を抱かずには居られなかった。そんな事をしていると格納庫の入口に1体の機体が下り立っていた。そしてその下り立った機体は格納庫に入り、ストライク・イーグルの近くに来るとエアロックの抜ける音と共にコックピットが開きワイヤーラダーが降りてツインアイの光が消え、機体色は白を基調とした物が灰色一色となった。

ステラ「黒逸准将、今し方入って来た機体がそうですか？白色の機体で先程灰色一色に成りましたが…？」

戒「ああ、ソイツだ。悪いが亦菲とクリスカはそれに乗り込んでくれ。亦菲がサブでクリスカがメインでな。」

亦菲「戒がそう言うのならしょうがないわね…。」

クリスカ「わかった。」

戒の言葉に2人は直ぐ様今乗っているF-15から降りるとストライクに乗り込んだ。その際にコックピットの作りが戦術機とは違う事に驚いていたのは当たり前である事を此処に記す。

戒「それじゃあ、通信を切るがこの後は唯依に任して置くが、くれぐれも無茶だけはするなよ？」

タリサ「あたし等はそれを戒に言いたいけどな…？」

戒『ふつ、言うじゃないかタリサ？心配はせずとも大丈夫だ。今向かっている所でラトロワ中佐達と合流したらお前達の所に合流する積もりだからその間は唯依の指示にちゃんと従っているよ？』

俺がそう言つと全員が元気良くそして通信越しでも力強さを感じさせる声で返事をし、俺はそのまま通信を切り、アルカインの速度を上げイーニア達の所に急いだ。勿論の事、後々の事を考えてテロリスト共が強奪した戦術機をミサイルやランスで次々に墜としながらだ。

イーダル小隊格納庫内

ラトロワ「シエスチナ少尉、ナスターシャ大丈夫か？」

ナスターシャ「問題有りません。」

イーニア「だ、大丈夫です！」

ラトロワ「今の所は大丈夫の様だな……。しかし、この状況下でよくテロリスト共が潜り込んだ来た物だな。奴らの狙いは一体何なんだ……。いや、今は2人を逃がし脱出する事を優先した方が良かった……。」

ラトロワは2人の安否を確認しつつこの事件の事を考えるが頭を振り今はこの状況下から脱出する方が先決だと判断し、イーダル小隊の使う戦術機 S u - 37 にそれぞれ乗り込んで起動した。

ラトロワ「全員無事に起動したな？直ぐにこの場を離脱し、戒准将

達と合流するぞ！（この状況では戒に頼るしか無い……わたし1人では高が知れているし、この子達を守ってあげられない……せめて戒と会うまで守り抜いてみせる……例えこの命を代償にしても。）」

「了解！！」

ラトロワが心中で決意を固めてイーダル小隊は格納庫の隔壁を破壊して脱出した。そして、向かうはクリス力達がいると思われる野外格納庫 全員は無事にクリス力達と合流出来るのか？

アラス力基地森林地帯

戒「ええい！鬱陶しい！」

俺がイーニア達をリーダーに捉え現場に急ぐ為に近道になるこの森林地帯を通った瞬間に狙ったかの様な待ち伏せしており数にすれば30機程の戦術機が隠れていた。

「貴様は我等の崇高なる目的の妨げだ！！！！」

戒「何が崇高なる目的だ！貴様等が望む物がこんな形で手に入れる事が出来る物か！！」

ズツガアアアアン！！！！

戒は30機を相手にし、ミサイルをマルチロックで的確に当てるが隊長機と思われる機体は周りの手下が身を挺して守っていた。

「なら、貴様は何をして何を望むのだ！我等は人が平等である事を

示す為に動いているのだ!!」

戒『俺はこの地からBETA共を葬り去り、この悲しき輪廻から救う為に戦っているんだ!!!』

、斬!!暫!!惨!!、

アルカインの両腰にあるヒートソード、「インフェルノ」と「ボールケーノ」を使い隊長機に斬り掛かったがまたしても手下達に阻まれるが意に介さないとばかりに一刀の下に切り捨てたり胴や腹の部分を横薙ぎに切り裂いた。鉄で出来ている筈の戦術機を切り裂いた断面は赤く熱されており所々が溶けていた事からその剣が放つ熱量が凄い事を物語っている。

「悲しき輪廻だと?貴様、ふざけているのか!!!」

戒『ふざけているのはそつちだろうが!貴様等がこんな事をしなければ多くの衛士達が死なずに済んだ筈だ!』

「大義の前には犠牲は付き物…仕方の無い事だ!!」

戒『……なんだと?』

「!?!?」

テロリストの言葉に戒は自身のナニかがキレるのを感じる。そして、機体越しても判る雰囲気の変化を隊長機は感じて直ぐに距離を取った……だが……

戒『「フレイム」のみを換装固定し、残りの全武装を換装…龍騎兵「ドラグーン」、龍牙兵「ファンク」、加琉羅を二門へ換装…』

俺は今自身の中のある物がキレるのを自覚した。これが所謂堪忍袋の緒が切れたと言っのたろうな…。上空でイカロスの装備等を戻し、改めて換装しなおした物はSEEDや00の時代の武装を俺なりの手を加えて完成させた物で地球の重力下にあっても落ちない様に00の技術をドラグーンに、ドラグーンの技術を00の武装へと掛け合わせて作り上げたのがこの龍騎兵と龍牙兵である。そして換装を終えたアルカインは墮天使の様な姿に変わっていた。

「なんだ！その機体は！！我々が聞いていた物とは違うでは無いか！！」

戒『コイツは殲滅を主眼とした砲撃仕様の装備だ…貴様等の言い分は判りたくも無いしほんとは相手にするのも面倒臭い…が、俺の仲間や家族達に害を成すとなれば事情が変わる。貴様等は俺が一瞬で……コロス！！！！』

「なっ？！はっ、速い！？」

戒はそう言つと背部ユニットの遠隔誘導兵器「ドラグーン」を16基と同じ誘導兵器の「ファンク」を両肩とリアスカートから8基…計24基を飛ばし、周りの手下達をドラグーンで蜂の巣にし爆散させた。

「貴様は何故其処までの力を持っていながら力無き人々を危険に晒すのだ！？」

戒『お前達には到底理解は出来ない…俺は全てを救うなんて事は

言わない。ただ、自身の手の届く所までしか救えないだけだ。それに人々と言うが、俺は仲間や家族以外はどうでも良い質でな？人々を10とするならば俺は9（他者）を切り捨てて1（大切な者）を救うだけの偽善者で悪者だろうな……例えどんなに蔑まされたとしても一生変わらん。』

「偽善者と判っていないながら、それに殉ずるか！！我等の行く道に貴様はやはり障害の他にならない！！」

戒『なら、その胸に夢想を抱いて……シネ！！！！』

「なっ?!しまっ……」

戒『貴様等の事は忘れん。道は違ったがお前達は1（大切な者）を切り捨てて9（他者）を救うと言う全くの真逆だったが俺が違う形でお前達と会っていたなら、道は違ったかも知れんな。』

戒はフアングで貫かれ爆散して墜ちる隊長機を見ながらそう独白した。

戒『……時間をかけ過ぎたか……。イーニア達の下に急がなければいけないな……。』

俺は周囲に展開していたドラグーン等を回収して、イーダル小隊の使っていた格納庫に向かった。

時間を少し遡った野外格納庫にて

唯依「アルゴス小隊は無事か！」

ステラ「篁中尉、アルゴス小隊は全員無事です。…それと暴風小隊の亦菲中佐とクリスカ少尉も一緒です。」

唯依「わかった。しかし、戒准将のストライクに2人は乗っているのか？」

亦菲「そうよ。このコックピットは副座式で2人で乗る事が出来る様になってるわ。」

クリスカ「それにしても先程の戦術機はなんだ？テロリスト共に他の小隊は戦術機を奪われたと言うのか？」

唯依「奴等最初は此方の所属する服を着て侵入し各小隊の戦術機を接收し、抵抗した人物は全員殺された。」

「!?!?!?」

唯依の言葉にその場にいた全員は驚愕した。

ユウヤ「殺された!?!?おい!?!?じゃあほとんどの小隊が全滅したって言うのか?!?!」

唯依「そうだ。今現在確認出来ている残存する小隊はインフィニティーズ小隊と暴風小隊にイーダル小隊そして、戒准将のオーガ小隊だ。暴風小隊は崔中佐のみになります。」

クリスカ「イーニアは無事なのか？」

唯依「詳しい事はまだ判らないが戒准将が今イーダル小队と合流するべく向かっている最中だ。合流でき次第に此方と合流すると言われた。我々はその間に現状把握をしっかりとして行動する。」

タリサ「現状把握もなにも今の時点で基地のあちこちは混乱しているんだから把握もなにもあったもんじゃないだろ？現状は混乱して指揮系統が駄目な状況だろ？イブラヒム中佐や戒の通信が来ただけでも奇跡な訳だし……。」

唯依の言葉にタリサは当たり前前の言葉を言った。

ユウヤ「確かに混乱はして指揮系統も麻痺して使い物にならないけれど、そんな状況の訓練を俺達はやってきたんだからな？」

ヴァリレオ「それにそこんところをしっかりとしないと戒からの地獄メニユーが待っているしな」

アルゴス小队「それだけは絶対に回避しないとだ（わね）な！！」

戒の行く地獄メニユーの訓練が余程嫌なのかアルゴス小队が必死さが伺える声で言う。

亦菲「そんなにキツイ物なのかしら？」

クリスカ「わたしも判らない」

唯依「んんっ！！兎に角！今は混乱している所で無事なのは我々と

戒准将の所だけになる。一時この場から離脱をし、戒准将の所への合流が、テロリスト共の鎮圧をしつつ総司令部の奪還を行う。」

タリサ「よっしゃあ！いつちよ暴れるか！！」

ステラ「程々にね？」

亦菲「総司令部はどうでもいいわ。わたしは早く戒に会いたいわ！」

ヴァリレオ「中佐は戒が狙いかい？」

亦菲「当たり前よ！戒はわたしの婿なんだからね！」

「「「！?!?」「」」

亦菲の言動に戒に好意を寄せている者は驚愕した。

唯依「い、いい、亦菲中佐何を言っているのですか!?!」

クリスカ「そ、そうだ！そもそもお前は戒と面識は余り無い筈だぞ?!」

亦菲「何であんた達にそんな事を言われなといけないのよ?」

タリサ「な、何でもだ!！」

亦菲「ふくん なる程ねえ あんた達も同じか……」

「「「なっ!?!?// // // // // // // // // //」」

亦菲の言葉に3人は更に驚愕し赤面する。

タリサ「だ、だったら何だっというんだ！」

亦菲「なに？ただ単なる恋敵でしょ？まっ、仲間だけどね？わたしはこの計画が終わったら戒の下に就ける様に頼む積もりよ。」

唯依「なっ！？そんな事出来る訳無いです！！！」

亦菲「それは判らないわよ？戒の事だから優秀な人材や気に入った人を転属扱いで自分の所へ置きそうだけど？」

唯依「わたしがそんな事させません！！！」

亦菲「なによ？あんたにそんな権限でもあるって言うの？戒の補佐官でもあるまいし。」

唯依「~~~~~っ！！！」

亦菲「なによ？やる気？！」

ユウヤ「その話はこの混乱が収まってからにしろよ！今はこの場で生き残って奴等を鎮圧して総司令部を奪還するんだろ！！！」

ユウヤの言葉に皆は黙り、ヴィンセントは違う様だが……

ヴィンセント「ユウヤが全体を見てるなんて……今日が俺の命日か？」

ユウヤ「ヴィンセントてめえな！！！」

ヴィンセント「ハハハ！頑張れよ？お前を変えてくれたあの人に恩を返せる位にな？」

ユウヤ「当たり前だ！」

唯依「んんっ！では全機出撃！」

そんな中、漸く落ち着いたのか唯依は全員に指示を出し、全員は格納庫から発進した。そして、場所は再びイーニア達の所に戻る。

森林区画上空

イーニア「戒を見つけたよ！！！」

ラトロワ「なに！それは本当か？！」

ナスターシャ「ラトロワ中佐?!後方からラストチカ8機が接近中です！」

ラトロワ「なに?!8機だと?!?此方は3機だと言うのか……逃がす積もりは無い……か。しかし、戒の所まで行けば……?!」

ラトロワ達が最大速度で飛行しているにも関わらずテロリストの乗るラストチカは距離を離される所か徐々に距離を縮めて来て突撃銃を今にも発砲しよう構え此方に迫る。しかしその瞬間遙か上空から赤紫の巨大な光が目の前にいたラストチカを飲み込み地表を抉りながら爆散させた。

ラトロワ「何が起こった?!」

時間は少し戻る

森林区画上空凡そ1000?地点

戒『まったく、すれ違いに成るとはな　…まあ収穫が無かった訳じゃないがな……』

俺がロシアの基地に行くとテロリスト共は居なく不審に思つて基地に入ったが人つ子1人居らず不気味さを醸し出していたが取り敢えずデータベースに侵入して色々調べると出るは出るロシアの汚い裏が大量にだ。イーニア達を後々此方に引き込む時の交渉材料になる物が沢山だ。人体実験や非合法な研究に隠匿されていたBETAとの感応実験等と国に取つては公表されたら不味い物が大量に見つかった。嚴重なプロテクトが掛けられていたが俺の使う世界の技術自体が違うからか簡単に突破出来た訳なんだがな……。

戒『取り敢えず早く戻らないとだな……!?!?』

俺が機体を下に向けて降下するアラームが早速鳴りモニターに最大望遠で確認すると3機のチェルミナートルが8機で編成されたラストチカに追われているのが確認出来た。

戒『イーニア達か!?!?間に合えよ?!?』

そして俺は加琉羅を構えて1機のラストチカに照準を合わせて引き金を引く。同時に加琉羅の銃口から赤と緑の色が混じった巨大な光条が走り1機のラストチカを飲み込み爆散させる。

戒『よし!先ずは1つ!』

俺は尚も速度を落とさずにイーニア達が乗っていると思われるチェルミナートルとテロリスト側のラストチカの間で機体を割り込ませた。

そして現在に戻る

戒『全員大丈夫か？』

ラトロワ「戒…なのか？しかしその機体は一体？」

戒『話は後だ！今は後退する事だけを考えるんだ！』

ナスターシャ「ですが連中は主機部を換装した様子で引き離せないのです！！」

戒『なる程な…、だからラストチカでチェルミナートルを追って来れた訳か。』

イーニア「戒、クリスカは？」

戒『今はアルゴス小隊と一緒にいるよ。取り敢えずこの馬鹿共を沈めないと先に行けないみたいだな？先にユウヤ達の下に行け！』

ナスターシャ「何をい　ラトロワ「任せて大丈夫か？」　中佐何を？！」

ラトロワ「ターシャ、戒なら大丈夫だ。まあ、最初は戒と合流した直後にターシャ達を預けてわたし自身が戦う積もりだったのだが、それも無理みたいだからな…。」

戒『まったく、貴女は一人で無茶をしようと　ラトロワ「病み
上がりの言う事じゃないとわたしは思うが？」…痛い所を突くな
まあ、後は此方に任せて先に行け。片付き次第其方に向かう。』

ラトロワ「判った。全機ビーコンに従い移動するぞ！」

そしてラトロワ達がこの戦域から離脱する間、敵方は何らアクションを起こさずに此方に敵意を向けて来ていた。危険度で此方を叩いた方が良策と見た様だな…。

「貴様は何者だ？」

戒『答える義理が有るとでも？』

「わたしはクリストファー元少佐だ。」

戒『元軍人がテロリストに成り下がる…か。』

クリストファー「わたしは人々の安寧の為立ち上がったのだ。だから今は敢えて汚名すら甘んじて受ける覚悟で此処にいるのだ！」

戒『生憎、貴様等と話をしている暇は無いのでな。さっさと終わらせて貰う！？』

加琉羅を構えて放つが今度は散開してしっかりと回避をして突撃銃を発砲して来た。アルカインの装甲材質は特殊なPS装甲を使用している為に直撃したとしても問題無いのである。

戒『まったく貴様等は人間を相手にしてる暇があればBETAの駆

逐でもすれば良かろうが!!」

クリストファー「そのBETAが居なくなったとしてその後の人類は何をするか判るか?! 貴様も判っている筈だ!! 人は所詮争う事しか知らぬ!!」

戒「ちい!!!!」

俺は加琉羅の二挺を送還し、両腰にマウントした二本のヒートソー
ド「インフェルノ」と「ボルケーノ」を抜き放ち一息で近くを飛び
過ぎるラストチカ2機の管制ユニットを狙い横薙ぎに切り裂きそ
の場からスラスターを吹かし離脱すると同時に爆発する。

戒「だからと言ってこのような手段を取った所で貴様等も同じ事では
無いか!!」

クリストファー「貴様等と同じでは無い!! 我等は人々の平和を
現させる為に戦っているのだ!!!!」

戒「だからと言ってテロをするのはまったくの真逆の行いだと…矛盾
していると言う事に何故気付かない!!」

クリストファーは突撃銃を残存しているラストチカと共に鉛の雨
を此方に降らして来るが全てを高G機動を取りながらファングを射
出して胸部を刺し貫いて更に2機撃墜する。

クリストファー「それは承知の上だ!! 今の々には劇薬が必要な
だ!! 人々の意志を統合する為の!!!!」

クリストファーの言葉を聞きながら戒はファングを戻し変わりにド

ラグーンを射出して緑色の光条を幾つも放ちクリストファーを残し他のラストチ力を墜とした。

戒『そんな物が今必要かどうか…軍人の責様なら判っている筈だろうが……!』

クリストファー「必要だからこそテロと言う劇薬を使っているのだ!」

戒『この……戯けがあ……!』

クリストファー「なっ?! うわああ……!」

俺は叫びと共に背部スラスターを一気に吹かしクリストファーに接近すると機体を跳躍ユニットごと切断し、地面へと墜ち、爆発するのを見届けた。

戒『世界には未だ劇薬が必要な時では無いと言っのが判らないか……。お前達は揃いも揃って意志の統合や安寧と謳うのか……その前にまだやるべき事がある筈だと何故判らんのだ……くっ!』

俺は黒煙が上がっている所でもう答える事の無いクリストファーに向けて言葉を投げかけ、ギリツと歯を食いしばりその場を後にする。

アルゴス小队

イーニア「クリスカあ……!」

クリスカ「イーニア! 無事だったのね!」

イーニア「うん！戒がイーニア達を守ってくれて、戒がイーニア達を先にクリス力達の所へ行けって……」

ユウヤ「戒はどうしたんだ？」

ラトロワ「我々を逃がす為に1人で7機のラーストチ力を相手にしている。」

タリサ「なっ？！戒を1人にして大丈夫なのかよ！！」

ラトロワ「仕方が無いだろ！！わたしだって戒を1人にして逃げるなど死んでも御免だ……しかし、戒はわたし達に逃げる様に……」

タリサの怒鳴り声にラトロワも叫びに近い声で反論をするが後半に入るにつれ弱々しい声になっていた。

ユウヤ「タリサ、そこらにしといてやれよ。中佐だって葛藤がある筈なんだからな……？」

タリサ「……悪い。」

唯依「今は戒准将を信じるしか無い。わたし達は予定通りにテロリストの鎮圧と総司令部の奪還を続行する。」

ヴァリレオ「だな。取り敢えず、今は俺達に向かって来ているお客さんを盛大に出迎えてやらないとだな……？」

クリスカがイーニアのチェルミナートルに乗り、亦菲がストライクのメインになりアルゴス小隊も各々の武装のチェックをし、F-15C ファイティングファルコン24機を迎撃する為の準備を始

める。

唯依「多いな…。」

ステラ「1人辺り5機を相手にすれば問題無いわね。」

タリサ「5機と言わずあたしが全機墜としてやるよ！」

亦菲「それはアンタには無理よ？わたしが変わりにやってあげるわ！」

タリサ「なら勝負と行こうじゃねえか！！！！！」

唯依「なっ？！2人共待ちなさい！！！」

タリサと亦菲はそう言って不知火とストライクのスラスターを吹かして唯依の制止の声も聞かずに先行してしまった。

その頃戒は……

戒『面倒臭い相手だな……？』

サリエル「キュオオオオオ！！！」

戒がイーニア達の後を追おうとして機体を飛ばしていると後方から巨大な熱源体が接近している事を知らせるアラートが鳴りモニターで確認すると戒の元いた世界のゲームに登場するモンスター「アラガミ」のサリエルが迫っていた。

戒『さっさと退場して貰うぞー!!』

俺は通常よりもサイズのデカイサリエルにフアングを向かわせて放ちサリエルの体に幾つもの傷を負わせたが瞬時に負った傷を修復するのを確認した。

戒『高速治癒だと!?ちい!!』

戒がフアングを一旦戻して加琉羅を両手に換装した瞬間、サリエルの目が怪しく光り自身の頭上より紫色の幾つもの光条が降り注いで来た。

戒『(高速治癒をして来るのであればそれを上回る速度で攻撃するか一撃で消滅させるしか無い…か。)厄介な奴め!!』

サリエルに向けて加琉羅の銃口を向けて撃つがヒラリと体を揺らして躲す。その際に紫色の球体を滞空させる。

戒『貴様の攻撃等知っているわ!!!!』

俺はスラスターを吹かしてサリエルに接近し蹴りを胴体に決め吹き飛ばす。

戒『今だ!いつけえええ!!!!』

俺は加琉羅を二挺構えて放ち赤と緑の混じった巨大な高エネルギーの奔流がサリエルを呑み込みこんだ。その余波で周囲の森が紙切れの様に吹き飛んだ。

戒『どうだ？』

戒は爆風により舞い上がった砂塵の中を油断無く睨み付け、反応を探すがどうやら先程の一撃で消滅出来た様子であった。

戒『反応は…無しか…。しかし、加琉羅を二挺同時発射は威力が有りすぎて危険だな…。着弾地点は大穴が開いてる周りは更地になってしまっているから万が一の時以外は使用禁止だな…（少し自重せねばいかな…。）』

そして今度こそ機体を反転させ、戒はイーニア達の下へと飛び去って行った。

そして時間を少し遡りアルゴス連合は

亦菲「邪魔よ！！」

亦菲はF-16Cの管制ユニットをストライクのビームライフルで1機また1機と撃ち貫いていく。

タリサ「墜ちろおー！！！！！」

そして、タリサはその近くで長刀を振るい敵機を両断する。

ユウヤ「タリサ！亦菲！出すぎだぞ！！！」

タリサ「遅えぞユウヤ！早くしないと獲物はあたし等が貰っちゃまう

ぞー!!」

亦菲「タリサ！そっちに行つたわよ!!」

タリサ「うおりゃああー!!」

亦菲の言葉に反応してかタリサは振り向き様に横薙ぎに払いファイティングファルコンを上半身と下半身に分断した。

タリサ「サンキュー!!」

ヴァリレオ「おいおい、さっきまでの喧嘩越しの2人が息のあつた動きをするじゃねえかよ」

ステラ「なにかあつたみたいね？」

クリスカ「そんな事よりも今は目の前の敵を倒す事が先決だ！」

ヴァリレオ「そりゃあごもつともな意見だなつと!!!!」

後ろから追いかけて来たコウヤ達はタリサ達の援護をしながらファイティングファルコンを次々に撃墜していき当初24機いた筈の機体は12機と半数にまで減つてしまつていた。

ジゼル「くっ?！何なんだ奴等は!？我が精鋭部隊が瞬く間に半数までに減らされるだど!？ただの試験小隊の集まりでは無いのか?」

わたしは今夢でも見ているのか!？我々の部隊の中でもかなりの腕を持つ選りすぐりの衛士達がたつたの試験小隊の戦術機9機に内1

機は見た事が無いタイプで戦術機とはまったく形状が違い性能すら現存するどの戦術機よりも上を行っており手を焼く相手だ。

タリサ「あたし等に喧嘩売った事を後悔させてやるぜ!」

亦菲「アンタ達は生意気なのよ!!!」

ジゼル「くっ?!　ズツガアアアアン!!!!!!!　な、なんだ!？」

全員が巨大な爆発音に驚愕しその音の方向を見ると此処からでも確認出来る位のデカさのある光が地表に刺さる様にして上空から放たれていた。

タリサ「なんだありやあ!？」

ヴァリレオ「案外戒の仕業だったりしてな」

ユウヤ「あの人ならあり得るから言っな」

ステラ「ほんとに規格外な人ね…。」

その光景を目撃したアルゴス小隊は各々の反応を見せ冷や汗を掻く者もいた。

ジゼル「くっ!!　何が起ころうとも我々はっ!!!!!」

亦菲「ユウヤ!？」

ユウヤ「なにっ?!」

ズツツガアアアアン!!!!!!!!!!

ステラ「嘘っ?!」

ヴァリレオ「マジかよ?! ジャパニーズ神風をやらかしたぜ!？」

ユウヤ「イーフェエエエイ!!!!!!!!!!」

12機の内の1機がユウヤに自爆特攻を仕掛けたが亦菲がユウヤの前に躍り出て自らを楯にしてユウヤを守った。その瞬間、ユウヤの絶叫が周囲に木霊こだました。

亦菲「まったく、男なんだから一々声を張り上げないでくれる? それでも戒の部下な訳?」

「「なっ?!」」

ユウヤ「無事なのか!？」

亦菲「当たり前よ! それに機体にも損傷は見当たらないわね...」

爆煙の中から亦菲の声が聞こえストライクが飛び出して来た。

ジゼル「なっ?! 無傷だと!？」

亦菲「戦術機に乗っていたら墜ちて重傷は免れなかったけど戒の作った機体がそう簡単に墜とされてたまりますかっかね!.....それ

にもうアンタ達の負けね？」

ジゼル「どういう…!？」

亦菲の言葉にジゼルは疑問を浮かべたが敵機の接近を知らせるアラートがけたたましく鳴り直ぐ様その場から跳躍ユニットを吹かして離れるが他の者は反応が遅れ上空から注がれた幾筋もの緑色の光条に撃ち抜かれて爆散した。

ジゼル「光学兵器だと!？」

戒「君が先程のテロリストの実働部隊の指揮官って所か？」

空から下りて来たのは漆黒の塗装をされたアルカインとその周りに滞空しているドラグーンであった。

ジゼル「だったらどうだと言っただ! (なんだあの機体は?! 戦術機とは姿が違い過ぎだし跳躍ユニットでも不可能な滞空をし飛び続けているだ!?! あの機体は空を飛べない筈…何故だ!?!)」

ジゼルは戒の質問に食って掛かるが内心では驚愕と困惑に彩られていた。自身の知る戦術機とはまったく違う形状フォルムで跳躍ユニットでは短時間の飛行が可能なのに対して戒は滞空をしながら尚且つ飛び続けている姿に度肝を抜かれる思いであった。

戒「ん…? その声は…アストライアスのジゼル・アジャーニ少尉だな…。」

ジゼル「わたしの名を何故知っている?!」

戒「一介の衛士でも覚えて置くのも仕事でな?」

ジゼル「貴様…何者だ!!」

戒「テロリストの前に衛士であるなら俺の事を知っていると思ったのだが?」

ジゼル「なんだと?!」

戒「日本帝国斯衛軍所属黒逸戒だ。」

ジゼル「なっ?!あの黒逸戒だといふの?!日本帝国の鬼神の?!」

戒「俺の二つ名ってマトモな物は無いのか?」

ジゼル「わたしが知るか!!」

戒「ま、まあいい……で、投降する意思はあるか?ジゼル少尉…いや、ウーズレム・ザーナーと言った方が良いか?」

ジゼル「なっ?!何故その名を知っている?!」

戒「さあ…な?知りたければ投降するか…俺を墜とす事だが後者はお勧めしないな…。戦力差は既に明白な訳だからな?それに無駄な殺し合いは俺はしたく無い。」

ジゼル「無駄だと?貴様等はそう言つのか!?!」

戒『投降はしないと…なら、実力公使で黙らすだけだ…!!!!』

ジゼルの乗るファイティングファルコンが戒に迫った。

”暫”惨”斬”…!!!!

ジゼル「キャアアアアア!?」

戒はヒートソードを振るいジゼルの機体の四肢を切断し更に自爆されない為にS-11が埋め込まれた腰元の一部を爆発しない様更に斬り飛ばした。

戒『はい、確保つと…全員近くの森林に隠れて話を少ししようか。』

そして、全員が近くの森林地帯に上手く機体を隠し機体から降りると先に降りていたのかファイティングファルコンの前に戒が居りコクピット部の上に立ち中にいるジゼルに出る様に施していたが中々出てこないでいた。

ユウヤ「ソイツ出てこないのか？」

タリサ「さつさと引きずり出してやれば良いだろ!」

ステラ「確かにそうね…時間もあまり無い事だしね…。」

戒『それはそう何だが、あまり手荒にするのは俺は好きじゃないからな……。よし!』

ヴァリレオ「どうした?」

戒『外側からハッチを開ける!』

タリサ「ぶち破るならあたしにやらせてくれよ!」

戒『阿呆。ハッチを開けるのにぶち破ってどうするんだ?』

ステラ「ではどうやって?」

戒『勿論…こうするんだよ…っと!』

そう他の者達とは違い機体の近くで何かしていたと思ったらその言葉と同時に機体のハッチが独りでに開いた。

ラトロワ「今一体何をしたんだ?」

戒『ん?ただのハッキングだが?』

「はっ?!」

戒の一言にその場にいた全員が一つになり驚愕の声を上げた。そんな事を戒はどこ吹く風と言う感じで開け放たれたコクピットの中を覗きこんだ。その瞬間……

”ダアアアアアン!!!!!!”

一発の銃声が鳴った……

クリスカ「戒?!」

唯依「戒准将?!」

タリサ「テムエー!!」

ジゼル「敵を撃って何が悪い!!」

ユウヤ「コイツ!!」

戒『お前等……少し落ち着け!!』

「?!?!?!?!」

戒の一喝にジゼルを取り押さえ様としたユウヤ達は勿論撃つた本人であるジゼルも驚きその動きを止める。

イーニア「戒、怪我は大丈夫なの?」

戒『心配すんな。義手の方で弾は弾いた。それに手榴弾を間近に受けてもしぶとく生きてんだから……な?』

戒は近くに寄って来たイーニアにそう言うと義手では無い方の右手で頭を撫で、コクピットの下にいるジゼルの所へと近付くが唯依達から制止の声が掛かるが素知らぬ顔でジゼルと向き合った。

戒『こっやって面と向かっては初めて……だな?』

ジゼル「貴様は何が目的だ!わたしの名を知っている事も含めて教えて貰うぞ!」

タリサ「テメエ！今の状況が……」

戒「タリサ、直ぐにそうカツカツするな。そうだな……。目的と言われても答え辛いな……。そもそも俺は明確な目的はあまり持ち合わせていないからな？」

ジゼル「何故だ！？あれほどの機体を作り上げる事が出来る貴様が何も目的が無いとほんとにそう言うのか?!」

戒「君ら程の大層な思想は持ち合わせていない物でな？」

ジゼルの言葉に戒は肩を竦ませて挑発的にも取れる言葉で答える。

ジゼル「ふざけるな!!!!ちゃんと答える!!!!」

戒「ふざけているとは心外だな……。俺は極めて真面目に答えている積もりなのだが……?なら逆に問おう……君らは……ジゼル達の指導者マスターと呼ばれる者は何を求めてテロリストの様な真似をした？」

ジゼル「なっ!?!何故その事を知っている?!」

戒「その位調べてに決まっているだろう?」

クリスカ「戒、一体なんの事だ？」

戒「今回のテロ騒動はな?とある一派による物だ。」

唯依「とある一派……ですか?それは……一体……」

戒「キリスト教恭順派と言う派閥が在るのは皆は知っているよな?」

ラトロワ「確かBETAを神として崇めている派閥だったか？」

戒「そうだ。此処に来る前に声明が出されていたがその中でこんな言葉があった。BETAに奪われる事に抵抗してはいけません、彼等は神の遣いたもつた使徒、彼等の行いは神のご意志である……ってな？どうもアレを神格化して祭り上げている様だがあんな遣いは俺だったら御免被りたいな……。」

亦菲「当たり前前よ！何が神の遣いよ！アイツ等はわたし達の故郷を……仲間を蹂躪しているのよ！」

ジゼル「指導者^{マスター}が間違いを言っていると云うのか?!」

戒「まっ、簡単に言えばそうだな。前々から判っている事はアレは外宇宙から飛来した炭素生命体で俺達の事を生命体と認識しない事位かな……。後はハイブ……アレを潰す事でBETAの行動は幾らかは抑制が効くって事だな……。」

ジゼル「人の傲慢さに神が怒り彼等を遣わしたのでは無いのか!？」

戒「なら、ジゼル……君はBETAを神が遣わした使徒と言われ、即座に頷けるのか？君達を難民たらしめた奴等をだ……。」

ジゼル「それは……。」

唯依「なっ……これは!?!戒准将!!!此方に接近する機影がありま

す！！！！！」

戒「判った！とりあえず、ジゼルは俺の機体に乗って貰い、皆は唯依の指示に従い行動するんだ！」

唯依「何を言っているのですか？！戒准将はどうなさるのですか！」

戒「奴等を引き付ける。」

ラトロワ「危険過ぎではないか？！わたしは反対だ！！囿役もそうだが、ソイツと一緒に乗せる事もだ！」

ユウヤ「そうだぜ！第一コイツは戒を殺そうとしたんだぞ！！！」

戒「じゃあ、誰か一緒に連れて行ってくれるのか？それに機体の能力も此方が上で帰還率も高いから心配はいらないぞ。それにお前達は他のテロリストの騒動もそうだが此処で時間を浪費している暇など無い事が判らんのか！！！！！」

戒の言葉にその場の全員は口を噤んでしまふ。

戒「……文句は無い様だな。全員、起動準備に入れ！」

「「……了解！！！」

全員は直ぐ様気持ちを入れ替えて戦術機に搭乗し機体に灯を入れた。

戒「じゃ、行くか？」

ジゼル「…何故この場でわたしを殺さないんだ？」

戒『俺の話を聞いていなかったのか？無駄な殺生はしたくは無いと
言ったんだがな？勿論、自殺はさせないからな？しようとするなら
俺が阻止してやる。』

ジゼル「何故其処までしてわたしを救おうとするんだ！わたしの命
だ！どうしようもわたしの勝手だろ！！」

戒『まあ、確かに勝手だな……。それと最初の質問だが、救う事に理
由があるのか？いると言うならば生きていて欲しいからでは駄目か
？そう言ってもその命を捨てると言うのなら俺が拾ってやる。』

ジゼル「お前……」

戒『兎に角、今は一緒に機体に乗って貰えるか？』

ジゼル「既に捕虜と同じ様な物なのだから拒否権は無いのだろ？」

戒『俺はそんな積もりは無いぞ？むしろこの後からのジゼルの処遇
は俺の所で仲間として来て貰う様に少し裏技を使う積もりだよ？』

ジゼル「不思議で変わった人ね（笑）」

戒『やっと砕けた話し方をしてくれたな。そろそろ奴さんも待ちく
たびれてきたみたいだしさっさと行くか……。ジゼルは後ろの座席に
座ってくれ。』

ジゼル「判ったわ……ってコレは戦術機とはまったくの別物みたい
ね……。」

戒「説明は後ですから早く席に座ってくれないか？」

ジゼル「え、ええ？」

ジゼルが後ろの座席に座つたのを確認して戒もコクピットに乗り込み、アルカインの灯を入れて各種センサーのチェックを手早く済ませ、全天位モニターが周りの景色をメインとサブのカメラを通して映し出した。その光景に後ろに乗っているジゼルがコクピットの周りを物珍しさからか左右に顔を向けて見ているのが前を見ている手に取る様に戒は感覚で感じていた。

戒「さて、ジゼル準備は良いか？」

ジゼル「何時でも！」

戒「アルカイン…黒逸戒、^で出撃るぞ！！！！」

ジゼル「！？（Gがあまり感じられない！？戦術機ではかなりのGを感じるのに！？）」

そして、戒が飛び出すのと同時に右方向より劣化ウラン弾が雨霰と降り注いで来た。

戒「ちい！早速かよ！！行け！ファング！！ドラグーン！！」

アルカインの背から16基のドラグーンと肩とリアスカートから更に8基のファングの計24基が飛び出し、大隊規模のF-16CとMiG-29の混成部隊に攻撃を仕掛けた。テロリスト達は初めて見る兵器に翻弄され、混乱に陥っていた。

戒「…其処だああ！！！！」

”ドガアアアアアアア”

戒はビットに戸惑っているテロリスト達の周囲を飛び回るビットの距離を一気に離して加琉羅を向けて放った。テロリスト達が気づいた時には全員が光の奔流に飲み込まれて盛大に爆発をした。

戒「ジゼル、大丈夫か？」

ジゼル「ま、まだ、大丈夫!!!」

戒「判った。(戦術機に乗り慣れていいるからかGの負荷があまり無い事に驚いているって所か?)……!!?」

戒は先程のテロリスト達を全滅させて、ジゼルの事を考えアルカイを飛ばしていたが高熱源反応の接近を知らせる警報に反射的に機体を左に滑らすと先程までいた場所を一条の光が過ぎ去って行った。

戒「光線属種だと!?!」

ジゼル「BETAがなんでこんな所に!?!」

戒「まさか!?!」

ジゼル「何か知っているの?!」

戒「たしか、米軍基地の研究所で実験用に捕獲されたBETAがいた筈だがそれを誰かが何かの目的で解き放ったと見て間違い無いと思う……が何故此方に来ているんだ!?!」

ジゼル「なっ?!」

戒の言葉にジゼルは驚愕した。

戒「兎に角、今はBETAを殲滅しつつテロリストの鎮圧を急がなければな…。」

戒はそう言っ て操縦桿を握り直し光線属種の群れに突撃した。

戒「オオオオオ!!!」

”ズガアアアアア!!!”

加琉羅を光線属種のある場所を薙払う様に掃射し、その近くにいた数体の要撃級に対してはファンクを飛ばして全方位から刺し穿ち、時には撃ち抜き徐々にその数を減らして行くが一向に減る気がしなかった。

ジゼル「数が増え続けています!!!」

戒「こんな状況だが、唯依達は大丈夫だろうか?」

ジゼル「先程の人達なら - 01基地に向かった模様です。?!…黒逸!こっちの画面にコード9111って出たがコレは一体何なの?!」

戒「何だっ て!?あんの馬鹿共がああ!!!」

”ダンッ!!!”

ジゼルの言葉に戒は激昂し操縦桿の近くを殴りつける。その様子にジゼルは戸惑いを隠せなかった。

戒「アイツ等はこのユーコン基地を放棄する積もりだ！10万人の命を簡単に切り捨て様としてやがる！！！！」

ジゼル「ど、どついう事?!」

戒「どうもこうも無い！「レッドシフト計画」ソ連と米国：奴等はアラスカのある一定のラインにBETAが到達した場合にこの場所の……ソ連領の地下深くにある水爆を自律的に起爆してこの地にいる人間と一緒にBETAを消す算段だ！（可笑しいぞ?!幾ら何でも計画が発動するにはまだ時間が有る筈だぞ?!）」

戒は尚も増え続けているBETAと空域を支配する光線属種を駆逐しながらも最悪のシナリオしか浮かんでいなかった。

戒「（背に腹は代えられぬか……！！）アル！！アルカインの魔導システム使用出来る様にしろ！！！！」

ジゼル「魔導回路？それは一体……」

ジゼルが疑問に思っている間にも戒はコンソールを手元に引き出して高速でタイピングをし、システムの再構築をし、アルは回路の接続を急いだ。そして……

アル 了解ですマスター。何時でも行けます！

ジゼル「なっ?!機械が喋った!?!」

第貳拾七話（後書き）

作者「久々の投稿だな…」

戒「遅すぎるし、何よりも宗教の事で手詰まりになってどうするんだよ？世界中で問題にもなっているのだから判る筈だろ？」

作者「基本的に仕事にかまけてテレビはあまり見ないからな…。」

戒「阿保だろ？」

作者「阿保じゃない！馬鹿なだけだ！」

戒「変な開き直りは止める！！見苦しいだけだ！！それにしても…原作では間接的にだがサンダークに死亡させらるたジゼル・アジャ―二少尉を生存させて、どうするんだ？」

作者「突発的な物で考えました！」

戒「シネ！！！！！」

作者「ゲボアツ（。；）」

戒「突発的にやって上手く行く訳が無いだろうが！！！！！」

作者「だが、ジゼルは他の一般衛士と比べると中々な腕だから亡くすには惜しいと思ったから、戒の陣営に引き込んであわよくば活躍させてあげれたらなって思ったんだよ？」

戒『今回の投稿で確実に批判が大量に来る可能性がある…。』

作者「俺、生きてるかな（；；）」

戒『知らん！！』

作者「グスン？兎に角、第貳拾七話は出来ましたが、次回の更新はかなり後になる予感ですな。」

戒『いつに完成となる事やら』

作者「で、M u v - L u vの話が纏まる迄は他の話をu pさせていきますので其方を見ながら待っていて下さいm (_ _) m」

戒『次回の第貳拾八でまた会いましょう！』

作者「御意見、御感想等はメッセージ又は感想板にてお願いします

m (_ _) m

第貳拾八話

戒が - 01 基地に向かっている時……

タリサ「なあ、唯依中尉。戒をあのテロリストと一緒に乗せて置いて大丈夫なのかな…？」

唯依「わたし達にはただ戒准将を信じるしかないわ。」

ヴァリレオ「だけど、先程の爆発には驚いたよな？ 衝撃波がこっちにまで届いたからな…。」

ステラ「それ以前にBETAが現れた事の方が重大な事だと思うけど……」

ステラの言葉にクリスカは思案しながらそれに答える。

クリスカ「この近くのハイブからでは無いのであれば米国が研究用として捕獲したBETAが脱走したと考えるべきだろう…。」

タリサ「だけだよ？ それだったら嚴重に管理がされてる筈だろ？」

亦菲「テロリストが逃がしたって事？ 何の為に？」

クリスカ「それは判らない…だが、テロリストが行ったと考えるのは早計かもしれない…。」

ユウヤ「どういう事だ…？」

クリスカ「良いか？テロリスト風情が研究所とは謂え米国のセキュリティを破る事が出来ると思うか？」

唯依「それは…確かに…。」

ヴァリレオ「じゃあ、そうだとしたら、一体誰がBETAを逃がしたって言うんだ？」

クリスカ「それは判らない…が今は兎に角 - 01基地に急ぎ体勢を整えなければならぬ…。」

ナスターシャ「黒逸准将は大丈夫なのでしょうか？」

ラトロワ「戒なら大丈夫だろう。アイツは何が起ころうとも何時も自身の持てる物で打開しているからな…。そうだろ？篁中尉？」

唯依「……………（戒准将とフィカーツィア中佐は一体どの様な関係なの？わたしはどうすれば良いの？）」

ラトロワ「篁中尉？どうした？」

唯依「……………！？あ、いや、な、何でも無い！急ぎ - 01に向かうぞ！」

ステラ「！？中尉！此方に向かってくる熱源を確認しました！」

唯依「なに！？数は！」

ステラ「8です！」

ラトロワ「アレか!!」

ステラの言葉にラトロワは正面から来る米粒の様な機影を最大望遠で確認する。それを全員がデーターリンクで確認した。

タリサ「テロリストか!？」

亦菲「それしか無いでしょ!!」

タリサの言葉に亦菲は言うや否やはライフルを構えて撃つ。それを皮切りに向こうからも突撃銃の劣化ウラン弾が無数に放たれて来たが全員は散開しそれを躲す。

ラトロワ「亦菲中佐は遊撃!ステラ少尉とナスターシャは中衛からの援護射撃!イーニアはタリサ少尉に唯依中尉と共に前衛!わたしとユウヤ少尉にヴァリレオ少尉は撃ち洩らしを叩くぞ!!」

全員「了解!!!!!!」

そんな中、其処へ突撃銃を構えて乱入する影が複数いた。

?「おいおい、なんでこんな美味しい事やってるんだユウヤ?」

ユウヤ「なっ!?!レオンか!」

シャロン「レオンだけじゃ無いわよ?」

ユウヤ「シャロンもか!？」

タリサ「インフィニティーズ！？てめえ等なんで此処にいやがる！！！！」

レオン「こんな混乱している所で唯一無事な部隊に合流が出来たと思えば面白い面子が揃っているからに決まってるんだろ？」

タリサ「何が面白い面子だ！この野郎！！！！」

ステラ「タリサ、今はそんな事をしている場合じゃ無いわよ？あの人達が乱入して来た事で向こうは警戒しているみたいだけど此方もそれに合わせる必要は無いし、時間も無いのよ？」

タリサ「わ、わかってるっての！！」

シャロン「レオンもよ？」

レオン「へいへい…わかってますよ。」

ラトロワ「それでは行くぞ！各自孤立だけは絶対にするなよ！」

そうして、再びテロリストとイーダル、アルゴス、暴風、インフィニティーズの試験小隊からなる小隊連合がぶつかるのであった。

そしてその頃、アルカインに乗った戒とジゼルはアラスカと米国の境界線の先に来ていた。当初は唯依達と同様 - 01 基地に向かう筈だったのだが「レッドラインシフト計画」の発動に対して最終防衛ライン…デッドラインとも呼べる場所にて研究所からのBETAとは別のエヴェンスクハイブから来ているBETAの迎撃をしているのであった。

戒「ちい！どれだけいるってんだよ！」

ジゼル「逃げた方が得策よ！？今なら死なないで済むわよ！？」

戒「それをしたら俺は結局の所…上層部の膿共と何ら変わらん！俺は出来る範囲…手の届く所の命を救う！失って良い命なんて一つもこの世にありはしないんだ！！！！」

ジゼル「……貴方は英雄にでもなりたいの？」

戒「そんな大層な者になろうとは思わんよ！人は万能等では無い…幾ら頑張った所で救える命など高が知れている…なら、その救える命を俺は可能な限り救って見せる！！！！」

ジゼル「貴方は……」

戒「クソツ！数が多い！！ドラグーン！ファング…射出と同時に一斉掃射！！！！加琉羅…スタンバイ、タスラム全弾装填…発射ああああ！！！！！！！！」

その瞬間、辺りを覆い尽くす程の光と爆発が爆炎がBETAと地面を蹂躪する。しかし、それでもBETAの進行速度は緩まずに仲間の屍を文字通り越えて尚も最終防衛ラインへと進行してくるのである……。

ジゼル「止まらないわ！？」

戒「……アル、アルカインのBH「ブラックホール」機関の凍結を

解除しろ。』

アル　しかし、それは危険度が高いとマスター自身が封印した物ですが…宜しいのですか？

戒『今は一刻を争う事態だ！幸いに此処等周辺には奴らしか居ないからな……………文字通り消し飛ばす事が出来る…。』

アル　……………判りました。BH機関凍結解除…後はマスターに任せます。

戒『逝くぞ……………BETA共！！！！コレが貴様等を葬り去る光さえ呑み込む虚構だ！！！！』

戒の……………アルカインの目の前にはどす黒い歪な球体が現れ徐々に形を成す。そして完全な球体になり状態が安定したのを確認すると戒は…アルカインは片手でその球体を掲げるとBETA群の中心辺りに……………投げた。そして、着弾したその瞬間……………

“ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！！！！！！！”

着弾した場所を発生源とした小規模なブラックホールが発生し、辺りにいるBETAとその一帯にある建造物や木々を容赦なく呑み込んで行く。

ジゼル「なんなんだアレは凄まじ過ぎるぞ！？」

戒『コイツにはプラズマリアクターとは別にBH機関とディーン・

レブ等の異星人とも呼べる様な奴らの技術がふんだんに使われていてな……。その一つがこれだ。後は出力を上げれば太陽系は疎か銀河系を消し飛ばす事が理論上では可能な縮退砲と空間と空間を繋ぎ合わせる事により超長距離移動すら可能にした歪曲空間発生装置を両方の肩に内蔵している。……………ん？どうした？」

「ジゼル「わたしはお前をやはり敵にはしたく無いなと思ったただけだ。」

戒「???そうか。（取り敢えず、これでイーニアとクリスカの自我崩壊の危険を退けられたって事だな…。）」

「ラクス「……………い……………ま……………か……………さい……………」

その時、ノイズ混じりに指令本部からの通信でラクスの声が聞こえた。それな戒は直ぐ様反応し、ノイズ除去をするために周波数をジヤミング防止された物に変えた。

「ラクス「戒、聞こえますか？応答して下さい。」

戒「聞こえてるぞ！どうした？」

「ラクス「只今、此方は指令本部の奪回が成功しましたので連絡をいれたのです。只、奪回した際に首謀者の指導者マスターを取り逃がしてしまいました。その代わりに指揮を取っていたと思われるヴァレンタインと名乗る女性を此方で確保しました……………勿論この事は他の軍人達にはバレずに済みましたので……………」

「ジゼル「姉さんは無事なのか!？」

ラクス「……戒、其方の女性は？」

戒「あ、ああ。彼女はジゼル・アジャーニ少尉だ。訳あって俺と一緒に搭乗してもらっている。」

ラクス「そうですか……。 (また、戒の周りに女性が増えましたわ……。) 取り敢えず、私は彼女を連れて先に基地に戻りますわ……。混乱の方も収束しつつありますから……。」

戒「判った。此方も唯依達と合流したら基地に戻る事にするよ。」

ラクス「判りましたわ。……指示した時点で決まっていると思いますが、この方達は仲間にすると言う事ですか？」

戒「ああ。その積もりだ。まあ、何か文句を言う様であるなら、MSの技術を多少流してやれば黙るだろうから……。紅の姉妹の方にも同じ方法が若しくは奴らの弱味をちらつかせれば良いだろう？」

ジゼル「ロシアの弱味……？ 一体何なんだ？」

戒「ソイツは秘密だな (笑)」

ラクス「……戒、楽しんで居ませんか？」

戒「そんな事無いさ？ ただ奴らの青ざめた顔が見れたらどれだけ面白いかなってな？」

ジゼル「それは楽しんでるんじゃないの？」

ラクス「戒は質が悪いですわね」

戒「そんな事はないと思うが……？兎に角、今回の事を境にして俺は本国に戻るうかと思う。まあ護衛の唯依は勿論、精華少尉も一緒に連れて戻る積もりだがな……。」

ラクス「では、手回しは此方で済ませますので……。」

戒「頼む……。」

ラクス「では、また後ほどに。」

そして、ラクスとの通信を切る。

戒「さて、 - 01 基地に向かうとしようか……。」

ジゼル「貴方はわたし達をどうする積もりなの？」

戒「ラクスとの会話を聞いてなかったのか？」

ジゼル「真意を聞いているのよ……！」

戒「と言われてもな……、ただ仲間にしたと思ったただけなんだが？確かにそのまま軍に引き渡しても良いが、腕も確かだからそのまま失うには惜しいからな……。」

ジゼル「それだけか？」

戒「後は……そうだな……、可愛いから……かな？」

ジゼル「なっ!?なにをいきなり言うんだ!真面目に答える!!
// // // // //

戒「俺は至極真面目に答えた積もりだぞ?」

ジゼル「わたし達を仲間に入れたとして貴方自身に危険があるかも
知れないのだぞ?」

ジゼルの言葉に戒は不敵に笑い、こう答える……。

戒「危険?ハッ!そんな物は最初から判りきっているだろう?それ
にロシアにも喧嘩を売る訳だからな?ジゼル達を仲間にする際に生
じる障害など簡単に打ち破ってみせなければそもそもそんな事が出
来るのは世界を探したって俺位だろうがな…?」

ジゼル「しかし……」

戒「考えて置いてくれよ?俺は別に強制を強いる訳じゃあ無い…た
だ、道を示しているだけだ。選択肢と言う道を…な。1つはテロリ
ストとして今後も活動する……2つ悠陽殿下の庇護の下で俺の部下
乃至は仲間として活動するかだ。勿論テロリストとして活動すると
しても姉の方は無事に帰すからな?」

ジゼル「……期間は?」

戒「そうだな……帰るにしても色々と準備をするからな……7日つ
て所だな?姉妹と一緒に考えると良い。」

ジゼル「……判ったわ。」

戒『……そろそろ基地が見えて来たな。』

ジゼルと話をしていると丁度モニターには - 01 基地が小さいながらも目視出来る距離まで来ており、戒は着陸する為の準備をコクピットのコンソールを操作しながら機体を飛ばす。

そして、俺が着いたと同時に唯依に詰め寄られたり、亦菲達に先程の事を執拗に聞かれたが割愛させて貰う。そして、あのテロ騒動からあつという間に7日…時間はして168時間は一気に過ぎる。

第式拾八話（後書き）

イーニア「ねえ戒、なんでイーニアはここにいるの？」

戒「今回は作者は気力0で不在な為、急遽俺とイーニアとの会談になったんだよ？」

イーニア「そうなんだ…。作者は体力が無いんだね？」

戒「そうでも無い筈だぞ？学生時代は体力馬鹿若しくは運動馬鹿と言われていたからな？」

イーニア「へえ、そうなんだ。凄いんだね？」

戒「運動は出来ても勉強は余り得意では無いと言っていたな……特に英語や数学が駄目らしく読み書きの時点でアウトで良くその時間はサボタージユをかましていたらしいからな？」

イーニア「悪い人だね。」

戒「まあ、判らんでも無いがな。そのお陰か判らないが教師陣にはブラックリスト入りさせられたと言う経緯も在ったりする訳だ。」

イーニア「……お仕置きが必要かな？」

戒「其処までする必要は無いかな？」

イーニア「でも、サボるのはいけないよ？イーニアはそんな事はした事無いよ？」

戒『イーニアは良い子だからね？』

イーニア「エへへ　／／／／／／／／／／／／／／」

戒『さて、短いですがこの辺でお別れです。次回は日本に戻る前のお話ですね。』

イーニア「イーニア達も出るよ〜」

戒『はてさて、俺がどう動き日本や国連にどう影響するかは次回までのお楽しみで。』

イーニア「戒と一緒に〜」

戒『あ！駄目だぞ！？先にバラすなよ！？』

イーニア「みんな、たのしみにしててね〜？」

第貳拾仇話（前書き）

この7日間、戒はわたくしにですら関わらせ無い様な事をしている様ですが戒の事ですから何か考えの下行動している事を信じ話してくれる事を待つだけですわ。

ラクス 戒の行動観察日記より抜粋（えっ

第貳拾仇話

今現在俺はユーコン基地総司令部に出向いて、総司令のハトルウィック大佐の下にいる。

ハトルウィック「本当に行つてしまふのか？」

戒「既に決めた事だからな……。それに此方ばかりに時間を使つていられる身でもないからな。変わりにアルゴスの連中には俺の技術をこの7日間で粗方叩き込んだから後はアイツ等がしつかりと戦績として出してくれるだろうから心配はいらないな……。」

ハトルウィック「その他には何故イーダル試験小隊を戒准将が接收したのか些か疑問何だが答えてくれないか？」

戒「その事を話す事に着いては外部の者には絶対に秘匿……洩らさない事が絶対条件だ。」

ハトルウィック「……なにか事情がありそうだな……判つた他人には勿論仲間や部下の者にも絶対に洩らさないよ。」

戒「……まず1つロシアの連中のやり方では彼女達が危ないからだ。2つサンダースが行方を眩ました事。3つこの事に着いては既にロシアの上層部と話が着いているが彼女達の接収に対して反対をすれば貴殿等にとつての悪い情報……所謂スキャンダルだがそれを世界に流す。4つコレが一番の事だが今後一切のESP発現者の開発の中止……コレを拒否した場合も3つ目と同様の事をする事を辞さない。コレが彼等と交わした契約だ。勿論彼等が反故にした場合も考えて

言質を録音した物もあるから破った場合は彼等に待っているのは破壊のみだな……」

ハトルウィック「やり方が危険とは？」

戒「……人体実験だ。しかも生きたまま……な。」

ハトルウィック「？しかしそれだけでは危険とは判断が出来ないが……」

戒「BETA由来の炭素細胞を使った物でもか？」

ハトルウィック「なんだと!？」

戒「あのテロ騒動の際に不確かな情報だからその騒動に乗じて調べたのだが惨い物だった。ヒトがヒトで無くなる様な狂気の産物だ。」

ハトルウィック「なんと言う事だ……。」

戒「勿論それに関するデータや基地内の施設は消去済みだからこれ以上は基地内で行われる事は無いと思うがロシア本国でも同様の事をしていた場合は俺は手出しが出来ないから……。」

ハトルウィック「そう……か。それとサndaース少尉の行方が判らないとはどういう事だ？」

戒「言葉通りだ。最初、アレを見つけ出した時に問い詰める筈だったのだがテロ騒動が収まりサndaースを探したのだが基地内には既に見えない事が判り、直ぐ様側近や部下に身边を護衛している者達に聞き込みをしようとしたのだが……。」

ハトルウィック「なにかあったのか？」

戒「サンダーズの息が掛かった者達は悉く変死体で見つかったんだ。怪物にでもやられたのかその全てが悲惨な状態でロシア基地の裏側から発見された。」

ハトルウィック「うゝゝむ。一体何が起きていると言うのだ？」

戒「それは俺にも判らないが俺の抜けた後は前よりも嚴重な警備体制を敷いた方が得策だな…。」

ハトルウィック「その様だな…。」

その後も事後処理に付いての話や俺の技術的な協力はどうするのかと言う事を話し終えて俺は総司令部を後にした。その際に何か俺に当たった気がしたがあの一件以来単独の時には一方通行を展開する様にしている為にそれを無視してさっさと飛行場に向かう事にした。

イーニア「あつ！かいゝゝ」

戒「おつ？早いな、まだ時間には余裕があるのだが？」

イーニア「クリスカが早く行って戒を驚かしてみようって」

クリスカ「イ、イーニア、なにを言ってるの／／／／！？」

ラトロワ「しかし、わたし達が戒と一緒に日本帝国に出向いても大

丈夫なのか？」

戒『心配は無い…事前に紅蓮大将に城内省の鎧衣さんに話をしているから向こうに着いてもラトロワ達の国籍等は向こうに合わせてあるし、住居の方は俺の屋敷になるからな…』

ターシャ「日本屋敷ですか？」

戒『見てからの楽しみだ。』

タリサ「なあ、戒は本当に戻っちまうのか？」

タリサは悲しげな顔で俺を見上げる。そんなタリサを安心させようと多少乱暴だが頭をクシャクシャと撫でる。

タリサ「ん／＼／＼／＼／＼」

戒『確かに俺はお前たちを置いて日本に戻るが何ももう会えないって訳じゃ無いのだからそんな顔をするな…。俺の知るアルゴスは生意気を言うが頼り甲斐のある隊だ。しっかりと俺のいない穴を埋めてくれよ？』

ユウヤ「当たり前だ！戒の教えてくれた事は絶対に忘れないし、これからも守って行く積もりだ。」

ヴァリレオ「色々と為になる話や技術を教えてくれたし、何より楽しかったな。」

ヴィンセント「准将の訓練は悪魔の何物でもなかったけどね？」

ヴァリレオ「そうそう……っておい!？」

戒「ふむ…ならヴァリレオには戻って来た時様の特別メニューを用意して置くか？」

ヴァリレオ「嘘だろー！ー!？」

戒「ふつ、冗談だ。そう思うのなら次に会う時までしつかりと練度を高めてこの世界を生き抜いてくれ。ステラ、1人で大変だが暴れん坊達の舵取りをしつかりな？」

ステラ「大丈夫ですよ。今まで黒逸准将にはそのやり方を教わりましたから…。」

ステラ以外「……一体何を教わったんだ(てんだよ)!？」

戒「お前たちの弱点や暴走した時の対処方法をだ。」

ヴァリレオ「どんな事ツスか？」

戒「なんだ？そんなに気になるのか(黒笑)」

俺が素敵な笑顔をして興味深く聞いて来たヴァリレオに言うと面白い位に蒼白にさせて「やつぱり良いです!!!」と悲鳴に近い感じになっていた。……何故涙目になる必要がある？ 鬼ですら裸足で逃げ出しかねない邪悪n

ラクス「戒、そろそろ時間ですわ。」

唯依「戒准将はムリーヤに搭乗して下さい。機体の方はわたしとラクス中佐の方で輸送機にて運びますので。」

戒「そうか？判った。頼むな……。唯依、ラクス。」

俺はそう言つとユウヤ達アルゴス試験小隊から離れて、ラトロワ達……イーダル試験小隊達と一緒にムリーヤに乗り込む為にタラップを踏んだ瞬間「待ちなさいよ！……俺の耳にはまずこの場にいない人物の声が聞こえてきた。」

戒「亦菲、何故君が此処にいる？」

亦菲「聞いて無いの？あたしも戒と一緒に日本に行くからよ。」

戒「その様な話は聞いていないぞ?!」

亦菲「テロ騒動の一件でどうも中華連邦のお偉方は戒の技術力に目を付けたみたいでわたしに密偵……所謂スパイを親交のあるわたしに決定して戒が帰国する際について行けつて辞令が下ったわ。辞令かどうかも疑わしいけどね？」

戒「それは軍の命令か？なら俺に話してしまつて良いものではない筈だろ？」

亦菲「確かに軍の命令だけどこのわたしが戒の不利になる様な事をする訳がないでしょ？」

戒『なら、スパイの役割はどうするのだ？』

亦菲『適当な事でも報告するし、向こうはそれなりの収穫があるまでは其方側にいて構わないみたいだな事を言っていたしね。』

戒『それで良いのか中華連邦は』

亦菲『向こうの上層部は馬鹿が多いからそれで良いのよ。』

ターシャ『その様な事をあからさまに言って良いのでしょうか？』

戒『亦菲が良いのであれば良いさ。それで、俺について来る事については日本の方には既に伝わっているのか？』

亦菲『ええ。国連軍として稼動予定の横浜への出向が御題目になっているわ。』

戒『そうか。（亦菲が来る事は想定外だがこれで俺が横浜に赴く理由が出来たな…。）』

パイロット 黒逸准将、そろそろ発進しますのでお急ぎ下さい。

ムリーヤを操縦する為に搭乗している国連軍のパイロットが船外放送で出発時間が迫っている事を知らせる。

戒『では、行くとするか。ラクス達は機体搬送の為に先に出発したしな…。』

そう戒は言うつと再びタラップを昇り、後ろからラトロフ、ナスターシャ、イーニアにクリスカと続き、最後尾に亦菲の順番でムリーヤ

に乗り込むと暫くしてからタラップを載せた車が離れて戒達を乗せたムリーヤはアラス力を発ち、物語始まりの地へと戻るのであった。

第貳拾仇話（後書き）

作者「やっと…やっと本編の話が書けるぞー」

戒「本編に入るまでが長すぎだったな…。」

作者「所々可笑しくならない様にしつつ武君が発案する筈の三次元軌道の出来るソフトよりも高性能な物を使える様に…。」

戒「次回は日本に戻ってから数ヶ月後の話…だな。」

作者「最初は城に戻って来た事を報告する場面から始めるつもりです。戒と悠陽殿下の話で面白い感じに仕上げたいですね？」

戒「とてつもなく不安だな…。」

作者「では次回の第参拾話で」

戒「感想、ご意見などを待っている。」

第参拾話（前書き）

久々の連日投稿ですが前話と同様に短いですが誤字脱字の御報告や御感想をお待ちしております。

第参拾話

黒逸家屋敷 戒自室

亦菲「戒来たわよ？」

戒「ああ、入ってきてくれ。」

戒にそう言われて部屋に入って来たのは黒のランニングシャツに青色のカーゴパンツの私服姿の亦菲とラクスが着付けをしたのか空を思わせる様な蒼穹色の着物を着たクリスカの2人が入って来た。

クリスカ「で、どうしたんだ？わたし達2人だけを呼んで……。」

戒「2人を呼んだのは他でも無いのだがこの後に城に行くのだが着いて来て貰いたいんだ……。」

亦菲「勢威大將軍の煌武院悠陽殿下に会うの？それならわたし達が行って大丈夫なの？」

戒「最もな質問だが問題無い……悠陽殿下と紅蓮大將達には話をしてあるから心配は無い。そう言えばイーニアは今どうしてるんだ？」

クリスカ「イーニアは今屋敷にいるアイルー達と遊んでいるよ。あの子が心から笑えるのは戒のお陰だ。」

戒「そんな事は無いよ。イーニアの安らぎ所は今も変わらずにクリスカという事だと俺は思っている。」

亦菲「城に行くのなら着替え無いといけないよね？」

戒「そうだな。正装としては軍服か……。俺は斯衛なので良いとして2人は国連か？しかしそうすると煩い奴がいるしな……」

ラクス「其処は大丈夫ですわ」

戒「…ラクス、済まないが何時の間にかいた？」

ラクス「先程来たばかりですわ」

戒「なら、良いが先程の大丈夫とはどう言う事だ？」

ラクス「亦菲さんは国連から来た事は変わらないですがこの日本での待遇は戒に一任されるそうなのでその心配は杞憂になりますわ勿論、イーダル小隊の方達も同様になりますが此方は完全に日本に所属と言う形になっています。」

戒「そうか、ならクリス力達には国連の無く帝国の制服にした方が良いな……」

ラクス「では、戒は先に外へ出て下さいな。外には効が車で待っていますので。」

戒「判った。」

俺はラクスに言われて屋敷の外に出ると黒塗りの高級車の様な物に乗った効がいた。

戒「久しぶりだな…。」

効「ああ、本当に久しぶりだな…。アラスカでの話は聞いた。無茶を相当した様だな。」

戒「悠陽に会ったらずまずその事をキツク言われそうだ。」

効「それだけ心配していた訳なのだから大人しく殿下のお叱りを受けておくんだな（笑）」

戒「他人事だと思いやがって。」

効「ふつ、他人事だろ？俺は戒では無いのだからな…。2人が来たみたいだから車に乗ったらどうだ？」

戒「へいへい、そうさせて貰うよ。」

俺はそう言つて車の助手席に座り、後から来た2人はラクスと一緒に後部座席に座る。そして効がバックミラーで全員が乗ったのを確認してからキーを回してエンジンを吹かしてアクセルを踏み込んで車は屋敷を離れて悠陽がいる城に向けて走る。俺は悠陽になんて言われるか内心が戦々恐々であった。そんな俺には心の準備をさせてくれないかの様にあつという間にして城の門前に着いていた。

戒「……………今の俺には地獄の門に見えるな。」

亦菲「まったくなにを馬鹿な事を言ってるのよ。さっさと行くわよ。」

？」

戒「あ、おい……はあ 真那や斑鳩さんになんて言おう いや、何も言わずに叩き斬られるかも知れんな」

クリスカ「だ、大丈夫か？顔色がとんでもなく悪いが？」

戒「いや、大丈夫だ。取り敢えず行こう。此処でうだつてた所で行かなければいけない事には変わりはないからな……。」

効「では俺は斯衛軍の連中の訓練に行くから此処で失礼させて貰う……。」

戒「そうか。予定が入っていたのに俺達の用事の為に済まなかったな……。」

効「なに、気にするな……。そう言えばお前が向こうに行っている間に香月夕呼と言う者が一度会いたいとコンタクトを取って来ていたぞ？」

戒「！？……へえ、横浜の牝狐が……判った。その内に会いに行くとするよ。……今後の為にも……な。」

効「……そうか。なら、気を付けて行け。向こうには例の子が既にいるからな。」

戒「そう……か。ご忠告傷み入るよ。」

効「それでは……。」

効はそう言つて謁見の間から反対方向に進み斯衛軍の訓練施設の方へと消えて行つた。そして、それを見送つた後に戒は目の前の大きな門とも捉える事の出来る扉を重々しく開けて3人を後ろに控えさせて豪華絢爛とは違つがそれでも偉大さを感じさせる謁見の間へと入室する。

戒『黒逸戒、只今戻りました。』

紅蓮「やつと戻りおつたか！久しぶりだな戒よ！！」

戒『紅蓮大将もお久しぶりですね？』

紅蓮「アラスカでの事は聞き及んでいるぞ？お前は何時も儂等を驚かしてくれるな（笑）」

謁見の間に入室した戒を先ず歓迎したのは日本帝国の生ける伝説である紅蓮大将であつた。紅蓮大将はその巨体に見合う様な豪快に笑いながらアラスカの件を戒に話す。

戒『いえ、俺も流石に今回は危ない所でしたよ？まさか腕を持ってかれるとは思ひもせませんでしたから……焦りましたよ？』

斑鳩「そう言いながら機械義手なる物を使っている時点で自身の身に何か起きた時用の保険を用意している……焦った輩では出来ぬ芸当だが？」

戒「ハハハ？まさか…使う事態になる事になるとは思いませんでしたよ？お久しぶりです。斑鳩准将…。」

斑鳩「心配する此方の身にもなつて貰いたい物だな…。」

紅蓮「そう言つな、斑鳩よ。その御陰と言つのは些か不謹慎だが顔面蒼白にした殿下を拝見出来たのだからな！ワツハツハツハ」

悠陽「ぐ、紅蓮大将／＼／＼／＼それは内緒と言つたでは無いですか！？／＼／＼／＼／＼」

戒「只今戻りました。煌武院殿下…。」

悠陽「此処には信用の置ける者だけですからその様な他人行儀に話さないで下さい。」

戒「…判つた。これで良いか、悠陽？」

悠陽「はい。お久しぶりですね、戒？アラスカのユーコン基地での事は紅蓮大将より聞き及んでいます。その件の機械義手の手術後の方は大丈夫なのですか？」

戒「大丈夫つて言えば大丈夫だな。別段気になる様な違和感も無い事だし、日常生活から戦闘に至るまで完全に使う事が出来たからな…。」

悠陽「それはどう言う事ですか？まさか…大怪我をした身でありな

がら無茶をして騒動の鎮圧をしたのですか……（黒笑）」

や、ヤバい？悠陽が笑っているのに目が笑って無いし背後にとつもない覇気を感じるぞ？！は、早く話題を変えなければ俺の身が危ういぞ！？」

戒「そ、その話はまた今度にしてくれないか？今は今後帝国に入ってくれる者の紹介をしたいからな？」

紅蓮「戒の後ろに控えている者達か？」

戒「向こうで腕の立つ者を厳選して勧誘したんだ。こっちのツインテールの子が中華連……じゃなかった、中華戦線の崔 亦菲中尉で銀髪の女性の方がロシア所属だったイーダル試験小隊のクリスカ・ビヤーチェノワ少尉…今は国籍が変わり彼女達のイーダル小隊の面々は尉官や佐官の位では無くなり一度訓練生として帝国で再訓練をした後に尉官を与え様かと思っっています。」

斑鳩「全員が女性なのか？」

戒「え？あ、ああ。イーダル小隊のメンバーは全員が女性で構成されてはいるがかなりの実力者である事は確かだ。」

紅蓮「ふむ、そうか（全員が女性とは殿下もオチオチしてられませんな……）ではその彼女達の訓練先は口振りからして何処か検討が着いていると考えても良いのかな？」

戒「はい。彼女達の訓練先は丁度この亦菲中尉の異動先である国連軍基地として稼働予定の横浜にと考えています。」

斑鳩「横浜だと！？彼処には牝狐がいると知っていて言うのか！？」

戒「勿論、彼女達だけでは行かせませんよ？上司としては部下の成長は自身で手掛けたいですからね？」

悠陽「また…離れてしまうのですか？」

戒「まだ本格的な稼働では無いから、当分の間は此方にいるよ？だから、その間は仕事の合間合間でまた悠陽と一緒に話をする事は出来るよ？」

悠陽「そうですか！では楽しみにしています」

俺の言葉に悠陽は向日葵のような笑顔で楽しみだと告げる。そんなに俺との話は楽しい物なのか？後ろの方からは尋常じゃない殺気を俺に放つし…訳判らんわorz

戒「それではまた……」

紅蓮「またと言わずに何時でも来い！俺等は戒と話をしている時がとても楽しいからな！」

戒「俺もですよ」

斑鳩「今度は話をするのでは無く、一衛士として戒と戦いたい物だな…。」

戒「その時にはお手柔らかに頼みますよ？」

斑鳩「はははっ！帝国最強の衛士が謙遜するな。それに、それは此方の言う台詞であろう！」

戒「斑鳩さんが俺と同様の機体でやり合ったら判らないですよ？」

斑鳩「そうか？帝国最強にそう言われるとはこれ以上には無い褒め言葉だな（笑）」

悠陽「……戒、すみませんが此方まで来て貰えますか？」

戒「……一体どうした、悠陽？」

俺が悠陽の言葉に玉座とも言える場所まで階段を上り悠陽の目前まで近づき言つと悠陽はいきなり立ち上がると周りの事等お構いなしにとばかりに俺に有らん限りの力で抱き付いた。俺は恥ずかしさの前に悠陽が微かに震えている事に気付き、この気丈を然とした仮面を被った少女がそれを外すまでに心配を掛けてしまっていた事に今更ながら罪悪感を覚えてしまっていた。

悠陽「本当に無事で良かった！貴方に……戒が怪我をしたと聞いた時からもう会えないと思うと夜も眠れませんでした。」

戒「悠陽、済まなかった。俺は大丈夫だ。君の前から急に居なくなりはしない。俺は此処にいる……此処にいるんだ。だから心配は「しない」とは無理な相談ですよ？」……そうだな（笑）」

悠陽「愛しい人を心配するなと言うのは愚問の何物でも無いのですからね？」

戒「そう……だったな。確かに俺の発言は愚問だったな（笑）」

悠陽「わたしは何時も戒の事を心配しているのですからね？」

紅蓮「……殿下？流石に他人が居ないからと言っても大胆過ぎでは無いのかな（笑）」

悠陽「！？／／／／／／／／／／／／／／／／」

俺と悠陽が玉座の前でかなりの時間抱き合っているのに流石の紅蓮大将も仕事がある関係上そう言うしか無い訳である。確かに俺もこの後に屋敷に戻りアルトアイゼンの強化を横浜基地に行くまでに済まないといけない為に内緒ではあるが内心で紅蓮大将にお礼を言う。悠陽は悠陽で今更になつて先程自身の行つた行動に頬を赤に染めてスツと離れて玉座へと恥ずかしさを隠す様に静かに座る。

戒「……それじゃあ、悠陽また会いに来るからな？」

悠陽「………はい、お待ちしております／／／／／／／／／／／／／」

俺はそう言うと階段を下りて紅蓮大将達に軽い会釈してから謁見の間を退出した。

紅蓮「そう言えば、悠陽殿下？戒には昇進の話をせずつで良かったのですかな？」

悠陽「あつ！？」

斑鳩「流石の煌武院殿下も大好きな殿方の前では初心の様子で忘れ

ていた様子ですな（笑）」

悠陽「//////////」

紅蓮「戒の奴には毎度毎度驚かされているから仕返しも兼ねれるから良いだろ（笑）」

紅蓮の豪快な笑い声に自身のうっかりに赤面をする悠陽と呆れながら苦笑する斑鳩であった。

第参拾話（後書き）

作者「はい、今回の後書きのゲストは戒に変わりました 亦菲嬢
に来て貰いました！」

亦菲「ちょっと作者、今回の話はと言う事？」

作者「ど、どうとは？」

亦菲「わたしと戒の絡みが少なくてなんで久々の登場の奴が戒と絡んで挙げ句の果てには抱き合っているかって事よ？」

作者「そ、それは仕方の無い事だよ？彼女もまた多くいるヒロインの中の1人なんだからさ？」

亦菲「言い訳は聞きたく無いわよ！これでも喰らえ！！！！！」

作者「 ちよつと！？青竜刀とか洒落にならつぎゃああああああああす！！！！！！！！！」

亦菲「ふう、少しはスッキリした」グイッ 頬に付いた血痕を拭う
（えっ

亦菲「作者は三途の川に行って貰ったから次回からはわたしが「勝手に殺すな！」っち！」

作者「舌打ちした?!今舌打ちしたの!?!」

亦菲「そんな事は良いからさっさと次回予告をしなさいよ!?!?……
またやられたいのかしら?」

作者「スグサマヤラサセテイタダキマス。……さて! 次回は第参拾
壱話で会いましょう! この後はオマケを初めて作って見たので感想
をよろしくお願い致します!」

オマケ

帰りの車の中

ラクス「そう言えば、戒にあの事を言いませんでしたわね?」

戒「あの事って?」

ラクス「昇進の話ですわ。今回のアラスカでの事が意外にも高く評
価されましたから准将から少将へとなりましたのですが?」

戒「なんだそれは俺は何も聞いて居ないぞ?!」

第参拾巻話（前書き）

今回やっと原作メンバーが登場します。此処まで来る道のりは長かつたな……

誤字脱字や御意見や御感想をお待ちしております。

第参拾壹話

戒「それじゃあ、少しの間向こうに行つてくるから、クリスカ達は横浜基地に訓練生として行く準備を済まして置いてくれ。それが終わつたらP TやM Sの操縦訓練を地下施設でやってくれ。」

俺は屋敷の門前に単車：F F 7のクラウドが駆るフェンリルを創造し、それに跨り玄関前に集まっていたクリスカ達に言う。俺の後ろにイーニアが座っているのは俺が行く事に自分も行くと思つた為致し方なく一緒に行く事になつてしまった。

クリスカ「イーニアの事を頼むわね。」

ラトロワ「戒が帰つて来る時までには慣熟訓練を終わらせてびつくりさせてやるよ。」

ターシャ「わたしは今更になつて緊張してきた……」

ジゼル「わたしはP Tの操縦訓練をして待つているわね？」

ヴァレンタイン「わたしはM Sかしら？ 戦術機に似た設計みたいだしね？」

ジゼルとヴァレンタインには俺の部下としてあの作戦に向けての私設部隊の基礎作りをして貰っている。2人は新しい技術に最初は戸惑いを覚えていたみたいだがスポンジが水を吸い込むが如く瞬間に技量が上がり今ではゲシュペンストやダガーで斯衛軍の戦術機を20機相手にして楽勝である程に強くなつていた。

戒『なら、ラクスに頼んで訓練時の情報解析をして置いてくれ。その情報を元に全員にはワンオフの機体を製造するからな…。』

俺の言葉に全員が驚愕する。まあ、無理も無いか…。普通は全員分の専用機と言うのは異例中の異例だからな…。まあ、例の作戦に対して生存率を上げる為にPTやASの技術をMSに転用し、EOT技術を使った機体を全員分用意する訳だからな…。

戒『それじゃあ、ラクス後は頼むぞ？シミュレーターの整備や設定はフェルトに頼んであるからデータ取りの方をしっかりとらな？』

ラクス「判りましたわ」

フェルト「任せて下さい！」

フェルトは俺が帰国した際に効から紹介された子でフルネームはフェルト・グレイシスで神が整備関連の助っ人として寄越した人物だが00の2seasonのまんまである。

イーニア「かい、はやくいこつよ？」

戒『わかった、わかったから揺するなつて』

ラトロワ「気を付けてな…。」

クリスカ「イーニア、体には気を付けなさいよ？」

イーニア「うん」

戒「じゃ、行くな…。」

俺はそう言つて鍵を回しエンジンが心地良い重低音を鳴らし、イーニアが俺の腰に手を回したのを確認しグリップを捻るとフェンリルは走り出す。流石はFFのバイクなだけあつてかあつという間に屋敷が見えなくなつていた。

イーニア「かぜがきもちいいね」

戒「ああ！この裂く様な風は心地良いな！」

俺はイーニアと一緒に風を感じながら舗装されていない砂利道をただ真つ直ぐに横浜へと走る。この東京から横浜までは飛行機で行くのだが今回の会合は悠陽と紅蓮大将達しか知らない為、大々的に行く事は出来ない為にバイクで自力で行く事になっていたのである。

イーニア「ねえ、かい。よこはまってどんなところなの？」

戒「基地の近くには桜並木の道になっていてな？春に行くと綺麗な桜が沢山咲き乱れて絶景だぞ？」

イーニア「ぜっけい？」

戒「凄い良い景色つて事だ！」

イーニア「はやくみたいね！」

戒『今は見れないが見れる様に頑張らないとだな（笑）』

イーニア「うん」

戒『そうと決まれば速度を上げて横浜まで一気に行くぞ！』

イーニア「ぜんそくぜんしゅん」

エンジンの重低音を響かせながら俺はイーニアと一緒に横浜へと向かった。

横浜桜凌基地

？「やっと待ち望んだ時が来たわね……」

？「夕呼、一体なに用事って？」

横浜基地のとある執務室には書類や資料が乱雑に積み、その机に座っている白衣を着た女性を夕呼と呼ぶ帝国軍の制服を着た栗色の髪的女性軍人が立っていた。

夕呼「まりも、明日ね？特別ゲストがこっちに来る事になっているから案内の方宜しくね？親友なんだからその位良いわよね？」

まりも「まったく、都合の良い時だけそう言うのは止してよね？」

まりもと呼ばれた女性軍人はその言葉に怪訝な表情で親友と呼ぶ夕呼に呆れ顔で溜め息混じりに言う。

夕呼「良いじゃない、基地が本格的に稼働するまではどうせ暇な訳なんですよ？」

まりも「確かに事務的な仕事があるだけだから別に問題は無いわ。けど、その特別ゲストって一体誰が来るの？」

夕呼「驚くわよ？なんと貴女の憧れの人よ」

まりも「……………え、ええええええっ！？ちよつとそんな話聞いてないわよ!？」

夕呼「だって言わなかったもの。」

まりも「なんで!？」

まりもの悲鳴に近い声に夕呼はしれつとした顔で言う。それにまりもは噛み付く勢いで問い詰める。

夕呼「まりもが驚く顔が見たかっただけよ？」

まりも「夕呼！貴女って人はっ!?!？」

夕呼「今更怒った所で何も変わらないわよ？」

まりも「もう！わかったわよ！明日は案内をちゃんとしていますよ！」

夕呼「なら、ちゃんとお化粧をしなくちゃね」（笑）

まりも「からかわないですよ／＼／＼／＼」

夕呼「はいはい（わたしのハッキングが通用しない奴が何故素直にノコノコと横浜基地に来るのが解せないわね…社に調べさせようかしら？）」

夕呼はまりもをからかいながら別の事を考えていた。自身のハッキング技術が通用しなかった相手がアポを取っただけで簡単に此方へ伺いに来る事に疑念を感じずにはいらなかった。魔女と聖人の会合で一体何が起るのか……

第参拾弐話（前書き）

連日投稿をしました。所々で無理な話があると思いますが御容赦出来ない方はクリアバックを推奨いたします。m（| |）m

第参拾貳話

横浜桜凌基地前 桜並木通り

戒『ほらイーニア、此処が桜並木通りだよ？まだ春じゃないから丸裸の木だけれど時期が来れば凄い綺麗な桜が見れるからな…？』

イーニア「はやくはるにならないかな？」

戒『今は秋の半ば辺りだから後数ヶ月もすれば見れるよ？』

あれから1日を掛けて横浜までバイクを飛ばしてあの京都防衛戦や明星作戦で散った英霊達が眠る桜並木通りをユツタリと走っていた。桜並木通りを抜けると瓦礫の山が見える。特別に何かがあると聞く訳でも無く走っているとようやく横浜基地の検問所が見えて来た。番兵らしき兵士が2人程門の前に立ち塞がり行く手を阻む。

兵士A「止まれ！これより先は国連の管轄である！軍関係者で無いのであればさっさと帰れ！」

戒『国連では無いが軍関係者ではあるのだがな…？』

兵士B「何処の所属だ！」

戒『帝国斯衛軍所属の黒逸戒少将だ。此処へは香月博士から連絡をもらって会いに来た次第なのだが、念の為に連絡を入れて貰えるか

？
』

兵士A「し、失礼致しました！？直ぐにお通しします！？おい！」

兵士B「わ、わかった！」

2人の兵士はそう言いながら門を慌てて開ける。それに対して俺は軽く礼を言つとフェンリルをゆつくりと走らせて基地の敷地内へと入る。駐車場と思しき場所にフェンリルを停めて基地内へと続く出入り口に栗色の長髪で少しウェーブの掛かった帝国の軍服に身を包んだ女性が此方に向かって走って来るのが見えた。

まりも「た、只今お迎えに上がりました！帝国軍所属の神宮寺まりも軍曹であります！」

戒「そんなに畏まらなくて良い。元々お忍びに近い事何だからな？」

まりも「いえ！その様な事は准将に恐れ多い！」

戒「堅すぎるのも俺はどうかと俺は思うがな…？適度にガス抜きをしなければその内潰れてしまうぞ？（俺が少将に昇進した事はまだ全体に伝わりきっていない様だな……。）」

その後はまりもの案内の下香月博士のいる研究室兼執務室に向かつて廊下を歩いているがまりもは何故だかイーニアの事が気になる様で先程からチラチラとイーニアを見るが何か気になる様子だな……。

戒「どうした？イーニアか気になる様子だが…？」

まりも「い、いえ！准将と一緒にいるその少女は誰なのか気になっ

ていただけです！」

戒「イーニアが？彼女はアラスカの時に出会って気に入ったから彼女の国の連中にOHANASHIをして一緒になっただ。」

まりも「……一部ニュアンスが違った様に感じたのですが？」

戒「気にするな。……此処が香月博士の執務室か？」

まりも「はい、少々お待ち下さい。」

目の前の重厚な感じの扉の前に立つまりもに聞くとまりもは肯定し、扉の横にあるモニターに向かって何か喋っているが向こう側にいる香月博士に俺が来た事を伝えているのだろう……。そんな事を考えている間に扉が開くとまりもは扉の前から少しずれると俺に先に入る様に施す。まあ、案内役だからと言っても上司に当たる者を入れるのは当然か。

夕呼「初めましてかしら？帝国の英雄さん。私の呼び出しに応じて貰えるとは思わなかったわ。」

戒「そうだな……。色々とコンタクトを取って来ていたがちゃんとしたアポを取って来たのは今回が初めてだな？」

夕呼「それで咎めにわざわざ注意しに来た訳かしら？」

戒「そんな事の為だけにわざわざ俺自身が来る訳ないだろ？交渉と契約をしに来たに決まっているだろ。」

俺の言葉に怪訝な顔をして何事か思案を始める香月博士。少し牽制を掛けてみるか？

戒「勿論、ただなにも対価が無い訳じゃない。此方の要望を聞いて貰えば光学兵器の資料を虫食いでは無い物をお渡しする。」

夕呼「なっ！？アンタそれは正気かしら？もし私がそれを他国に流したりしないかって思わないのかしら？」

戒「仮に流れた所でそれを扱う為には高出力のジェネレーターが必要だから問題は無い。だが、香月博士はそんな事をしない筈だからな。」

夕呼「……どうしてそう言い切れるのかしら？」

戒「確かに今の地位を手に入れる為に色々と汚い手を使ってはいるがそれは誰かを貶める為では無くある目的の為なんだろう？俺は目的の為ならばどんな事でもする香月博士に共感してコイツを渡そうと思っただけだ。」

夕呼「……アンタ、私の目的が何か知った上で言ってるのよね？」

戒「無論だ。第5計画の発動阻止に加え、Alternative計画を第4計画でBETAの地球上からの抹殺……後は機械的0、生物学的0の素体のユニットの開発だろ？」

夕呼「隠し事は出来ない訳ね……。」

戒『隣の子に心を読ませてもプロジェクションをしているから無理だぞ?』

夕呼は手元にあるパソコンを弄ると少しして戒達の後ろの扉が開くとイーニアと同じ位の背丈に頭には何故か知らないがウサギ耳の力チューシャを付けた銀の長髪の少女が入ってきた。

夕呼「何故、この子の事に気付いたのかしら?」

戒『俺の家族にも同じ子がいるからな?ほら、隠れてないで自己紹介をしなきゃだろう?』

イーニア「う、うん。イ、イーニア・シエスチナです。」

夕呼「まさか、第3計画の!?!」

戒『彼女とはアラスカでのJFX計画の折に知り合って連れて来たんだ。』

夕呼「どうやって連れて来たの?アイツ等がESP発現者を簡単に手放さない筈よ?」

戒『なに、奴らの不祥事になりそうな物をちらつかせたら簡単に彼女達の身元を俺に預けてくれたよ。』

夕呼「アッハハハハハ 連中を脅したの?イケメンな顔してやる事が大胆じゃない」

戒「脅したんじゃない。少しお願いをただけだ。それを奴らは快諾してくれただけだ。余程自身の身が大事みたいだったからな？」

夕呼「アンタ、黒逸戒って言ったわよね？良いわ。黒逸の要求を呑んであげるわ。で、今更だけど黒逸の要求って何な訳？」

戒「俺の要求は彼女達をこの横浜基地に訓練生として入れて貰う事とそれに伴い俺が来る事だ。俺が来る事に関しては煌武院悠陽殿下及び紅蓮大將達が許可してくれているから他の奴が文句を言う事は無い。後は専用機を3機程を使用していない格納庫に搬入させて欲しい事だ。」

夕呼「彼女達の事と黒逸が来る事は良いわ。けど、格納庫は使用していない物は限られるわよ？とりあえず番外の格納庫でセキュリテイーレベルを将官クラスでなければ入れない様にすれば良いかしら？」

夕呼の的確な判断力は直に見るとやはり目を見張る物であった。

戒「では、来月までには機体を搬入する。まあ、先に彼女達が基地に行く事になるのだが……。」

夕呼「そう、なら後は基地内の案内よね？まりもだけにしようかと思っただけど気が変わったわ。わたしも一緒に行くわ。勿論社も一緒で良いわよね？」

戒「彼女が構わないのであれば俺は異論はない……。」

夕呼「どう？社も一緒に行くわよね？」

社「……………」

戒『どう反応した物か困るな』

夕呼「この子は元から無口だからしょうがないわ。まあ、仕事はしつかりやってくれているから別に問題は無いけどね？」

戒『そうか。（原作通りならば純夏の記憶を自身の記憶としているのだったか？まあ、今更原作通りと言うのも変だがな……………）』

まりも「では案内をします。」

その後は食堂や訓練を行うグラウンドや軍人としての学を学ぶ為に使う教室の様な所を見学し、最後に戦術機に慣れる為のシミュレーター機がある訓練室に入ると丁度此処の部隊だろうか？それを使って慣熟訓練を行っている途中であった。

戒『此処の基地の部隊と言う事はA-01小隊のA分隊か？B分隊はまだ訓練を始めたばかりのヒヨツ子共の筈だからな…』

夕呼「ほんとに黒逸は色々な事を知り尽くしているのね？」

戒『情報は何時の世でも共通して大事だからな？』

夕呼「帝国最強の衛士の力を少し見せて貰えるかしら？丁度あの子達もBETA相手ばかりだと詰まらないでしょうしね？」

戒『そう言いながら実の所は俺の戦闘データが目当てだろう？』

夕呼『あら、バレてたの？』

戒『全く、悪びれる素振りすらせずにとの口がぬけぬけと言うのだ？まあ、良いが此方も強化型の試運転をやってみたかったからな……。良いか？』

夕呼『そんな事なら良いに決まってるわよ。なら設定もしないとだから先にシュミレーター機に乗って調整をしてなさい。わたしはA分隊の連中に対人戦を仮想的にやって貰う様に指示を出しておくから。まりもはB分隊の子達を訓練を一旦中止して連れて来たら？今回の仮想訓練はあの子達にも勉強になるかも知れないからね？』

まりも『確かに……。実際に英雄の動き方を見る事は滅多に無いかも知れないわね……。』

戒『じゃあ、俺は設定をしてくるから、イーニアは俺の方のCPを頼むな？』

イーニア『わかった』

俺はシュミレーター機に乗り込むと直ぐにアルトアイゼンの強化改修型のリーゼの機体情報の入力始める。より正確に再現しデータを取る為に細かな情報を次々に入力していると向こう側は準備が整ったのかシュミレーター機にある通信端末を通して説明と準備が終わった事を伝えて来た。

香月「こっちは準備完了したわよ？」

戒「此方も直ぐに終わらせるっ！こっちもOKだ。」

まりも「それでは今からA-01小隊のA分隊と黒逸戒准将…じゃなかった？黒逸戒少将との仮想空間での市街地戦を始める！各員不様な姿を晒すなよ！」

速瀬「英雄か…早くやり合ってみたいわね！」

柏木「少しは冷静に動いてね？」

宗像「速瀬は猪突猛進だから無理でしょ？」

速瀬「宗像あゝ！どう言う意味よそれは！」

風間「2人共作戦前からいがみ合いは良くないわ。相手はBETAでは無く少将よ？しかも新型機の情報収集も兼ねているみたいだから手加減は無いと思うから油断は禁物よ？」

伊隅「風間の言う通りだ。2人は何時までいがみ合っていれば気が済むんだ？いい加減仲良くは出来ないのか？」

速瀬「コイツとはウマが合わないから無理です！」

宗像「からかい甲斐があつてあたしは大好きだけどね？」

伊隅「これ以上の無駄話はするな！少将が貴重なお時間を割いてくださっているのだから時間を無駄にするなよ？コレを任務と違って全力を尽くせ！！！！」

A分隊「了解！……！」

伊隅みちる率いるA分隊と戒がシュミレーター機を使った仮想戦闘が今始まることとしていた……

第参拾弍話（後書き）

次回はA - 01小隊のA分隊との仮想空間での戦闘になります。また、誤字脱字にしましては感想板を使って教えてください。それとは別に50万ヒットを超えましたのでご要望がある方は誰かと絡ませたいのか教えて下さい。期限は有りませんので宜しくお願いします。

第参拾参話（前書き）

御感想と御意見があればどの様な事でも送って下さい。

第参拾参話

仮想空間 市街地跡

瓦礫を疾走するは紅の重装甲を身に纏いし古の鉄の巨人、相対するは装備の異なる7体の撃震……

伊隅「全機散開！！各員フォーメーション通りに攻撃開始！！！！！」

A分隊の隊長を勤める伊隅みちる大尉の声に即座に反応したのは制スト・ガード圧支援の装備をした撃震に乗る風間樗子先任少尉で肩に装備した92式多目的自律誘導弾を一気に全弾を戒の操るリーゼに向けて放つ。その隙に突撃前衛と強襲掃討の装備をした速瀬水月中尉と涼宮茜先任少尉がそれぞれが87式突撃銃を発砲しながらリーゼに接近して来た。他の打撃支援や砲撃支援の装備をした撃震は既に倒壊しているビル群に身を隠したのかその姿を確認する事が出来なかった。

戒「粹な歓迎会だな……。しかし、強化したリーゼには無意味だ！！！！！！」

戒はリーゼの右腕に装備された5連装チェーンガンを牽制に狙いを先程撃たれた多目的ミサイル群に向けて掃射する様に弾をバラまく。一発のミサイルに着弾した事を皮切りに橙色の閃光が次々に生まれ、それに伴い大量の爆煙が発生し視界を一時的にも悪くする。

速瀬「今だ！行くぞ！茜！しっかり合わせろよ！」

涼宮「了解です！」

2人は87式突撃銃を捨て速瀬は74式近接戦闘長刀に…涼宮は65式近接短刀にそれぞれ装備を切り替えてそのままリーゼに突撃する。しかし…爆煙を切り裂くかの様に弾丸の嵐が速瀬機と涼宮機に襲い掛かる。速瀬は咄嗟に92式多目的追加装甲を前に翳し難を逃れるがそれが無い強襲掃討である涼宮は左腕に直撃を受けてしまう。

涼宮「キヤアアア！？」

まりも「涼宮機左腕を破損、中破！」

速瀬「今ので追加装甲が駄目になるってどんな威力よ！」

戒「今のを咄嗟に盾で防いだのは見事だな。」

煙の中からリーゼは右腕を前に突き出したままゆっくりと歩いて機体が無傷と言う事を見せ付ける。

速瀬「茜は後退！風間と宗像は援護して！」

戒「ふむ。たった3機でこのリーゼに挑むか…面白い！受けて立とう…！！！」

戒は操縦桿を操りリーゼをやや重心を前に倒すと背部に多数あるバーニア・スラスターやブースターを展開すると過給機が作動し周りの空気を燃焼させる為に機体へと流入させる。そして各ブースタ

ーがアルミ粉を噴出させると燃焼させた為に青白い炎が吹き出して速瀬機の懐へと瞬く間に入る。

速瀬「なっ!?!はっ、速過ぎる!?!」

戒「貰ったぞ!?!!」

” 騾!?!!!”

前のステーキよりもかなり大口径となったりボルビング・ステーキ：バンカーは撃震の胸部に突き刺さった瞬間撃鉄が勢い良く入り薬莖の中の火薬に衝撃を与えると火が入って大質量の鉄の塊と言っても過言では無いソレが撃ち抜いた。胸に風穴を開けられた撃震と撃ち抜いた姿勢のままのアルトアイゼン・リーゼは勢い良く左腕に固定装備されたリボルビング・バンカーを抜くと速瀬の駆る撃震は後ろにゆっくりと倒れ、全身が地に伏せるのと同時に爆散する。爆炎を背後に背負ったリーゼは怪しくツインアイを光らせる。その光景は誰もが恐怖を覚えてしまっただろう。

風間「速瀬機が墜とされた!?!」

宗像「アレは防げないと思うけど異常な威力よね……」

柏木「2人共大丈夫?」

風間 栲子と宗像 美冴は目の前に不気味にそして存在感をありありと漂わせるアルトアイゼン・リーゼに87式突撃銃の照準を合わせていつでも撃てる様に構えていると背後から砲撃支援装備をした柏木晴子が跳躍ユニットを吹かしながら2人に声を掛けて無事を確かめ

る。

美冴「わたし達は無事だけど速瀬はさっき脱落して遥は右腕を損失して前衛での戦闘は難しいな……。」

晴子「伊隅大尉が此方に向かっているから大尉が着き次第遥を加えた5機で一気に叩くわよ。」

晴子はそう言いながら遙機に近づくと自身が装備している87式突撃銃を遙機に渡し、茜機は損傷をしていない右腕で受け取る。

伊隅「全員いるか？」

晴子「速瀬機は大破して涼宮機は左腕を損失し中破で現在無事な機体は大尉を含め4機となります。」

伊隅「速瀬が墜とされたのは致し方ないか……。風間と宗像と涼宮は射撃による牽制をしろ！わたしと柏木はその隙に接近して叩く！A-01小隊A分隊の力を見せてやれ！！！！！」

伊隅の号令の下、風間機と宗像機そして涼宮機は一斉に跳躍ユニットを吹かして上空から87式突撃銃を発砲する。戒はそれに動揺するでも無く強化前のアルトでは出来なかった滑らかな機動で劣化ウランの雨を躲す。

戒「その程度ではリーゼは墜ちんぞ！」

戒はそう言いながらフットペダルを踏み込むと同時に上方へと重武装のアルトを跳躍させると肩に装備されたクレイモアのハッチを開放する。

戒『雪崩を冠するこの武装…天災には抗う術は無い…避けれる物であれば避けてみる…!!』

”ドガガガガガガ!!!”

ハッチから放たれた炸裂鉄鋼球弾はステーク同様強化前とは比較にならない程の代物になっており面制圧の出来る範囲が拡大し弾数も1.5倍ほどで上空にいた風間機達を弾幕の雨で撃ち抜き爆散させる。

まりも「風間機と宗像機、そして涼宮機、爆散。大破!」

伊隅「馬鹿げた武装ばかりでは無いか!」

柏木「たった一つの武装で3機同時に破壊する威力は脅威ですね…。」

伊隅「これが帝国斯衛最強の力とでも言うのか…。」

戒『まだ本気を出してはいないのだが…。まあ、まず最初に相手の攻撃手段を分析するべきであったな…。』

アルトの額部分に取り付けられた加熱式実体剣ヒートホーン改め荷電式実体剣プラズマホーンが電撃を放ちヒートホーンと同じように熱を持ち赤く紅く発光をさせ柏木機に一瞬の間に肉薄する。

伊隅「柏木!」

柏木「えっ!?!」

”ズンッ!?!?!”

柏木の驚愕の声と同時に柏木機は一瞬の内にプラズマホーンにより胴体を突き刺されその熱により突き刺した周辺の装甲はアイスのように溶け出していた。そして……その状態のリーゼはコンクリートを踏み砕く衝撃の反動を使い頭を上を思い切り振り上げ、鉄の雫を撒き散らしながら柏木機は中空に投げ出される。

戒「チエツクだ!?!?!」

戒は中空に投げ出された柏木機を追い掛ける為に背後にあるバーニア・スラスタールや各部ブースターを点火させ、青白い炎が吹き出しその重厚感溢れる体躯を軽々と上昇させる。

戒「打ち抜け!?!?!」

”鈍”貪”呑”!?!?!”

最初はゆっくりとだが瞬く間に速度を上げ高速よりも速い音速で接近し左腕に装備した大質量の鉄の塊を咆哮と同時に衝撃の胸部へと打ち込み撃鉄が打ち下ろされる。古城の城壁すら破壊する鋼鉄の塊が柏木機を更に蝕むかの様に三度叩き込まれ速瀨機同様爆散する。

伊隅「柏木いいいい!?!?!」

伊隅大尉が駆る撃震の前に上空にいたリーゼは降下し、地面に降り立った衝撃で足まわりのコンクリートを粉碎し陥没させリーゼの機体重量が異常である事が伺える。

戒『後は伊隅大尉の撃震だけだな……』

伊隅「例え1人になっても！どんな事でも諦めたらそこで終わりだ！……！」

伊隅はそう吼えると跳躍ユニットを吹かし、背部ラックに設置された長刀をポルトアクシオンを用いての抜刀をそのままに戒の駆るリーゼに振り下ろした。振り下ろされた長刀は跳躍ユニットとポルトアクシオンにより爆発的な速度を得て初めてリーゼにその剣を叩き込む事が出来た……しかし

伊隅「か、硬い!？」

戒『悪いな伊隅大尉、コイツの装甲は伊達では無い。戦術機が扱う実体剣如きでは切り傷所か掠り傷一つ付かんぞ……!』

伊隅「くっ!……!」

戒『今度は此方から行くぞ……!』

伊隅は跳躍ユニットを吹かして戒から距離を取るがそれでもアルトアイゼン・リーゼには……戒には意味すら成さず、戒は鬼の様な速度で追いながら各武装を展開し、5連チェーンガン、アヴァランチ・クレイモアと続け最後にプラズマホーンで突き刺したままゆっくり

と持ち上げると丁度戒の目の前に胴体を晒す状態になっていた。

戒『これでゲームセットだ……全弾持つて逝けえ!!!!!!!!!!』

”弾”弾”断”段”壇”壇”!!!!!!

角に刺さったままの伊隅機にバンカーを打ち込むとそのすぐ後ろにあるシリンドーが高速で回転し全弾倉をの弾丸を使い果たすのと同じ時に伊隅機は今までの撃震よりも盛大に爆散した。それを背景にしてリーゼはリボルバーのシリンドーを開放し空薬莖を廃棄し背部ラックにある予備弾倉を装填し閉める。

まりも「伊隅機主機部の損傷による爆散。大破！これにより黒逸少将の勝利で仮想模擬戦を終了する！」

まりもの言葉に従って戒はシュミレーター機の電源を落とすとビル群の瓦礫が広がっていた画面は何も映さず、しかし自身の姿だけを鏡の様に映し出していた。

戒『確かに練度ならばA-01小隊が帝国内では最強かも知れないが実戦経験が恐ろしく少ないのが厄介だな……。』

暗いシュミレーター機の中で戒はそう一人言葉を零していた。

香月「A分隊が約10分で全滅したわね……。」

まりも「機体もそうですけど黒逸少将の技量は途轍もないですね……。」

「

の少女…鎧衣美琴。

御剣「……………」

腕を組んで仁王立ちしているのは黒の腰辺りまで伸びた髪を持ち綺麗なプロポーションを持った御剣冥夜この5人が後の桜花作戦の主力メンバーであり其処で短い生涯を終えてしまう儂い運命を背負った戦乙女達……黒の聖人たる戒と会合を経てどう変わるのか……。

第参拾参話（後書き）

作者「戦闘描写と言うのは難しい」

戒「当たり前だろ？それは。他の作者の方々はそれを工夫して魅せる様に頑張っているのだから…。簡単な事はどんな事にだって在りはしない。」

作者「それは判ってはいるんだけど…中々これだ！って納得出来る描写が出来ないのが読み手の皆様に申し訳無くなって思う事が多いんだよ。」

戒「なら、文章力を上げるんだな？」

作者「頑張ります（ノ）丁（）」

戒「次回は会話のみの話になりますが楽しみにして下さい。」

作者「では、参拾四話で！」

第参拾四話（前書き）

今回の話は会話が殆どで機体等と長いかも知れませんがそれが嫌な方はクリアバックをお願いします。

第参拾四話

シユミレーター室

戒『出てくるなり全員で敬礼はしないでくれなひか？其処まで偉い積もらは無いからな？』

まりも「いえ！少将の身である貴方には失礼な態度をとる事は出来ませんので。」

戒『まあ、いいか……先程の分隊の隊長と隊員は？』

伊隅「わたし達です！」

戒『君達の名は？』

伊隅「伊隅みちる、階級は大尉になります。」

速瀬「速瀬水月、階級は中尉になります。」

風間「風間栲子先任少尉です。」

宗像「宗像美冴中尉です。」

涼宮「涼宮茜先任少尉です。」

柏木「柏木晴子先任少尉です。」

涼宮「涼宮遙です。階級は中尉になります。」

戒「そうか、伊隅大尉は良い指揮をするな……。後はもう少し経験を積みめ大隊を指揮しても大丈夫だろう。次に速瀬中尉は冷静に局面を見れるがもう少し相手の出方を見る事を覚えた方が良いな。確かに思い切りは良かったが次に繋ぐ事を意識してやってくれ。涼宮先任少尉は咄嗟の行動がやや遅れがちだな。急な場面は戦場では常にある対処の仕方を覚えた方が良いだろうな……。風間先任少尉と宗像中尉は特に言う事は無いがあの場合で固まっつての攻撃は的になるのと同じだからその事に気を付ければ後は連携でカバー出来るからな？ 柏木先任少尉は冷静に周りを見れるが自身の事となると若干だが視界が狭まっている様に伺えるが其処を克服すれば後方から指示していても自身が前衛に出た時に役立つ筈だからな？ 涼宮中尉は今回は役割はなかったが確かCPコマンド・ホスト・オフィサー将校だったか？ 重要性のある情報や戦況などは刻々と変わる為に逐一その情報を部隊に報告出来る様に頑張ってくれ以上だ。」

戒がシュミレーター機から降りて先程戦った隊の事を問うと敬礼する少女達の中から横一列になって出て来ると再び敬礼をしつつ自己紹介をした。そして戒はその自己紹介を聞き終えたと次に先程戦った時の感想で悪い点と善い点を述べ、一部の者には改善点も述べた。戒が話を終えたのを待っていましたとばかりにイーニアは戒の腰に抱きつくと猫の様にすり寄る。

戒「ああ、先に言っつて置くが俺の事を階級で呼ぶ事は禁止だからな？」

伊隅「な、何故階級で呼ぶ事が禁止なんですか？」

戒『只単に俺が階級で呼ばれる事が嫌いなだけだ。まあ、強いて理由として挙げるなら階級など飾りでしか無く仲間といると邪魔以外のそれにしかならないからかな？俺は命令より仲間との事を重要視するから余計に…な？』

伊隅「は、はあ？」

戒『まつ、今は判らずとも良い…。みちる達も経験を積んで行けば判る事だ。まあ、階級が無ければ思った様に行動する事が出来ない事は確かなのだがな……』

夕呼「ふふふ（笑）アンタって本当に面白い奴よね。普通将官クラスになる奴って偉そうな奴ばかりなのに階級が邪魔にしかならないって言う奴は珍しいわよ？」

戒『そうか？階級は上だとしてもそれが本当に敬うに値する者かどうかは他の者にしか判らない物だからな？なら、上官としてではなく戦友として彼女達と一緒に隔て無く接したいと思うのは俺の我が儘になるのだろうな…。』

夕呼「そういう考えなら良いんじゃないの？彼女達の中には訳在りな子が多少いるけどねえ？」

まりも「少将はこの後は……」

戒『階級で呼ぶ事は禁止と言った筈だ…。』

まりも「しっ、しかし…！」

戒『俺はそれ以外で呼ばれたいと思わんからな。』

まりも「でっ、では黒逸さんと。」

戒『まっ、生真面目なまりもに呼び捨ては強要はしないから呼称は良いか……。』

まりも「少将…じゃなかった！？黒逸さんに呼び捨て／／／／／／／／／／／」

戒『……大丈夫か？』

夕呼「あらら、まりもってば惚けてあこがムゲツ！？」

まりも「夕呼！？それ以上言ったら駄目だからね！？／／／／／／／／／／／／／／／／」

夕呼「判ったわよ。だけどいきなり口を塞がないで欲しいわね？」

まりも「それは夕呼が……」

夕呼「はいはい、今は黒逸のスケジュールを聞くのが先でしょう？」

まりも「そうだった！？あの…黒逸さんはこの後の予定はどうなっていますか？」

戒『この後は夕呼との会談が終わっているから予定と呼べる物は無いな…。強いて言うなら彼女達…B分隊の訓練を見学したいかな。』

まりも「B分隊を…ですか？今日の訓練は黒逸さんが来ると言う事で今日は訓練過程は無しにしていますから今日見る事は出来ませんが？」

戒「高々俺が来るだけで休まなくても良かったんだが？」

まりも「その代わりに黒逸さんからA-01小隊全員に講義をお願いしたいのですが……」

戒「講義とか俺には向いていないぞ 実技とか戦闘に関する事や相手の弱味の掴み方と使い所や機体の整備や機体の操作性の善し悪し位だぞ？」

まりも「2つ程危険な単語が有りましたがそれだけでも彼女達には良い話になります。どうか御願います。」

戒「はあ、かつたるいが生き残って貰わないといかんからな で、何処で講義をすれば良いんだ？」

まりも「では先程案内した時の教室で御願います。」

夕呼「わたしも見学しようかしら。黒逸の機体講座と言うのも気になるしね？」

戒「まあ、お気に召す様に頑張らせて頂きますよ。」

そして其処から全員で移動したが隣てイーニアと社が睨み合いをしていた事は敢えてスルーしよう。夕呼博士が何故かニヤニヤと笑っていたのは釈然としなかったが…。

訓練用講義室

戒「さて、まずは機体に関する事柄から話すでしょうか。何か聞きたい事がある場合は話が終わってからにしてくださいな？」

俺は教壇に立ち、教室のグラウンド側と廊下側でAとB分隊の2つに別れ、後ろの席にはまりもと夕呼が座り俺の話を聞く姿勢をしていた。

戒「まず、俺の扱っている機体はPTパーソナル・トルーパーと言い、戦術機とは基本的な動作が違い管制ユニットでは無く「戦術的動作思考型OS」、TC - OS（タクティカル・サイバネティクス・オペレーティング・システム）を採用しているこのOSにする事による利点は予め複数のモーションパターンを登録する事により戦闘に置いてOSの方が適切な動きを選択してくれるし本人の癖や修得している武術等をそのまま機体に乗ったまま使用する事が出来るな。例を挙げるならば紅蓮大将やその…冥夜だったか？が使う剣術や慧が得意とする格闘家然とした動きも出来る。後はそう言ったモーションを自動と手動に切り替えが可能な為、戦術の幅は戦術機に比べたら桁違いだぞ？後、戦術機に乗れなかった者も搭乗者に掛かる負担も軽減され戦術機適正が無い者でも乗る事が出来る様になっているからこの際乗ってみるのも1つだと思っぞ？さて…と、機体の大まかな説明は此処までにして質問したい者は挙手で頼む。色々聞きたいだろうがまずは1人2つか3つで頼むな？最初は冥夜からか？」

冥夜「先ず聞きたいのですがそのPTとは武装はどのようになるのですか？」

戒「良い質問だな。武装の方は左腕に固定武装としてジェットマゲ

ナムと言う武器と背部に収納された多弾頭誘導弾のスプリットミサイルで、ジェットマグナムとは3本の突起の様な形状から成っており、それにプラズマエネルギーを蓄積し放つ事により内部から破壊する兵器でその突起は引き抜く事も出来、非実体剣所謂光学兵器として運用する事も可能となっている。まあ、引き抜かない状態で展開して相手を刺したり切り裂く事も可能だから搭乗者によって使用用途は異なるな……。」

冥夜「こつ、光学兵器ですか！？でつ、では動力源は戦術機とPTはどう違うのですか？」

戒「戦術機の動力源は確か燃料電池なんだがPTの動力源はそれとは違い核融合炉ジェネレーターと言ひ、文字通り核を使つて稼働している物と難しい事は学者とそれに携わつた者にしか判らないがプラズマリアクターやプラズマジネレーターを使用するタイプがある。これ等の原理として別の機関であるテスラ・ドライブを開発する過程である重力制御基礎理論を用いて重力制御を行い核融合炉ジェネレーターとは違いプラズマを磁場では無く重力を用いる事でより高い発電効率が実現した。そしてリアクターの方は炉心を臨界点まで上げる事で高出力を生み出す事が出来るが此方は搭乗者に高い技量を求められる為に限られた者かそれを制御する為の高性能なAIが必要となつてしまふな……。」

冥夜「かつ、核が動力源ですか！？しかし、南極条約に反してしまわないのですか!？」

戒「それは……まあ、裏技と言つたか、脅迫もとい俺の持つ一部の技術提供で文句を言えない様にしてあるから大丈夫だし、それを言つたら米国のG弾など核を上回る程の危険性を秘めた物だがな……。」

冥夜「……判りました。わたしの質問は以上です。」

戒「次は……水月か？」

水月「先程の戦闘で使用された機体もPTになるのですか？」

戒「PTはPTなんだが、厳密に言えば機体によって名称に違いがあるが……。俺が使用したPTはアルトアイゼンで強化改修後はアルトアイゼン・リーゼと言う名だが正確にはゲシュペンスト試作三号機の強化改修型で全ての武装が固定武装となっており、これから配備予定でもあるゲシュペンストシリーズは近、中距離戦と装備によつては遠距離戦もこなす万能機だが決め手に欠ける為に特化型として近距離戦闘を主眼として開発されたのがこのアルトアイゼンでその強化改修されたのがリーゼになる。本機の特徴としては左腕に装備された大型の杭打ち機……まあ、パイルバンカーなんだが武装としての名称はリボルビング・ステークで改修後はリボルビング・バンカーとなっている。これ等はその根本にあるリボルバーと同じ回転式薬室があり装弾数が六発で突撃した際の運動エネルギーを使つて相手に突き刺した後に実包の炸薬を用いる事によりステークを打ち出し目標を破壊する。耐久性や貫通性が高い事と機体の出力に關係せず高い威力を誇る為この武装での攻撃がメインとなる。そしてその際に突撃する為の移動手段としては先程も見たと思うが背中や脚部等に設置されたアフター・バーナーやブースターにより遠くの敵に一瞬で接近して使うのが殆どだ。次に肩にある巨大なコンテナの様な物にはスクエア・クレイモア……近接指向性・近接戦闘用炸裂弾M180A3の通称で実際にはクレイモア地雷を大型化した物で弾頭にはチタン合金製の平均直径120ミリの炸裂網球弾を大量に発射して目標を粉碎するが見た目通りに重量バランスの点で跳弾の危険性も含むが射角が広い事もあり接近して使用しないと流れ弾の被害が出て更には誘爆の

恐れも出てくるがこの機体コンセプトである可能な限り遠くの敵の懐に入り込んでの必殺の一撃を叩き込んだ後の急速離脱（ヒット&ラン）と言う一撃離脱（ドアウェイ）に沿った物となっている。唯一の射撃兵器としては右腕に装備された三連式マシンキャノン此方も改修後は口径はやや小さくなっ
てはいるが装弾数や砲塔の増設による連射力の上昇等により三連式よりも威力が上がり中距離からの射撃で敵を粉碎する事が可能となっている。そしてこいつのもう一つのトレードマークである額上部にあるブレードホーン、加熱式実体刃ヒートホーンはその発する熱量により戦術機程度の装甲であれば難なく切り裂く事が出来る
が改修前では非常用の武器としてだったがそれも改修後はリーチを長くして障害物除去にも使える様にして、名称はプラズマ・ホーンで此方は荷電式で使用时にはブレード自身に電撃を纏わせる事により加熱式よりもより高い発熱量を得る事に成功しまだ試してはいないがBETAのダイヤモンド以上の硬度すら物ともしない威力を持つ。後の武装は無いが他のPTもだが戦術機に使用していた武装が使用可能となっているな……。」

水月「接近戦が主になると言う事ですが敵が遠距離に居り尚且つ近付けない場合はどのようになさるのですか？」

戒「其方の事は既に解消済みだ。」

水月「と言いますと？」

戒「ゲシュペンストMk-? 試作型三号機の改修型で高機動性重視の超長距離砲撃戦型PTでヴァイスリッターと言うが基本的な姿はゲシュペンストと変わらないが本機の特徴としてはテスラ・ドライ

ブと言うシステムを積み込む事により人型でありながら跳躍ユニット無しで長時間の飛行が可能となり空戦も行なう事ができ、此方の開発コンセプトは亜音速での飛行により敵のあらゆる攻撃に対して悉く回避して尚且つ、その超長距離兵器を駆使しての超長距離からの敵中枢にダメージを与える事にある。此方の動力源にはプラズマジエネレーターを用いている。武装の方はその殆どが光学兵器で占められている。が基本的装備は通常のゲシュペンストと変わりはないが右腕に装備された三連式ビームキャノンだがこれは収納が可能なので高速機動時には収納しての運用になる。でこのヴァイスリッターの主力武装と言うのはオクスタン・ランチャーと言い、銃身が上下に2つ備わっているのが特徴で形状としてはライフルに似た物だな。」

水月「何故、1つの銃に銃身が2つも在るのですか？」

戒「これはだな？実体弾と非実体弾。所謂ビームなんだが、2つのモードへの切り替えを可能にする為の処置だ。上段の銃身を使用するモードはBモードで下段の銃身を使用した時のモードはEモードだ。で、Bモードなんだが、特殊徹甲弾を使用するモードなんだが特殊と言っても只単に貫通力に優れた徹甲弾で、下段の銃身からは動力源からの直結でビームライフルの様に使用する事も出来るしターゲットへの長時間の照射を可能と、出力によっては色々な用途が出来るが設計上長大な武器な為に取り回しが難しいが扱いきる事が出来ればとんでもない武器ではあるかな？」

水月「その様な機体を製造してもし乗り手が決まらなかった場合はどうするのですか？」

戒「決まるまではお蔵入りかな？まあ、水月達にもシュミレーターを使ってコイツ等を使いこなす事が出来るか出来ないか調べさせて

貰うがな？勿論使いこなせた奴には専用機扱いで譲渡するがな？』

俺がそう言った瞬間全員がその場で驚愕の顔をした。まあ、試作機だからと言っても自身の専用機扱いとなれば尉官クラスのものや訓練生にはとんでもない事なんだろうが俺としては扱う事の出来る奴には渡す積もりでいたからな。第一俺の専用機はアルカインにヴェルフェゴールがあるからそれ以上専用機があつたとしてもあまり乗る機会が無いからな……。その後も機体や戦闘に關しての質問は続いたがこれ以上は長くなる為に省かせて貰うが一言だけ言えば夕呼が獲物を前にした肉食獣の様な目で見ている事が恐ろしかったな……。実機が来たらバラしてしまわないか心配だ。そしてその後は昼頃と言ふ事もありPX：食堂に来ていたが京塚曹長：貴女は既に此処の食堂の勤務に就いていたのか？

PX

戒『で、何故お前達は俺の座る場所に群がっているんだ？冥夜や慧は兎も角として尊や壬姫に千鶴は俺にまだ何か質問でもあるのかも知れんが、A分隊は何故に周辺を固めるかのように座っているんだ？そして、夕呼は何故ニヤニヤと此方を見て笑っているんだ？』

冥夜「そなたの話は役に立つ事ばかりでわたしとしてはもう少し話をしたいと思っただけだ。」

美琴「わたしも聞きたいな」

壬姫「わ、わたしは戒さんの射撃技術を教えて欲しくて？」

慧「……………臨機応変の対応を詳しく」

千鶴「わたしは部隊をまとめるのに必要な事は何か聞きたいからね。」

戒「俺の話が何時も役に立つとは思えないが、まあ、機会があればまた話してやるよ。王姫の場合は技術云々の前にそのあがり症をなんとかしないと集団での作戦行動に支障を来すからな…。慧や千鶴の方はまあ、アレだな…。今度と言いたいのが先ずは千鶴からだな、部隊を纏める事は並大抵の事じゃないぞ？皆を纏めるには軍の教科書通りには絶対に出来ない。その状況に応じた対応が若しくは従わせる何かを持ち得る事だな…。次に慧だが臨機応変の動き方と聞かれども俺の場合だと君達のようにポジションと言う物がないから殆どが遊撃隊として動く事が多いから慧の望む答えは得られないな…。」

俺が冥夜達とそう話をしていると夕呼が何気なく近づいて来た。…
…何かやったか？

夕呼「黒逸は聖徳太子みたいな奴ね？一度に聞かれた事を一瞬でそれぞれ質問をした人間に答えているのだから…。わたしには到底真似は出来ないわね？」

戒「俺は聖徳太子の様に善人では無い…。9を斬り捨て1を救う只の偽善者さ…。」

イーニア「かいはぎせんしゃじゃないよ？かいはつよくてやさしくてイーニアたちをたすけてくれたからね？」

戒「有難う、そう言ってくれて。」

冥夜「9を斬り捨てて1を救うとはどう言う事なのだ？」

夕呼「意味としてはその10を人として9を他者…1を大切な者と
いった所かしら？」

戒「何故そう解釈する？」

夕呼「そうねえ…、勘かしら？」

戒「女の勘と言うヤツか？学者の夕呼が言つと違和感があるな…。」

夕呼「学者の前にわたしは女よ？で、さっきのわたしの見解は正解
かしら？」

戒「正解だ。俺は自身の手の届く範囲でしか守る事が出来ないなら
他者よりも知人や親友達を守る方を選ぶ。例えそれが悪だと言うの
なら甘んじてそれを受けよう…。」

冥夜「そなたは何故其処までの覚悟がありながら全てを救おうとし
ない！そなた程の実力があれば不可能では無いのではないか！？」

戒「冥夜、全てを救う事は人の身で出来る事は限られる。そして、
その全てを救おうとする事は聞きようによっては希望になるが悪く
言えば傲慢な事になる。不可能な事なんだ。成し得ようとするなら
は命を捨て去る覚悟…若しくはヒトと言う器を捨て去る覚悟はある
か？」

冥夜「それは……………」

戒『覚悟の無い奴には無理だろうな……。ましてや衛士になる前の者達……生まれたての雛では尚更……か。』

俺の言葉に先程まで重い空気だったが一瞬でピリピリとした空気になる。やはり、納得していない奴が数名か……。まりもは教官として衛士として複雑な表情かおをしているな……。ソレを指すのには代償チップがある事を教えた方が……。代価うてを見せた方が早い……。か？

イーニア「……かい？」

戒『イーニアは少しおとなしくしてくれな？』

イーニアは鋭いな……。あの時の事をまだ引きずっている節は無いが不安は残っている……。か。この子は本当に優しい子だな……。

戒『冥夜を始め何人か納得が出来ない者にも教えてやるよ……全てを救おうと奔走し一部の者に暗殺されかけた奴の姿を……。な。』

俺は食堂内にいる奴等が注目している中で席を立つと帝国製の軍服の上を脱ぎ捨てると全員が息を呑むのを感じるが気にせず左腕を前に出す。

夕呼「義手……それも機械義手ね……。しかも左腕丸々って黒逸は相
当な無茶をしたようね……。」

戒『まあ……な至近距離で手榴弾を喰らう体験なんて滅多に無いがな？御陰で片腕に肋骨が数本逝ったがな……。』

夕呼「……良くそれで生きてるわね」

戒「悪運が人よりも強かった様だな…。」

夕呼が呆れ顔になるが確かに手榴弾を至近距離で喰らえば普通ならば即死だからな。悪運では済まされない事だがな……

夕呼「悪運で済ませられないわよ……所でその機械義手は誰が作ったのかしら？其処まで精巧な義手は見た事も無いし、機械の義手なんて尚更ねえ？」

戒「察し位ついてはいるのдар？聡明な夕呼博士は…？」

夕呼「何をどうやれば機械のなんて思い付くのよ。」

戒「日常的な生活等を鑑みて必要性があったからとしか言えんな…。」

夕呼「良いわ、今度と言うか赴任して来たらじっくりと訳を聞かせて貰うからね？」

戒「正直に話すとは限らないぞ？」

夕呼「その時はその時よ。」

戒「そうか、ならお手柔らかな手で頼むよ。……で、コレを見て貴様等はどうか？俺は代償として左腕を犠牲にしたが全てを救えなかった。なら何を犠牲にすれば全てを救えるんだ？冥夜やお前達は答えられるか？」

冥夜「そつ、それは……」

戒「……少し、苛め過ぎた様だな。俺の場合の事は極端過ぎたな。まあ、人それぞれが持ち得る筈だ。しかしソレを成すには並大抵の努力では成し得る事は不可能だ。成したいのであればより訓練生として訓練にそして人として恥ずかしく無い様に励めよ？」

俺は上着を肩に乱暴に掛けるとイーニアを連れてPXを後にして今日はあてがわれた部屋に行く事にした。部屋に行くまでの間イーニアが何故か空いている右手を遠慮がちに握って来ていた事が微笑ましいと思ったのは内緒だ。後は俺の言葉でアイツ等A-01小隊がどう変わるのか楽しみだな……

そして、戒がPXを後にした後は夕呼もコレ以上は留まっても仕方ないと判断したのかまりもと一緒に退室しその場に残っていたのはA-01小隊のメンバーであった。

冥夜「わたしはあの方にとても失礼な物言いをしてしまった。」

美琴「でっ、でもさ？戒さんはその事については何も言わなかったじゃん。気にしないで大丈夫だよ？ね？」

壬姫「戒さんの目って敵しいけど優しい感じだったね？」

慧「……そだね。」

千鶴「珠瀬は何処を見ているのよ 彩峰もよ。」

壬姫「すつ、すいません?」

慧「……千鶴は鈍感」

千鶴「何ですって!」

壬姫「はうあうあー??」

冥夜「（確かにあの方は厳しい中に優しさを秘めた様な方……ってわたしは何を考えているのだ／＼／＼／＼／＼／＼／＼）」

B分隊の面々はその様に話をしている中……一部別の事を考えて悶絶しているが、A分隊はかなり深刻な表情かおで集まっていた。

みちる「黒逸少将があのような事を言うのは何か理由があるのかもしれないな……。」

水月「アイツ等は気付いた様子は無いみたいだが?」

美冴「速瀬が気付いているのにわたしは驚きだけど?」

水月「なんだと!宗像あ!それはどう言う意味だ?」

遥「落ち着いてよ2人共？」

晴子「少将は敢えて嫌われる様な言動をしたのには何か理由が？」

みちる「その理由が皆目見当がつかないのが悩み所だけどね……。」

栲子「代価に代償……。」

茜「と言うかあの人の腕を見た時はびっくりしましたね……。服の上からだと義手をしているなんて全然わかりませんでしたね。」

みちる「確かにそれもだが何をしてあの様な義手を着けるに至ったのか気になるな。暗殺されかけたとも言ったが何故暗殺などを企てられたのか……。」

A分隊はA分隊で先程の戒の話や腕の事で頭を悩ませていた。戒が赴任した時、彼女達はどの様にな変わって行くのか……。

第参拾四話（後書き）

作者「出来たが何故かグダグダになってしまったな……」

戒「物凄い駄文だな。説明も長つたらしく書いて……」

作者「武装や機体概要を詳しく書いていたら何故かダラダラとした文章となつてしまつたんだよ」

戒「前回の話で久々に感想が来たと思つたらこれか？」

作者「スイマセン？」

戒「今回は大丈夫だろうな？」

作者「なるべく見やすく書かせて頂きますo」z。」

戒「今回は参拾伍話で……」

作者「その前に溜まつてきたhit記念小説を書かないと」

戒「それは作者の力量でやるしか無いだろうが。リクエストも来ているのだから先にやるべき事だな……」

作者「ガンバリマス。」

戒「では、長つたらしく駄文製造者のクロイツヴァルトの小説をこれからもご愛読の程を宜しく御願ひします。」

50万hit記念リクエスト小説（前書き）

L様リクエストの夕呼先生との絡みになりますが夕呼先生のキャラが崩壊気味ですが批判等のコメントはリクエストして下さい。方のみですので御了承下さい。

50万hit記念リクエスト小説

香月夕呼 研究室兼執務室

戒「~~~~って事で俺の機体であるヴェルフェゴールの技術提供は無理だが、ゲシユペンスト並びにヒュッケバインの技術であれば多少ならば大丈夫だが……」

夕呼「確かに黒逸のヴェルフェゴールは今の世界では破格な機体能力を持つ反面量産に向かないばかりか常人には扱いきれないし国が傾くわね それに総合的に見ても異常なまでの技術の集合体みたいね……。て言うか普通なら其処までの技術を持った黒逸が少将であるのが不思議ね……。」

戒「と言うか技術提供の話だけで夕呼が俺を呼ぶ訳が無いだろう？何を考えているをだ？……また天然物のコーヒー豆か？」

夕呼「それも良いけど今は良いわ。」

戒「ではわざわざ呼んだ理由は一体なんなんだ？」

夕呼「黒逸は鋭いのか鈍いのか判らないわね……わたしが言いたいよね……少し息抜きに出ないかって事よ。幸いに黒逸が大型バイクを持っているから少し海辺辺りに遠出でもして気分転換の名目で2人で出ない？」

戒『研究の方は良いのか？』

夕呼「黒逸のPTが搬入されるまでは大丈夫よ？それに研究以外の事はイリーナに任せてあるからね。さっさと行くわよ？」

戒『拒否権は無しか（ピアティフの苦勞人属性は健在か…… 今度差し入れでも持って行ってやるか）』

夕呼「こんな美人と一緒に出掛けようって誘うのに拒否するのかしら？」

戒『普通は自身で言う事では無いが まあ、俺も時間はあるから構わないが仮にも副司令なのだから其処はしっかりとしてくれ……』

夕呼「判ってるわよ。少しだけ準備するから先にバイクの所に行つててくれるかしら？」

戒『わかった。』

駐車場

夕呼「待たせたわね？」

戒『何時も着てる制服では無いのだな……。』

夕呼「デートに軍服とか雰囲気が無くなるでしょ？そう言って黒逸

だって軍服じゃ無くて革のジャケットとか何気に大人みたいな格好をしてるじゃ無い？」

戒「コレと和服の様な物しか私服と呼べる物は持ち得ていないだけだ。」

夕呼「それでも黒逸の場合は似合っているから良いんじゃない？」

戒「それよりも早く乗ってくれるか？さっさと出発しないとアイツ等が騒ぎ出してしまつかも知れんからな……。」

戒はそう言いながら自分は丸渕のゴーグルを掛け、夕呼にハーフメットを渡してエンジンを掛けると重低音のエンジン音と共にリズムカルな振動を生み出す。

夕呼「独特なデザインのバイクね。」

戒「趣味で自分の工房で製造（創造）したからな……。デザインはなんとなくだ。排気量が1・160CCでエンジンがV E 4 - G e 型油冷型V 4気筒D O H Cの化物モンスターバイクだな。」

夕呼「バイクはあまり良く判らないけど普通の人には乗りこなせないわね。」

戒「とりあえず出るぞ？」

夕呼「そうね……。」

俺は2人乗り用に改造したフェンリルのバックシートに夕呼を乗せ

るとハンドルを捻り横浜基地を出て海岸まで走らせる。4サイクルのエンジンは低速では一定のリズムを刻むが高速ではドツドツドツとドラムを叩いた時の様な感じのリズムを刻んで走る。

夕呼「うっくん！潮風が気持ち良いわねえ」

戒「乾くとべた付くだけだ。」

海岸付近に着くとフェンリルを路肩に止めて浜辺まで来ると夕呼が腕を伸ばして潮風の感想を言い戒はその横に立ちながら至極当然の様に夕呼の発言を一刀両断にして海を眺めていた。

夕呼「黒逸って案外雰囲気と言うか空気をぶち壊す事を言うわね」

戒「良く判らん……。しかし、何故急に海辺に行きたいと言い出したんだ？」

夕呼「まっ、黒逸……いいえ戒が居た御陰でわたしの研究もかなり進んだからね？これはお礼と感謝そして……」

戒の横で呆れながら夕呼は見ているが何処か嬉しさを感じさせる表情おをする夕呼は急に戒と向かい合うとの距離を0にする。そして夕呼は戒と身長差がある為に首へと腕を回し軽いものから濃厚な大人のソレにシフトしていた。戒もそれに逆らう訳でも無く夕呼の肩と腰に手を回していた。2人は夕日を背景にして浜辺で長年連れ添っている恋人達の様な口付けを交わしていた。

戒「いきなりのキスとは貴女にしては些か大胆ではあるな……。そう言う事は好きな異性にするのが普通だと思っがな？」

夕呼「わたしだって学者の前に1人の女と言う事を忘れないで欲しいわよ？それとわたしだって好きでもない相手にキスなんて絶対にしないわよ。それ位察しない／＼／＼／＼／＼」

戒「済まない。だが俺は世界中のBETAを排除するまでは答えを言う事は出来ない……」。

夕呼「それならさつさとBETAを駆除するしかない訳ね？勿論オルトネイティブ4で決着をつけて……ね？」

戒「その為にも俺は最善の方法を取り続け、俺の仲間や家族達を守ってみせる。勿論夕呼もその中に入っているからな？」

夕呼「なら、期待してるわよ？帝国の守護神様」

戒「守護神と言うか奴らに取っては死神にしかならないが……」

夕呼「違いないわね（笑）それじゃあそろそろ行きましようかしら？戒の連れのイーニアだったかしら？が探し始めるかも知れないしね？」

戒「そうだな……」

夕呼「その前に……んっ……」。

戒「……先程したのにまたするとは夕呼は唐突過ぎるな。」

夕呼「好きと宣言したのだから他の女に取^{ヤッ}られたく無いのは普通で

しよ？」

戒『良くは判らないな。』

夕呼『戒はもう少し女心と言う物を学んだ方が良いわよ？』

戒『なるべくは善処する……。』

夕呼『じゃっ、さっさと帰りましょう。』

戒『わかった。』

そして夕呼と戒はフェンリルに乗ると先程までいた海岸を離れ再び横浜基地へと戻って行った。魔女と聖人のBETA殲滅の狼煙はゆつくりと上がった。そして彼女達の恋と呼べる戦いもまた激しさを増して行くのであった。

50万hit記念リクエスト小説（後書き）

作者「最後にこの話で参拾話になって登場したバイクの一部を開示しますね？まんまFFのクラウドが乗っていたフェンリルを2人乗りに変えた事と剣を収納するギミックの所に通信用端末や魔力式のスナイパーライフル等を仕舞える様にして装甲材質はガンダニウム合金仕様で並大抵の事では破損しないと速度や頑丈性に操作性等が超魔改造モンスターバイクとなっております。扱えるのはやはりそれ以上のバグキャラもといチートな戒にしか乗りこなせない問題有りな乗り物ですね……。L様御期待に添えられていれば宜しいのですが御感想の程を宜しく御願致しますm()m

第参拾伍話

横浜基地駐車場

戒『それでは来月に此方へ来るからその時は宜しく頼むな。』

夕呼「判ってるわ。戒の推薦で来る子達だから配属先はB分隊にしておくわ。」

戒『ああ、頼む……。』

まりも「B分隊に配属される人数は4人ですか？」

戒『まあ……。な。アラスカで試験小隊の衛士をやっていた奴等だからあまり苦勞を掛ける事は無いと思うが何かあれば俺に教えてくれ。

それと配属とは別に此方から俺の他に統一中華戦線の崔 亦菲中尉と一緒に来る事になっている。』

夕呼「資料を見たけど良くもまあ、あんなちんちくりんを赴任させようなんて思ったのかしらね……。」

戒『彼女にそれを言ったら怒り狂うぞ？亦菲は上官だろうと噛み付いて来るからな……。』

夕呼「戒が言ってる事は相当な物なのね……。まあ気をつけておくわ。」

まりも「戒さん、道中お気を付けて。」

戒「そうそう事故など起こさないが気を付けるよ。夕呼はあまり無理をしない事だな。人間無理を続ければ壊れてしまうからな……色々とな。」

夕呼「まあ、一応は受け取っておくわ。」

戒「それじゃあ、イーニアを待たせているから……行くな？」

まりも「はい。戒さんまた会いましょう。」

夕呼「来月にはしつかりと来なさいよね。戒が来ないと研究の核が行えないんだからね？」

戒「わかった。また来月に会おう……。」

俺は2人とそれだけを話してイーニアを乗せてあるフェンリルに跨るとキーを回してハンドルを捻り横浜基地をそのまま後にした。

夕呼 s i d e

夕呼「行ったわね……。」

まりも「想像していた方とかけ離れていましたね。」

夕呼「そうね。普通の将官のヤツはプライドは高いわ態度が悪いのが多いからね。……そう考えると戒って帝国内……軍においてはかなり異質になるのかしらね?」

まあ、普通に考えると上の無能共にとっては邪魔者の何物でも無いわけなのよね……

まりも「異質……ですか?」

夕呼「まっ、アイツはそんな事は関係無いみたいだけどね?わたしとしては面白い奴が来るから退屈はしないで済むから良いわ。」

戒が来るとなればあのゲシュペンストやヴェルフエゴールに他の機体も搬入予定になっているからね。退屈している暇なんて無い位の楽しみが待っているのよね(笑)

まりも「退屈って」

夕呼「良いじゃない。ほら戻るわよ?まりもにもわたしにも戒が来た時の支度を今の内からしない手は無いからね?」

さて、わたしはわたしで戒の推薦の子達が受け入れやすい様に久々に副司令としての仕事をしましょう

夕呼 side out

戒 side

戒「イーニア、横浜基地の雰囲気を感じての感想はどうだった？」

俺は東京に戻る道をフェンリルを疾走^{はし}せて後ろに乗るイーニアにある基地の感想を聞いていた。

イーニア「すごくあたたかいけど、どこかきのぬけたばしょにかんじたよ。」

イーニアの言う通りに温もりをとても感じる反面前線では無いが戦場には変わりはない事に対しての認識不足が強く感じたが俺が赴任した時にでもそれを払拭出来ると良いが、出来なければあの横浜基地の事件が起きてしまうからな……。

戒「ふむ、イーニアもそう感じたか？あの雰囲気はクリスカや亦菲辺りが五月蠅く言うだろうからな……。改善しないと士気云々の前に横浜基地の危機に繋がってしまうから……。A 01小隊の子達とは仲良く出来そうか？」

俺はそんな事を言い、基地に搬入する為のゲシュペンストの機体数と自分専用機に特化型の2機をどう搬送するかを考える。陸路で行くとしたらとてもじゃないが日が掛かる事は明白だし空路を行くとして万が一にBETAと遭遇した時に光線級にやられないか心配である。海路では何処に停泊するかが問題があるし、わざわざ船を使つてまで横浜基地に機体を搬送する事も無いと悠陽達とは別の奴等が言うかも知れないな……。やはり陸路か空路のどちらかか？空

路なら今の所はアウドムラかガルターダ辺りになるな。陸路ならば運搬車両が若しくはM D s y s t e mでゲシュペンスト達を操作して行く2つ…か。操作して行くのならば向こうの奴等のデモンストレーションとなるが特殊部隊以外の国連の衛士が五月蠅いかも知れないがそこは俺の階級で黙らすしか無いか……？

イーニア「あのこ…やしろかすみだけはべつ…ライバルになりそうだから」

戒『なんのライバルだよ 兎に角、帰ったら色々と準備や手続きをしないといけないな…。唯依が五月蠅いかも知れないが……。』

そして俺はフェンリルの速度を更に上げて東京へと戻る為、国道を疾走する。

第参拾伍話（後書き）

御意見や御感想またはアドバイス等がありましたら宜しく御願ひ致します。

第参拾陸話

黒逸邸屋敷地下ドック

戒『A 01小隊分のゲシュペンストの搬出を急いでくれ。来月までには全機体を横浜基地に入れる予定だからな!』

アイルー達「「「了解だにやー!!!!」」」

俺の声に心える様にしてドック内のアイルー達が一斉に返事をして今も早く動いて機材運んでいるが更に早さを増し迅速に運び出している。やはり人語を理解し喋るアイルーは整備や農業に向いているな……。

585

ラクス「戒、輸送機の準備は整いましたわ。」

戒『ありがとう。後はリーゼとヴァイスにヴェルフエゴールか…。』

ラクス「その3機は別にしてリーゼとヴァイスに関しては特注の戦術機用カーゴで運搬し、ヴェルフエゴールは陸路の輸送車で運ぶ手筈になっています。搬入する期日は総合戦闘技術評価訓練が終わり次第と言う事で宜しいのですか?」

戒『ああ。それで良い。』

効「それを待っている時間はあまり無いかと思つぞ。」

戒「それはどう言つ事だ？」

効「の奴等が騒ぎ出して来る可能性が高いからだ。既にヴェルフエ
ゴールは日本帝国にとって守護神の様な扱いをされているからな。
国連に属している横浜基地に搬入する事に異を唱えかねないから東
京から搬出するなら早めの方が得策だと思つが……。」

ラクス「……ですか？ですがあの方達にはその様に騒いだ所で阻害
する事は出来ない筈ですが……無能な官僚（阿呆）達が便乗して来
るからですか？」

戒「（阿呆つて誰も聞いていないから良いが）まあ、可能性は大
いにあるな……。判つた。機体の積み込みが終わり次第、出発すると
しよう。機体の搬出に動向する形で先発隊としてクリスカとラトロ
ワに亦菲そしてヴァレンタイン、その後から俺とイーニアにナスタ
ーシャとジゼル。そして整備士兼オペレーターはフェルトに整備専
門のアイルー15匹に主任のシオを含め9人と16匹の編成で向こ
うに行く時に此方で栽培している天然物の野菜とポポやガーグアの
生肉を合わせて1トン程を一緒に空路で行く。全員準備をして置け
よ？」

全員「……了解うけ（ですにゃ）！！！！」「」「」「」

効「……ところで言うのを忘れていたがアラスカのユーコン基地か
ら横浜基地へ1機のムリーヤが戒達が横浜基地へ入る前日に到着す
る予定になっている。」

戒『？どういう事だ？（なんだ？ユーコン基地からわざわざ横浜基地へ赴任させる衛士でもいると言うのか？……今考えていても致し方ない…か。来る人物にとりあえずは態度を合わせてやれば良いか。まあ、良いか……。ラクス、俺は少し、悠陽の所に用事があるから後の事は効とフェルトと一緒にアイルー達に指示を出してくれ。』

ラクス「わかりましたわ お気を付けて下さいな。」

戒『ああ、わかってる。』

俺はそれだけ言い、地下ドックから地上の屋敷に通じている地上エレベーターに乗り地下を出るとすぐに愛車と成りつつあるフェンリルに跨ると悠陽が住まう帝都城に向け走らせる。

煌武院悠陽 私室

戒『突然押し掛けて済まない……。』

悠陽「いえ、戒が来て下さっただけで私はとても嬉しく感じています。……それで用とは？」

戒『いや、来月に横浜基地へ帝国軍籍で横浜基地へ赴任する事になったから、また当分会えなくなるからな？仕事の方も粗方片付いたから会いに来たんだ。』

悠陽「そうなんですか……。戒、貴方に話をして置きたい事があるのです。私の家には双子は世を分ける忌み子と言われもし生まれた場合には離す仕来りになっているのです。」

戒『……何故今になってそんな事を言う？』

俺が訝しく聞くと悠陽は重たい雰囲気でその口を開ける。

悠陽「もうお気付きの筈です。あの横浜基地にいる御剣は私の双子の妹なんです。」

戒『成る程、あの子が悠陽の妹だったのか。道理で……雰囲気が似ていた訳か。しかし、何故俺にそのような事を話すんだ？』

悠陽「向こうに行きましたら私の妹を……冥夜の事を御願ひ致します。勿論この様な事を頼み込む事自体間違いだとはわかってはいます……。」

戒『悠陽……俺が大切な人の頼みを断る程冷酷な人間だと思ってるのか？』

悠陽「思っていないませんが……私事を持ち込むのはいけない事と思ひ勘違いしてはいないか？……え？」

戒『悠陽が頼まなくても俺は御剣冥夜と言う1人の少女を見捨てる事はしない。それに悠陽の言い方だと何処か遠慮しがちに思えるぞ。自分で支援すれば良い事を他の者に頼む事とかな……』

俺が多少呆れながら聞くと悠陽は重たい雰囲気のまま悲しげな表情を浮かべていた。

悠陽「……冥夜が私の事を怨んでいないかと思うと私が冥夜の事で表立ってやってよいのか判らないのです。」

戒「悠陽は考え過ぎな所があるな……。あの子を見たが目には恨みなど微塵も感じずに何か目標があるのか力強い覚悟を秘めた目をしてたぞ。」

悠陽「そうなのですか？冥夜が衛士として立派にやれているか心配でしたから……。」

戒「まだ訓練兵だが総合戦闘技術評価訓練で合格が貰えれば衛士として軍に携わる事が出来るからな……。」

悠陽「では冥夜が無事に衛士になれた暁には武御雷を渡しませうか……。」

戒「良いんじゃないか？その後の事は俺がしっかりと指導していくから問題ないぞ？」

悠陽「戒、ありがとうございます。」

戒「じゃあ、この話は終わりだ。……悠陽、またしっかりと寝ていないだろう？目の下に立派過ぎる隈が出来てるぞ？」

悠陽「え!？」

俺の言葉に目を丸くしてビックリする悠陽だが目の下に目立った隈があれば誰でも気付いていると思ったのだが……

戒『目の下に隈が出来てるぞ？また考え込んで寝ていないな？』

悠陽「貴方には誤魔化せないのですね…。妹の事やこの日本の事等を考えていると寝られないのです。」

戒『まあ、悠陽の事だから心配なのは判るがその本人が倒れでもしたら冥夜や日本の者達が心配して元も子もないだろ』

悠陽「……ごめんなさい。」

悠陽は俯きがちに戒に対して謝ってくる。

戒『兎に角、寝ないとだな…。自身の足か俺が運ぶのとどちらが良
い？』

悠陽「その………御願います／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／」

戒『承りました…それでは失礼しますね？悠陽殿下（笑）』

戒はそう言つと後ろから悠陽の肩と膝の裏を抱きかかえる……所謂お姫様抱っこの状態で寝台に向かい悠陽をその上にゆっくりと下ろす。

悠陽「また寝れるまで居てくれますか？」

戒『当たり前だな……』

悠陽が不安げな表情で此方を見る為、戒が悠陽のその綺麗な紫の髪を優しく梳く様に撫でる事数十分……

悠陽「すう…すう…」

戒が見たのは安心しきった可愛らしい寝顔を見て優しく微笑んで頬に唇を落として部屋を出る際に何かを呟いてから扉を閉めて帝都城の廊下を歩いていく。

紅蓮「おお！戒よ久しいな！！元気にしておったか？」

戒「ええ、紅蓮さ…大将も元気そうで何よりです。真那中尉は元気にしていますか？」

紅蓮「まあ、元気と言えば元気だと思うが今は横浜基地にいる御剣の者の護衛役をしておるから偶にしか会えぬがな。それと何時もの口調で構わぬぞ？」

戒「そうですか。ところで紅蓮さんそつちの人は誰です？」

紅蓮「おお、彼は帝都守備連隊の指揮をしておる沙霧尚哉でな？守備連隊の配備の事を相談しておったのだ。」

戒「紅蓮さんでも相談する事があったのですか。」

紅蓮「儂も人ぞ？守備連隊の配備はやはり其処に配属している者が一番詳しく知っておると思うから相談をしているのだ。」

戒「確かにそれは一理あるな……。俺は「悠陽殿下の剣の黒逸少将だ。……紅蓮さん 自己紹介の時に挟まないで下さい。それと何時からそんな大層な2つ名が付いたんだ？剣と言つのなら紅蓮さんや斑鳩さんの方が向いていると思うが？俺の場合は死神や殺戮者と不吉な物しか存在しないのだから……。多少ましな物も幾つか存在するにはするが……。」

紅蓮「何を言うか。戒はそのBETAを殲滅する姿からBETAにとつての死神等と言われているだけで帝国人民には守護者やその黒を好む事から黒の守護者や黒き聖人と謳われているのだぞ？」

戒「俺はそんな立派な者では無い……。戦う事でしか護りたいモノを護っているだけの不器用な男だ。」

沙霧「その様な事はありません！」

紅蓮大将の言葉に戒が自虐的な笑みを浮かべて否定的な事を言っていると沙霧が大きな声で否定してきた。……いきなりの事に戒は愚か紅蓮大将ですら目を丸くして沙霧を見ていた。

戒「……何故そう言い切れる？」

沙霧「失礼ながらわたしには黒逸少将が戦う事しか出来ない方には見えません。紅蓮大将や他の衛士達の話聞く限りでは皆の……民達の事をしっかりと考えている方だと言われていますし、少将に助けられた事がある大多数の衛士達が少将の事を目標に今も新たに配

備されたゲシュペンストの慣熟訓練に励んでいます。ですが、わたしはそれを抜きにして京都撤退戦での出来事で少将が戦うだけの人では無いと確信しています。」

戒「そう…か。（沙霧尚哉の雰囲気だと原作の様に謀叛を起こす気配は無い…な。では誰が戦略研究会の頭なんだ？）そう思っている者が尚哉を含め多くいるのは俺にとって救いになるよ。…紅蓮大將俺はこれで失礼します。近々横浜基地へ行く訓練兵の指導の補助と新型の試験運用も平行して行うからゲシュペンストの派生型のヒュツケバインの開発に着手していますので完成しましたらゲシュペンストと共に帝国の主戦力になると思います。』

紅蓮「おお！既にその様な事を含め行動しておったのか！アラスカでの事を含め戒は頼もしいな。他の将官共にも見習わせぬといかな…。」

戒「いや、俺が好きでやっているだけだからな？…それじゃ。』

そう言い紅蓮達と別れ今度こそ自らの屋敷に戻るのであった。

第参拾七話（前書き）

連日投稿になります。やっと本編に入る事が出来ましたが、多少強引にした感が否めませんがご容赦下さい。

第参拾七話

戒が横浜基地へ赴任して数日後の訓練にて

戒『其処！行軍速度が落ちてきているぞ！』

俺は今よりもと一緒にB分隊の訓練指導を行っていた。

まりも「しかし、戒さんまで一緒に指導しなくても良かったのでは……」

戒『そうでもないさ。今回この子達に用意したゲシユペンストは多少複雑だから……。その機動について実戦での講義やその戦闘時に置ける立ち回り等の戦闘技術教導訓練を行っていくから……。勿論まりも…君にもそれには参加して貰うがな？』

まりも「わたしもですか？」

戒『戦術機とは違うのだから当たり前だろ？それともPTではなくMSが良いか？其方だとPTより複雑な操作が必要になる事とOSを自分に合わせて調整したり環境によつては細かな設定をしなければならぬからな……。』

まりも「PTの方で分隊の者達と受けさせて頂きます！！」

戒の言葉に焦った様にまりもは敬礼しながら言葉を返す。

戒「ん？そうか。なら総合戦闘技術評価試験で合格したらその次の日から行っていく事にするか……。よし！丁度昼時か……。全員走り終えたら午前の訓練は終了！汗を流して昼食を取って講義室に集合せよ！……。まりも、後の事は頼む俺は少し格納庫に寄ってからPXに行くからな……。』

まりも「判りました。」

タリサ「ハア：ハア：ハア……。か、戒何処に行くんだ？」

戒「おお、タリサが一番早かったな。なに、少しゲシュペンストの調整と俺の機体に新たに付けた機能の確認を少しするのに格納庫に行く所だ。』

タリサ「あ、あたしも……。」「抜け駆けは無しの筈だが？」う！ク、クリスカ」

クリスカ「お前と来たら油断も隙もないな……。戒の事は皆で同盟を結んだ筈だが？」

タリサ「だあー！悪かったからそんなに責めるなよ！」

戒「……。2人して何の話をしているんだ？」

タ、ク「なんでもない（です）よ！？」

戒『???…まあ、なら良いが。それじゃあ、俺は格納庫に行くからタリサ達は汗をしっかりと流して昼食を取れよ?』

俺はそれだけ言つと格納庫に向けて歩いて行く。

シャワールーム

タリサ「ハア〜、こつちに来れば戒の近くにいれると思つたらライバルが一気に増えているんだよ」

クリスカ「わたしに言つな。わたしですらライバルが多くいるのは困っている事なんだからな。」

ラトロワ「全くね。競争率が此処まであるのは判つてはいたのにいざ目の当りにするのとはしないのでは違いがでるわね…。しかも後数週間もすれば篁中尉が来るらしいしね…。」

タリサ「げっ!あのお姫様も来るのかよ 益々戒の近くにいられなくなるじゃねえかよ」

ラトロワ「だが、そうは言つても戒に好意を持つ者は多い…。戒の事を好く奴は私達を含めて大勢いるのだ。仕方のない事だろ」

ヴァリレオ「まったくだね……。あの人の異性を惹きつけるアレは最早才能と言っても良いかも知れないな？」

全「……………」。

ヴァリレオ「ん、どうした？」

タリサ「どうしたじゃねえ！V G！テメエなに堂々と入って来て居やがるん…だ！…！」

ヴァリレオ「ぶべらっ！？」

イーニア「大丈夫なのかな？」

タリサ「ふんっ！自業自得だ！ほっとけ！」

ヴァリレオが居た事にタリサは激昂し一瞬の間に懐に入ると捻りながらのアッパーを水月に叩き込んでからシャワールームから出て、イーニアがそれに続きながら地に伏して悶絶するヴァリレオを気遣うがタリサの声にビクつきながらもタリサに続き出てクリスカ、ラトロワと続くが2人はまるでゴミを見るかのような目でヴァリレオを一瞥してからヴァリレオを放置して退室する。後から入って来る冥夜達だがヴィンセントを発見するや否や悲鳴と共に断末魔がシャワールームから聞こえたのは言うまでも無い……。

番外格納庫内

戒「ヴェルフエゴールのゲシュマイディッヒパンツァーと両肩に内蔵した空間歪曲場生成装置は正常…と。後は奥のコンテナにあるストライクフリーダム^①の最終調整だけか。M D s y s t e mの採用や

ZERO systemに00の技術流用によるドラグーンの大気圏内の使用可能にスティニーの掌の武装の追加に斬艦刀の追加による近接能力の向上…か。また悪魔的な強さの機体だが使いこなせる奴が居れば乗せてみるか？空間認識能力の低い中でも使える様に補助AIを搭載でもするか。』

シオ「御主人ー！ー！！！！そろそろ切り上げてお昼にしてはどうですかー！ー！！！！」

戒「もうそんな時間か！判った！後はヴィンセントとフェルトの指示に従って作業を続行してくれ！ヒュツケバインのBHエンジンの最終調整は俺がやるから放置して置いてくれ！リーゼやヴァイスに搭載予定の亜空間転送装置の準備をして置いてくれ！」

シオ「了解だニヤー！ー！」

戒「さて……ん？やけに門の所が騒がしいが？（今はまだ西暦1999年の9月の筈だが現れるのは来年の2000年の10月頃の筈……）おい！何があった！」

門番A「なにつて……く、黒逸少将！ー！！！」

戒「気にするな。で…、何を騒いでいたんだ？まさか敵が正面から来た訳でもあるまい？」

????「……あんたは？」

門番B「貴様！黒逸少将になんて口を聞くか！？」

戒『止めないか！！……で、少年君の名は？』

白銀「俺は白銀……白銀武だ。夕呼先生に面会を望みこの地に来た。
（何なんだ！？コイツは？！俺の記憶には一切出てきた覚えは無いぞ？！）」

戒『夕呼にか？……良いだろう、着いて来なさい。（さて、漸く主要人物が揃ったが時間軸のズレはやはりイレギュラーの存在が原因か……。）』

白銀「わっ、判った。（アイツがどんな奴か判らない……けど皆に危険が及んだ時にはどんな事になろうと俺が守って見せる！！）」

斯くして黒き聖人と白き戦士は会合をした。果たしてこの事が意味する事とは……。早すぎる白銀の出現は一体何を示すのか？それは誰にも理解する事は出来ない……。

第参拾七話（後書き）

作者「いや、此処暫くの間若干のスランプに陥る事数回：試行錯誤しつつ本編を書き続けています。さて、今回からヴェルフエゴールの武装にグランゾンの歪曲空間発生装置に似た物を載せて見ましたが、読者の方々でこの様なPTやMSが良いと言う方は御意見等を感想板にてお願い致します！また、55万ヒット致しましたので記念小説として誰かと絡ませたいと言う方も感想板にてお願い致します。それでは次回の参拾八話でまた会いましょう」

第参拾八話

香月夕呼執務室

夕呼「~~~~で、此処に連れて来た訳ね？まさかこんな形で自身の因果導体量子理論を証明する事になるなんてね……。」

武「信じてくれるんですか！？」

夕呼「信じざる得ないと言う事よ。私にしか…いえ、戒の方でも判る訳だけどね…。」

戒「俺はこの後PMで食事をするが夕呼はどうする？少年もどうだ？久々に俺が京塚さんに頼んで腕を振るって作るぞ？」

夕呼「そうね…。なら社も良いかしら？あの子も戒の料理は好きな様だしね？因みに献立は何かしら？」

戒「ポポ肉のステーキに千年キャベツとピリ辛人参の千切りサラダに合わせ味噌を使ったオクラの味噌汁に沢庵と胡瓜に白菜の漬け物だな。多分アイツ等も京塚さんから聞いている筈だから少しだけ急いで行くか……。」

白銀「なんか一部聞いた覚えが無い食材だけど合成食材じゃ無いのか？」

戒「当たり前だ。これらの食材は俺の屋敷にて飼育栽培した天然物のだからな…。」

白銀「はあっ！？天然物おお！？……マジか！？てっ言つか黒逸は料理が出来るのか？」

夕呼「あまり馬鹿にしない方が良いわよ？食べた後だと一切合成食なんて食べたいと思わなくなるからね。」

戒「さつさと行くぞ？社も丁度来た事だからな？」

社「……（ギョツ）」

俺は後ろに隠れて軍服の裾を軽くだが握る姿は無性に保護欲を掻き立てられるモノがあった。

PX（食堂）

戒「待たせたな……。今日の昼食のメニューのポポ肉のステーキの千年キヤベツとピリ辛人参の千切りサラダの特製ソース和えに沢庵と胡瓜の漬け物にオクラの味噌汁に黄金米だ。しっかりと味わってくれよ？」

壬姫「戒さんの料理美味しすぎますう！」

冥夜「うむ。しかし、女としてのプライドを完膚無きまでに粉碎されるな……」

千鶴「それには触れない様にしてたのに」

慧「……おかわり」

美琴「慧さん早っ!!」

戒『そんなに焦らなくともまだまだあるから安心して食べ。よく噛んで食わないと体に悪いからな?』

武「黒逸さんってなんか良い父親とかになれるよな。」

武の言葉にその場にいた女性陣は即座に反応をして赤面をするが武と戒には訳が判らないと言った表情をしていた。

戒『どうした?辛すぎた物でもあったのか?』

美琴「ちっ、違うよ?」

冥夜「よっ、鎧衣の言う通りだ?」

戒『冥夜、少しの間動くなよ?』

冥夜「なっ?!////////////////」

俺が冥夜の額に自分の額をくっつけて熱が無いか計るが熱は無い様だが先程よりも赤くなっているが何故だ?

冥夜「キュウ……………」

壬姫「みつ、御剣さん!?!」

慧「ムグムグ…気絶しただけ」

戒「……何故だ？」

武「とつ、兎に角医務室に連れて行った方が……」判った。夕呼は
まりもに冥夜は体調を崩した為に俺が医務室に連れて行ったと言っ
て置いてくれ。皆は昼食が済んだらしつかりとまりもの講義や軍人
としての勉強を教われよ？」あつ！おい！」

夕呼「しょうがないわねえ、社行くわよ？アンタは白銀だったかし
ら？戒の前ではあまり調子に乗った行動は慎みなさい……。あれでも
此処の司令官よりも上の人間なのだから言動には気を付けた方がい
いわよ……。下手したら追い出される位になるかも知れないからね……」

武「判ったよ、夕呼先生。（俺の記憶に居ない黒逸少将って一体何
者なんだ？俺の名前を当然の様に知っているし……）」

戒とその背に背負われた冥夜と夕呼と社が出て行ったPXの出入り
口を見ながら武は悩む……

医務室

冥夜「……ん、わたしは……」

わたしは確かPXに居たはずだが何故医務室などに？

戒『起きたか？』

冥夜「かつ！戒少将／／／／／！？」

そつだ。わたしは戒少将の額に直に触れて羞恥の余りに気絶などと愚行をしてしまったのだった。穴があつたら入りたいはこの様な事を言うのだろうな／／／

戒『階級で呼ぶなと言うのに……まあ良いか。急に倒れて心配したぞ？』

冥夜「すつ、すみません／／／／／」

まつ、まさかすつと看病をして下さっていたのか？！でつ、では今の状況はふつ、2人きりと言う事か！？

戒『まだ顔が赤い様だしまりもの方には今日の訓練は休ませる様に俺から言っておくから冥夜はこのまま自室に戻って休んでおけ……』

冥夜「い、いえ！わたしは大丈夫ですから戒少将のお手を煩わせるなどと！？」

戒『いいから今日はゆつくりと休め……。今日の冥夜は顔色が悪い……軍人の前に1人の女性なのだから体調をしっかりと整えろ……良いな？』

冥夜「はい、判りました。しかし、戒少将は何故わたしの体調が悪いと？」

戒『部隊のメディカルテクは上の者としては当然だし特にB分隊の連中は来週には総合戦闘技術評価試験を控えているのだから尚更な…。(悠陽に頼まれた事もあるしな…。)』

冥夜「そのPCで、ですか？」

戒『いや、これは部隊全員のパーソナルデータや訓練の時の動きの癖等を入力してそれに合う様に開発する機体のデータを集めた物だ。壬姫なら狙撃主体の物、美琴や千鶴は遊撃主体で慧に冥夜は近接主体と言った所だな。機体の方はPTとMSのタイプ別の物を考案中だな。試験に合格した暁には全員にどのタイプに搭乗したいか意見を聞く積もりだ。まあ、試験に合格しないと話にもならないがな…。

』

冥夜「そう…ですね…。」

戒少将はやはり凄い。我々等と比較にならない程に…。全員のメディカルテクやパーソナルデータを見てそれに合わせた機体を既に開発出来る段階にいるとは……

戒『俺はデータを纏める為に執務室に行くが何かあれば遠慮無く連絡を入れてくれて構わないからな？』

冥夜「わたしはもう少し此处で休んでから自室に向かいますので戒少将は御自分の仕事をして下さって下さい。」

戒『そうか？なら、ゆっくりと休めよ。』

戒は冥夜の髪を軽く梳いてから医務室を退室した。

冥夜「戒少将の手の温もりは安らぎをくださる…ってわたしは何を
考えているのだ／＼／＼／＼／＼」

戒が出て行った医務室では戒が最後に冥夜の髪を梳いた事により冥
夜は1人で赤面して悶絶をしていた。武よりかはましたが鈍感には
変わらない戒に冥夜はどうアプローチをかけるのか楽しみである。

第参拾八話（後書き）

誤字、脱字にアドバイス等がありましたら感想板にてお待ちしております。

第参拾仇話

とある南国の島

夕呼「ん~~~~~ やっぱ南国は息抜きには最適ね〜」

戒「B分隊の奴等が必死に演習をこなしてる近くでリラックスし過ぎではないか？」

夕呼「良いじゃない。私が心配した所で合否の結果はあの子達次第なんだから。それにしても意外よね〜。」

戒「何がだ？」

夕呼「貴方が社を連れて行くこうなんて言うからよ？」

そう言う夕呼の視線は浜辺で砂の山を弄る社とアイルーがいた。

戒「彼女は思い出と呼べる物が無いに等しいからな…。こういった事でも彼女の思い出になれば良いと思っただけだ。」

夕呼「へえ〜（笑）」

戒「まったく、嫌な笑みをするな…。？あれは発煙筒の煙か。」

俺がそう言葉を零した瞬間とけたたましい破碎音と速射砲の様な発砲

の音が遠くで聴こえた。

戒『……多少やり過ぎでは無いのか？』

夕呼「アンタが改造した固定砲台で中身が強化ゴム弾なんだから直撃したとしても打撲程度で済む筈でしょ？」

戒『しかし、それでもだ。今回の演習に合わせて各要所にブービートラップを仕掛けるとは如何なものかと思うが？』

夕呼「よく言うわね？アンタの所にいるアイルー達を総動員させている時点でアンタの方が私よりも恐ろしいと思うわよ？」

戒『それでも簡単な落とし穴に丸太に加えて槌が降る位だぞ？後はアイルー達が悪戯の為の団栗弾丸の嵐や肉球ハンマーで攻撃を仕掛けるだけだぞ？』

夕呼「戒の方がやり過ぎじゃないのよ」

戒『しかし、これ位難なく突破して貰わなければ後に控えている訓練に進めないからな…。』

夕呼「まあ、アンタが考え無しにやる訳ないのは判ってはいたけどその訓練は私も立ち合うからね？」

戒『データで見るよりも目で見た方が判る…か？』

戒の言葉に夕呼は先程から浮かべた笑みを更に深い物にして笑う

夕呼「当たり前でしょ？データは後から見れるけど実際に乗り手の事を見るにはやっぱり直に見ないと判らないからね？」

戒「まあ、確かにそれには一理あるな……。」

戒が夕呼の言葉に同意した瞬間、誰かの断末魔の様な叫び声が島中に響いたのではと思う程であった。

夕呼「……今のは何かしら？」

戒「さあ……な。何処かの馬鹿が何かやらかしたのではないのか？」

夕呼「ああ、あの子？確か白銀だったかしら？冴えない感じの少年よね？でもまあ、門の前でアツク語ってたわよ？人間同士が銃を突き付けあっている時じゃないその銃を向ける冪はBETAだろ……ってね。」

戒「そんな事を言っていたのか？その様な事が判りきっているのは一部の人間か若しくは長い間戦いそして生き抜いて来た者にしか判らない事をあの小僧が言い放った訳……か。（なら、少年には一度模擬で1対1（サシ）でやり合ってその真意を測るとするか？）やはり、夕呼の唱えた因果導体量子理論に間違いはなかった訳だな……。」

夕呼「当たり前……と言いたい所だけど実際に現物を見ないと判らない事って多いのは戒を見て心底思う事が多数あるわよ？現在進行形で継続中だけどね（笑）」

戒「まだまだ驚愕は終わらないぞ？G弾の様に重力異常を来さない兵器を搭載したPTの開発に高性能なMSの開発ももう直ぐ終わって後は実証データを取るだけだからな…。」

夕呼「……………またアンタはとんでも無いモノを作るわね あの国が黙っているのかしら？」

戒「あちら側はG弾こそが最強だと思いがちだが陸戦型の砲撃戦特化型のPTシユツバルトの両肩の砲塔は重力制御技術の成果であるG・インパクトキャノンに固定装備として二門装備に加えて両腕には三連式ビームキャノンに頭部には近接自動防御用バルカン砲を二門装備でマニピレーターを廃して両手は大口徑ビームカノンを取り付けて完全な移動砲台となっているからな…。主機に関しては完全に未公開の試作型BHエンジンを搭載した試作機だが実証データを取って安全であれば量産する方向だな…。勿論、両手のビームカノンはだが主機の方から直結で使えばBHを射撃用として運用する事も可能だ。全長は武御雷位になるが移動用の装備は各部に小型のスラスターにランドスピナーと呼ぶ移動強化型で外観はローラースケートみたいな物だ。コレがあれば移動しながらの砲撃が可能でもあるし突撃級の至近距離からの体当たりすら避る事も可能だ。」

夕呼「果てしなく悪魔な機体ね…。しかも突撃級の攻撃を至近距離から回避とか有り得ないわよ……………でもうひとつの高性能なMSは何かしら？」

戒「其方の方は完成してからの御楽しみにして置くよ。其方の方が俺としてもサプライズになって面白いだろうし、向こうからあの子達も戻って来たからな…。また今度にしよう。」

夕呼「確かに…でも何処かはぐらかされた感があるのだけれど気の所為かしら？」

戒『……気の所為だ。』

夕呼「まっ、良いわ…戒にはまだ色々人としても科学者としても教わる事が多いかも知れない訳だからね…？」

戒『俺は教える事は苦手だが師の技を盗んで自分のモノにしると言う言葉が確かあったが出来るの良いな…。』

夕呼「絶対にモノにして見せるわよ。技術をそして…戒、アンタ自身もね？」

戒『まあ、出来れば良いな…。今はこの一時の安息を甘受するとしてどうか…。』

夕呼「そうね…。あの子達にとってはこの後に待ち受けているのはBETA達が蠢いた激戦区に向かう事になってるのだから……」

俺と夕呼は海に入って年相応に遊んでいるB分隊の面々を見守っていた…。願わくばこの子達が誰も欠ける事なく日常を取り戻してやりたい物だな…。

第参拾仇話（後書き）

今回の話は武達が演習を行っている傍らでの夕呼と戒の2人の語りになりましたがどうだったでしょうか？次回の四拾話ではPTの仮想空間での演習までの話になります。御楽しみにしてて下さい

m ((m

第四拾話（前書き）

今回の話は白銀視点が主になります。

第四拾話

シュミレータールーム

総合戦闘技術評価試験が終わってから数日が経ち今、武を始めとしたB分隊はシュミレータールームにて戦術機による応用動作試験を行っていた。ラトロワを始めとしたメンバーはイーダル小隊の時の戦術機に乗っていた為に難なくパスをしていたが千鶴に王妃に冥夜やと言ったB分隊の女性メンバーは四苦八苦していたが武の番になってそれは一変した……

市街地戦想定 仮想空間

其処には球体の的ドローンが数十体浮遊して戦術機の進行方向の各所に点在していた。

武「よし！ちやちやっとな片付けるぞ！」

俺は戦術機のコクピットを再現したシュミレーター機のフットペダルを踏み込むとそれに連動する形で跳躍ユニットのスラストノズルから火が噴き上げて機体が低空飛行をし、目に映る的へと突撃銃を向けてトリガーを絞りの確に数十体の的を撃ち抜き最後の一体に対しては短刀へと武器変更をし左手で逆手へ持つとそのまま的へ向けて直進して横からすり抜ける様にして袈裟切りに切り裂く事で応用動作課程ランクDが終わった……。三年前まで衛士をやっていた身

としては味気なかったがシュミレーター機だとこんな物かな？

武「此方白銀動作応用課程ランクDを突破しました。」

まりも「C Pから白銀へ動作応用課程ランクDの突破を確認した。

この後は一度装備を整えてある機体との仮想空間内での模擬戦に移行する。……何か質問は？」

武「ちよつ！ちよつと待つてくれよ！？訓練生がいきなり模擬戦をやるつて無いだろ！？どういう事だよ！まりもちゃん！」

まりも「……今はお前を説教する時間が無いからな。お前は今乗っている戦術機でゲシュペンストMk-？改コードネームアルトアイゼン・ナハトと模擬戦を行つて貰う。」

武「ゲシュペンストつて何ですか！？戦術機とどう違うのですか！」

まりも「これ以上の質問は受け付けない。装備を突撃前衛に設定される…その場で待機せよ！」

武「くつ！了解！」

まりもちゃんがこれ以上の質問を返してくれず、俺は仕方なくシュミレーター機の設定が突撃前衛に変わったのを確認してから各装備の確認をしていた。

武「（一体何なんだよゲシュペンストつて！）」

武が苦虫を噛み潰した様な表情で心中で毒づいている少し前に遡る

シュミレータールーム前

戒「とりあえずどの様な戦闘をするか見極めるべきか…。」

夕呼「程々にしなさいよ？アンタが本気であの子達に挑んだら逆に若い芽を摘み取りかねないんだからね？」

戒「其処等については承知している。だからヴェルフエゴールではなくゲシュペンストMk-？改をシュミレーターで使用するのだからな…。」

夕呼「逆にヴェルフエゴールなんて使った日にはシュミレーターの処理速度を上回る事をしてジャンクにしかねないわよ。あの機能は軽く処理の許容範囲外になるわよ…。歪曲空間発生装置だったかしら？アレ単体でもとんでもない代物なのに私が否定したラプラスの悪魔がラプラス・デモン・コンピューターって名前のシステムとして存在していた事に驚きを隠せないでいるのよ。」

戒「まあ、俺のやる事に一々驚きを表していたら切りが無いが…。これからも驚きの連続かも知れないからな…。では、行ってくる。」

（白銀武：貴様の実力を確かめさせて貰うぞ！）

夕呼「行ってくるって私も同伴するに決まってるでしょ？それと顔が凶悪な笑顔になってるわよ？怖いだけだから止めなさい。」

戒「むっ！そんな顔をしていたか…。」

戒はシュミレーターによる仮想戦闘で武と交える事を想像したのか凶悪なまでの黒い笑みを浮かべていたのか夕呼が冷や汗を掻きながらも注意をして戒は一瞬だけ顰めっ面をしたが直ぐに何時もの優しくも厳しい目つきに戻してから夕呼と共にシュミレータールームの扉を開き入っていく

シュミレータールーム

戒『やっているな…。』

まりも「戒さん！それに副司令までどうしたのですか！」

戒『なに、あの少年の技術はどれほどの物かと思ってな…。』

夕呼「私は研究の息抜きがてらで戒の付き添いよ。」

戒達が来た事によりまりもが狼狽えたが戒と夕呼はそれを気にした素振りを見せずに来た理由を述べた

戒『さて、夕呼俺の使っている特注のシュミレーターと少年のシュミレーターの連動はいけるか？』

夕呼「データリンクの応用で割り込みの様な形で始まるけど出来るわ。」

戒『……なら課程ランクD修了と同時に始めるか……。まりも悪いが少年に模擬戦の旨を伝えてくれ。夕呼は他の連中と一緒にモニターで見えていてくれ。あの番外格納庫に搬入した機体の1つの性能を見せてやるよ……。』

夕呼「そう。……だけどさっきも言ったけど『やり過ぎるな……だろ？判っている。』なら良いわよ。」

戒『では行ってくる……。』

戒の言葉に溜め息混じりに夕呼がそう言ったのを確認してから戒は強化服を着用せずにシュミレーターに乗り込んでシュミレーターの電源を入れた

戒『（今回は少年の実力の把握が主な事になるが技術が俺の考える基準値以下ならば多少TOKKUNを受けて貰うがな……）機体選択：ゲシュペンストMk-?改：コードネームアルトアイゼン夜間迷彩仕様何時でもイケるぞ！』

夕呼「じゃあ、今から白銀のシュミレーターにリンクさせるわ。精々観衆の度肝を抜いてやりなさい！」

戒『ふっ……了解した。』

夕呼の言葉に戒は返事をしてからメインとサブのカメラに位置する画面には舗装されたコンクリートの道路に自身を主張するかの様にして建ち並んだビル群が目映っていた。

戒『さて、少年の位置は………此处から10キロの地点か……。なら

合図を送ってやるか……。」

戒はそれだけ言うと右腕に固定されたパイルバンカー……リボルビングステークを隣に建つ10階建てのビルに撃ち込みリボルバー内の炸薬を炸裂させるとバンカーがその衝撃により勢い良く打ち出され一撃で10階建てのビルが倒壊し大きな地響きと共に大量の砂塵を巻き起こした。

戒『（さて、少年はどう動く？）』

戒が地の彼方を見つめて白銀の出方を窺っている時白銀は……

武「なっ！？ビルが崩れた！？……彼処にいるのか……？派手な動きで挑発か？……いやしかし動かなければ模擬戦の意味がないけど何故今模擬戦なんだ？考えていても埒が空かないな……行くぞ！」

武は咆哮と共にフットペダルを踏み込みスラスターノズルの火を噴き上げてビルの倒壊した場所へと急ぐ

武「アレか！」

武が撃震でビルが倒壊した場所に辿り着くと青色を基調とした甲虫の様な頭部に右腕には拳銃の様なシリンダーに加えて杭の様な武器を装備し左腕には3つの銃口が連なった物に肩は異様にせり上がった形で両方に上下に別れる様にハッチが取り付けられ各部に細かなスラスターを配し背中から飛び出た大型のロケットエンジンの様な

物に加えて装甲の厚そうな機体が武を待ち受けていたかのように仁王立ちをして立っていた

戒『ほお、直ぐに来るとは決断が早いな…伊達で衛士を目指している訳ではないか？』

武「いきなり模擬戦を仕掛けるなんて何処のどいつだ！」

戒『問答は無用…貴様には戦術機とゲシュペンストの決定的な火力差を……教えてやろう！！！！！！』

武が通信を行うが戒の方は映像を遮断して音声のみの通信となっている為に白銀には相手が戒だという事は判ってはいなかったそして戒は白銀に一言だけ言って最後の言葉を皮切りに左腕のマシンキャノンを乱射した

武「くっ！このおっ！！！」

戒『ふむ、教科書マニュアル通りの対応だが常に教科書通りには行かないと言う事を知れ！！！！』

武「うわっ！？」

マシンキャノンの乱射をビルの影に隠れる事で鉛弾の嵐をやり過ぎたがそれを見越していたのか戒はフットペダルを踏み抜き背中ofバーニアーを全力で噴かしてビルに突撃して白銀の駆る撃震に速度

の乗った体当たりをかました。武はビルから飛び出してきたアルトアイゼンに回避を一瞬忘れ驚きを隠せずその一瞬で撃震が体当たりによりビルの壁をぶち抜きながら数千メートルを吹き飛ばされて大通りに背中から打ち付けて苦悶の表情をする

武「痛つゝゝゝ！シュミレーターで衝撃がくるのは判ってたけどキツいな…！？」

俺が機体を直ぐに起こすとあの青い機体が機関銃を乱射しながら突撃してきたのを確認して直ぐに追加装甲を目の前に持つてきたけどとてつもない衝撃と共に小規模な爆発が立て続けに起こり追加装甲が破壊された。直ぐにスラスタを前方に噴かして飛び退いたけどあの機体が見当たらずに周囲を見回すが見当たらなかったが不意に影が差し込んだ為に突撃銃を上を防ぐ形で構えたが青い機体の角が高熱を発している様に真紅色に染まっていて豆腐でも切るかのようにして意図も容易く切り裂くとシオルダータックルをかまして俺はバランスを崩して気が付くと目の前にはあの機体が腰溜めに右腕を構えた状態で双眼を妖しく光らせていた。

武「ヤバッ！？」

俺の中で激しく警鐘を鳴らしていたが俺の回避は間に合わず鋭い衝撃の後に何度も重い衝撃を受け吹き飛ばされた感覚を感じた時にはモニターには何も映されていないかった。その時に俺はあの機体に撃墜されたのだと理解した……

第四拾話（後書き）

ほぼアルト無双で白銀フルボッコで白銀に負けたと実感させて見ました。戦術機とPTでは基本的な性能に大差がある為、仕方が無い事ですがこれを機に白銀には歪んで貰おうかと思いますが皆様の御意見御感想をお聞かせ下さい。では次回の四拾壱話にてまたお会い致しましょうm（　　）m

第四拾巻話（前書き）

仮想空間内での戦闘後のお話になります。誤字脱字等がありましたら御報告下さい。

第四拾巻話

シュミレータールーム

武「一体アレは何なんだよ…。撃震を一瞬で破壊するなんて……………」

夕呼「随分と落ち込んでいるようね…。」

武「夕呼先生！？アレは一体何なんですか！」

夕呼「あら？まりもの説明を聞いていなかったのかしら？アレはPパーソナルトルーパーTのゲシュペンストタイプの改造機でMk？改…でコードネームアルトアイゼン翻訳したら古の鉄って所かしら？先に言って置くけど相手が相手だったんだから撃震如きで勝てる訳が無いのよ？性能も技量もアイツの方が段違いに…………次元が違うのだからね…。専用機じゃないだけましよ？」

武「一体アレに乗っていた相手は誰なんですか！」

夕呼「それは今出てくるわよ？あの黒のシュミレーター機からね。」

武「はっ?!」

夕呼に詰め寄っていた武だがその夕呼の言葉に後ろを振り向き黒い色に塗られたシュミレーター機を見つけ凝視しているとハッチが開け放たれて出て来たのはあの戒であった事に武は驚愕した…。自身の記憶に…繰り返した世界に存在せず知らない技術や機体等に加え

て夕呼達と親しんでいる事に武は疑念を感じずにいらなかったが階級は此処の基地指令よりも上の為に下手な事が出来ずただ見る事しか出来ないでいた。

戒『ふむ、撃震であれ衛士としてはかなりの物だな…少年。』

武『その…少年と言うのは止めて頂けませんか黒逸少将。』

戒『なら、俺に勝てれば名前を呼んでやる…。』

武『……………いつか呼ばせてみせますよ。』

戒『ふつ、楽しみにさせて貰うぞ…まりも後の事を説明してくれ。』

まりも『はっ！B分隊は今日の午前の訓練は終了だ。この後については各々休息を取るなり好きにして構わない。』

戒『……………つと済まないが千鶴は後で俺の所に来てくれるか？少年の機動データを集めた資料を渡すからな？』

武『えっ!?!?』

戒『少年の機動は訓練生としては飛びぬけた物があるからな…。隊全体の練度向上に繋がるし戦場に出た時の生存する確率も上がるから全員しっかりと見るよ?』

全員『……………はいっ!?!?!?!』

まりも「なおそれに伴い訓練カリキュラムの大幅な変更がされ、本日からお前達が卒業するまでの期間我が207訓練部隊がシユミレーターを最優先に使用する事となった。」

戒「で、君達が乗る実機つまり練習機が俺と副司令の伝手で明日搬入される事に決まった。」

武「あつ！明日…ですか！？」

戒「副司令の言葉になるが戦術機は車と同じで慣れの様な物だと言ったが俺から言わせたら慣れて貰っては困るのだがな…。」

千鶴「どう言う事…ですか？」

戒「人間は誰しも慣れてしまつて油断や慢心をし其処に生じた隙を突かれ手痛い傷を負うからな…。ましてや戦場に立つ者が機体の扱いに慣れる事は確かに良いが自信と過信を履き違えるなよ？後者の者を持った輩は早死にするだけだろうからな…君達にはそうなつて欲しくない…俺の言いたい事が判るな？」

千鶴「慣れる事はしても良いが過信や慢心をするな…常に戦場にいる事を胸に刻め…と言う事ですか？」

戒「まあ、そんな所だが正確には傲つても良いが時には冷静に物事を把握しろと言いたただけだ。戦場に出ても勝てなければ仲間と連携を取れば良いし負けそうならば撤退すれば良い…撤退をせずに自

身の身の丈に合わない戦いだけはしないで欲しいって事だ。勿論！敵前逃亡だろうと生き残らなければ戦っている意味が…自分の道を閉ざす結果になってしまふからな…。人は国のために成すべきことを成すべきである。そして国は人のために成すべきことを成すべきである。俺はある人からこの言葉を聞き人は国が無ければ生きられないが逆も然り国は人がいてこそ成り立つ物と教えられた…。だからこそ！若く…尊い命である…君達には一分一秒でも長く生き長らえて欲しい。ただそれだけだ…。」

俺が黙ってあの人の話を聞いて感じたのは悪い人間って感じじゃなくて本当にこの基地の事や皆の事を思う気持ち言葉だけでこれだけ感じれたのに…俺は何故疑ったんだ！確かに俺の記憶にはこの人はいなかったけどこの人はこの人なりに皆の事を…人の事を思っている…馬鹿だ…俺は何年経っても馬鹿野郎だ！

戒「俺の話は以上だ。後はしっかりと午後のカリキュラムを終えて明日搬入される戦術機を見に行くといい。」

少年が何か思い詰めた表情をしているが俺の話に何か感じたか？まあ、何を感じたかは判らないが少年が焦り過ぎない様にケアをして行くか…。

戒は自身の経験等を踏まえた話をしてまりもと夕呼に霞と共にシュミレーターームを出る…それを見送ったB分隊の中には苦い表情をした白銀とは別に冥夜や慧と言った訳ありの訓練生は何か思う所があったのか午後のカリキュラムを手早くこなしカリキュラムが終

了した後、戒に会う為に戒を探す為に走った。

横浜基地 屋上

冥夜「此処に居ましたか。」

わたしは午前のシュミレータールームでの事もあり、午後のカリキュラムを手早く済ませてから、神宮寺教官が午後の訓練の終了を告げるのと同時に講義室を飛び出していた。あの人が……戒少将が言った言葉もそうだが、あの時の愁いを帯びた表情をした訳が知りたい。将軍家縁者……いや、将軍の妹だと知りながらも普通に接するあの方とわたしはもつと話がしたいだけかもしれない……。

戒「どうしたんだこんな所に？夜の風は冷える……中に入ったらどうだ？」

冥夜「いえ、それを言ったら戒少将も当てはまりますが？」

戒「フツ、俺は良いんだよ男なんだからな。それにしても夜の……冬場の星空と言う物は宝石よりも万倍も美しいものだな……。少し見ていくか？息抜きには丁度良いかも知れんぞ？」

冥夜「そうですね。」

戒「貯水タンクの所からの眺めが此処ら辺を一望するには丁度良いな。隣にくるか？遠慮はするなよ？今は俺と冥夜しか居ないのだからな……。」

していたのか不思議でしたもので……」

戒「そう…か。なあ冥夜、お前は何の為に衛士になろうと思った？俺は全てを護るなんて大層な事は出来ないが自身の手が届く範囲の者を守ろうと戦っている。」

冥夜「わたしはわたしの住むこの日本の民の笑顔を消させぬ為にです。」

戒「笑顔…か。冥夜らしい目的だな。俺は先程も言ったが自身の手が届く範囲の者を守れずに死なせた事を悔やむ事が少なからずあるんだよ…。この隊の中にもいるし、目の前で守れずにその尊くそして儂い命を消してしまった。少将と言う大層な役について大層な二つ名があるうともな…。そして悠陽との約束すら守れずに……」

冥夜「戒少将…貴方は姉上と知り合いだったのですか？」

戒「ああ、君達との事は悠陽から聞いた。それと済まなかったな…辛気臭い話をして。冥夜は俺の様になるなよ？軍の嫌われ者にはな？」

冥夜「そんな悲しい顔をしないでください！たとえ軍の嫌われ者だとしても戒少将の行ってきた事に対して民の者達は戒少将の事を慕っているのです！現にこの基地の者達も戒少将の人徳により国は違えども結束させているではないですか。」

戒「そう…だな。変な気を使わせてしまったみたいで済まないな…。」

」

冥夜「あつ?!いえ、その様な事は／／／／／／／／／／／／／／／／あの
……不躰で無ければ少し宜しいでしょうか?」

戒「……なんだ?」

冥夜「戒少将の背中を借りたいのです……。」

戒「背中と言わず胸を貸すぞ……。」

冥夜「……胸の方をお借りします。／／／／」

俺の胸を借りた冥夜は静かにしかし肩を震わして泣いた。何に對して泣いたのか判らないが胸の奥が温かい物が流れるのを感じていた。俺はその泣き顔を見せまいとする気丈な少女の髪を優しく梳きながらこの美しくも儂い世界を照らす星が煌めく夜空を暫くの間無言で見上げていた。

その状態から暫くして冥夜が動かない事に不審に思った俺はそつと冥夜の顔を覗くと泣き疲れたのか目元を赤くした状態で安らいだ表情で眠った冥夜がいた事に自身の頬が緩むのを感じずにはいられなかった。

戒「怒ったり泣いたり忙しい奴だな……。しかしそれは必ずしも誰

かの為を思つての冥夜の行動…か。そんな冥夜は俺の事も思つてくれているんだな……。つとこんな所では冥夜が風邪をひいてしまふな…。一先ず俺の部屋に運ぶとするか。』

戒はそれだけ言つと泣き疲れて眠つてしまつた冥夜を横抱きに…所謂お姫様抱っこをしてから人に会わない為にレポートで自室に戻つて行つた。

がこれからも宜しくお願いします。次回の四拾弐話でまた会いませう。

戒『気にするなと言いたい所だが冥夜の部屋が判らずに取り敢えずの応急処置として俺の寝台で我慢して貰った訳だ。服の事は気にするなよ?』

冥夜「は、はあ。（誰がわたしの服を着替えさせたのか激しく気になりますよ?!戒少将!）」

戒の言葉に冥夜は力ない返事をしたがその心中で1人悶絶をしていたのであった。

戒『それともうそろそろ練習機が搬入されて来る筈だから冥夜も見に行つて来たらどうだ?』

冥夜「戒少将は行かれないのですか?」

戒『俺は別の用事があるからな...。』

冥夜「別の...用事...ですか?」

戒『まあ、サプライズみたいな物を用意しているから楽しみにしておいてくれ。』

冥夜「判りました。では、失礼します!」

戒『.....俺だが準備の方は完了しているか?』

「????」何時でも行けますのにゃ!」

冥夜が自室を出たのを確認すると戒は通信端末を使い何処かに連絡を取り始めていた

格納庫内

千鶴「あれが……」

美琴「私達の……」

武「高等練習用戦術機……」

ユウヤ「吹雪か……」

ヴァリレオ「ユウヤに取っては懐かしの戦術機だな」

タリサ「あの時のユウヤには笑わせられたな」

ユウヤ「そんな事を思い出してんじゃねえよ……」

ステラ「でもこれからは私達も乗るのだから先に乗っていたユウヤに教えて貰う事になるのよ?」

ユウヤ「俺の柄じゃない……」

アルゴス組がそんな話をしている中でイーダル組は別の所で今し方搬入されて来た吹雪を見ながら談笑をしていた。

イーニア「ねえ、クリスカ戒はどこにいるのかな？」

クリスカ「それはわたしにも判らないけど何かあると思うわよ？」

ラトロワ「アイツは今度は何をして驚かしてくれるのだろうか…。」

ターシャ「少将はやはりPTなる物を吹雪と一緒に出す積もりなのでしょうか？」

ラトロワ「さあ…ね、それは判らないが戒が私達を此方に寄越す際に言っていた様に部隊分のPTやMSを運ぶと言っていたからどちらかを出して来るだろうな…。」

イーダル組がそんな話をしていた中、本家B分隊の王姫に慧そして冥夜の姿だけが見当たらなかった

格納庫外

冥夜「……………」

武「武御雷か……………」

冥夜「なっ！？そなた知っていたのか!？」

武「まっ、話くらいはな。（冥夜専用として將軍家から譲渡されたがコイツは結局の所あの世界では一度も出撃する事は無かったけどな……）……ん？あれは……」

冥夜「戒少将に月詠：中尉？それとあれは誰だ？」

”ブオオオオオオオオン！！”

搬入用の車がせわしなく出入りする傍らで戒と月詠そして唯依の3人が話をしていた。その後ろには3人の少女達が控えていた。寡黙そうな薄い紫色の髪の少女の神代巽、活発な感じを伺える茶髪の少女巴雪乃、気が強そうな目をした金髪の少女戎美凧の3人である。

戒「久しぶりだな……。真那、そして唯依。」

真那「戒少将もご健勝で何よりです。」

戒「俺がそうそうどうにかなる様な玉ではないぞ？（苦笑）」

唯依「そう言う事じゃないのですよ？例えそうだとしても礼節と言うのはしっかりとですね……うんぬんかんぬん……」

戒「ハハツ　唯依も変わらずに元気な様だな……。」

唯依「当たり前です。軍人たる者体調管理はきちんとしていますからね。」

真那「……あれは！」

3人が話をしている時に武がその中に入って来た。

武「戒少将「白銀武！」…はい？」

真那「何故死人が此処にいる！」

武「なっ！」

唯依「少将は何か御存知ですか？」

戒「まあ、な。」

唯依「あの人物は？」

戒「俺が見つけたんだがかなりの逸材だぞ？戦術機応用動作過程ラ
ンクDをたったの1日で終わらせた奴だからな？通常なら5日掛か
る所を五分の一に縮める偉業を成し遂げたからな…。戦術機の機動
のセンスはかなりの物で他の訓練生とは二周り以上の違いがあつた
な…。」

唯依「それは誠なのですか?!」

戒「まあな。俺が実際に見た訳では無いがデータや模擬戦等で見せ
た動きは訓練生とは比べる事が出来ないからな…。そろそろ止める
か…。」

俺は唯依と話をしながら武が問い詰められているのを傍観していた
が如何せん可哀想な為に助け舟を出すことにした。

戒『真那其処までにしておけ…。』

真那「しかし！」

戒『この少年の事は俺が保証する。冥夜に危害が及ぶ事は無い。』

真那「ですが万が一の時には『直々に俺が処断する。』……判りませんでした。」

戒『冥夜も来た事だしこの話は終わりだ。』

真那「その様ですね…。」

冥夜「お前達何をしているのだ！」

戒『他愛もない話をしていただけだ。』

冥夜「真ですか？」

戒『こんな事で嘘について何の意味があると言うんだ？』

冥夜「そう…ですね。」

戒の言葉に冥夜は不服ながらも取り敢えずは納得をせざる得なかった。

戒『そろそろ練習機全ての搬入が終わったか？』

唯依「はい。先程入った吹雪で最後になります。」

戒「……そうか、なら10分後にB分隊を番外格納庫の前に集合だ。武に冥夜：頼めるか？唯依と真那は俺と一緒に来てくれ。付き人の神代に巴と戎の少尉達も同行してくれて構わない。」

冥夜達と別れて先に向かう戒の一行は歩きながら話をしていた。

唯依「格納庫と言う事は戒少将の設計し開発した機体ですか？」

戒「ああ。PTに加えヴェルフエゴールには新しい機能を追加してMSでは新型を幾つかを完成させた所だ射撃戦特化型に広域型汎用機に近接戦特化型の3タイプにPTでは超能力者専用機としてタイプTTに汎用機としてゲシュペンストMk-?にヒュッケバインMk-?に限定機として008Lだけは1機だけになるな……。何故ならばコイツにはBHエンジンフラックホルルを搭載している為だ。そしてアルトアイゼンとリーゼの2タイプにヴァイスリッターを……。ヴァイスリッターに関しては主機部にG元素を用いたGエンジングラビティに広域結果……。Gウオールを使用する事が可能となっているがG元素の事に対しての解析は進展がないために試験機に変わりは無いが安全性と搭乗者が見付かれればその者に乗せる積もりだ。どちらを選ぶにせよその者にあつた物を使つて貰う事になるな……。勿論だが唯依や真那それに少尉達にあつた物は今屋敷の地下で制作中だ。武御雷では近接戦特化に近いから他にも中、遠距離戦にも対応出来る機体としてヒュッケバインとゲシュペンストにビルトシュバインにアルトアイゼンの強化発展型としてアシユセイヴァーにDGG(ダイナミックゼネラルガーディアン)プロジェクトにあるダイゼンガーにアウンゼンダイザーそして大雷凰コクピットシステムはアウンゼンダイザーは違うが他の2機はDMMLダイレクトモーションリンクを搭載して搭乗者の動き

をリアルタイムで反映させた物で搭乗者の身体能力が性能を左右させる代物で身体能力が高い人物にしか使えないが使いこなせば最高の機体だな…。そしてダイゼンガーは剣戟特化でアウンゼンダイガーは砲撃戦特化に大雷凰は格闘戦特化でダイゼンガーとアウンゼンダイガーは2機でセットになり大雷凰は単騎での一点突破を主眼とした機体だ。まあ、完成してからの楽しみだがな…。」

唯依に真那は只啞然とするしか無かった…それは付き人として来た神代を含めた3人も一緒に同じ様な顔をしていた。戒の途方も無い技術にそして自分達には考えつかない様な発想の数々に…武御雷に代わる特別な主力機を用意している事に

第四拾貳話（後書き）

戒「おい、作者。」

作者「ナンデスカ？」

戒「貴様：ダイナミックシリーズやゲシュペンストMk-？を出して今後の事は大丈夫なのか！」

作者「無問題！ダイゼンガーやアウンゼンダイザーに大雷凰のやさしさは知的宇宙外生命体に対しての威圧感を出すことが目的だったけど相手がBETAって事で大きさとしては武御雷より一回りデカイ設計にしたけど戦闘力が高い事には変わりはないぞ？Mk-？にしてもだが制御系のシステムはMSやASに使われる様な高性能型だから問題は無い筈だぞ？ターミネーターの様なスカイネットワークを用いても面白そうだな（笑）」

戒「このチート大好き駄人間が！」

作者「そんな事は自覚している！反省はしていない！」

戒「駄目だコイツ」

作者「次回は開発したMSにPTに特機の紹介を部隊に説明する事と部隊を半分に分けての模擬演習になります。が戦術機を使う者やPTやMSに乗る者とかかなり別れる話になります。」

戒「大体誰が何に乗るか予想がつきそうな気がするが…」

作者「だまらっしやい！……次回の四拾参話にてまた会いましょう」

戒「意見または感想を貰えたと作者のやる気が増すと思うので送ってやってくれると助かる……」

第四拾参話（前書き）

御感想や誤字脱字があれば御一報下さい。

第四拾参話

番外格納庫前

千鶴「こんな所で黒逸少将はわたし達に何を見せると言うのかしらね…。」

美琴「とても凄い物…とか？」

慧「……それじゃ判らない」

冥夜「わたしも戒少将に言われる儘に皆を集めた為に見当が着かないな…。」

壬姫「何をするんでしょうね、武さん？」

武「さあ？俺も皆目見当が着かないな…。」

B分隊がそんな話をしている中でイーダルとアルゴスのメンバーは別に集まって話をしていた

ユウヤ「戒の奴、今度は何をしたんだ？」

ヴアリレオ「さあね、俺は地獄の訓練メニューでなければ良いだけだな…。」

タリサ「戒の事だからまた新しい機体でも見せてくれるんじゃないかねえ

のか？」

ステラ「そうね…。あの人の開発した機体はどれもがだけどわたし達の知る技術とはかけ離れた物が多いから今回もかなり凄い物かも知れないわね？」

ラトロワ「年甲斐も無く心を踊らされるな。」

ターシャ「どんな物が楽しみですな。」

イーニア「イーニアは戒やクリスカと一緒になら楽しいよ？」

クリスカ「ふふ、そうねイーニア。」

そんな話を各々がしていると目の前の格納庫の巨大な扉が左右に開かれると中からは多少げんなりとした唯依と真那に神代と巴に戒が現れた。

冥夜「つつ、月詠！寝れた顔をして…そなた達に何があつたのだ！？」

真那「冥夜様、私達の事は気になさらずに格納庫の中にお入り下さい…戒少将がお待ちになっておりますので…。」

冥夜「わっ、判つた…。」

千鶴「それじゃ、B分隊の者は中に入るわよ！」

千鶴の声にB分隊のメンバーは先程出て来た唯依達を先頭にして格納庫内へと入る。しかし中は照明が落とされている為か暗闇に支配

されており唯一光が差し込んでいる所は先程入って来た扉からの太陽の光だけであつた

武「中は真つ暗だけどこんな所であの人は何を……」

武がその言葉の続きを口にしようとした瞬間、格納庫内の照明が一斉に点灯されて全員がその光量に瞳を閉じ、次に瞳を開いた時には驚きの光景が広がっていた

戒「よく来たな……」

全員「戒（黒逸）少将!?」「」

戒「全員、充分に驚いて貰えたみたいだな？」

冥夜「はい。それよりもこれは……?」

武「明らかに格納庫の中に入る数を超えているのに何故全て入りきっているんですか?」

戒「やはり其処が気になるか?」

真那「我々も最初は驚嘆しましたからね」

戒「コレの広さの秘密は此処の内部空間を弄って通常よりも広くなっているんだ……。正確に言えば通常空間を歪曲場を発生させる事で通常の格納庫の4倍程の広さになっているんだ……。歪曲場は異空

間の様な物で演算ユニット…つまりラプラスデモンコンピューターを使用する事で空間事象予測をしながら機体の数…大きさに機材の数に……ってどうした皆して頭を抑えて？」

唯依「後半から難しい単語や理解が出来ない物が出て来たものですか」

戒「なら、今度講義で…「勘弁して（くれ）下さい！」…残念だな…。」

戒が歪曲場の生成の詳細にそれを計算する為の演算ユニットであるラプラスデモンコンピューターを講義の時間に使おうかと宣言した途端B分隊が無駄に凄い結束力を見せて言葉を八毛らせていた

戒「それじゃこの格納庫にある機体の説明をする…まず手前からだがPTシリーズのヒュッケバインにタイプTT…コイツは白が標準的なカラーリングになるが他のヒュッケバインシリーズに関してはカラーリングは基本的な色は青だが自身の搭乗機には専用のカラーリングをする事も出来る。黒い機体がゲシュペンストMk-?で紫色の機体がゲシュペンストMk-?…そして更に奥にあるのがゲシュペンストMk-?改…近接戦特化型のアルトアイゼンに色違いのナハト、同じくゲシュペンストMk-?改のヴァイスリッターにMk-?改の改修機でアルトアイゼン・リーゼ、そして最奥にある機体ダイナミックゼネラルガードイアンがDGGシリーズのダイゼンガーにアウンゼンダイザー、そして大雷凰だ。ダイゼンガーは剣戟特化型でアウンゼンダイザーは砲撃戦特化型で大雷凰は格闘戦特化型でダイゼンガーと大雷凰についてはコクピットシステムが特殊な物で操縦者の動きをリアルタイムで

反映させるDMLシステムを搭載して実際に体を動かした時と変わ
りない動作が可能でそれを可能にするのが機体を組み立てる際

に作成した人工筋肉で巨大な人間とでも言えるな……。で中程に位置
する場所にはMSタイプでダガータイプにザクタイプそしてガンダ
ムタイプの三種類でダガータイプとザクシリーズに関してはHPS

ハードポイントシステム

を採用し、近、中、遠の三種で場に応じた武装へと切り換える事
により臨機応変な戦いが可能だ。……でガンダムタイプには様々なタ
イプがあるがどの機体も総じて基本的な能力値は他のどの機体より
もずば抜けてはいるがその分操縦者に高い技術が求められるが使いこなす
事が出来れば一騎当千の力を発揮出来る筈だ。勿論だが俺の愛機で
あるヴェルフェゴールもガンダムタイプに属するMSだ……。長々と
説明したが取り敢えず大丈夫か？」

武「かつ、辛うじてですが半分程理解はしましたが……」

戒「口で説明するよりも画像で説明した方が良いか……。アル画面を
皆に見える様に展開してくれ。」

アル「了解しました。」

全「なつ（はつ）（えつ）！？」

戒「コイツの説明は省くぞ？で、今画面上に映っているのは現存す
る戦術機のスペックとPTシリーズの平均的なスペックだそれを見
合わせてみてもその差は一目瞭然だな……。コクピット周辺部の安全
性や操作性は比べる迄もなくPTには戦術機適性検査の様な物はな
くただ運動神経の良い事位だな……。で、画像は変わるが此方はMS
のスペックになるが通常の物であれば戦術機の約6倍程になる。最

初の搭乗は四苦八苦するかも知れないが慣れてしまえばどうと言う事ではないがな…。』

俺の説明に当然の如くどよめく小隊当然と言えば当然だな…。この時代の人間からしたら戦術機がBETAに対抗する唯一の方法だったからな…。その6倍の出力と言えば驚くのも無理は無いか……。

武「通常の物と言いましたがそれ以上の物もあると言う事ですか？」

戒「そうだな…通常のと言うのはダガーやザクと言った量産型の物で高性能機であるガンダムタイプのエネルギーゲインはタイプによって違いがあるが基本的にはダガーやザクとは比べ物にならない…。出力の事を言えば俺のヴェルフエゴールが大体40倍程か？まあ、その分尋常じゃない技量に人間離れた情報処理能力が求められるがな…。後はMSの場所にあるガンダムタイプの中でも特に性能の凄い物はストライクフリーダムと言う機体で装甲材質に採用されているPS装甲と言うのがあってコレはヴェルフエゴールにも使用されている物で物理的な物つまり実体弾や実体剣質量を持った物の攻撃はその装甲の特性により全て無効化されるんだ。その他には手甲の部分には光学防御システム…所謂ビームシールドを…。武装面ではオールレンジ攻撃が可能な背部兵装ウイング…スーパードラグーンを8基にライフルを二挺に腹部には複列位相砲に両腰にはビームサーベルを装備し腰の下にはレールガンを装備して高速戦闘を前提の開発の為に各間接部にも同じ装甲を使っている為間接等の負担を極限まで減らす事により無茶な機動をした所で問題は無い。口ツクは三種類ありワン口

ツクやダブルロックに加えて大多数の敵に対したマルチロックが可能で単体で面制圧が可能となっている。後は主機になるが此方は非公開ではあるが戦略兵器を小型化した物を使用している……。」

全「「せつ、戦略兵器!？」」

千鶴「でもそれは…!？」

戒「まあ、色々な物に引つ掛かるからこそその非公開なのだが……。柵が多いからかなりの苦勞を労したが…他の高性能機の幾つかも同じ物を使用しているし仮に機体が他の者に奪取され情報が漏洩する危険も鑑みて遠隔操作にて自爆させる事が可能になっている……兎に角その他の機体についての質問は随時受け付ける為何か疑問があれば聞きに來い。それと昼の間には俺の愛機であるヴェルフエーグは表のドッグに移動する事になったがシステム上生体認証に網膜認証、そして声紋認証…此処までは本人のみだが最後のパスワード入力は他人が操作する際に入力しなければシステム及び機体を起動する事は出来なくなっているからセキュリティは万全な物となっている…。機体の中やシステムに武装といった物がみたい場合はその時によつてだが見せる事が可能だな…。」

冥夜「その機体は見られて大丈夫なのですか？」

戒「高々中身を見られた程度と現物を持ち去られる事とだと比べるとでもないし、見られた位では再現する事など不可能だ…それにシステムは大半が常人には理解が追いつかない……と言うよりは解析が不可能だな…。」

冥夜「少将は一体何者なのですか？」

真那「戒少将は我々とは違い機体と同様に規格外ですから」

武「……規格外って」

戒「アル、この格納庫にある各機体の性能テスト用のシュミレーターは今何機使える？」

アル「只今使用可能なシュミレーターは二機程になります。」

戒「二機……か。なら俺の愛機に設定して市街地戦想定に敵機のタイプはグフイグナイトッドで数はそうだな……取り敢えず300機か？」

武「さっ、300機!？」

冥夜「正気ですか?! その様な大群を御一人で……」

真那「冥夜様、大丈夫で御座います。京都防衛戦及び撤退戦に明星作戦の際には無数の旅団規模をお一人で足止め及び殲滅をしておりますので……」

戒「アレはあの機体がオーバースペックだから出来る事だから……。他の機体であれば連隊規模が限度だな……。」

武「それでも凄すぎる……規格外つてのも領けるかも……」

戒「……取り敢えず、今回はヴェルフエゴールに組み込んだ機能の性能テストと機体の動かし方を兼ねた物だから少しでも良いから参考にしてくれ……。唯依はCPを頼む。」

唯依「了解しました。謹んでコマンドポストオフィサーをお受け致します。」

戒「アルは全員にモニターを周囲の様子と機体側に全体用の画像を見られる様に回しておけよ?」

アル《了解しましたマスター》

戒「それじゃ、しっかりと見ておけよ?コイツで動くとしたら大きな作戦のみになるからな……?」

俺はそれだけ言うと出入り口の傍らに置いてある8機の内1機に乗り込みシステムを起動させると全てのPT及びMSの機体に共通したコクピットを再現し360度全てを見通す事の出来る全周囲モニターには立派に立ち並んでいるビル群が映っていた。

唯依「それでは今から型式番号GB-9700……正式名称:ヴェルフエゴールの性能及び動作テストを開始します。戒少将準備は宜しいですか?」

戒「何時でも行けるぞ……。」

唯依「それでは敵機……型式番号ZGMF-2000……正式名称:グライグナイテッドを全方位に展開します。」

唯依の言葉と共にリーダーに緑色の自機のマーカ―の他に赤色のマーカ―が大量にそして距離も疎らに展開される。

戒『さて、逝くとするか…？黒逸戒、ヴェルフエゴール出撃するぞ！』

俺は先ずは割と近くに配置されたグフに接近し、掌のパルマファイオキ―ナによる零距离砲撃により頭部を破壊し無力化し次のグフへと目指す。シュミレーターの内CPのレベルをマックスに設定している為か、三機編成の状態で一斉にドラウプニル四連装ビームガンを撃つてくるがゲシュマイディッヒパンツァ―を前面に移動させる事により防ぎながら腰に装備されたGNファンングを8基全てを射出し、グフのコクピット部を穿ち一度に8機撃墜する。

戒『動作問題は今の所は取り敢えずナシ…か。次はマルチロックのテスト…行くぞ…！！！！』

戒は叫ぶと同時にフットペダルを強く踏み込み操縦桿を操作し上空へと機体を飛ばし、グフの飛行している空域よりも上に移動すると幾つかの機体はそれを追ってビームガンを撃ってくる

戒『肩部クローにドラグリーン及びファンングを展開…そして胸部砲門開放…』

戒は機体を操作し肩部の隠し腕を展開し大型の背部兵装ウイングを射出し更に半分に別れ8基の倍の16基にファンング8基の計24基に胸部砲門のハッチを開放する。

戒『目視可能な敵機への照準固定を完了…全砲門一斉掃射オオオオ
(フルバースト)!!!!!!』

戒が操縦桿のトリガーを引き絞った瞬間…周囲に展開した遠隔兵器に両の手から肩のクローの砲門が一斉に火を噴き嵐の様な光の雨が戒の目に映っているグフへと降り注ぐ。四肢や頭部を破碎される物にコクピットを貫かれる物…そして全身を蜂の巣にされ破碎するグフにより大小様々な爆発を発生させるそしてトドメとばかりに胸部砲門からはトリプルメガソニック砲が発射され周囲に辛うじて残っていたグフを爆破させ大量の爆煙を巻き起こした。

戒『(ふむ。300機程度では話に成らぬか…。)唯依、何機健在だ!』

唯依『…あ!はい!グフイグナイトド残存数120機になります!』

戒『後120機…か。なら、相轉移エンジンからのエネルギーを胸部ハッチ開放と共に収束!重力異常過多による重力崩壊をラプラスデモンコンピュータにより算出し固定!着弾箇所を距離を算出!出力安定…逝くぞ!BHクラスターアアアア!!!!!!』

戒は目に映る179機ものグフを瞬く間に撃墜すると遠隔兵装を回収すると今度は胸部砲門に回す出力を相轉移エンジンに切り替えるとあらゆる事象を計算するラプラスデモンコンピュータを使用しBHクラスターの発動前のモノを両手により発射され目標地点に着弾した途端にその名に違わない程の強力な超重力の地場によりその

効果範囲内に存在するグフイグナイテッドや建造物は逃れる事が出来ず超重力により次々と飲み込まれ潰されてしまうそしてBHKラスターは効果範囲の膨張を止めると次第に収束させて収束の臨界点を迎えた瞬間に周りを巻き込んだ大爆発を起こした

戒「残りは…？」

唯依「はっ！はい！残敵は先程の効果範囲より逃れた二機のみになりました。」

戒「ふむ、118機を消滅させたか…。しかし威力はまだまだだな…。次！歪曲場生成！貴様等には逃げ場など存在しない事を証明しよう！」

言うや否や戒は自機の前に歪曲空間の穴を開きその場に入ります。その際にコクピットのメインカメラを通して映像を見ていた者達は突入した場面で景色が通常とは異なっている事に驚愕していた。

戒「斬艦刀…雷光斬り！！！！」

戒が歪曲空間を飛び出すのと同時に後ろ腰に鞘事マウントされた斬艦刀を居合い抜き要領で機体の体を上と下に分断されグフは爆砕した。

戒「これで最後！！…ワームスマッシュャー！！！！」

戒は再び目の前に歪曲空間の穴を作りだすと今度はその穴の中にビーム兵器をこれでもかと言う程に撃ち込んだ…。すると飛行をしていたグフの目の前が急に歪んだと思った矢先、歪曲空間の穴が開き

無数のビーム兵器が吐き出しては消え別方向からまた現れては消えての繰り返しを20回程繰り返した後に最後のトドメと言わんばかりに周囲の空間に歪曲空間の穴が開き全方位からのビーム兵器の一斉掃射により爆発した。

唯依「ぜつ、ZGMF-2000、グフイグナイトッド全機戦闘不能及び全滅によりシュミレーターを終了致します！」

戒「了解した……。(グランゾンに使われていた歪曲空間の生成システムにサイバスターに搭載されているラプラスデモンコンピュータの実装による性能テストだがやはり上手く行ったがもう少し処理速度を上げるべきだな……。)」

唯依の言葉に了承の意を伝えてからシュミレーターの電源を切り暗くなった周囲のモニターで自身を見ながら戒は1人今後についてのヴェルフェゴールの改良点を見つめていた。その後シュミレーターから出た戒はB分隊と真那や唯依そして何時の間にか来ていた夕呼により質問責めにされたのは別の話である……

第四拾参話（後書き）

作者「いや、やってしまったな…（笑）」

戒「魔装機神の設定を使ってアレを更にチート化したな…」

作者「けどそれだけで未来予測の算出を高速演算するにはMSに使っているOSじゃあまだまだ時間が掛かるのは作中の事を見て貰えれば判ると思うけど…。アルや8とは別に補助をするAIやOSを知っている方は参考にしたいので教えて下さい」
> | | <
< | | >

戒「今回は第四拾四話でお会いしましょう。」

オマケ

シオン「ウチらの出番はもう来にゃいのかにゃ……………」

慧「……………元気だして猫缶あげるから」

シオン「綾峰さんは優しいのにゃ！」

慧「……………その代わり戒の好きな物を教えて」

「……シオン」……どっせそん「チャ」どだるんや思った「チャ」……！

第四拾四話（前書き）

久しぶりの投稿ですが色々と詰め込んだ為に説明文のような形になっていきますがご了承下さい m () m

第四拾四話

格納庫内

『ヴェルフエゴールのシステムを他の機体…パーソナルトポノイドモジュールアーチャー P TやA MにM Aへの反映とヴァイスリッターの主機部のプラズマジェネレーターをG元素を使用したGエンジングラビトロンに換装を………ラクス其方はどうだ？』

「戒、此方の所は私がM AのO Sの設定をしてフェルトさんはM Sのメンテナンスを行っておりますわ。戒はそろそろ作業を切り上げてお昼にしては如何ですか？」

『そう………だな。此方は一段落したからな……。後はラクス達に任せる……。フェルトにもそう伝えて置いてくれ。』

「わかりましたわ。」

戒はラクス達にその場を任せると基地の中に在るP X（食堂）へと足を運んだ……

『さて…今日の献立「お前はただ俺たちの質問に答えれば良いんだよ！」はって何だ…揉め事か。』

戒が食堂へ赴きながら今日の献立のメニューを何かと考えていると
目的地である食堂が何やら騒がしくなっており戒は訝しむが行かな
ければ何が起こっているかも解からない為に足を運ぶしか無かった。

「少尉自身の興味本位の質問であれば自分は答える事は出来ません。
そもそも少尉の質問は上から言われた命令なのですか？そうでない
のであればお答えする義務がありません…。」

「テメエ！！！！」

「っ！？」

「……白銀（武）！？」「」「」

「大丈夫…撫でられたただけだ。」

「案外骨があるじゃない」

「オラ！男なら殴り返して来いよ！！」

「そんな易い挑発には乗りませんよ？」

「ならもう一発……『其処までだ！』なっ！？」

「……戒（黒逸）さん！？」「」

『貴様等はなんの権限があつて訓練生に手を上げている…』

「そつ、それはあいつ等が俺達の質問に答えなかったからで……」

『ほう、貴様らの質問…か？気になるな、どんな内容だ？勿論だがくだらない内容であれば軽い処罰では済まさんからな…』

「彼等の質問の内容は武御雷の事を嗅ぎ回っている事によつてです。」

「「「なつ！てつ…帝国期衛軍！？」」」

『真那…それはどういう事だ？』

「先程の男が絡まれる時に其処の国連の衛士が聞いていたのを耳にただけです…。」

『成程な…それで先程の騒ぎと言う訳か…。貴様等覚悟は出来ているのだらな？』

「こつこれは国連の内部の問題で……」

『国連だからと言って此処は治外法権だと言う算段か？アレは貴様等の様な馬鹿が聞いて良い物ではないわ！！！！早々に立ち去れ！！…さもなければ征夷將軍で在らせられる悠陽殿下の剣であるこの俺が直々に相手をし、我が刀の錆にしてくれる！！！！』

「「「っひ！？」」」

戒の尋常ではない殺気に当てられてか2組の国連兵は逃げるかのようにしてその場を離れた行った。そして……

「つつ!?!」

『まったく、貴様はほんとアクシデントに好かれている様だな…?』

「ハハハ そんなつもりはないんだけどな…」

『まったく、今回は俺が居たから良かったものの次も俺が居るとは限らんだぞ?』

「すみません…。」

『冥夜、布を濡らして来てくれるか?』

「わかりました…。」

「武さん、大丈夫ですか?」

「大丈夫だから心配すんなって。」

『大丈夫じゃなければ俺の特別訓練メニューを贈呈してやりたかったがな……。』

「……(特別訓練メニューって何!?)」

「そっ、それにしても黒逸さんは先程の啖呵は凄いですね…」

『其処まで凄いものではない……。それと少年はもう少しやっても良かったと思うぞ？お前の身体能力なら避けるなり反撃なり出来た筈だぞ？』

「自分はまだ未熟ですから。」

『……まあ、そういう事しておくか。この後は訓練だったな……？少年は念の為に医務室に行った方が良いだろうな……。皆は訓練に行け、俺が少年を医務室まで連れて行くからな……。』

「黒逸さんは少将ですからその様な事は……。」

『気にするな……。少し少年と話をして親睦を深めたいからな……。立てるよな？』

「はい、問題はありません。」

『それじゃあ皆は訓練を頑張れよ？良い結果を出せば戦術機とは違い専用機を与える事が出来るからな……。』

「……はっ、はい！」「」「」

その後、戒は白銀と一緒にPXを後にして千鶴達はシュミレーターによる訓練へと別れる

医務室

「痛っ!？」

『何を言ってる…殴られた瞬間に流していただろうが…。』

「バレてました？」

『甘くみるな……俺は仮にも少将なのだからな？それで少年は何処まで覚えているのだ？』

「……その言い方だと黒逸さんは全てを知っているって事ですよね？」

『さて、それはどうだろうな……。俺と少年の認識に相違が無いと仮定すればそうなるがな……。』

「……どういふ事ですか？」

『少年の記憶には俺はいないのだろうか？勿論、MSやPTも……』

「それが？」

『少年は平行世界と言う物を知っているな？』

「色々な可能性の上に成り立った世界の事で、今現在俺が体験している事ですよね？」

『そつだ。そこに少年とは違う異分子である俺が交わってからは既に少年の知る歴史とはかけ離れた世界へとなっているなは理解しているよな？』

「はい…俺の記憶にはアルゴスやイーダルに中華戦線の中尉に武家関係の中尉はいませんから嫌でも理解させられました…。」

『そして、少年の知る知識では珠瀬事務次官が横浜基地に来ると同時に大量の火薬を積み込んだ再突入殻が横浜基地に落下して来るのだったな…。』

「………だけど黒逸少将と俺の記憶が何処まで合ってるのか解らないですが………」

『まあ、何事にもイレギュラーと言う物は付き物だ…俺の腕もその1つだがな…。』

「…その腕って義手ですか？」

『ああ、少年は知らなかったな…これは機械義手で材質はG元素を使った物だが改良に改良を重ねて光線級の攻撃にも耐えうる強度になっているよ。まあ経緯はどうでも良い事だがな………』

「………そつですか。」

『まっ、突入殻の事は俺に考えがあるから、少年は事務次官の歓迎の方を頼む。』

「タマの親父さんか…」

『難しい事では無いだろう？なに、最初は俺も一緒に出向く事になるだろうから安心しろ…。』

「そうしてくれると助かります　タマの親父さんを相手にするとうも精神的に疲れますから」

『壬姫の出す手紙か…？其処までの物なのか？』

「思い出すだけでも疲れますよ」

『……やはり俺は行かない事にするか』

「ちよっ？俺1人じゃ親父さんの暴走は止められないですよ!？」

『少年なら大丈夫だろう？』

「そんな〜？」

『冗談だ…珠瀬事務次官が来た時には俺も同伴するから安心しろ。』

「良かった」

『少年は訓練に戻れ。俺は俺のやるべき事をする…。お互いに頑張
って行こう』

「はい！」

そして戒と白銀は医務室の前で別れ、別々の道を歩いて行った……

- - - 格納庫 - - -

『……で、部隊に配置する全てのGの調整は出来たか？ラクス、フ
エルト……。』

戒は白銀と別れた後、一人格納庫へ赴きラクス達と会話をしていた

……

「はい。戒さんから貰った資料にあった訓練生のパーソナルデータ
と照合した所デュナメスに適合したのが珠瀬王姫と言う少女ですが
大丈夫なんでしょうか？」

『王姫の補助にH A R Oを使用するから問題は無い……。狙撃に関し
てはかなりの逸材だろうし機体制御は慣熟訓練で何とかなるだろ？
それにH A R Oの補助でG N粒子の運用は問題なくいけるだろ？後
の残りはどうだ？』

「はい。鎧衣美琴は別段特にこれと言った物は持っていませんでし

「だから汎用性の高いストライクか若しくはインパルスを想定して調整を行っています。」

『確かに美琴ならそれで充分に戦っていけるだろうな…。局面で装備を変更出来て戦い易いだろうからな…。』

「綾峰慧は格闘戦が主な様でしたからソードカラミティで調整をしています。」

「榊千鶴は万能とはいいますが遠中近をそつなくこなす事から大立ち回りが出来るノワールでの調整で進めておりますわ。」

『慧はソードで榊はノワール…か。慧は兎も角、榊はノワールを乗りこなせるか……まあ、慣熟訓練で慣れて貰うしか無いか…。で…後は少年と御剣…か。』

「はい、御剣冥夜は剣術を主としていますからセブンスソード…エクスシアにて調整をしています。」

『御剣にエクスシア…か、アイツならば使いこなすかもしれんな…。』

「ただ、白銀武に関しては機体の操縦技術が他の者よりもずば抜けており、尚且つ得意な物と呼べる物が皆無な為、未だ機体の特定が出来ていません…。」

『少年の機体は俺の方で考えておく…。他の者の機体は？』

「崔 亦菲中尉は近接特化のアルトロンにて調整を行っています。」

「元アルゴス小隊の皆様は統一してGではなくGN-X?で調整を行っていますわね…。」

「GN-X?…か。まあ全ての機体の主機は擬似太陽炉からエネルギー効率を考えてプラズマリアクターに変更してあるから問題は無いな…。」

「元イーダル小隊のクリスカ・ビヤーチエノワとイーニア・シエスチナには復座型のガンダムサバーニヤ、ファイカーツィア・ラトロワは近中距離主体のGフレーム^{ゴルド}天で、ナスターシャ・イヴァノワには遠中距離主体のヘビーアームズで調整をしています。」

「紅の姉妹は2人での連携プレーを重視したか…。ラトロワやターシャは中々良い機体を選んだな…。天は隠密性の高いコロイドにゾル・オルゴニウムを素材とした実体剣にワイヤーアンカー等に加え、装甲材質はPSでエネルギー切れが起こらない様にSEED世代のMSには半永久機関のNエンジンを搭載して、それ以外のMSにはPTと同じくプラズマリアクターやジェネレーターを搭載して00の機体は一部だけだが太陽炉を搭載しているからな…。」

そして戒は一息入れて話を続ける。

「そして、実弾系の装備を搭載しているMSは弾倉を改良した物で大きさをそのままに通常の3倍の量を装填出来る様になっているから旅団規模のBETAと相対しても潜り抜けられる筈だが…それは乗り手による…か」

「後は戒様のヴェルフェゴールの歪曲フィールド発生機の最終調整

が完了し、ストライクフリーダムにデステイニーにインフィニットのロールアウトが完了しておりますわ。」

『その三機は何れもM D s y s t e mを搭載済みか？』

「はい、AIの思考パターンは戒様を参考にしておりますわ。」

『なら問題は無いな…後は横浜基地に落ちてくるELSの対処か？正史には一機だったがイレギュラーが何時起きるか解らんから壬姫の他に俺もスタンバイしておいた方が良い…か。』

「それでしたらヴァイスリッターが宜しいかと…」

『いや…デユナメスの発展機のケルディムで行く……米国の馬鹿共に誰を敵に回したか思い知らせてやる…』』

「戒様ならあんな阿呆なんて一捻りですわ（黒笑）」

「いつそのことアルヴァトーレやデストロイで消し飛ばしましょうか（黒笑）」

『いや それは流石に不味いだろうが 奴等がいなければ計画そのものが廃止になりかねないだろうが…』』

明日の辺りで珠瀬事務次官が来日するがあの人に会うのは久し振りだな。……………あつ、その前に唯依が正式にこの横浜基地に転属されるから出迎えの準備でもしてやるかな…。

..... 香月夕呼執務室

「.....で、急に来てどうしたのかしら？黒逸から貰った資料の
陰で〇〇ユニットへの糸口が見えてきたのだけど？」

『いや、前に頼んでおいた横浜基地に置ける衛士適性に落ちた者の
資料を取りに来たのだが.....』

「それなら後で社に届けさせるわ...。で、建て前はこれで良いかし
ら？」

『まあ...な、流石は香月夕呼...か。伊達に女狐などと呼ばれてはい
ない様だな？今から言う事はまだ皆には内緒にして置いてくれ。』

「また何か面白い事かしら？」

『とても面白い事だ.....馬鹿共を黙らせる位の...な。』

「.....詳しく教えてもらえるかしら？」

戒のその言葉に夕呼は妖艶な笑みを浮かべ、戒の話をも更に聞いてい
く.....。

「……成る程ね確かにそれなら馬鹿共の牽制になるわね。」

『そして、奴等が俺の保有技術を自分達の軍事力を傘にして強奪出来ない様にするのも目的の1つで真の目的は此方の動きを抑制させない事で本丸を…甲壱号を討ち取りやすくする為だ…。』

「黒逸はオリジナルハイブを落とす気がしら？彼処は他とは違ってLV5なのよ？」

『その為の全ての準備は全て年明け前には完了する…。それにオリジナルハイブだけでなく太陽系のハイブ全てを滅ぼす…。人類が完全な平和を手に入れる為にな。』

「全てって黒逸…アンタ、自分の言ってる意味解ってるのかしら？相手の根城は確認されている物で木星よ！まさか、木星圏まで行くつもり！？あそこは測定が出来ていない事から危険度は未知数なのよ!？」

『俺個人のみであれば可能だ…。そもそも宇宙空間……無重力下での機動は難しく姿勢制御は戦術機では先ず気密性の問題から論外でMSやPTも宇宙空間内での機動訓練に重力下と無重力下での違いを詳しく認識して貰わないといけない事も考えると桜花作戦の開始日の12月24日のクリスマスまでにはどんなに煮詰めても絶対に間に合わないと俺は思っている…。』

「そう……ならば何も言わないわ……。ただ、どうやって行くかだけ教えてくれるかしら？」

『今、帝都の屋敷の地下にて建造中の戦艦……コードネームはアークエンジェル、アレが完成すれば宇宙であろうと航行可能で大気圏の離脱に突入も可能で武装は陽電子破城砲……ローエングリーンを二門に艦上部には2連装大口径ビーム砲……ゴッドフリートMk-2を二門に両側には超電磁砲……バリアントを二門……そして迎撃用兼防御の近接自動防御システム……イーゲルシュテルンをブリッジ付近と下部に背後に真横にそれぞれ10門装備し、追尾型16連装ミサイル……スレッジハンマーをブリッジ下部に2基装備、防御面にはBE TAの光学兵器に対して絶大な効力を発揮する排熱に特化したラミネート装甲にアンチビーム爆雷を有し、索敵範囲も他戦艦と比べる事など無意味な物で距離は一万キロに及ぶ。』

「武装や索敵に関しては凄いとはいえませんがそれに対してのジェネレーターや機体の運用はどの位の物なのかしら？」

『それは今から説明する……ジェネレーターはプラズマリアクターの2基を連結してあり高出力を叩きだし、光学兵器を難なく使用する事が出来る。機体の運用はオールラウンドで搭載数は32機で中隊位なら余裕で搭載出来る……。』

「聞いてるだけで凄いわね……。進水式が待ち遠しいわね。」

『進水式は佐渡島の奪還の時に御披露目を兼ねてやるよ……（既に完成しているミネルバと一緒にな。）夕呼には特等席を用意しておく……さて、俺はこの後唯依の出迎えに行くが副司令官として一緒に来るか？』

「篁のお姫様？遠慮するわ、嫌でも後で会うだろうし、今はMSやPTに光学兵器と科学的として研究しがいのある物が多いからね…。」

『そうか。それじゃ、研究の方を頑張れよ？』

「はいはい、言われなくとも頑張るわよ。この天才を舐めないでくれないかしら？」

『それでは吉報を楽しみにしておくよ……。』

「ええ、佐渡島の奪還までには00ユニットを完成させてみせるわね…。」

そして戒は夕呼の執務室を出て、そのまま外に出たのである……

- - - - 滑走路 - - - -

『良く来たな…、唯依中尉いや、今は大尉に昇進したのだったな…。』

「いえ、戒少将の口添えで昇進出来ただけですので其処までの物では……」

『何を言うかと思えば……あの場所での唯依の功績を紅蓮大将や悠

陽に報告しただけだ……。君が中尉のままでは俺の近くでの補佐官として居られないだろうに……』

「私が戒少将の補佐官ですか!？」

『ラクスのいない時に俺の補佐役に唯依と俺は思っている。視野の広さに頭の回転の早さに衛士の能力等を総合的に見ても補佐官としてしっかりと仕事をしてくれるだろうしな……』

「そんな、私などが黒逸少将の補佐官などは……他の者に適役がいるかと……例えばフィカーツィア中佐などが……」

『他に候補はいない……。ラトロワは俺の私設部隊の指揮官として動いて貰わないと困るからな……勿論、唯依も同じく……だがな?』

「私設部隊……ですか?」

『ああ、正規の部隊とは別枠で完全な遊撃隊として各方面に近接や遠中距離をこなせる者として戦場で戦ってもらう事にもなるがそのかわりにと言うかその部隊の者にはカスタム機を与える積もりだな……』

「カスタム機とは?」

『早い話がその人物専用の機体でカラーや戦闘時の癖などを機体にフィードバックさせて扱い易く且つ強力な武器にもなるんだ。』

「しかし、それは本人達のパーソナルデータが……」

『それなら着任した時に全てに目を通してあるし、既に機体の方も準備は完了している……後は全員のMS及びPTの慣熟訓練を残すだけとなっている。』

「既に其処まで出来ているのですか。」

『ま、大まかな事はこれ位だな……後の詳しい内容は今度にしよう。今は香月副司令とラダビノット司令に会って着任した事の報告をしておかないとだな……?』

「そうですね。」

『久し振りの再開だし後で部屋に来るか?』

「そつ、それは//////////」

『ふつ、ようこそ横浜基地へ…唯依、これから宜しく頼むな?』

「はい!//////////」

「これで全てではないが大体の役者が揃ったな…。ラクス、準備は整っているな…？」

「はい。グランゾンのロールアウトも完了致しましたが…：…本当に
おやりになるのですか？」

「ああ、G弾などと言う地球に住む人々に害しか与える事しかない
物など無用の長物…：…主要人物に開発をしている研究所の全てを悉
く破壊しつつ、作る気すら起きない様に無に帰す。俺とグランゾ
ンなら可能だろうしな…。」

「彼の国はまた使ってくるかと仮定してそれを未然に防ぐ為に研究所
やそれに関係する建物や人物を消す訳ですか？」

「ああ。佐渡島や喀什の攻略の時に横槍を入れられたくはないから
な…。徹底的に潰す。後は俺が破壊工作というか活動をしていない
と言うアリバイ…。」

「その事は私達に任せて下さいな。」

「ラクス…何か考えがあるのか？」

「もし向こうが戒様に疑惑を掛けた場合に格納庫内で作業をしてい
る所や執務室にいる偽造映像と記録を相手に開示して此方にいると
言う事の証拠にして私達が口裏を合わせておけば大丈夫かと…：…。」

「…：…まあ、それしか無い…：…か。明日か明後日頃には実行をする。」

その時には頼むぞ?』

「はい」

そして、物語は史実とは異なる方向へとゆっくりとだが確実に変わっていく……

第四拾伍話（前書き）

今回の話でとある人物が敵として登場しますが今回の人物は多分知
っている方は多いかと思えます……。そして、ジゼルやヴァレンタ
インのファミリーネームをオリジナルに変更しましたが苦手な方は
クリアバックを推奨致しますm（| |）m

第四拾伍話

――食堂内――

「えっ！？黒逸少将、今なんと……」

『だから、少しの間帝都にある自分の屋敷に用事が出来たからその間、俺の代わりに訓練生達の機体慣熟訓練を見て欲しいと言う事だ……。』

「私がですか!？」

『ああ、この中で俺の機体等をアラスカにいる間見ていた唯依ならば的確な指示を出せる筈だから……。』

「しかし……頼む、唯依。』解りました。戒少将の代役を慎んでお受けいたします。」

『有難う。早めに終わらせて帰る様にする……。』

「いえ、此方の事はお気になさらずに戒少将は御自分の成される事に集中して下さい……。その間はこの私が訓練生達の面倒を見ますので……。」

『……解った。帰ったら天然物の酒でも一緒に飲むか……。』

「その時は御一緒させて貰いますね……。」

『それじゃあ、俺は司令達に話をして来るから唯依中佐は少年を始めとした訓練生14名のと亦菲を加えた新型機の慣熟訓練のカリキュラムをこなしてくれ……。』

「了解しました！」

……………そして

……………格納庫最奥部……………

『コイツを…グランゾンを…AMタイプにして最強と謳われた機体を使う時が来た…か。』

戒は格納庫の一番奥に封印される様にして安置されているPTとは外装や外見が大きく異なる青と黒を基調とした巨大なAMの前にラクスとフェルトの3人で立っていた……

「この様な機体がある世界にあると考えると考えただけで恐ろしいですね……………」

『まあ…な。EOTの技術と魔術技術の粹を集めた結晶と呼べる機体で下手をすれば世界を滅ぼしかねない機体なのだからな……………』

「その機体で殲滅をするとして作戦はどのような物になっているので

すか？」

『グランゾン1機あればさほど時間を取られないが、疑惑を掛けられない為に面倒臭いが……取り敢えずは形式的に施設の見学と称して研究所に入り込んで、G弾の設計図や解析情報をグランゾンの襲撃の混乱に乗じて残さず消し、関係者を残さず消す。グランゾンの操縦は遠隔操作して襲撃と同時に主要施設を完膚無きまでに破壊する。後は陽動として公表していないAMのリオンにランドリオンアーマートモジュールの二個中隊の編成でアメリカの戦術機の足止め位は出来るだろうし、仮に撃破されたり擱獲されそうになったとしても技術が盗まれない様に周囲の空間を取り込んでの爆破や自爆になるから先ず問題にはならないだろうな……。』

「技術的な事で戒さんに疑いが掛けられたらどうするんですか？」

『なに、此方が研究所にいるのに疑いを掛けられる訳が無いだろ？』

「それは確かにそうですが……」

『此方がわざわざ出向いてG弾の技術を見せて貰って戦術機の機動性向上の為の技術を提供すると言うのに奴らは疑いもしないだろ？』

「……戒さんがそう言うのであれば大丈夫だと思いますが念の為に護衛の方を1人付けさせて下さい。」

『……なら、誰にするんだ？ジゼルやヴァレンタインは私設部隊の構築に忙しいから無理だろう？』

「それでしたら既に香月副司令に話をして霞さんを同行させるとの

事ですよ？」

『何時の間に話をしていたんだ』

「戒が米国へ行くと聞いた時からですよ？」

『用意の良い事だな… 行くとして、移動手段はカモフラージュとしてビルドラプターか… レイダーといった所か？』

「総合的に見るとラプターの方が宜しいのでは？ラプターであればPTである事を隠蔽して入国が出来る筈ですよ？」

『そう… だな。レイダーだとMAになっただとしてもどうしても頭でまるわかりだからな……』

「それではラプターの準備をしておきますね？」

『頼む…。俺は少し外出をしてくる。』

「解りました。お気を付けて…。」

…
…
…
横浜基地外市街地跡…
…
…

『……………そろそろ出て来たらどうだ？馬鹿神……………』

「ほっほっ、気付いていたようだの…?」

『テメエの馬鹿みたいな神力は俺でも感知出来るからな……で、なんの用で此方に来たんだ? 神がそうそう下界に降りて来る事は殆ど有り得ないのだからな……』

「やはり……解るようで助かるわい。単刀直入に言えば御主の左腕の事でな?」

『この機械義手がどうしたんだ?』

神の言葉に戒は自身の左腕に視線だけで見た……

「御主が造った機械義手なのだが、このままではBETAへの情報漏洩を促してしまう状態にある事が解ったから急遽、儂自らが出向いた次第なんじゃよ……。」

『理由はG元素…か。』

「それだけならば感応現象だけで済んだかの…。」

『どつという事だ…?』

「御主の能力に係しておってな? 御主が左腕に付けたソレはG元素でありながらBETAと同じ様に情報を上位者に情報を送ってしまふ物へと変貌をしているのじゃ……。」

『ちょっと待て……それではPTやMSを揃えた所で無駄になってしまうのか!?!』

神の言葉に戒は驚愕の為に狼狽えはしなかったが詰め寄る様にして神に質問をした。

「落ち着くのじゃ。何の為に儂が来たと思っておるのじゃ?ソレを解決する為なんじゃぞ?」

『出来るのか!?!』

「儂に出来ない事は在りやせんわい!」

『で、どう解決するんだ?左腕が無いと戦闘に支障をきたしてしま
うが……』

「大丈夫じゃ。(神狩の隊長の腕仕様じゃがな(笑))行くぞい!」

その瞬間、光がその場を埋め尽くした。

そして……

『これは……なんだ？人外の腕にしか見えないが……』

「G元素を変異させて荒神の細胞を使った腕にしたのじゃ。拒絶反応を起こさん様に御主の体を適合性の高い体に変化させ、制御用のコアにはある物を使っておる。それとその気になれば荒神になる事も可能じゃぞ？」

『色々突っ込み所が多いがこの状態では騒がれてしまうがなんとか出来ないのか？』

「腕は変異はしたが御主のイメージに沿って外見は簡単に変更する事が出来るから安心せい。」

『それならば良いが……』

「それと捕食したらその捕食した相手の特長を能力として補完する事も可能になっておる……。」

『どんどん人外街道を爆進して行くな……』

「光線種を捕食すれば任意の場所から光線が放てるといった具合じゃな？それと財宝や剣製等に眠っている武器や防具を左腕や右腕から……そして体に纏う様にして現す事も可能じゃ。」

『やり過ぎ感はあるが助かった……』

「それではの……健闘を祈っとるぞい」

『ああ。』

そして、神がその場から姿を消して、市街地跡の中心には戒しか残っていないかった……

『さて、先ずはこの腕を機械義手に戻して……これで良いか？』

戒は漆黒に染まった悪魔の様な左腕を今までの様な機械義手へと変化させて掌を開いたり、閉じたり腕を回して調子確かめる

プレデター・モード
『「捕食形態」……』

戒が左腕を前に突き出してそう呟いた瞬間、左腕が物理的に変貌を遂げ、怪物の様な頭が口を大きく開けて現れた。そして…次の瞬間……

『……喰らえ』

戒の言葉に従って左腕のソレは目の前にある瓦礫をその大きく開けた顎で喰らった。

『……凄まじいモノだな。』

戒は捕食した場所を見てそう零した……捕食された場所はその部分だけが何かに決り取られた様に削れていた……

『まあ、これで当分の間は大丈夫だかオラクル細胞の暴走は無いが危惧すべきは捕食衝動乃至は「終末捕食」……か。』

戒は前にいた世界に存在した携帯ゲームの世界設定を思い出して今はBETAの住処となっている月を思い浮かべていると後ろから誰かが走つて来る

「黒逸少将！！」

『どうした、何か起きたのか？』

後ろから来たのは国連の軍服を着た兵士が走つて来て戒に焦ったような口調で戒の名前を呼んだ

「今、米国が何者かの襲撃を受けてホワイトハウスより救援要請が日本帝国の黒逸少将宛てに発信され、黒逸少将を探していた所です！」

『何だと！？米国が襲撃を受けたと？！』

「今、司令達は作戦司令室に詰めて少将をお待ちです！」

『解った、知らせてくれて有難う。俺は先に戻る！君も気を付けて』

戻れよ！」

「はっ、少将もお気を付けて！」

戒は兵士のその言葉を聞きながら脚を魔力強化して跳躍すると、荒神化した影響か元の身体能力を倍化された様子で軽く跳んだ積もりが300メートルを越す大跳躍をし、戒自身それに内心で驚きつつ文字通り人外になったんだなと呆れていた……

……… 作戦司令室 ……

『ラダビノット司令！香月副司令、黒逸少将只今戻りました。』

「黒逸、今まで何処で油を売ってたのよ！こっちは状況把握だけでてんでこ舞いなんだからアンタがいないと話にもならないでしょうが！……！」

「落ち着きたまえ、香月博士……今は少将に現状の説明をするのが先であろう？」

「………そうね。」

『現状はどうなっているんだ？俺の下に来た兵士からは襲撃を受けたとしか聞いていないが………』

「まずは衛星からの画像を見た方が早いかしら？モニターに映し出して頂戴……。」

夕呼の言葉にオペレーターが従い正面のメインモニターにアメリカ全土が映し出されていた……

「これが前日のアメリカ全土の映像ね？……でこっちが先程撮れた映像よ……。」

「なっ！？」

夕呼の示した映像にはアメリカ全土の至る所が抉られた様な大きなクレーターが虫食いの様に存在し、衛星軌道上からの映像で確認出来る大小のクレーターは優に百カ所は存在し至る所で黒煙が上がっているのが今現在、リアルタイムで映されていた……

『（この現象……いやこの異変は間違いない……荒神が関係してやがる！しかも単体じゃない……確実に大多数、タイプが解らないのもどかしいな……）他に判明した事はないのか？』

「他に判明しているのは襲撃した奴らがBETAとは明らかに姿が違う事ね……BETAは単純に巢を造る事が優先だけど、コイツ等はあらゆる物を喰い潰して行ってる様で行動理由が解らないのよ。」

『敵の規模は？』

「それは今、調査中だ。今回の相手はBETAとは違う未知の相手だ……十分に調査をしてから事に当たり、事態を収めたいが米国が

滅びる様な事になれば今の計画が頓挫してしまう為に少将の意見を聞きたいのだ……」

『早急に誰かが現場へ向かって現地の被害状況の詳細確認をした方が良いかと思う……勿論、危険性が高いというデメリットはあるが正確な情報が手に入るというメリットもあるからこの時点での取れる最良策と思うが……』

「確かに……リスクを伴わなければリターンはしないわね……」

戒の言葉に夕呼はその聡明な頭脳で思案しながら戒の意見に賛成の様である……

「しかし、そうなれば誰が行くのだ？此方では帝国所属の人物は篁中佐に黒逸少将しかいないのだが……」

『俺か唯依と言うのが現在の状況では彼女は俺の補佐官ではあるが、向こうへ迅速に行く手段を持つのは俺位だろうな……。それに、彼女には俺の代わりにPT及びMSを用いた慣熟訓練をB分隊に教えているのだからな……』

「しかし……」

『無論、単独では行かん……部下のジゼルとヴァレンタインに俺の3人で現地に赴き、威力偵察を行って敵勢力の解析を行うから安心しろ……。』

「向こうへはどの様に行くつもりなの？」

『飛行能力のあるPTのヴァイスリッターに、新型MSのWガンダム0にフォビドウンの三機の編成になるな……。ヴァイスにはジゼル、フォビドゥンはヴァレンティンでWには俺が搭乗する。機体能力は折り紙つきだから心配するな……。』

「わかった。ならば直ちに出击準備を整えて米国へ向かってくれ……。」

『了解した……直ちに出击準備をして米国へ出向いて敵の正体を掴んでくる……。』

そして戒は作戦司令室を後にしてジゼル達がいるシュミレータールームに向かった……

「戒さん?!」

「黒逸少将?! どうしたのですか?」

『唯依、まりも……ちょっと良いか?』

戒がシュミレータールームに来た事に2人は驚愕するが至極真面目な戒の言葉に2人は直ぐに軍人然とした表情になる……

『ジゼルとヴァレンタインは今何処にいるんだ？』

「今は訓練生とは別のシュミレーター機でヴォールクデータを二機^{エレ}編成で攻略中です。」

「驚くべきは2人の連携ですね…。機体はゲシュペンストにヒュッケバインですが機体能力を上回る数値をだして今、中層を突破する所ですね…。」

『済まないがそれを中断して2人を俺の執務室に連れて来てくれ…。』

「……………何かあったのですか？」

『まだ公にはなっていない事で…。済まないが直ぐに連れて来てくれ。』

戒はそれだけ言ってシュミレータールームから出て行ってしまった

「一体何があったんでしょうか…唯依中佐は何か御存知ですか？」

「私は何も……………黒逸少将に聞かないと解らないな……………兎に角、2人を連れて黒逸少将の所へ行かないとだな……………」

「そうですね。訓練生には各自で訓練の継続をして貰いましょう

……………」

「それじゃ、2人を連れて行きましょう……………」

そして、2人はシュミレーター機に乗るジゼル達に訓練中断の旨を伝え、戒の待つ執務室へと向かうのであった。

.....執務室.....

『.....さて来て貰ったのは他でもない.....ジゼル、ヴァレンタインの両名は俺と一緒に渡米してもらおう。』

「「えっ!?!」」

「「どっという事ですか?!」」

「何故、黒逸少将自らが出向くのですか!?!」

『落ち着け.....訳は今から話す.....』

俺の言葉にジゼル達は困惑から驚きの声を.....唯依とまりもは疑問をぶつけてくる...解らないでも無いがな.....

『先程、米国が何者かによって襲撃され、国土及び街が甚大な被害を被りホワイトハウスより帝国宛てに救援要請が出され、この基地にもそれが伝わって、司令達が俺が行く事に決まったからだ...。』

「なっ！？米国が襲撃を！？」

「何かの間違いでは……」

『残念ながら事実だ……衛星画像からも確認したが、酷い物でアメリカ全土がまるでスプーンで抉った様にボロボロになっていた……コレがその証拠だ……』

戒がデスクの上に出したソレはアメリカ全土を衛星から撮影した物でその場にいた4人はその写真を見て絶句していた……

「こ、この様な事が……」

「酷い……」

『敵はBETAとは違つと仮定してはいるが未だにその正体は不明だ……そこで帝国内で迅速に動ける人間で俺が行く事になったと言っ訳だ……』

「どの様にして行かれるのですか？」

『飛行可能なPTであるヴァイスリッターと可変型MSのW0にフオビドゥンによる三機編成で米国へ威力偵察の名目で現地に赴き、可能であれば生き残った人間を救出する。今より1時間後に番外格納庫の前に集合しろ……以上だ……』

「了解しました！！！！」

『篁中佐は少し此処に残れ、神宮寺軍曹は自分の持ち場に戻って来て構わない……。』

「はっ！」

「それでは私はこれで失礼します……。」

そして、ジゼル達は執務室を後にして出撃の為の準備をしに……。まりもは自身の教え子たる訓練生の下へと向かい、執務室には戒と残る様に言われた唯依の2人だけとなった。

「それで、私をこの場に残したのはどうしてですか、戒？」

『……今回の米国の襲撃は俺達が行った所で一時的に抑えるだけにしかならない事を教えておこうと思っただけ……。それに下手をすれば俺もタダでは済まないかも知れん……。』

「何を弱気になっているの！貴方は……。戒は何時もどの様な事があっても生還したじゃない！今回だって……。『前の時と今の状況は訳が違っ！』……。っ！？」

『先程の衛星写真を見て理解はしているだろうが！敵は既にBETAとは別物……。危険性は未知数なのだ……。だから今回も無事とは限らんその様な事は戦場には付き物だ……。』

「ですが！」

『無論、俺もみすみす死ぬ様なへま等をやらかす積もりはないが……だが、常に俺が無事とは限らない事を解っておけ……』

「……解りたく……ありません」

『……唯依』

戒の言葉に唯依は俯き肩を震わせて蚊の鳴く様な声を搾り出す様にして紡いでいく……

「私は……愛する人の……死を……理解などしたくは……ありません……」

『……俺は愛してくれるのは嬉しい……だが、俺はその事については応える事は……』

「それは既に承知しています……」

『なら……それでも私は貴方を……戒を1人の男性として愛してしまっているのです……』……唯依』

「貴方がいない事に私は……」

耐えられないと唯依は言葉にしようとしたが、それ以上の言葉を続ける事は出来なかった……何故なら、戒に抱きしめられた事により続く言葉を物理的に遮られたからである……

「戒……」

『本当に済まない……唯依にそれ程までに苦痛を与えてしまった事に気付いてやれなんだな……』

「私は……」

『だから、今はこれで許して欲しい……』

「ん……」

戒は唯依へキスをする時、睡眠魔法を使い、唯依は意識を失って倒れそうになるが戒が抱きすくめていた事によりそれは無かった……

『（唯依……次に会う時には俺は……）』

戒は唯依をソファーに横たえたと表情を苦痛に歪めて唯依を一瞥したが、出撃の時間が迫っている為に執務室を出て、足早に格納庫へと向かって行った……

- - - 格納庫前 - - -

『ジゼル達……準備は良いか？』

「いつでも行けます！」

「機体資料でしっかり長所と短所は見極めてあります！」

『よし!ならば、直ちに機体へ搭乗せよ!』

「了解!!!」

-. -. 管制室 -. -. .

「3人とも準備は良いわね？」

『此方はいつでも行ける……』

「ファイヤーコントロールシステム
FCS並びに各システム……クリア……メイン、サブカメラの異
常なし……発進準備完了です！」

「エンジン良好、アクティブコントロールシステムACS問題なし……各関節部アクチエーター
問題なし……固定武装チェック……クリア……機体リンク……問題
なし……行けます！」

「よろしい……では、各自発進してくれ。武運を祈る……」

「私が言うものじゃないけど……3人とも無理は禁物よ？特に黒逸！アンタが一番の心配の種だと言う事を忘れないでよね？」

『了解した！黒逸戒…Wゼロ出撃^でぞ！』

「ジゼル・オスロー発進します！」

「ヴァレンティン・オスロー行きます！」

戒の駆るゼロはバードモードで、ジゼルはヴァイスリッターで、ヴァレンティンはフォビドウンの背部にあるリフターを展開し、三機は碧の炎を噴かして横浜基地から広大な空へと飛び出した……目指すはアメリカ

……ホワイトハウス……

「畏は既に張った……後は奴がノコノコと現れた所に……この荒神達を使つて出迎えてやるだけ……か。」

ホワイトハウスの一室……本来なら大統領が座るべき場所には見慣れぬ蒼いスーツウェアを全身を包む様に着込み筋骨隆々とし、身長は軽く2メートルはあるであろう体躯をした男が座っており、その傍らには大統領であったモノやSPと見られたモノが無惨な肉塊となつて辺りに横たわっていた……

「しかし、この世界には俺の渴きを癒やす奴はアイツしかいないのか……駒の荒神でさえ俺の渴きを癒やす事が出来ないが未だに見ぬ俺を蘇らせたハデスが敵と見る奴は……先ずはあの駒共にやらせるか？幸いにも災厄の星の名を冠する荒神や神話の名を冠する荒神が何体もいるのだから……」

男は椅子を回して後ろの窓から今も尚大地を文字通り喰らっている山のような体躯の荒神や街に辛うじて生存していた住人を蠍のような荒神がその両手に持つ鋏と言うより顎に似た物で咬み殺し、貪り喰う光景に表情は狂気を孕んだ魔獣のような笑みを浮かべていた……

「早く……早く来い！時の神子……この俺の……血の渴きを癒せよ？クククツ……ハハハハハハハツ！！！！！！」

男は壊れた様に嗤いながら尚も街の惨状を見て更に笑みを深めていった……戒とこの男の2人が会い間見える時……物語は更に加速する

……

第四拾伍話（後書き）

「久しぶりの登場だー！ー！！！！！」

『嫌い……吹き飛び消え失せる「ゴッドブレス」！！！！』

「それはm……」

急に起きた突風により作者は行方不明 えっ？

『さて、此処まで読んでくれた読者やユーザーの皆様有難う御座います。駄作者の所為で此方の更新が滞っている事をお許し下さい。また、次の話では戦闘描写が大半を占め、神狩のネタが多くであるかと思われませんが楽しみにして下さい。』

次の次位の話の後に戒は一度他の世界の次元に渡ります

『何処から喋ってやがる！この駄作製造機があ！！！！』

さあ、何処からでしょうね？次回は四拾陸話にてお会いしましょう。
ゲストは唯依姫かと思えます

『何処に居やがる！！！！』

第四拾陸話

横浜基地を出発し、2、3時間程経って戒達はアメリカに到着した

……

……アメリカ南部 上空3000メートル……

『今の所、敵は目視出来ないな……』

「あのアメリカが……」

「酷いわね……でもどうやったら大地が抉られるのかしら……」

『それは解らん……だがそれを調べる為に我々は来ているのだから
全てを逃さずに2人はレコーダーに記録しろよ？』

「了解！……」

「レーダーに感あり！小型の熱源反応多数確認……この高度を飛ぶ
物体が存在するのか！？」

『此方も今、最大望遠で確認した……どうやら盛大に歓迎してくれ
ている様だな……』

「アレ……は何……ですか？」

「生物……なのか？」

『さあな…生物の定義がアレに当てはめるのは些か無理があると思うが……来るぞ！ジゼルとヴァレンタインは二機編成「エレメント」を組んで各個撃破しろ！サイズは小さいがあんなモノに取り付かれたら堪ったモノではないぞ！』

「了解！！」

戒は先ずは先制とばかりに両翼に取り付けられたライフルから巨大な二条の光を発し、正面に展開していた下半身は卵の様なモノで上半身は女性のソレの生物と言って良いのか疑問が残るが戒は正面にいたソイツ等を光の奔流で消し飛ばした…がまだ下にいたのか大量に先程の奴らがワラワラと上がって来る……

711

『コイツ等は雑魚だ！親玉が何処かにいる筈だから先に其方を叩くぞ！！！』

「このおツ！！」

「墜ちろツ！！！！」

ジゼルとヴァレンタインは各々の機体に装備された固定武装を駆使して卵の化物を次々に葬り去っていく……

「……っ！どれだけいるのよ！？」

「切りが無いわ!!」

『……………2人共、今直ぐにその場から離れろ!俺が全て雑払う。』

「「りよ、了解!!」」

ジゼルとヴァレンタインは最初何を言っているのか理解出来なかったが、戒の機体がいつの間にかMAからMSへと変形し、両手を突き出す様にしてバスターライフル二挺を構えているのを確認すると慌ててその場から……………射線上より退避した。

『……………ワラワラ…ワラワラと鬱陶しい……………消えて無くなれえッ!!』

戒の咆哮と共にライフルからは先程とは比べ物にならない程の光の奔流が迸り化物達のド真ん中を撃ち抜いたそして……………

『まだだ!!!!』

瞬間……………ゼロの持つライフルは左右に分かれ2つのライフルにし、そのまま両手を左右に広げて敵への被害を更に与えていき、空にいた卵の化物を殲滅尽くした……………

「す、凄い……………」

「あれだけの数を……」

『戦闘空域に敵影無し……このまま降下してアメリカの様子を見るぞ！無論、先程の化物がまた出てくる事を想定として周囲の確認は絶対に怠るなよ？』

「了解！！！」

そして、戒達は雲を影に利用し、地上へと降下する事に成功した……そして

『これは……』

「本当に人間が住んでいた所……なのか？」

「酷すぎる……」

戒達が地上に降下して目にしたのは地面が抉られていた他に建造物が見るも無惨な状態で広がっており、公道の近くには人の血痕が至る所に大量に付着しており、幾分か時間が経ち乾き、鮮血と言うよりもどす黒く変色して街の不気味さを醸し出していた……

「一体、何が……」

『?!二人共その場を離れる!!!』

「「!?」」

「グオオオオオオオオ!!!」

戒の言葉に即座に反応をした二人は機体を後ろへとブーストした瞬間、先程までいた場所には突撃級よりも一回り程の巨体を有した百獣の王を模した様な獣がビルを破壊しながら躍り出て、此方を視認すると威嚇をするかの様にして大気を震わせる様な咆哮を上げていた……

「ライオン?!」

「サイズが違い過ぎよ!?!」

『来るぞ! 散開しろ!』

戒の判断は正しかったのかライオン擬きはその頭上に雷球を二十個位を発生させると戒達へと狙いを定め、全てを撃ちはなってくるが戒の指示で既に散開していた為に狙いは不発となり地面を粉碎するだけと成った……そして、狙い通りにいかなかったのが気に入らなかったのかライオン擬きは怒りの様な咆哮を上げる……

『……どうやら雷を操れるようだな?』

「雷を操れる敵なんて……そもそもあんなのがいる事自体知らなか

「ったわ。」

「あんなの喰らったら一溜まりも無いわね……。」

戒がライオン擬きの攻撃を冷静に分析をして、二人は先程の地面を砕いた攻撃の感想を述べる。

『……………どうやら感づかれた様だな。』

「うっ！」

「気持ち悪い顔ね……………」

そんな中、戒はライオン擬きを前にして後ろに聳え立つ虫食いだらけのビル群の上を見て眩き、それを聞いた二人はその上を確認して表情に嫌悪感を表して声を漏らす。ビルの上にはいたのは鬼の様な面を顔に貼り付け二本の太い脚に魚類を思わせる尾を持った化物に西洋の拷問器具……………鋼鉄の処女を彷彿とさせる奴に先程、空で遭遇した卵の化物がビルの屋上の至る所で此方を睨み付けていた……………

『鬼の様な面に魚の様な尾……………さしずめオウガテイルと言った所か？それに雷を使うライオン擬きは雷獣…ヴァジュラ…か？』

「ならアレは幼虫とアイアンメイデンを掛けてコクーンメイデンって所かしら？」

「じゃあ、あの卵は？」

『ちいつ！二人は互いにカバーをして各個撃破しろ！俺はリーダー格と思われるヴァジュラを潰す！』

「了解！」

「了解しました！」

戒の言葉に二人は互いの距離を保ちながらヴァイスリッターはオクスタンを…フォビドゥンはフレスベルグを放ち、オウガティルやザイゴードと言った小型種を次々に討ち滅ぼしていく……

『……さて、此方も始めるとするか。俺を相手にした事を後悔して……消え失せる！！！』

戒はそう言ってゼロの肩部に収納されているサーベルを接近しながら抜き放つがヴァジュラはその巨体に見合わない俊敏性を使って跳躍しサーベルを躲すと唸る様にして此方を睨み付けていた。

『……流石は荒神と言った所か？（奴らよりかは割かしら楽ではあるが、やはり荒神達の体を構成しているオラクル細胞が邪魔…だな。実弾等は小型種ならいざ知らず中型や大型種には効果は皆無…だからな。）』

俺がそんな事を考えているとジゼルとヴァレンタインは小型種を掃討し終えたのか俺の近くに機体を降下させる。

「戒、大丈夫か？」

『あんな獣如きに俺が怪我するとても？』

「でも、相手も無傷だよな？」

『面倒臭い事にあのヴァジユラが意外にも俊敏過ぎてな……接近した所で攻撃をしても躲すから……な。』

戒達がそんな事を話している間にヴァジユラはいざ攻撃しようと思いき出したがそれは直ぐに思いもよらない形で中断される事になるのであった……幾筋もある太い幹の様な物が空から降ってきてヴァジユラを押し潰すと言う形で……

「何が……」

「何あれ？山……なの？」

二人の眩きに対して戒は叫び声を上げる

『二人共直ぐに撤退をしろ！あんなのとマトモにやり合える様な装備はその機体には備わってはいない！！！！』

「そんな物やつ」あの様な大質量の相手をするには此方は火力不足な事は解り切っているだろうが!!!」…!?!?」

「戒はどうするのよ?!」

『お前達が戦闘空域を離脱するまで殿を勤めてやるよ…』

「ダメだ(よ!?!?)」

「そんな事なら私達を」俺に部下を置いて逃げ出せと言っのか…
…それは」

『部下の安全を確保するのも上司の役目だ…。それにゼロや俺が高々あんなデカブツに遅れを取るものか!』

「だけど!?!」

「承服出来ません!?!」

『…仕方ない。』

「!?!?」

『遠隔操作でM D s y s t e mを…起動!』

戒の言葉がトリガーとなり、二人のコクピットのメインモニターにはM D s y s t e mと表示されて自身からの操作を受け付けなくなる。

「戒、何をした（の）！？」「」

『緊急用として予めから搭載しておいたシステムだ……それは俺の声紋を認識してから作動して内部からの操作を受け付けなくし、搭乗者の生命を第一として設定してある……言いたい事は解るな？』

「解りたくありません！！」

「戒も一緒に……」それは無理な相談と言う物だ……。向こうに着いたら司令達にこの事を報告するんだぞ？』……戒！！！」

『俺は絶対に死なん……行けえ！！！！』

「戒い……！！！！」

二人の叫びを残し、機体は搭乗者の意志とは反対にこの場から飛び

出し戦線を離脱するのであった……

『さて、これで良い……荒神相手では如何に強力な兵器と言っても通用するのは光学兵器位で後は奴らと同じオラクル細胞を持った者しか太刀打ち出来ないから……二人には悪いが俺が全力を出すには見られる訳にはいかない……さあ、行くぞウロヴオロス！貴様を駆逐させて貰うぞ！！！！』

戒はそう言ってゼロの持つ最大の武器であるバスターライフルをウロヴオロスへと撃ち放つ……そして……

「

！！！！！！」

ウロヴオロスは此方では理解不可能な雄叫びを上げて自身の目の前に光を収束させて戒の撃ったバスターライフルと同等かそれ以上の光の奔流を持って互いの中間点で拮抗させる……しかし

『無駄だ！』

戒の言葉に呼応してライフルの出力を更にとってウロヴオロスの光線を呑み込み、その射線上にいたウロヴオロスをも呑み込んでウロヴオロスはその光の奔流により滅びた……

『よし…後は……』

戒は周囲を確認しようとした瞬間^{とぎ}地を揺るがす音と共に蠍の化物…
ボルグカムランが変異種と共に戒の目の前にゆっくりとした歩調で
現れる……

『これでは埒が空かないな……やはり早く元凶を見つけ出さないと
か……』

戒はそう言いながらライフルを蠍擬きへと放つ……が

『……早速順応してきたか。』

蠍擬きは両の手の鋏を楯の様にして正面に翳してビームを拡散させ
るのを確認して戒は冷静に分析をする……そして

「「「ギシャアアアアア」」」

『ちっいいー！』

三体の蠍擬きは突進や棘をミサイルの様に出すが戒はそれを飛
行する事で避ける……

『機体に乗っけては全力を出せない……か。』

空中に浮きながら戒はコンソールを操作してオートパイロットにし
基地へと帰還する様にして、コクピットのハッチをエアロックと共に
開けてその身を空へと投げ出した……

『行くぞ……荒神共！荒神完全……龍神化……ハンニバルうッ！！！！』

その瞬間、戒の体は戒を中心とした黒く光る玉に包まれる……そして

「グギャアアアアア！！！！」

一体の蠍擬きがその黒玉に向けて無数の棘を射出する……しかし……

『ムダだ……』

棘が黒玉に到達する直前に戒のそんな言葉が響き、黒玉に向かって
いた棘は細胞の結合崩壊を起こして塵となった……そしてそれを引

き金としたのか戒を包み込んでいた黒玉はまるで卵から雛が生まれる為に殻を割るかの様にしてその姿を現す……それは今までとは違うヒトの域を逸脱した行為……その姿はまるで人の様な龍……左右の腕には盾と手甲とを掛け合わせた様な物、背中には非物質化した8枚の翼を持ち……頭部は龍で体躯は戦術機よりも人に近く、大きさは二回り程大きく体躯の色は全てを呑み込む様な漆黒の色……所々に紅の色を持ち、瞳の色は戒の持つ真紅の瞳の色ではなく、金の瞳となり、妖しく輝いていた……

『さあ、貴様等を駆逐させて貰うぞ……「光の天災」……！……！……！』
シャイニング・ノヴァ

ハンニバル浸蝕種改めハンニバル龍神種となつた戒はそう言い放ち、左手に目を瞑りたくなる程の光量と何人にも防ぐ事の出来ない熱量を集め、それを収束させ、更に圧縮をして野球ボールのサイズにしてから蠍擬き……ボルグカムラン達に向けて投げ落とした……

”ゴオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！”

その瞬間、その場から音と言う音と掻き消えて景色が白色に塗り潰され、遅れて大音量の爆音と回りの物を一瞬にして融解させる熱と爆煙が着弾地点を中心として輪の様に広がりあらゆる建造物を蠍擬き諸共に消滅させた

『まだ他にもいる筈だな……！』

戒は被爆地点中心部に降り立ち周囲を確認し、ボルグカムラン達が全滅したのを確認してからその場から飛び立って中心部へと向かった。

- - - 横浜基地司令部 - - -

「何ですって！？戒が1人で向こうに残ってる!？」

「……はい。敵が余りにも多く、戒は1人で足止めをするからと……私達も反対をしたのですが、戒が何かした様でして内部からの操作を受け付けずに横浜基地まで戻されてしまいました……」

「あの馬鹿！自分がどれだけこの日本にとって重要性を持つか解ってないわね!!」

「しかしこのような生物が存在していたとは……」

「その生物は戒少将の命名で通称荒神と呼称し、どれもが異形と呼べる姿で雷を操る戦術機サイズのライオン擬きや小型種で誘導弾を放つ者に空中を飛び回り空気を圧縮した物を放つ者に山の様な体躯を持った蜘蛛のような者など人智を逸脱した奴らが米国の大陸を闊歩しているのが現状で生存者は絶望的と言えます……」

ジゼルの言葉に司令部の中には沈痛な空気が流れる……そこへ

「司令！此方へ接近する機影があります！これは……黒逸少将の機体です！！」

「?!モニターに映し…待った！通信いける？」

「先程よりしているのですが応答がありません！」

「どついう事かしら？まさか……無人？」

「当たりですわ。香月副司令……。」

「クライン中佐……何故そう思われるのですかな？」

「それは勿論、戒様は此方に来るならば通信の一つを必ず寄越しますからですわね、ラダビノット司令……。」

「なら何故本人は乗っていないのかしら？あの状況下でありながら機体を此方に戻す意味が解らないわね……。」

「戒様が御動きになられるのに対して邪魔と感じて此方へ戻したの
でしょう。戒様は生身でBETAを屠られる方ですから……」

「冗談でしょ？」

「私が戒様の事で御冗談を言いましたか？」

「……アイツは本当に規格外ね」

「兎に角、黒逸少将が戻るのを此方は待つ他に無いと言う事か……」

「その件に関してなのですが迎えに行く手段は既に御用意が整って、
何時でも出撃出来ますが？」

「行く手段とは？」

「人間のみであれば中隊規模の人数を乗せる事の出来る高速艇を御
用意出来ています。」

「なら、救出部隊としてA-01小隊A分隊を連れて行きなさい……」

話は私が通しておくわ。」

「解りましたわ。では此方は直ぐにでも出発出来る様に準備をしておきますわ。」

それから暫くして……

……高速艇内……

「皆さんこれから米国へ向かいますがよろしいですわね？現場指揮は伊隅中尉がして下さいな？私は戒様のバイタルサインを探して皆さんの通信機へ逐一報告致しますので……。」

「副司令からの話と渡された資料を見る限り敵は「荒神」と言われましたがどの様な生物かまだ把握が出来ていないのですが……。」

「あれが生物とは言えるかは定かではありませんが順応性に関して言えばBETAを上回るかもしれないわね？それにBETAが外からの来た存在に対して荒神は中の存在になるのですから……。」

「どづいつ事ですか？」

ラクスの言葉に機内にいるA分隊の面々はざわつき、その中で伊隅中尉が代表として質問をする。

「これはまだ仮説に過ぎませんがBETAが襲来したのは宇宙から喀什でしたが彼等が襲来した時には宇宙から観測されませんでしたからですわね？また、彼等の共通している事は我々人類の敵…と言う事ですわ。」

「では、この資料を見る限りで危険と思われるライオン擬き…ヴァジユラに遭遇した場合にはどの様な対処をすればよろしいのでしょうか？」

「先ず現段階では皆さんの力では大型種を倒す事は叶いません……ですがそれは倒す事を前提とした場合であり、小型種程度ならば携行している自動機銃で殺す事はできますが中型や大型は倒す迄には至りません。なので先ず大型や中型に遭遇した場合は先程皆さんに配布した閃光手榴弾で目を眩まして逃げる事位ですわね。」

「それ程までに危ない奴等が相手で我々だけで大丈夫なのでしょうか？」

伊隅中尉はラクスの説明に表情を暗くした。

「それを皆さんは承知で来た筈ですが？それとも今になって怖じ気づいてしまいましたか？戒様はその場所で今も尚戦っているのですよ？」

「それは……」

「中佐、目的地付近の空域に間もなく到着します。」

「解りました。では皆さん此処からは私を含め、皆さんの力を合わせなければ戒様の救出は成り立ちません。心を一つには言いませんが頼みます。」

「……はいつ……!……!……!」

ラクスの言葉にA分隊の全員が力強い返事をする。それを見ていたラクスはこの人達は強いなと感じていた……

そして所変わってその頃の戒は……

『ムグムグ……やはり荒神の形態では思いの外に腹が減るな。しかし、ヴァジュラ系の荒神は部位によって違うが脂の乗った牛肉の様な味わいに対してウロヴオロス系は全身が手羽先の様な味わいと驚きだな……。』

戒は荒神化した状態であり、今し方倒したディアウスの腕をフライドチキンのかぶりついて自身の感想を1人で喋っていた。その後ろには無数の荒神の死骸が転がっていた。そこにはヴァジュラ他にサリエルやコンゴウ等の中型にウロヴオロスや禁忌種のアマテラスにゼウスと言った荒神が体の一部を欠損した状態で放置されていた。

『……んっ、それにしても喰った荒神に括らずに喰ったモノの特性を得るし生物等であれば技すら習得するとは反則スキルだな……。BETAはいったいどの様な味をして……。イカンイカン、此処に来てから思考が荒神に近くなってダメだな。』

脚の最後の一片を飲み込みながら自身の思考に対して呆れた感情を自身に向けていた。そこへ上から何か土煙を上げて落ちてきた。

『なんだ?!』

戒は落ちて来た何かに視線を固定し一瞬たりとも油断や隙を見せずにその場で構えた。向こうから放たれる異常なまでの禍々しいまでの殺気や狂気が入り混じった場所を睨み付けていた………すると

「待ちわびたぞ!この時をよおッ!!!!!」

そんな咆哮に似た叫びと共に強風が巻き起こり、そこから現れたのは子供位の大きさの戦斧を片手に持ったやや筋肉質で長身の男が粉塵をその戦斧をもって風を起こしたのか横に振り切った姿勢でいた。

『貴様は誰だ!この国をこんなにした目的は』

「名乗りがまだだったなあ?我が名はバルバトス…バルバトス・ゲーティアだ!目的は貴様との殺し合いだあ!小国の英雄様の力を俺に見せて欲しくてなあ?俺の渴きを癒すに値するかどうかの品定めを兼ねてこの国を奴等がもっていた駒を使って誘き出しただけの事だが思いの外効果はあったようだがなあ?クツクツクツ。」

『貴様ア！俺を誘き出す為だけにこの国の人々を無闇に殺したのか！？なんの力を持たない人々をツ！！！！』

「弱者は強者によつてその運命が決まる……戦場では当たり前であろう？それにあんな力が何も無い塵芥共が生きていた所で何の価値も無いのだから俺が貴様を誘き出す為に有効利用してやったのだから感謝して欲しいものだなあ？」

『……この下種がツ！！！！』

「良い……良いぞ！その憎しみが！怒りが籠もった目が！俺の望みを叶えんが為にその命を寄越せツ！！！！」

『誰が貴様なんぞに命をくれてやるものか！！！！「黒龍残影剣」！！！！』

「そつだ！素直に寄越す様な奴には俺は用が無い！貴様の様に抵抗する奴を……強い奴を俺は望んでいたのだ！！！！さあ、続けようか！ブルアアアアアア！！！！」

戒は叫びながらハンニバル化した状態で高速移動をし両の手に顕現させた漆黒の炎を剣状にしてバルバトスにあらゆる角度から連続で振るがバルバトスはその手に持つ戦斧でいなしたり弾いてハンニバルと化した戒の連撃を防ぎきり更にお返しとばかりに有らん限りの力を戦斧に乗せて横薙に戒の首を狙うが戒はそれを黒炎の剣で弾いて距離を取った……

「中々やるじゃねえか！だがコレはどうだ！断罪のおおッ」「エクセキューション」！！！」

バルバトスが呪文を唱えた瞬間、戒を挟む様にして上下の空間に暗黒の渦が出現した。

『「恵みの炎」^{バアル}！！！！」』

バルバトスのエクセキューションに対して戒は左手に漆黒の炎を集め、ソレを地面に叩きつけて幾筋もの火柱が周囲を焼き尽くすかのように立ち上り、戒の周りを回りバルバトスのエクセキューションが発動していたにも関わらず上下に展開された空間を破壊した……

「魔法をその様にして突破するとは驚きだなあ？しかしこれで更に楽しめると言うものだなあ？」

『俺は貴様の様な戦闘狂に構っている程暇では無いのだからさっさと終わらせて貰いたいかな…。』

「そんなに早く終わっては俺が詰まらねえんだよッ！行くぞおッ！！貴様の存在諸共消滅させてやるよおッ！！ブルアアアアアア！！！！！！」

『貴様の存在自体をこの世から抹消させて貰うぞ！！！！』

『「うおおおおおおおッ！！！！！！」』

そして2人の攻防は激しさを増していき、倒壊寸前の周りのビルは跡形も無く次々に消し飛んでいく……

……黒逸戒少将救出？部隊現在地……

「なんだと言うのだ？先程から起きている地響きや巨大な火柱は……資料にはないタイプか？」

「何かが戦っていたり……そんな事がある訳無いだろ！」
~~~~~  
「で怒鳴るな！！！！」



「ラクス中佐、一体この国に今何が起きているのですか？」

ラクス「先程から続いている地響きは確証は有りませんが多分、戒様の戦闘による余波の様なものかと思えますね？」

ラクスの言葉に部隊の全員はその意味が解らずに目を丸くしていた。

「ラ、ラクス中佐それはどう……」

言う事かと水月はラクスに聞くがそれは最後まで言われる事は無く目の前の事象により中断を余技なくされる……

「「グガアアアアアアアアアアアア！……」」

「「ヴァジュラ！？」」

「ちいっ！全員逃げろおッ！……！」

「「」のおッ……！」

目の前のビルから咆哮を上げながら飛び降りて来た2体のヴァジユラに風間と宗像は驚き、伊隅は叫び退避する様に声を上げ、水月は閃光手榴弾を全員が背を向けた瞬間にヴァジユラの目の前で炸裂させ、視覚と聴覚を奪つ。

「茜！ボサツとしてないで逃げるぞ！」

「は、速瀬中尉…足が動かないんです…。」

「（ちいつ！茜は確かに軍人としての精神面は確かに大した物だが、こんな巨大な生物（？）は私ですら畏怖の念を覚えてしまうからな…。）肩を貸してやるから一緒に逃げるぞ！」

「は、はい！」

「速瀬！危ない！？」

「はッ！？」

水月が涼宮の腕を肩に回していざ逃げようとした所へ伊隅が叫び、咄嗟に後ろを振り向くと視覚が早く回復した1体のヴァジユラが2人目掛けて腕を振り下ろす所であった。

「くっ！？（茜まで巻き込む訳には！）茜…ごめん！」

「速瀬中尉!？」

そして、速瀬が覚悟を決めた瞬間、空から一条の炎が槍の様にして降ってヴァジュラの水月を狙って振り下ろされた腕を貫き、その炎の槍により腕を貫かれたヴァジュラはその標的を水月から上から降ってきた炎の方を向いた瞬間に空から赤黒い8対の羽を生やした黒い影が落ちてきた。

「なんだアレは?!」

「仲間割れ...?」

「いや...違ってみたいだ。」

「私達を守って...る?」

「何故?」

伊隅達の声は上から降ってきたソレには聞こえずにいた。

「グアアアアアアアアア!?!?!」

「ゴアアアアアアアアア!?!」

空から降ってきたソレはヴァジュラを踏み潰し、トドメとばかりに

咆哮を上げその盾と鉄甲を合わせた様な腕をヴァジユラの背に打ち下ろして絶命したのを確認するともう1体のヴァジユラに向けて腕を振りかざすとヴァジユラの真下からその体をすっぽりと覆い尽くす程の炎に灼かれ黒こげの焼死体となり地に伏した。

「凄い…一瞬であの2体のヴァジユラを……」

「関心するな！アレは敵かも知れないのだぞ……！！」

柏木の感嘆の言葉に伊隅は激をとばし部隊には再び辺りには緊張感ぎ生まれ、その黒い龍の様な怪物と相對していると黒い龍が突如発光し全員が咄嗟に腕で目を庇い光を遮るがその眩い光には目を瞑らずにはいられなかったがその光が収まってから暫くして皆が目を開くと其処には自分達が探していた人物……黒逸戒が軍服の端々に埃や焦げた後を付けた姿で立っていた……それだけならば良かった……

#### 第四拾陸話（後書き）

「久々の投稿だがやりきったぜ！」

『チート化が更に進んだな　しかし、バルバトスとの戦闘のくだりが途中で終わっていたが何故だ？』

「それは次回の回想で使用するからさ」

『……そうか。だが、敵を増やし過ぎて完結出来なくなってはいないか？』

「そこら辺は大丈夫。荒神の登場は今回と次回だけで終わりだし、バルバトスも咬ませ犬程度で終わるからかな？」

『ゲームじゃ最高ランクでやると鬼畜だからチヨイ役程度の出演か？』

「まあ、後は…時間止めてハメをやらないと最高ランクはキツすぎる！リメイクだと最低ランクでスタートした瞬間一撃必殺喰らって即終了だったから余計に…ね　まあ、levelが高ければそんなに苦労はしないけどexダンジョンに入りたての場合だとキツすぎるよ」

『弱い奴には用はないってか?』

「多分ね 原作でも相当な戦闘狂バトルジャンキーだったけど最後は自分勝手に逝ったがキャラや声の人は気に入ってるよ?」

『主にボスキャラメインの方だからか?』

「声の音質と言つか発音の仕方が気に入ってるよ?」

『某有名ジャーナリストの番組のナレーション役をやる位の人だからか?』

「あれには吃驚したけど今じゃ録画して見る位だからね?」

『まあ、この話はこれ位にしておこうか?』

「次回は、第四拾七話で……もしかしたら吸血鬼姉妹が飛び入り参加するかもよ?」

『おい?! 姉妹ってまさか!?!』

「それではまた次回に会いましょう！」

『俺の質問に答えろー！ー！ー！ー！ー！』

## 第四拾七話（前書き）

今回の話では新たに知っている人は知っているあの2人のキャラが乱入します！かなり世界観が違う2人ですがこの後のお話に御期待下さい。



## 第四拾七話

ラクス達がヴァジュラに遭遇する少し前……

「ブルアアアアアア！！！！！」

「ウオオオオオオオオ！！！！！！」

戒とバルバトスは未だに決着が着かずに炎剣と斧剣を交えていた。

「貴様との戦いは血肉が騒ぐなあ！」

「俺はそんな物は一切ないわ！さっさと失せろ！！！！」

「そう言わずに俺の渴きを癒やすこの戦いに付き合っただけで貰うぜえ！！」「ジエノサイドブレイバー」アアアア！！！！！！」

「チイツ！？能力選択！」「アクセラレータ一方通行」、リフレクト「反射」オオオ！！！！！！」

バルバトスが手元にある斧剣を起点にして赤黒い光の奔流を戒目掛

けて放たれるが戒は一方通行の能力であるベクトル変換でバルバトス自身へとその攻撃を跳ね返した。

「又オオオオオ!!!」

バルバトスが自身の放った攻撃が返って来た事に驚き、斧剣で防いでいる間に足下の力を操作して弾丸の様な速度でバルバトスの後ろへ移動した瞬間に戒はその龍の巨体からなる手でバルバトスを捕らえる事に成功した。

「この様な事まで出来るとは中々楽しめたぞ? まあ、俺としてはもう少しこの心躍る戦いに興じたかったがなあ?」

『殺す前に聞く……貴様を送り込んだ奴は誰だ?』

「この俺がそれに答えると?」

『だろうな……。まあ、大体の予想はしてはいたが……』

「クククツ! それよりも俺の相手をしてこれ以上の時間を費やして良いのか?」

『どう言う意味だ?』

「貴様は気付かないのか？貴様の仲間がこの荒神が闊歩する地に来た事に……既にヴァジユラが2体其方に……」

バルバトスはそれ以上喋る事は出来なかった。それは戒によってバルバトスが力の限りに握り潰された為である。その際にバルバトスが戒を嘲笑うかの様な顔をしているのを戒は見逃さなかった

「クソツ！いたい誰がこんな場所に来ているって言うんだ！考えても詮無き事……アレか?!」

戒はバルバトスを握り潰した直後に背中に3対の翼を顕現させると空へと飛翔して上空から視界と感知能力をフルコトバセンスに使って探査する。そして……

「なっ!?間に合えッ!!!!」

2体いるヴァジユラの内1体が水月へとその凶器となる豪腕を振るう所へと戒は瞬時に左手に炎を象った剣を顕現させてヴァジユラの攻撃を中断させる為にソレを投擲した。その速度は音速の域を超えて光速の一手手前ではあるがヴァジユラの動きを止めるには十分であった。

(よし、今の内に！)

戒はその瞬間を見逃さずに進行上にいるヴァジュラを踏みつけて着地をする。

『(水月は…無事か。しかし、A分隊が来るとは…しかもラクスマで…)』

戒が分隊を観察していると踏み潰していたヴァジュラが起き上がるうとしていた。

『(往生際が悪いな…。さっさと逃げ！！！)』

戒は腕を振り上げて足下のヴァジュラの背に向けて思い切り拳を地面が陥没する程の力で叩き込みヴァジュラは鮮血を撒き散らして絶命する。

『(もう1体！！！)』

漸く視界が回復したもう1体のヴァジュラは仲間を殺した戒を睨み付け、雷球を放とうとしていたが戒の反応が早かった。

『「地獄の炎」<sup>ヘル・フレイム</sup>！！！！』

地面に拳を打ち付けると呪文を詠唱せずに地獄から喚び出した獄炎の柱がヴァジユラを呑み込み、焼殺した。

『（さて、此処に存在した荒神はこれで終わり…か。俺が荒神としての特異点として存在し抑止力となればこれ以上出現する事は無い筈……）』

戒は焼き殺したヴァジユラを見つめながら意識を内に沈めていると後ろの方から視線を感じて意識を内から外へと浮上させて視線を感じる方へと向けると疑心を持った表情で警戒して此方を伺うA分隊の面々がいた事とヴァジユラと戦っている間に忘れていた事に戒は自分自身に呆れを感じずにはいられなかった。

『（何故だ……って、まだハンニバル龍神種になったままだったな…… さつさと元に戻るとするか。）』

戒は未だに自身が荒神化した状態である事に気付いて人間へと戻るヒューマノイドのであった。勿論、変化の際には光を放ち過程を見せない様にして

……

「黒…逸…少将？その…左腕…は？」

誰かがそんな事を言い、戒は自身の左腕を見ると機械義手として擬態させていた筈が荒神化した為なのか漆黒の羽を生やし同色の痛々しい腕が露わになっていた。

『（拙いな…、荒神化した反動で擬態が解除されてしまっていたか？どうする？）これは……「先程の敵に関係がありますかね？」……ラクス？』

「戒様がお二人を逃がされた後に何かしらの経緯で左腕が変異したのでしょうか？」

『いやに具体的だな（ラクスがフォローしてくれて助かったな…。変な言い訳を言うよりも無難な答えで安心したな）……まあ、経緯は話せないと言うよりも信じられないがな？』

ラクスの唐突に話した事に部隊の面々は戒のその異様な左腕に視線を移し、戒は内心ではラクスのフォローに感謝をして外では冷や汗を流しながら理由を述べた。

「その腕は…その……大丈夫なのですか？」

『以前と比べるとやはり肉体的に繋がっている此方の腕が感触は良好だな…。』

「では先程の姿は……」  
『それについては口外されては困るので余り話したくは無い……が、わざわざ助けに来てくれた訳だしな？』……  
では？」

『先程の姿は奴らと同じ存在だがどうやら俺は規格外らしくてな……？あの様な姿になっていた訳だ。勿論あの姿で戦う事も出来るし変異しなくとも生身でBETA達と戦う事だって出来る。腕の方は見苦しいのであれば外見を普通の腕に見せる事も出来るし、機械義手に戻す事も可能だ。（体の内部の変貌は伏せておくのが正解……か。荒神としての本能の事や特異点は説明のしようが無いからな……。）』

「何らかの障害は無いのですか？」

『今の所は異常は無い……な。とりあえず今は此処から離れた方が良いかも知れんな？BETAが攻めて来たら堪らないから……な？』

戒のその言葉に全員は今更ながらに気付いた。今の米国の現状でBETAが攻め込んで来たら戦術機乃至はMSではなく生身で来ている自分達では成す術が無い事に戒の言葉が無ければ気付かない程に彼女達は黒逸戒と言う人物がどれだけの影響を与えているのかが伺える……

「では合流地点に向かいます。合流地点はこの少し先の大広場にあります。急ぎましょう！」

ラクスの言葉と先導の下に戒と伊隅達は辺りを警戒しながら足を進め、大広場跡地へと向かった。

『此処…か？』

「はい。此処で迎えが来る手筈になっていますわ。」

『……そうか。』

「黒逸少将は我々が来るまでの三日間をどの様にしてお過ごしだったのですか？」

『そんなに畏まらなくても良いのだがな…？まあ、大体が荒神の駆除に国の状態把握に努めて生存者がいないかの調査をしていたよ…。その最中にこの腕になってしまったがな？』

伊隅の質問に戒は最初は苦笑をしながらどんな事をしていたのかを話した。最後の方は自嘲を含んではいたが……



『…………来たか。』

「え？まだ見えませんか？」

『奴らと一緒に存在となった今では常人の何百倍もの身体能力を手に入れた訳だ……勿論、視力や聴力に加えて第六感すら強化されているよ。文字通り化け物に……怪物になったと言う訳だな……？』

戒のその発言にラクスを含めた全員が驚愕を露わにした……

「戒！何故その様に平然としてそんな事を言うのですか……！！」

『…………ラクス』

「貴方は化け物でも怪物でもない……戒は戒なのです！だからそんなに自分自身を下卑に見るのは止めて下さい！そんな貴方を私は……見たくありません！」

「そうです！黒逸少将は何時も毅然として強く……私達の目標であり希望なのです！」

「速瀬中尉はそんな黒逸少将が好きなんです！！！」

「なっ！？茜！それは言うなって言っただろうが！！！」

ラクスに続く様に茜が爆弾発言をして早瀬が赤面しながら茜に詰め寄るが後の祭りであった。

「へえ〜？速瀬がねえ？」

「宗像！？」

「やっぱりでしたか…。」

「柏木も！？」

「柏木は気付いてたのですか？」

「そう言う風間はどうなの？」

「私は最初から知ってたわよ？」

「私の秘密は秘密ですらなかったのか…orz」

上から宗像、柏木に風間と言った面々もそれに乗っかる形で速瀬弄りを始めて早瀬はがっくりとうなだれていた。

「今更ですよ？貴女は隠し事が出来ませんからね？（直ぐに態度に出て解り易いのが私としては面白いのですけどね？）」

『皆、済まない……俺は体が変異した事でマイナスに考えていたみたいだな……。こんな俺でも皆の希望になれるのだから……。早瀬の事はまだ解らないが……』

「良かったじゃないですか！速瀬中尉？」

「良くない！！！」

「中佐！間もなく此方に迎えが到着する時間です。」

「解りました。戒、貴方がいなければこの世界の未来は変わらぬ事を忘れないで……。俺だけではどうにもならない……ラクスや悠陽に夕呼に少年や他の皆がいなければこの世界の未来は変えられないぞ？」……そうですわね　なら皆さんで頑張らないとですね？」

ラクスがそう言った途端に地面が揺れた。

「な、なんですか！？」

「今のは！？」

そんな事を言っている間に空から空気を切り裂く様な音と共にラクス達を運んだ輸送機が地面へと着陸した。

『ラクス達は先に乗っている！』少将はどうするのですか！？』…  
俺は先程の揺れで倒壊したビルを調べてから戻る！』

伊隅の言葉に戒はそう答えると即座に走りトップスピードを出して  
ビルが倒壊した場所に急行する。

…同時刻の高層ビル跡地…

「フラン！走りなさい！アイツ等に追い付かれるわよ！（まったく、あのスキマ妖怪にやられたわね！まさか拉致された上に見知らぬ世界に落とされるなんて事になるなんて…）」

「レミリアお姉様！さっきの奴は何なんですか！？」

「それは私が知りたいわよ！？（それに信じがたい事に私やフランの能力ちからが使えないし翼も出せないなんてどういう事なのよ！？）」  
「グアアアアアアアアア！！！！」もう追い付いてきたの！？フラン  
「こっちよ！」

ビルの倒壊した場所では淡い藍色の髪に白を基調としたフリルの付いた服を着た小学生位の女の子…レミリアと呼ばれた子と金髪の此方は赤を基調としたフリルの付いた服を着た女の子…此方の子はフランと呼ばれていた子は後ろから迫る年寄りの様な顔をしたヴァジラ種ジラ種の上位種…ディアウス・ビターに追い掛けられていた。

「もう何だつて言うのよ!?!」  
レミリアが叫んだ瞬間に追い掛けて来たディアウス・ビターは突如として爆炎に包まれた。

「はっ?」

状況が飲み込めないレミリアはそんな間抜けな声をあげていた。-

- - side 戒 - - -

俺はラクス達の所から最初は地を走っていたが時間が無い為にビル伝いに跳んで先程から聞こえる豪音の下へと急いだ。

『アレか!..... ってまだいたのか しかも老猫か...。』

俺が敵を確認しながら周辺のモノを確認していると老猫..... ディアウス・ビターの前を2人の少女達が懸命に走って逃げているのを確認する。

『生存者か!』

見つけるや否や走る速度を上げながら少女達を助ける為に魔法の詠唱に入る...。

『契約に従い、我に従え、冥府の王。其が放つは、全てを捕らえ包む死の炎、其を灰燼と化すは冥界の劫火。愚者ゆ、その魂の全てを

燃え散らせ。「冥王縛焰葬」！！！！」

そして、魔界の最奥：冥府に住まう王の力を借りた炎はディアウスを中心とした半径100メートル程の場所を呑み込む。勿論本来の姿は半径100キロ圏内を焼き尽くす程の広範囲殲滅呪文な為、少女達：生存者がいる為に威力を抑えたのである。そして、ディアウスが冥府の劫火に包まれて瞬間に戒は2人の前に降り立つ……

『大丈夫…か…って君達は！？』

俺は着地してから2人の無事を確認する為に振り向いた瞬間に何度目かの衝撃を覚えた。

…戒end…

2人の前に降り立った戒にレミリアはフランを自身の後ろにやりつつ警戒の色を露わにして戒を睨み付けていた。

「……貴方は何者かしら？急に上から降ってきて……アレについて知っている事があれば話しなさい。」

『済まないが今は説明をしている暇がない。急いでこの場を離れる事の方が先決だ……。』

「何故？さっきの奴は多分だけど貴方が起こしたあの炎にやられたのだから此処で説明した所で問題は無い筈よ？」

『確かに俺がやった物だが単なる足止め兼時間稼ぎにしかならない

し、俺の仕事は生存者を連れ帰る事にあるからなるべく早くにこの場を離れ、仲間と合流しなければならぬ…。」

「仲間？貴方の他に誰かいるのかしら？」

『部隊の者達がこの先に高速輸送艇に乗って待っている。』

「それを信用しろと？そもそも、最初に自己紹介も何もしない男を？」

『それはもつともな意見だな…。俺の名は戒、黒逸戒だ。名字でも名前でも好きな風呼んでくれ…。』

「そう、私はレミリア、レミリア・スカーレットよ。でっ、この子が…「フランドール・スカーレットです！よろしくお願いします、戒お兄様」…はい？」

「フラン、なにを言ってるのかしら？」

「お兄様はお姉様と同じ匂いがするからです！」

『なんの匂いだよ』

「血の匂い？」

「フラン!？」

『……………血…つまり吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>…か？』

「なっ!？貴方…もなの？」

『レミア達とは別物だがな？こんな曇り空の下でなく太陽の下を歩き回れるし弱点と言う物が余りと言うか俺に限るが弱点が存在しない真祖の吸血鬼<sup>ハイドライト・ウォーカー</sup>だ。種族で言えば仲間乃至は親<sup>おや</sup>兄弟姉妹(きょうだい)にあたる事になるな…。』

「私達とは違うのね…。」

『俺の血を飲めばエミア達も多少の違いはあれど真祖に近い存在になれる筈だが神気に耐えられるかが問題だな…。』

「何故、吸血鬼である貴方が神気を帯びているのかしら？」

『……………正確には吸血鬼に加えて荒神に神子としての能力…そして不老不死の肉体に身体能力は常人を優に超える…もし他人にバレれば怪物<sup>モンスター</sup>と言われるな…。』

「貴方は……………」

『兎に角!早くこの場を…「グガアアアアアアアアアア!……!」  
…ちいっ!予想よりも早すぎるぞ……!』

「えっ!？」



「お兄様!？」

『2人はその場を動くなよ?』

戒は直ぐ様戒はディアウスの前に2人を守る様にして前に出る。そして……

「グガアアアアアアアアアア!!!」

『喚くな!鬱陶しいんだよ貴様はあー!!!』

「ゴアアアアアアアア!？」

『来れ!煉獄白鎌シャドウ!!!』

咆哮して突進してくるディアウスに対して戒はただ拳で殴るだけだったがその尋常ではない身体能力を使いディアウスを吹き飛ばした。そして、ディアウスが体制を整える間の隙に背に手をやりある言葉を叫びながら手を引くと眩い光と共にその手には身の丈の二倍はある純白の刃を持った鎌……死神が持つ死鎌デスサイスとは真逆の物が握られていた。

『さあ、殺し合おうか…老獅子よ!殺される覚悟は十分か!!!』

戒は鎌を水平に構えて未だに体制を整えられていないディアウスへと駆けて鎌での一閃で前脚の一本を斬り飛ばした。その際には血の軌跡を伴った脚が弧の放物線を描きながらディアウスの後ろへと飛んでいく。



戒は鎌を持つ手とは逆の手を地に着けてそう唱えるとディアウスの周囲に影が円を描く様にして出現してゆっくりとディアウスの体を呑み込んでいく…。そしてその体が完全に影の中に沈むとそれは円の中心部に向かって収束し消える。

『これで大丈夫だな…。後は彼女達の処遇…か。』

戒はディアウスが存在した場から空に広がる暗雲を見詰め考えていた…。

…sideレミア…

私は今信じられない光景を目にしていた。自分と同じ様で違う吸血鬼と言ったあの男が私達を追い回していた怪物を私達とは違う能力ちからで自分達とは何十倍もの体格差があるヤツを圧倒的なまでの力を見せ付けて倒してしまっただけだから……

「（彼は何者なのかしら？）フラン、大丈夫？」

「はい、お姉様。」

「フランはあの人を兄としたいの？」

「お姉様は反対ですか？私はある所よりもお兄様といると胸の中

がこう…暖かくなるんです……会って間も無いですけど…。」

「確かに見ている限りじゃアイツ等とは違うのは解りそうだけど…

…」

解らない…。あの男がアイツ等と同じ様な事をしないか……私達が持つ能力ちからを知ればあの目で見られないか……私達はその能力故に疎まれ暴力を振るったあの両親とも呼びたくも無いアイツ等と面影が重なってしまうから……私は未だにあの時の事を夢に見てしまう位にトラウマとなっていてから……尚更に不安で怖いのかも知れない。見知らぬ土地で助けられたあの男…戒にあんな目で見られないか…

…

『大丈夫だったか？』

「大丈夫です！お兄様」

『っと、そのお兄様って俺は君の兄では無いのだが それにフランにはエミリアと言うお姉さんがいるだろし、両親もいる……「あんな奴等親じゃ無い！！」……どう言う事だ？』

「貴方には関係無い事…よ。これは私達の…問題だから…。」

私がそんな事を言うと戒はバツの悪い顔をした後に目を瞑り何かを

考えている様な仕草の後に私にとって予想にも無いを言い私は……

……レミリアend……

……side戒……

「貴方には関係無い事……よ。これは私達の……問題だから……」

レミリアやフランの言葉から察すると先ずマトモな親では無いのだ  
ろうな……。拙い事を思い出させてしまったな……。彼女達のトラウマ  
になっている事……か。レミリアのあの言葉を言う時の孤独感を感じ  
させる表情を俺は笑顔に変えてやりたい……。並大抵の事では無いが  
……生前の俺からは考えられない事だがな……。これもあの神の御陰  
なんだろうな……。癩だがこれに関しては感謝はしないとだな……。後は  
あの言葉を言うだけだな……。

『レミリア、それにフラン。俺と一緒に来ないか？生存者を連れ帰  
る事とは別として家族としてだ……』

「……貴方は何を言っているのか解っているのかしら？こんな素性  
も何も解らないヒトを家族にする？ふざけないで！！」レミリア  
の言葉ももつともだが俺だってふざけてこんな事は絶対に言わない  
し、彼女達が元の世界に戻るまでの間だけでも孤独を味合わない様  
にしたい一心だから言う事だ……。

『何も解ってない？名前だけが解っていればそれで十分だろ？話せ  
ない事情があるならそれでも言いじゃないか……俺の所には訳ありな  
奴等がいるし今更だ……』

「私達はもしかしたら貴方に害を成す存在かも知れないわよ？」

『それは仮定の話だろ？実際にレミリア達がそんな事をするとは俺は思わない…。国に帰ったらエミリア達を俺の養子として申請する手配は直ぐに出来るが…。どうする？エミリア達の考えを尊重したいと俺は思うから…。な？』

「貴方は甘いよね…。」

『例え甘ちゃんや偽善者と言われようともこの考えは変えるつもりは無いがな…？』

「ふふつ 良いわ。貴方の提案を受けるわ。これからよろしく頼むわね？戒兄様」

俺が苦笑しながらそう言うとレミリアは可笑しそうに笑い俺の提案に承諾の意を伝えてくれた。あんな表情も出来るのだな…。先程の周りを拒絶する様な雰囲気を多少なりとも和らげている事に俺は安堵した…。

…戒 e n d …

「で、此処から何処に向かうのかしら？」

『此処から南西に進んだ所に広場があるんだが其処に高速艇がある…。それに乗って此処から離脱する事になるが…。日の光は大丈夫か？』

「少し動き辛い位で多少は大丈夫な筈よ？でも、フランにはかなり

キツいかも知れないわ…。」

『（多少なりとも改善策を作る幕だな…。）取り敢えずは向かうとするか。歩けるか？無理そうならば抱えて行くが……』

戒がそう言うとレミリアはフランを見て少し考えてから口を開いた。

「お願いするわ。」

『解った。揺れるとは思うが多少は我慢してくれよ？』

レミリアの言葉に戒は了承すると右にフランを…左にはレミリアを抱き抱えると部隊を待たせている場所に向かって再び跳び、今度は無事に合流する事でアメリカを後にするのであった。また、合流した時にフランのお兄様発言に水月や茜にみちるが過敏な反応を見せたのは割愛する。

#### 第四拾七話（後書き）

誤字脱字やアドバイスにリクエストなどがありましたら御一報下さ  
い。



## 第四拾八話

日本に戻ってからの今日までの日々は目まぐるしい事の一言に尽きた。先ずは戻って来てからの悠陽や紅蓮さんに斑鳩さん等の帝国の重鎮に情内省の鎧衣さんを交えて向こうの事を自身の事とバルバトスを除いた事の全てを話し、その後についての話で第5計画が事実上脱出用のシャトルのみとなった事で米国への対応を見直す事が決まり変わりの計画として俺の進めているMSやPTの開発がBE-TA及びハイブ攻略の重点に置かれる事となり、横浜に戻った俺は今、ゲシュペンスト等の一般機の強化改修案の計画作成に昼夜を問わず寝ずに取り掛かっている。

・・・黒逸戒 執務室・・・

『ゲシュペンストはその汎用性の高さの割りに火力不足が否めないな。改良点としては携行専用火器の増設に機動力向上の為にブースター増設に陸地のみならず航空可能にする為にバックパックにウイングユニットを換装……それに伴い機体側の能力向上にAIの書き換え……そして規格の大型化に近接主体の人間には獅子王刀か斬艦刀のどちらかを専用装備にするか……』

戒は自室で既に日が登ったにも関わらず、PCに向き合って黙々と改修案をデータとして打ち込み続けていた。

『そして、中衛若しくは後衛の人間には両肩にビームカノン二門に両腰に両肩や腿に多目的弾頭ミサイルを装備し背部には選択した携行火器を……それに加えて装甲の増加に伴う機動力低下のカバーに脚部の後ろやリアスカート等に増設用としてフレキシブルブー

スターで……後は試験運用若しくはシュミレーターでデータ採集をしないと実用性が見いだせないな……。」

「お兄様？なにしてるの？」

戒が丁度改修案の目途を着けた所へ寝室のドアが開きフランが元気良く戒に飛び付きながら挨拶をして来る。

『んっ？フラン起きたのか？レミイはどうした？』

「お姉様ならまだ寝足りないみたいでまだ眠ってますよ？」

『まあ、元々が吸血鬼だから仕方ないか……ん？フランは眠く無いのか？』

「私は其処まで眠くないし夜行性でも無いから大丈夫」

『そうか仕方ない。レミイを起こして朝食を済ませにPXに行くか？』

「わーい」

『それじゃあ、レミイを起こし……行ってくる』大丈夫か？』

戒のその呟きは現実の物となり寝室からは盛大な破碎音と共に誰かの悲鳴が聞こえてきた……

．．．PX（食堂）．．．

「うゝゝ？頭が痛いゝ？」

「当たり前よ！あんな起こされ方した身になってみなさい！」

『ハハハツ　災難だったな、レミイ？』

「もう！そう思うなら兄様が起こしてくれば良いじゃない！？」

そうレミリアが抗議の声を上げる戒の膝の上にちゃっかり座っているフランの頭には見事なまでのタンコブが湯気を上げて出来ていた。

『いや、その前にフランが突撃してしまったからな？』

「黒逸少将、お早う御座います。今食事ですか？」

『ん…？水月か、お早う。まあな？所で今日は涼宮とは一緒では無いのだな？』

「何時も一緒と言う訳では無いので……」  
そう話す所へ入って来て話すのは丁度PXに入って来た速瀬水月中尉である。

『そうか…。水月も一緒に食事でもどうだ？横にはレミリアがいる

が……。』

「はい、御一緒させて頂きます。」

「って言うかフランは何時まで兄様の膝に座っている積もり？」

「お姉様もお兄様の膝の上に座りたいの？」

「そつ、そんな訳無いでしょ！？／／／／／／／／／／」

「……お姉様お顔を真つ赤にしても説得力が無いですよ？」

「うっ、五月蠅いわね！／／／／／／／／／／」

それから暫くして……

「そう言えば今日の事は黒逸少将は御存知ですか？」

『ん、今日？今日は確か……王姫訓練生の親父さんが来る日だったか……。』

「はい。その事について香月副司令が黒逸少将に話があるそうなのです。」

『……と言う事は水月は仕事で俺を探していたと言う訳か？解った。直ぐに行く伝えてくれ。』

「はっ、了解しました！それでは失礼します。」

そして水月がPXを出るのを見送った戒は背中に乗ったフランと後ろから視線だけで殺せる様な殺意が籠もった目で睨むレミアアを見て軽く眩暈と頭を抱えたい衝動を覚える。

・・・香月夕呼執務室・・・

『失礼する。。。』

「失礼（しまゝす）するわ。」

「来たわね…って何故その娘達も一緒なのよ」

『今の時間帯は頼める奴等が居ないのでな。。。』

「クラインはどうしたのよ？」

『彼女はつい先日頃に俺が屋敷に戻って貰ったんだ。……ある資料を持ってな。』

「ある…資料？」

『まあ、出来てからの御楽しみとしてくれ。。。』

「そつ…なら待つ事にするわ。」

『それでだいたい俺を呼んだ用件はなんだ？俺を呼ぶ程の事なら何か急ぎの事…若しくは頼んだ事が完了した…か？』

戒の言葉に夕呼は自身の座る椅子を少し軋ませて意識を切り替える。

「その両方よ…。」

『……………どう言う事だ？』

「先日の事だけど軍の馬鹿なお偉方が佐渡島の奪回の予定の繰り上げを強行したのよ。」

『なんだと！？まだハイブ攻略の為の軍備が全体の6割強しか準備が出来ていないのか！？』

「向こうも必死なんでしょ？お姫様の発言力に加えてアンタがお姫様の剣と公の場で宣言した御陰で自分達の思い通りに動かなくなつて来ているのだから自分達で手柄を立てて自分達の方が優れていると誇示したいようよ？考えが馬鹿を軽く通り越していて呆れる事すら出来ないわね…。」

『たかが権力欲しさに……………考えが浅はかでしか無い！これでは貴重な人材を無駄死にさせるだけではないか！愚行の何物でもない！！』

「わたしに怒られてもどうしようも無いでしょ？……………で、アンタはどう動くの？」

「……計画の繰り上げは想定外だが戦力は十全……後は悠陽の言葉だけで動く事は出来る。今の戦力なら国と言わず世界と戦う事だつて出来る。ヴァルキリーズ小隊用にゲシュペンストやヒュッケバインのカスタム機や105ダガーにザクといった機体は既にハンガーに置いてある。後は全員が尉官を手に入れば世界最強の部隊の出来上がりだ。それに加えて戦艦も2隻完成しているのでな……。言い方は悪いが丁度良かったと言えるな……?」

「そう、ならわたしはそのどちらかの戦艦に乗せて貰おうかしら?」

「勿論だ。それで?他の用件はなんだ?」

「あんたの言っていた小隊……善行善則だったかしら?ソイツの率いている部隊の引き抜きに成功した事と珠瀬事務次官の相手をして貰いたいのよ。」

「それは壬姫訓練生のいるB分隊で問題無かるう?」

「そうは言つてられないのよね……?所詮は訓練生、少将のアンタがソイツ等の引率……と言うよりも暴走しない様にして貰いたい訳……:…:まりも一人じゃ誰かさんの所為で人数の増えたB分隊の制御は難しいかもしれないからね……?」

「それを言われると耳が痛いな 解った、珠瀬さんには外交関連で世話になつていたしな?…:それに久しぶりに会うのも良いかも知れ

「ないな？」

「知り合いなら尚更行って貰わないとね……？」

『解った。レミィとフランはどうする？一緒に来るか？来るなら騒がしくするなよ？』

「はい」

「兄様に迷惑は掛けない様に気をつけるわ……。」

『よし……それじゃ、失礼する……。』

「ええ、気をつけてと言うのも変だけどね……。」

そして夕呼の執務室を出て執務室は再び静けさだけが支配する……。

「さて、わたしはわたしの出来る限りの事をやってアイツのバックアップをしますか……。」

夕呼は自身の前にあるPCを起動させるとなにやら作業を始める。

……横浜基地玄関前……

『おっ？全員揃っているな？』

「」「」「黒逸（戒）少将！？」」「」



「かつ、戒少将！？何故此処に！？」

『何故って俺は此処に任官しているからいるに決まっているだろ？』

「阿呆なのかしらこの女は…？」

『レミア〜』

レミアがぼそりと呟いた言葉に戒は冷や汗を掻いてレミアの名を呼ぶがレミアの言葉にまりもは眉を引き吊らせてイイ笑顔で此方を見ていた。

「誰が阿呆…ってそう言う事では無く…『来たみたいだぞ？』…はっ！全員敬礼！！！」

「出迎えご苦労…。」

「はっ！此度の基地内の案内はB分隊が勤めさせて頂きます！」

「楽しみにさせて貰うよ。」

そして珠瀬事務次官が分隊の面々を一通り見た後にある人物を見つけるとその厳格な表情が一気に崩れ破顔した顔になりその人物を抱き締めた。

「た〜ま〜 やっぱりお前は可愛いな〜」

「おっ、お父さん！？皆が見てるよ〜！？（戒さんの前で恥ずかしいよ〜〜？）」「

『相変わらずの溺愛振りですね、珠瀬さん。』

「んっ？おおっ！！戒君じゃないか久しぶりだな？君も横浜基地にいたのかね！」

『まあ、任務の事もあって東京から此方に赴任していましたがからね？……で何故そんな嬉しそうな顔をしているのですか？』

「なに、たまの婿が君で良かったと思っただけな」

その言葉を聞いた人間の時間ときが凍った……。

「戒少将……ドウイウコトデスカ？」

「バイニヨツテハヨウシャシマセンヨ？」

『チヨット待て！？俺は何も知らな……』

「ナニ、スグニ……ラクニスムカラマカセロ。」

『何を任せ……って待て流石に人体はその方向には……アツ……  
……！？』

珠瀬と白銀を除く分隊の面々に更にもまでもが有無を言わせぬ  
雰囲気を放ちそれに呑まれた戒は何処かへと連れられてかなり離れ  
た場所からだと言うのに戒の悲鳴は基地内に響き渡る勢いがあり、  
人外の戒にダメージを与える彼女達には恐怖を覚える……。そして

……

『痛ッッッ！アイツ等俺だったから良かったもの一般人なら死んでるぞ』

戒はまりも達から解放された後、自室のソファに倒れこんでいた…。

「お兄様大丈夫ですか？」

「あの牝豚共… 兄様にしたこの仕打ちどう返してあげようかしら？」

『レミイ、洒落にならない事になるから止める』

「兄様に害を与える者達は敵の何物でもないわ…。」

『ははは そんなに邪険にするなよな？アイツ等はああ見えて優しい奴等ばかりなんだからな？多少の事は多目に見てやる位はしてやらないとだろ？』

「兄様は甘いわね？そんな考え方だと上の者として下の者達に示し  
がつかないわよ？」

『レミイは手厳しいな…俺もアイツ等が度が過ぎる行動をすれば流石に言うが大抵の事では言わないさ…』

戒はソファから体を起こし傍にいるレミリアの頭を優しく撫でて更に言葉を続ける。

『それに俺が言わなくとも鬼軍曹のまりもがアイツ等を指導するからな？俺の出る幕は無いからな…』

「あの牝豚が？」

『レミイ、言葉が汚いぞ？そんな言葉使いをしていくのなら…怒るぞ…』

「ごめんなさい気をつけるわ…」

『ほんとだぞ？この後はどうする？俺はデータを持ってシュミレーター室に行くがレミリア達はどうするんだ？』

「兄様の勇姿を見てみたいわね…」

「お姉様が行くなら私も行く〜」

『決まり…だな？』

そして戒とレミリア達は自室を出てシュミレーター室へと向かった。その時に再び事務次官を案内していたB分隊の面々に遭遇し流れで

全員を伴ってシュミレーター室へと向かうのであった…。戒の設計  
改修をしたゲシュペンストを見て皆は何を思い何を感じるのか……  
それはまだ解らない。

## 第四拾八話（後書き）

御意見や御感想をお待ちしております。

## 第四拾仇話

……シユミレーター内部……

『さて、今から始めるのは仮想空間内での実証実験だが今から使う機体は今ある機体の強化改修型と言っていていい……。まずは先行量産型としてゲシユペンストMk-？だが今回の機体は次世代機のヒュッケバインタイプRVと言つて歩兵然とした運用の他に航空戦力としても使用出来る様に背部にテスラ・ドライブを積み込んだウイングユニットを装備し、可能となっている。機体性能も上がっている事と武器も一部だが変更してあるからモニターで見てください……。』

戒の言葉に従つてこの場に集まつたB分隊の面々と珠瀬事務次官はメインモニターへと目を移す。其処には真紅の機体色をし、細部は異なるがやはり目を向けてしまうのが背中から見える翼がゲシユペンストとして皆が持つイメージから離れている物と認識させられた。そして仮想空間機にて戒が乗り込んだヒュッケバインは無数の<sup>ドローン</sup>的を前にして腕を前で組み仁王立ちで立っていた。

「準備は……良いわね？」

『……いつでも。』

「解つたわ。……仮想戦闘……状況開始！」

何時の間にか付いて来ていた夕呼の言葉を皮切りに戒はヒュッケバインを駆り高速で動き回る的真ん中を突っ切りながら腰に装備し

た獅子王刀を抜刀し一体を斬りその勢いを流れに乗せたまま逆袈裟、  
尻ぎに刺突等を使って5体の<sup>ドロ</sup>的を撃破をし駆けた勢いを殺さずに地  
を踏み抜き跳躍をした。

『武器換装…：ビームライフル！狙い撃つ！』

戒は獅子王刀を持つ右手とは逆の左手に蜃気楼の様にして出現し、  
中空で姿勢制御をし、銃口から放たれるのは桃色の光条…：その光は  
的を次々と的確に撃ち落とした。

『ビームライフルの換装解除…：次にチェーンライフルに換装！』

そして次に出したライフルとしてはやや口径がデカイライフルを左  
手に出した瞬間、浮遊する目的掛けてマズルフラッシュを閃かせて  
撃つ、撃ちまくった。

『テスラ・ドライブ始動！チェーンライフルの換装を解除、続いて  
メガバスターキャノンへ換装。』

戒はモニターに映る出力を調整し照準を固まって浮遊する複数体の  
的に合わせる…。

『出力調整…：仰角…：誤差修正、ターゲットロック！メガバスターキ  
ャノン…：発射！』

戒はトリガーを絞り、腰溜めに構えた黒い巨大な砲身から発射され  
た巨大な朱色の光条は固まっていた的を纏めて消し飛ばし、勢いは



その後も衰えずに射線上にある他のに仮想空間内の建造物をも融解させながら遙か彼方へと消えていった。

『武装はこんな物…か？夕呼博士、そろそろ高速機動に入るぞ？』

「……………」

『夕呼博士？夕呼、意識はしっかりしているか？』

「えっ？ええ、大丈夫よ。黒逸少将はそのまま動作を続けてくれて良いわよ。」

『了解した…。(先程の夕呼は何処か変だったが何かあったか？)自身の行った強化改修型の実証実験で驚かせた事に気付かない鈍感な馬鹿WWW』

その後は機体の姿勢制御や機動の巡航や平面等フラットの機動を試した後に戒は上がった。

……シミュレーター室内……

「戒君！やはり君は凄いな あのような機体を見せてくれるとはね」

『まだ、設計段階ですけれど乗り手を選ばないで大隊規模のBET A位なら単機で相手取る事も出来る機体となっていますね？』

「しかし、モニターから見えていたが武器が出たり消えたりしていたがどういう仕組みなんだい？」

『それはヴェルフエゴールの空間制御の技術の一部を携行武器等に転用してデータを起こして選択した火器を亜空間転送により空間と空間を繋ぐ事により手持ちの武器と空間倉庫の武器をその場で交換出来、武装制限の制約を取り除いたに過ぎませんよ？』

「頭の固い儂にはちと解らんな 衛士でも無いしの」

『解り易く言うつと遠く離れた格納庫から距離感を0にして武器の装備を交換出来ると言う事ですよ？』

「アンタねえ…！しれつと言っけどそれがどれだけ凄い事だか解つた上で言ってるんでしょね！？」

戒は珠瀬事務次官に説明していると間に夕呼が詰め寄り食って掛かる勢いで戒に自分のした事の重大さを叫んでくる。

『それは解っている…が、ソレを公表等はしないから安心しろ。したら各国に余計な混乱や無駄な騒ぎが起こるからな……そんな物は御免だからな……』

「解っているなら良いわよ…。」

「ふ…む、香月副司令が取り乱すとはな…。やはり君は凄いな！どうだ？ウチのタマと『俺の年齢としを考えて下さい 下手したら犯罪ですよ？』…むう、だがそんな物は愛の前には些細な事だ！」

『勘弁して下さいよ 大体に俺はそういった事は控えているんですからね…？』

「…それは何故なんだい？」

『こんな事を言うのは不謹慎だと言うのは解つてますが俺がもし居なくなつた時に悲しませたくないからに他ならないんですよ。』

「不謹慎すぎだ！君は後の日の本を支えると言う大業があるのだぞ！？」

『それは解つています…が今の情勢では万が一の事は幾つもある事を解つて下さい。それに俺だつて最初はなから死ぬ心算等はしたくはありませんよ？』

「…それならば良いが、くれぐれも気を付けてくれよ？君みたいな若者が老い先短い儂等よりも早く逝くのは耐えられんのでな…。」

『孫の顔を見るまでは死なないんじゃないですか？』

「八八八八八八ッ 確かにその様だな！」

『ではそろそろ戻りましょうか？ 迎いの車が来ている頃ですからね……？ 榊訓練生達はシュミレーターを使ってくれて構わないからな？ 先程の機体データはそのままにしてあるから試乗して具合を確かめて可能であればレポートが何かに纏めてくれると有り難い……。』

「わかりました。」

『それでは玄関前まで送りしますね？』

「ああ、頼む……。」

そして戒は珠瀬事務次官とまりも軍曹とレミア達を交えた5人でシュミレーター室を出ると玄関前までたわいない事を喋りながら送る。

……玄関前……

「今日はとても楽しい視察だったよ。こう毎日が楽しければ国連事務次官としての仕事もやっている物だな？」

『そうですね？そして皆が笑える世界を目指す為にも1日も早くBETAから地球は愚か太陽系から追い出さなければいけないですね？』

「他の者が言えば遠い未来とを感じるが君が言つと希望に満ち溢れた言葉で近い内に実現させてくれると期待できるな？頼んだぞ？若い者が前線で戦っているのに爺は後ろでふんぞり返るしか出来ないが日の本を……世界を頼むよ？」

『任せて下さい。絶対に成し遂げて見せますよ……。』

「うむ、それでは……。神宮寺軍曹、タマの事をよろしく頼むよ？」

「はっ、全力を尽くします！」

「頑張ってくれよ？……出してくれ。」

そして事務次官を見送った後には戒とまりも達の4人だけがその場に残っていた。

『さて、俺は格納庫で最終チェックを済ませて置かないといけないから何かあれば報告をしてくれ。レミイ達はどうする？』

「私達は兄様と一緒に行くわ。」

『そう……か、まりもは皆にあの事を今日か明日のブリーフィングで説明しておいてくれ。それと後で俺の所へ崔亦菲と篁唯依そしてA分隊を寄越してくれ……頼むな？』

「了解しました。」

『それじゃあ行くな…。』

「はい、お気を付けて…。」

そして戒達はまりもに見送られながら戒の使っている格納庫へと向かうのである。

――格納庫内部――

「戒さん、どうかしましたか？此方に来るのはもう少し後かと思っ  
ていたのですが？」

『フェルト、その事なんだが佐渡島ハイブの奪還の時期が早まり1  
2月の上旬に行う事になった……。それに伴って戦艦及びヴァルキ  
リース用に用意している機体の整備と調整は何処まで完了している  
んだ？』

「ミネルバとアークエンジェルは完了して後はPTとMSの最終調  
整のチェックを行うだけとなっています。また、戒さんのヴェルフ  
エゴールはいつでも出撃出来る様に最良の状態に出来ていますね…。  
」

『よし、ならばアイルー達を総動員させて4日で仕上げるぞ！シオ、  
整備士アイルー達の指示はお前に任せるからな？』

「了解したのニヤ！野郎共！気合いを入れるのニヤ！」

「合点だニヤ！！！！」

戒の言葉に整備士アイルー達の隊長であるシオが答え、シオが号令を出せばその場にいたアイルー達は声を揃えて返事をする。元々早かった作業速度を更に上げて作業に取り掛かっていく…。

「さて、俺はヴァイスの強化と今のゲシュペンストの次世代機用としてヒュツケバインタイプRVの最終調整のチェックを始めるかな…？」

アイルー達の声を聞きながら戒はヴァイスの強化を能力でしながらゲシュペンストの次世代機としてヒュツケバインタイプRVの最終調整をする為に行動をするのであった。

## 第四拾仇話（後書き）

「四拾仇話投稿だー！！！！」

『完結までどの位掛かる事やら……』

「最終話のプロットは出来上がっているし、佐渡島攻略に烈士達の反乱に桜花作戦と更にBETAと冥府の神ハデスを交えた最終決戦とまだまだ長い道程になりそうだね…。」

『具体的にはまだまだと言った所か？』

「だね…。新潟上陸するBETAの駆逐も次回かその次辺りで書いて行きたいからね…。？の間には機体の強化や新型を出すかも知れないね？」

『まあ、実際に書いてみないと解らない……と言っ訳か？』

「まっ、そう言う事だね？後は書ききった後には後日談や番外編の様な物を用意する積もりなので楽しみに待っていて下さい」

『リクエストは作者が随時受付中と言うのでどしどし送ってくれ。』

「それでは次回の伍拾話で！」

『それとヒロインの連中から絡みが少ないとの苦情が来ているが…』

…』



## ダッ 逃走

『ジャッジメント天罰……作者の書く駄文で稚拙な作品ですがまた見て下さい。』

「グフツ！いつか復讐を……あれ？唯依さんに悠陽さん他の女性陣までどうし……グシャ！バキ！ゴン！メキメキ！女性陣に袋叩き

## 第伍拾話

――A-01小隊A分隊ブリーフィング――

「済まないな…急に集まって貰ってしまった…」

「それで神宮寺教官、私達は今回集められた理由は？他にも崔中佐がいる事から何かあるのは解りますが……」

「今回集まって貰った理由は他でもない……黒逸少将のいる基地の外れにある格納庫に今いるメンバーで向かって貰いたい……コレは黒逸少将切つての要望だ。」

ブリーフィングルームに集められたA分隊の面々に亦菲に加えオスローの姉妹は驚きの表情をしてざわつく……

「黒逸少将が…ですか？」

「理由は解らないかな？兎に角貴様等は格納庫に向かい黒逸少将の指示に従え。」

「副司令はこの事は？」

「既に知っている。多分だが副司令も黒逸少将の考えを解つての事だろうかな……ブリーフィングはこれで終了だ！」

「解りました：A - 01 A分隊は直ちに黒逸少将のいる格納庫へ向かいます。」

「うむ、頼んだぞ？」

まりもに敬礼をした後にA - 01 A分隊はブリーフィングルームを後にして、戒が待つ格納庫へと足を向けるのである。

--- 格納庫前 ---

「それにしても戒はなんの用で私達を呼んだのかしら？……機体の事かしら？まさか！愛の告白：「それは無いです。」…なによジゼル？文句あるわけ？」

「黒逸少将がその様な事で我々を呼ぶ筈が有り得ない事ですし何より最後の方なんて貴女の欲望が駄々漏れですしね…。」

「なんですって!?!？」

「ジゼル、今はそんな事よりも黒逸少将に会って詳細の程を確認しないとでしょ？」

「すみません、姉さん。」

『さっきから喧しいと思ったらお前達か?』

「」「黒逸（戒）少将!?!」「」

ジゼルと亦菲が口論をしている所に後ろから戒が現れた事にその場にいた全員が驚きのあまりに声を上げていた。

『……………？何を騒いでいるのかは知らんが……………さっさと中に入ったらどうだ？』

「は、はい！」

戒の問い掛けに直ぐに反応をした伊隅が返事をして戒の後を追いつ、他の面々もそれに続いて格納庫の中へと入っていく。

……格納庫内部……

『さて、来て貰ったのは他でもない……B分隊よりも早く君達の機体の調整が完了した事と部隊編成の事についてだ。コレは夕呼にも許可は既に貰ってある。』

「部隊編成……………ですか？」

『ああ、今まで通りの夕呼直属の特殊部隊を裏にして俺の指揮下に試作機の運用実験部隊として動いて貰う事になる……………後からB分隊も加わる事になるかな？』

「A-01部隊全てですか？」

『優先順位は夕呼が先になるから……………建て前の様な物と考えてくれ』



『俺は奥にて機体の最終調整の確認をしているから決まったら声を掛けてくれ。シヨット、皆さんに知らない機体の説明を頼んだぞ?』

「アニキ、了解だニヤ!」

戒はそれだけ言うのと近くにいたシヨットと呼ばれた毛が赤色のアイルーに案内と説明を任せて奥に鎮座するヴェルフエゴールへと歩いていった。

「それでは皆様、自分に付いて来るのニヤ」

「あ、ああ。」

そんなシヨットを目の前にして未だに伊隅みちるを始めとした面々は信じられないモノを見る目をしていた。

「コイツが今皆様が慣熟訓練で使用されているゲシユペンストの次世代機のヒユツケバインですニヤ。先程機体の話を聞いていたみただから説明は不要ですかニヤ?」

「大丈夫だ...。」

「そうかニヤ、ニヤら次の機体に行きますのニヤ!」

黒色をしたヒユツケバインの前を大型のカーゴで移動する。勿論アイルーが動かせる様に改造をした物である。そして、次に見えた機体はグレーを基調とした機体の機体の前に特徴的にクロスした独特なパーツの付いた機体...GN-X?が見えて来た。

「コイツはGN-X?…名称はジnkクスニヤ!名前の通りにコイツは改良に改良を加えた4型にあたるのニヤ。改良点は両肩のHPSハードポイントシステムと主機と各種センサーシステムシステムなのニヤ。初代の機体は突撃槍ランスと光学突撃砲ガンの複合型兵器で能力的には戦術機で言うと第4世代機にあたるのニヤ。…で2型3型と改良されて今の4型があるのニヤ。主な改良点は頭部センサーアンテナや主機部足る太陽炉の小型化に主武装の交換による戦略に富んだ運用が可能にニヤっているのニヤ!

「太陽炉とは?」

「ゴメンなのニヤ、ソイツは極秘事項ニヤものだからアニキの許可がニヤいと教えられニヤいのニヤ。」

「そうか、なら主武装とは何になるのだ?」

「主武装はさつき言ってた突撃槍にGNバスターソードまあ所謂大剣だニヤ、それとGNランチャー長距離砲撃に支援砲撃も出来る優れた物に他のMSやPTの武装も一部だけだけどHPSに対応してるのニヤ。戦術の幅が広くて自由度が高い反面扱いが過敏ヒューキー過ぎて乗り手を選ぶ機体ニヤけど乗りこなせれば鬼に金棒ニヤ!」

「確かに聞いていれば魅力的な内容だが扱いが過敏な所はどうにかならないのか?」

「そこは搭乗者の技量に関係するからニヤんとも言えニヤいのニヤ。」

「そうか、なら次に行って貰っても良いかな?」

「承知したのニヤ！」

その後もPTやMSにASにAM、アーマートモシユールそして歩兵用の強化兵装等パワードスーツの紹介や説明を続けていく。

「~~~~こんニヤ所かニヤ？後は資料の詳細を見て考えてくれニヤ」

シヨット達は先程の出発点に戻ってくると何時の間にか脇に抱えた分厚い資料をA分隊と亦菲等に手渡していく。

「それじゃあオイラは仕事に戻るから決まったらアニキの所に行ってくれニヤ！」

シヨットはそれだけ言うとカーゴを運転して他のアイルー達が作業する中へと紛れていった。

「ふむ、どの機体に乗ったとしてもポジションが関係無く動かせるのはとても凄いな……。」

伊隅みちるはただ一人黙々と資料を捲りながら自身の感じた事感想を述べていた。

「そうですね……。それと機体の豊富さに目を惹かれますね……。近接に中距離に遠距離……果ては全範囲に適応した機体と悩む機体ばかりですね……？」

そう話すのは柏木晴子である。



「私は断然近接特化のアルトアイゼンだね！色合いも私に合ってるしね？」

そう言うのは速瀬水月である。

「黒逸少将が乗っていたのと同じだからじゃないの？」 ニヤニヤ

「 なっ／＼／＼／＼／＼／むっ、宗像あー！！！！！」

そう言うって水月をからかうのは宗像美冴

「まっ、私としてはタイプRVかしら？訓練で慣れている機体の方が扱い易いし…何よりも自身の手足の様な物に成りつつあるからね？」

「私はガンダムタイプのアルトロンね！まるで私の為にある様な機体コンセプトだし何より武装が気に入ったわね！」

そう興奮気味に喋ったのは崔亦菲で資料をガン見して言うてくる。

「私は宗像と同じ物が良いかしらね？」

そう零すのは風間栞子…。

「自分は速瀬中尉と一緒に戦いたいからアルトアイゼンの強化発展型であるビルドビルガー…ですかね？」

涼宮茜はそう言うて見ていた資料にはアルトアイゼンの設計思想を

そのままにして各武装面を補強して、アルトアイゼンの苦手としていた遠距離も出来る様になっているビルドビルガーのページを開いていた。

その後も次々と自分の興味を惹かれる機体を選ぶA - 01小隊A分隊、そこへ香月博士が入ってきた。

「あら？機体の方は選び終わったのかしら？」

「香月副司令!？」

「わたしは敬礼が嫌いって言ってるでしょ？それより黒逸は何処にいるのかしら？」

「黒逸少将なら奥にいますっていたので其方にいると思われませんが……」

「そう…解ったわ。テツはいるかしら！」

「夕呼さんニヤンですかニヤ？」

夕呼に呼ばれたテツと言う毛が黒色のアイルーは突如上からツナギを着た状態でワイヤーを伝って降りてきた。

「黒逸の所まで案内してくれるかしら？」

「それニヤら新しく作ったその転送ポートに乗れば奥にあつという間に着くのニヤー！」

「アイツまた凄い物を作ったわね？質量保存や物体の力量なんかはどうやって解決したのかしら？」

「ダンナに用があつたんじやニヤいのかニヤ？」

「そうだったわね。兎に角アイツに相談しないといけない事があるしね…。」

「みニヤさんはどうするのかニヤ？行くのニヤらばコイツを使った方が早いニヤー！」

「……それは大丈夫なのか？」

「ダンナが作った物には失敗は無いのニヤー！それともみニヤさんはダンナが信用出来ニヤいのかニヤ？」

「いや、そう言う事では……」

「ニヤらさつさと行くのニヤー！これ位の人数ニヤら一発で行けるのニヤー！」

テツの言葉に施される儘に格納庫の脇に設置してある大型のポッドの様な機械に全員が乗り込んだ事をテツは確認するとポッド内にあるコンソールを弄ると青白い光と共にその場から消えた。

## 第伍拾巻話

――格納庫最深部――

「着いたのニヤ！」

テツがそう言った場所の辺りは入口の前とは違い薄暗く、目の前は吸い込まれる様な暗黒が広がって恐怖心を呼び起こしてしまいそうな物であったがテツと夕呼は慣れた足取りで奥へと進みその後ろを周囲を恐々とした表情をしながら伊隅と他の面々は夕呼達の後を追っていく。

「ダンナあッ！」

「ん…テツか？どうしたこんな所まで来て……」

「夕呼さんがダンナに用事があるそうニヤので連れて来たのニヤ！それとA分隊のみんなニヤが機体の選出が出来たので一緒に連れて来たのニヤ！」

テツは奥へと進み目的の人物を見付けると猫本来の走り方でその人物…：戒へと近付く。戒は真紅の機体…：ヴェルフエゴールの真下の近くにあるデスクに座り何やらPCで作業をしていたのである…：

『そう…か。済まないが今は手が離せない…。選出した機体の資料は其処の机に置いておいてくれ。』

「はい！」

「黒逸は何をしているのかしら？」

『ヴェルフエゴールの機能で他の機体で実装可能な物を調べている所だな…。ヒュッケバインのあの換装機能はASのアルカインの技術流用だが…。本家と比べると幾段か性能は落ちるが想定内の数値で出来たがな…？』

「へえ〜？それは見せて貰っても良いかしら？」

『まあ、機体の最終調整のチェックを並行してやっているから見たければ御自由にどうぞ…。それで用事とは？』

戒の許可を貰い近くにある椅子を戒の作業しているデスクへと引き寄せてから座る夕呼はモニターを見ながら小声で話し始めた。幸いな事に他のメンバーはヴェルフエゴールの他にアルカインやヴァイスリッターの変異した機体：ライン・ヴァイスリッターとアルトアイゼン・リーゼや00ライザー等が鎮座している場所を物珍しく見て回っていた。

「ええ、それで……」

『夕呼、ちょっと待て……テツ、彼女達に見るのは良いが無闇に触らない様に言っておいてくれ。』

「解ったニヤ！」

「……良いかしら？」

『ああ、それで?』

「ちょっと気になる事があって…ね?」

『気になる…事?それはどう言った物だ?』

「白銀が前の世界から来たのは黒逸も知っているわよね?」

『まあ…な、それでその少年が今の話とどう言った関係が?』

「アイツの中の記憶で歴史に大きな変化を齎す事象は無かったのかと聞いたんだけどその時にアイツは佐渡島から新潟方面からBETAが上陸してきたって言うのよね?それで日時が11月11日以後4日しか無いのよ…それで帝国や国連にも顔の利く黒逸に相談しに来た訳よ。湾内または揚陸した所で迎撃するかね…」

『11月11日…か。ならば水中での戦闘が可能な機体を出すとするかな?アビスガンダムにディープフォビドゥンとフォビドゥンヴォーテクス、ゾノやアッシュにシーリオン…後はヒュッケバインタイプRV若しくはMk-?か?海中や水中で戦闘行為が可能な物は帝国内では海神位わたづみだから一応と言う形で製作していたが…まさか使う時が来るとはな…』

「揚陸した所じゃなくて湾内…しかも水中で迎撃出来る機体を既に用意していたの!？」 小声

『BETAには常識が通じないからな…?念には念をとって用意していたに過ぎない…まあ、用意して必要無ければそれに越したことは無いさ。……で迎撃するとして誰が……どの部隊で行くんだ?』

「今動かせるのは伊隅のA-01A分隊ね…。他の所は無理だろうし、私の直轄になってから他の部隊よりも比較的簡単に動かせるわ…。」

「よし、ならその部隊で水中での迎撃をするか…。ヒュッケバインタイプRV二機にアビス一機そしてフォビドゥンヴォーテクス二機にディープフォビドゥン二機…って所かな？で亦菲とジゼルにヴァレンタインの3人には討ち漏らしが揚陸した時の迎撃として残って貰う事になるか…。」

「そう…。後は移動手段ね…。カーゴで此処から新潟まで…。」  
「カーゴでの移動はしないぞ？」  
「は？じゃあどうやって行く積もりなのよ？」

「MS等にはにはサブ・フライト・システムSFSがあつてな？それを用いたに運用補助として空の足場として使用できる戦闘機等…今回はグウルを出撃する機体分を回して佐渡島方面の海岸付近へと運搬して其処から迎撃に向かう。飛行能力を有する機体は直接現地へ向かって貰う。」

「成る程ね…、そうすれば陸路を使わずに時間短縮に繋がる訳ね…。」

「勿論の事だが俺も一緒にで出撃する積もりだからな？」

「…何で行くつもり？」

「水中専用フォビドゥンシリーズの上位機のフォビドゥンブルーで出撃する積もりだ。フォビドゥンの主要装備はガンダニウム合金を使ったトライデントに極音速で発射されるスーパーキャピティーン

グ魚雷を両肩のシールド上部に各一門に両腕に内蔵された単発式の  
リニアガン…アルムフォイヤー…そして両肩のシールドの下部に  
取り付けられたフォノンメーザー砲が四門だな…。これは水中に置  
いて減衰しない為に大体の水中専用の機体に装備されている…。」

「そう、なら明日か明後日にでも出発かしら？」

『陸路なら2、3日に掛かるが空路なら1日で十分に間に合うから  
その間に皆に装備の確認と水中での戦闘を模擬で慣れて貰う事にし  
よう。付け焼き刃になるがやらないよりはマシだろう？』

「そう…ね。ならば後は任せるわ。シュミレーター機の使用を許可し  
ておくわ。伊隅達には私から言っておくわね？」

『頼む…。なら半導体の理論を渡そうか？00ユニットの完成がこ  
の計画の最終目的の筈だったよな？』

「そうよ。黒逸はほんとに情報網が広いわね？まっ、ソレは有り難  
く受け取っておくわね…。完成したら最初に黒逸に見せてあげるわ。」

『楽しみにしているよ。』

「ふふ、楽しみにしてなさいよね ……ほら、アンタ達行くわよ！  
伊隅は後で私の執務室に来なさい。他の連中はシュミレータール  
ムに行きなさい。」

「は、はい！副司令の御用時は……」



「もう終わったわ。ほら、サツサと行くわよ！長居は無用ってね？  
アンタ達はシュミレーターである機体の慣熟をやって貰うからね。」

「ある機体…ですか？」

「説明は戻ってからするから行くわよ！」

「了解しました！」

「それじゃあ、朗報を期待しているわ…。」

『任せる…期待には応えよう。ヒトとしてな…。』

「そう…。」

そして夕呼は伊隅達を引き連れて戒のいる格納庫深部から引き上げ、  
その場にはPCを使って作業をする戒だけが残っていた。

『桜花作戦までの障害は全て取り除く…それが人道に反する事だ  
としても…問題はクーデター…沙霧大尉か。奴等の横槍は既に無い  
としてもそれまでの閣僚の連中の所業を糧にして大きな事を起こし  
かねない…か。紅蓮さんや斑鳩さんを始めとした近衛は大丈夫とし  
ても心配なのは悠陽…彼等烈士達の行動にアイツは悔やむかも知  
れんからな…。』

戒はPCのデータにある淩乃皇のファイルとは別の物を開いていた。  
其処に映っているのは全てを破壊する淩乃皇と同サイズのMSのデ  
ータが映っていた。ファイル名はDESTROY…とある世界で

悲劇の引き金となった悲しき機体の名が其処に表示されていた。

『其処から救う為ならば例え……バケモノと呼ばれる様になったとしても俺は……』

戒は一度PCから手を離しヴェルフェゴールの方を見る操縦者がいない今は灯が付いていないツインアイは冷たく戒を見下ろしている様であった。

『俺の守りたい世界を……大切な人達のいる世界を……護れればそれだけで……良い。』

戒の独白は深部の中で静かに響きそのまま霧散する。その場に聞いている者がいるとは知らずに……

「……………どういう事ですか？戒…少将……………」

その人物は黒髪の子がアラスカと一緒に行動する事が多かった篁唯依その人であった。唯依は戒の独白を立ち聞きしてしまった事と戒の発した言葉の意味を余りの衝撃の為か理解出来ずに格納庫の外へと誰にも気付かれない様にして逃げる様にして後にしていた。

## 第五拾巻話（後書き）

「さあ！次回はいよいよBETAの新潟上陸を阻止する戦闘です！」

『その前に最後のアレは何なんだ！？俺の独白ってイタすぎないか！？』

「気にするな……。俺も気にしないから」

『確実に楽しんでいるよな！？』

「ソナナコトハナイヨ？」

『なら、何故片言になっているんだ？』

「ナツテイマセンヨ？」

『煉獄の底へ墜ちろ！！！』

「チヨツ…アツ…！？」

『作者は地獄旅行に行きましたので此処等の辺りで………次回の伍拾巻話でまた会いましょう。』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9495o/>

---

少年の異世界戦記 ~ Muv-Luv Alternative編 ~

2011年10月1日22時08分発行